

今だから全力でやりた
い事を探して【完結】

皇我リキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生なんて適当に生きてれば勝手に過ぎて行く物だ。

ある程度遊んで、ある程度勉強して、ある程度の高校大学をでて、ある程度の仕事について、ある程度の人と結婚とかして、ある程度の幸せな人生を生きる。

そんな物だと思っていた。

目次

今だからやりたい事とか特にない	1	モカつとくる財布を探して	179
青葉モカという少女	20	それはきつと彼女達の笑顔に憧れたか	
A f t e r g l o w	42	ら	
やりたい事を探して	63	ライブハウスにて	201
夕焼けを見て思う	86	美竹蘭の憂鬱	222
山田翔太はそういう奴だ	102	シヨッピングモールにて	242
今だから	123	羽沢珈琲店にて	262
接客業をしてると偶にこういう事があ	144	学生の本分は遊ぶ事である	277
るという話	164	長い一日の始まり	296
ポイントカードでパンパン		メリーゴーカート?	316
		羽沢つぐみとツグってみる	337
		6番目の。出口にて	360
		大切な財布を探して	378
			392

観覧車から見たそれは	406
探せなくても	422
個人的主観だがギター弾いてる奴は八	436
割変人	436
高校生バイト戦士の平和(?)な一日	457
社畜の休日	474
第八十四回チョココロネ争奪クイズ	490
置いて行かれたくないから	510
答えを探して	528
見付かった答え	549
普通のいつも通り	567

恋愛難易度と攻略法	586
お家デート【準備編】	602
お家デート【本番編】	620
宇田川巴は過保護さん	637
温めますか?	659
勘違いから見付けたもの	679
上原ひまりにお任せを!	695
雪だるま造形大会	713
俺なりの進み方で	734
その言葉を伝えられたら	753
探して	770
今	791
今だから全力でやりたい事を探して	791

815

今だからやりたい事を全力で――

844

少し先に――

856

番外編――今だからやりたい事を全力

で

【番外編】青葉モカ誕生祭2018

870

モカランド〈番外編〉――

890

どうしてお前の水着姿はそんなに可愛

いんだ――

914

【番外編】青葉モカ誕生祭2020

933

今だからやりたい事とか特にない

休日に家で惰眠を貪っていると、よく母親にこう言われるのだ。

「高校一年生が休日に家でゴロゴロして、あなたの人生それでいいのか。やる事はないのかやる事は」

手に持った掃除機で「邪魔だ」と言わんばかりに俺を突いてくる母を寝起きの目で見てみると、片手にスマートフォンを持ってゲームをしている。

あんたこそ、いい歳こいてゲームかい。というか、掃除するかゲームするかのどっちかにしろよ。

「はいはい起きますよ……。てかまだそのパズルゲーやってたのかよ」

「明日からガチャイベントだから石を集めないといけないのよ」

若々しい笑顔で掃除の片手間にスマホゲーに熱中する母のスマホケースを見てみると、何故か福沢諭吉^万さんが挟まっていた。

課金する気満々である。

「あんたもやる?」

「やらねーよ。そんなクソゲー飽きたわ」

俺もやってたけどそのゲーム、途中でインフレ起こし過ぎてつまらなくなつたんだよな。

まだやってる友達もいるけれど、俺はもうやっていない。熱中していた時期もあつた筈だけ。

「どーせ何もやる事なくて寝てるくせに」

「うるせーよ。なにかと新しいのやっては飽きての繰り返しで問題ない」

別にやる事がない訳じゃないし、完全に無趣味という訳ではない。

好きなゲームのタイトルはあるし、読んでる漫画もあるし、運動も嫌いじゃない。

——ただ、何かに深く熱中して続ける事はなかった。

「趣味の一つくらい持った方が人生楽しいわよ」

「趣味は読書とゲームです。……母さんみたく廃課金ゲーマーになるとか、父さんみた

いにパチンカスになるよりマシだろ」

現在父親は休日の昼間からパチンコ屋にお出掛け中である。

俺が起きた時にはもう家に居なかつたので、朝起きて直ぐに向かつたらしい。

時計を見てみれば午後の五時だ。何時間パチンコに居るつもりなんだらうあの人は。

「お父さんはパチンカスだけど自分のお小遣いの中で遊んでるから良いのよ。チンカスには変わりないけど」

「自分の旦那をチンカス呼ばわりかよ」

そんな会話をしていると、件のチンカスが帰つて来た。

「今日は五万勝つたぞ!! 焼肉にしようぜ!!」

「よくやったわチンカス!」

「なんで突然チンカス呼ばわりされてるの?!」

楽しそうな両親でなによりである。

あー、今日焼肉か。チンカス父さん最高。

「チンカス、小遣いくれ」

「なんで息子にまでチンカス扱いされてるの?!」

良いから金寄越せ。

「というか翔太お前、バイトの面接したんだろ?」

そういや、一週間くらい前にコンビニのバイト面接しましたね。

我が家のお小遣いはチンカスのパチンコの勝敗で決まるのだが、これが中々不安定で高校生にもなると足りないと感じてしまうのだ。

なので、一週間くらい前に近くのコンビニでアルバイトの面接をしたのだが。そういえば合否の連絡来てないな。

「まだ連絡ないし」

「自分で働いてお金を稼いでみると世界が変わるぞ。だから今回はお小遣い無しだ」

「いやその金働いて稼いだ金じゃなくて遊んで手に入った金だろ」

「パチンコは父さんの仕事ですう!!」

テメエの仕事は大工だろチンカス。

「……つと、電話?」

そんな会話をしていると、見知らぬ番号からスマートフォンに電話がかかって来る。

登録してないんだけど見覚えがあるその番号。出てみると、一週間前アルバイトの面接をしてくれたコンビニの店長さんの声が聞こえた。

「あ、どうも。……はい。……あー、はい、ありがとうございます。明日の朝ですか？

あ、はい。大丈夫です。……はい。……はい、分かりました。ありがとうございます」

電話の内容は、採用が決定したので明日の朝から店に来て欲しいという趣旨。

どうやら合格していたらしい。自分でお金を稼ぐ時が来たようである。

「それはそうと金くれ」

「今の電話バイト先だよね？ 受かったんだよね？」

それとこれは別。

「あ、私もお金ちようだいパパ。明日からガチャイベントなのよ。愛してるわパパ」

「父さん泣きそうだよ」

我等ながら酷い扱いだ。

こうして俺と母さんは諭吉さんを一人ずつ手に入れて、父さんの金で焼肉に行き今日という日を終える。

いつまでもスマホゲーに熱中する母親と、パチンカスの父親。それに対して俺は特にこれといった趣味もない。いや、このくらいが普通なんじゃないですかね。

だってまだ高一よ？

そんな今を全力で生きる歳でもない。

人生なんて適当に生きてれば勝手に過ぎて行く物だ。

ある程度遊んで、ある程度勉強して、ある程度の高校大学をでて、ある程度の仕事について、ある程度の人と結婚とかして、ある程度の幸せな人生を生きる。

そんな物だろ。

そんな物だと思っっていたんだ。

そんな程度の物だと思っってしまったっていたんだ。

◆◆◆
「山田翔太君、ね。うん、これ着替えと名札。名札はここに付けて、着替え終わったら出て来てね」

コンビニの店長さんは制服を渡すと店に戻っていく。

今日からバイト開始な訳ですが。さつきレジ見たらなんかその……ギャルが居たんですよ。

ザ・JKみたいなギャルが。綺麗な茶髪の髪をポニーテールにした女の人。多分高校生かな。

年上か、同じ年か。滅茶苦茶顔が可愛いんですよ。いや本当、一目惚れしそうだ。てかした。

?
バイト先の可愛い女の子と恋に落ちて、みたいなありがちな展開あると思いますかね

……ないと思う。絶対にあの人が彼氏とか居るでしょ。取っ替え引っ替えしてるでしょ。どう見てもギャルだもん。

ダメな偏見ですわね。

そんな事を考えながら着替え完了。

シャツに薄水色のエプロンと、デカい名札。

山田翔太とか大きく書いてあるの恥ずかしいんだけど。何このザ・普通な名前。いや文句がある訳じゃないけど。

「父親なんて山田剛三郎さんだし。母親は上から読んでも下から読んでも「やまだまや」さんだから。普通って素晴らしい事だと思ってるけど。」

……逆につまらないのだろうか。いや、良いんだけど。

「着替え終わりました」

着替えを終えて休憩室を後に。

レジの辺りでは店長と、さっき見かけたJKが話している。

流石ザ・JK。店長と何気ない会話を弾ませていた。コミュ力高そう。友達になれるかな。

「お、山田君来たね」

はい、山田君ですよ。

「紹介しておくよ。彼女は今井リサちゃん。山田君より一つ上だったかな。仕事出来る子だから、色々教えてもらってね」

はい、色々教えて下さい！

「よ、宜しくお願いします」

本当はもつとこうガッツリ行きたいけど、ほら、相手ザ・JKだし。俺はチキン。鳥です。そこで揚げられてる鳥です。

「あー、そんなに固くならなくて良いよ。気楽にして、気楽にさ」

俺の緊張を解してくれようとしているのだろうか、今井さんは手を振りながらそう言ってくれた。コミュ力お化け。

「あ、あはは……。どうもです、今井さん」

「うーん、まだ固いな。リサで良いからね、山田君」

何この人俺を落とそうとしてるんですか。怖いんだけど。もう惚れてるわ。もう惚れてるわ。

リサさんか……。リサさん……。リサさん……。

「それじゃリサちゃん、この後山田君のこと宜しくね」

え、ドユコト。

「あー、店長もう上がりでしたっけ。お疲れ様です」

店長帰るのお?!

と、という事はリサさんと二人きりでバイトですか。色々教えてもらう面目でお話し出来る訳ですか。

青春が来た気がする。

「はいお疲れ。青葉も遅れて来るだろうから、リサちゃん叱つていて」

「あ、あはは……。言っておきます。お疲れ様です店長」

「お疲れ」

そう言うと店長は着替えてコンビニを出て行った。

なんでもう一人来るのか。いや、当たり前だろ。新人と一人でコンビニ回せる訳ないだろ。何を期待してる。

しかし、遅刻とはその青葉つて奴はどんな奴なんだろうか。リサさんを困らせるなんて許さない。

「山田君はこの近くに住んでるの？」

さて、どうやって話し掛けたら良いものか。そんな事を考えていたら、リサさんの方から話し掛けてくれた。

一体どんな生活を送ったらそんなコミユ力が身につくのか。

「あー、えーと、はい。歩いて三分ですね」

「うわ、凄い近いじゃん。それなら簡単に通えて良いねー！」

うわ、凄いぐいぐい来るじゃん。好感度マシマシですか。

「あ、連絡先聞いても良い？ 突然バイト来れなくなった時とか、代わってもらえないか

聞きたいしさ」

何この人平然と連絡先聞いて来たんだけど。脈ありですか？ 期待して良いですか？

と、とりあえず連絡先を交換しよう。ここから始まる青春に期待。

「も、勿論で——」

「ギリギリセーフ」

そんな俺の台詞を遮ったのは、のんびりとした口調で突然レジに入り込んで来た一人の女の子だった。

「いや、二分遅刻だよモカ」

「二なら、四捨五入すればゼロですよ」

灰色の髪をショートカットに整え、フードの付いたパーカーにショートパンツとボーイッシュな服装の少女はそのままの調子でリサさんに返事を返す。

遅刻者と言う事は、彼女が店長の言っていた青葉という人物だろうか。リサさんがモカと呼んでいたから、青葉モカ？

「いくらゼロに戻しても時間内じゃなかったら遅刻だよ、モカ」

「おー、リサさんに叱られてしまった。……申し訳ありません、二分余分に働くので、どうかがご勘弁を〜」

「あつはは、調子が良いなあもう。分かったからさ、早く着替えて来て」

「はーい」

ゆつたりとした返事を返すと、青葉モカは休憩室に入っていく。まだ今朝方で客も来ていないとはいえ、そんな態度で大丈夫なのだろうか？

特に俺自身真面目ちゃんという訳ではないが、節度位は守る物だ。

「えーと、さっきの人は」

「あー、今のがモカ——青葉モカだよ。山田君とは同い年だね」

青葉モカ……。

「……よく遅刻するんですか？」

「え？ あー、いやー、そんな事はないよ。たまーに、かなあ」

リサさんは笑いながらそう返事をしてくれる。

少し多い程度だろうか。困った先輩がいるらしい。

「……ヒーローは、遅れてやってくる。モカちゃん参上」

数分後、ゆつたりとしたペースで口を開きながら制服に着替えた青葉モカがやってきた。

彼女は俺を見るなり首を横に傾けて「知らない人が、レジに」と、俺を凝視する。

「モカ、昨日言ったじゃん」

「え、なんでしたっけ？」

首を逆に傾けながら、彼女はハツとした表情になって口を開いた。

「あ、高木さん、若返りましたね」

「誰だよ」

「あつはは、えーと、他のバイトの人。……いやモカ、どう見てもそんな訳ないでしょ。

高木さん六十歳だよ?！」

なんでそんな老人と間違われたの俺?！」

「あー、そうでしたね。なら、ジョンソン・マッケンジー君?」

「誰だよ!! このコンビニ外人がいるのかよ!!」

つい口が開いちゃったよ。てかなんだその格好良い名前の人。後で名簿見てみよ。

「モカ……その人誰？」

「架空の人物かよ!!」

なんだコイツ?! 怖い!! リサさんと別ベクトルで怖い!!

「もー、ほら、昨日帰り際に言ったじゃん。明日新人が来るって」

「あー、そういえば、そんな事言っていましたねー。……高木さんがその高木さんと俺を間違えるなよ!!!」

「えーと、山田……しよーたくん。しよーくんと呼ぼう」

なんでいきなり愛称付けられてるの俺。

「なんなんですかこの人……」

疲れるんだけど。

「あ、柔らかくなった」

というかその人に揉みくちやにされただけだと思う。

「えーと、あたしは青葉モカっていいまーす。ピチピチの、高校一年生です」

「同い年ですね。タメ語でいいですか？ いいよね？ オツケー。」

「よろしくどうも」

「よろしくどうも」

「で、モカ。なんで遅刻したの？」

「挨拶を済ませた俺達の横で、リサさんはそんな質問をした。」

「二分だけが遅刻は遅刻である。」

「あー、えーとですね。スマホゲーのイベントが今日でして、夜中に全力で回してたら、そのー、ぐっすり？」

「最低じゃねーか。」

「そんなゲームなんか本気になって何が面白いんだか。ドーせいつかは終わるゲームなのにさ」

「あ、いかん。親と話してる感じで言葉に出してしまった。」

「いやいやー、今しか出来ないから、全力で楽しむのだよ」
今しか出来ない、か。

「別に、その手のゲームくらい後で幾らでも出てくるだろうに」
「んー、モカちゃん的には、このゲームが今ちよーエモいんだけどな」
なんでも変わらないだろうに。ってかエモいつてなに。

「理由はともかく、今度から遅刻は気をつけなよ？」

「はーい」

軽い奴。

「よーし、それじゃ、自己紹介も済んだ事だし。お客さんがいない内にレジ打ちの練習しておこっか！」

流石リサさん、纏めるのもお上手ですね！

「しよーくん、何か分からない事があれば、このモカちゃんに聞くのじゃぞー？」
「いや、心配だからリサさんに聞くわ」

絶対にこの人真面目に仕事してないでしょ。……いや、しかしそれは流石に偏見か。

「んー、それじゃせっつかくだからモカが山田君に教えておいてあげてよ。アタシは棚卸しやってくるからさ」

マジかよ。リサさんが良かったのに!!

「任されました。それじゃ、しよーくん、モカちゃんが手取り足取り、教えてあげますよ」

からかうような表情でそんな事を言う青葉モカ。面倒臭いからモカでいいや。

リサさんが商品のチェックをしている間に、モカはレジ打ちの仕方を結構分かりやすく教えてくれた。

態度は少しおかしいが真面目に教えてくれたので少し彼女の事を見直した所で、今日初めてのお客さんがやってくる。

「いらっしやいませーっ」

「い、いらっしやいませー」

リサさんがまず挨拶をしたので、俺も続いて挨拶をした。
モカも口を開いて挨拶をするかと思えば――

「……しやーませー」

――なんだその挨拶は!!!

なんなんだコイツは。

それが、俺が青葉モカに抱いた初めての感情だった。

青葉モカという少女

「……つしゃーしたー」

「……その挨拶はどうなのよ」

コンビニのバイトにも少しずつ慣れて来た。

レジの打ち方を覚えたり、棚卸しのやり方とか、あと揚げ物類の作り方とか。肉まんの作り方とか。

仕事を覚えてきたら後は接客に慣れるだけだ。この接客がかなり気を使うのだが、バイト先の先輩——青葉モカはこの態度である。

ただ、不真面目に仕事をしているという訳ではなくて割と仕事は丁寧になしているのだ。

細かい所に結構気付くし、商品の並べ方とか滅茶苦茶綺麗だったりする。そのギャツプのせいで、俺はこの青葉モカという人物がよく分からない。

「どこまで言葉を崩せるかの、挑戦中なのだよ。しよーくんも、チャレンジしてみる

？」

「しねーよ」

怒られるわ。

「ふふーん、ならば、モカちゃんの不戦勝という事で」

「流石にそれは聞き捨てならないんだが」

何？ 勝負だったの？

「おー、しよーくん、やる気だね〜」

「見てろよ……」

なんかコイツには負けたくないという感情が湧いて来るんだよね。なんでだろうね。

「あ、さつきコーヒー買って飲んでたお客さん、帰るみたいだよ。しよーくんチャーン
ス」

彼女の話し方がゆっくりのんびりし過ぎて言い終わる頃にはお客さんほぼ外なんだ
が。

まあ、むしろその方が都合が良いか。

見てろよ、最高に崩れた「ありがとうございました」を披露してやる。

「あ、し、あ、違、しゃ、さんしゃいん！」

いや、ごめん。良い感じの言い回しが思いつかなかった。

「——ぷはっ」

くそ……っ！ 笑われた!!

「……ぶ、っ、ふふ、あはは、サンシャイン、サンシャインだっつ〜」

「うるせーよ……っ！ ならお前がやってみろ」

「任せんしゃーい。モカちゃんパワーを見せてしんぜよう」

そう言っつて数分後に俺のレジにお客さんが来て、タバコとコーヒーを買って行く。

「ありがとうございました」

俺がそう言うとお客さんは商品の入った袋を持って店の扉を潜った。

さて、モカ先輩はどんな崩し方を見せてくれるんですかねえ？

「サンシャイン〜ン」

「……っ、き、貴様」

堪えろ山田君。まだお客さん居るから。扉の外でタバコ吸ってるから……っ!!

「……ふふ、ふふ、サンシャイン」

「もうこのバイト辞めたい」

「えー、しょーくんが辞めてしまったら、モカちゃんはちよー寂しいよー?」

まだ二週間くらいしか働いてないですけど。やっと皆に顔を覚えられたかな? くらいなだけぞ。

この二週間で一番驚いたのは、モカが俺と間違えた高木さんというご老人が女性だった事である。頭を抱えて蹲ったね。

「山田君この前もアタシと変わってくれたし、結構助かってるんだよねー。だから辞められちゃうとアタシも困るかなー」

商品の補充を終えたりリサさんがレジの方を見ながらそう言ってくれた。

いや、そりゃ辞めませんよ。リサさんの為に働いてるような物ですからね!!

リサさんとは連絡先も交換して、連絡も取り合っている仲である。良い進展だ。仕事の話しかしてないけど!!

「えー、リサさん、しよーくと連絡先交換してたんですかー？」

リサさんの話を聞いて、驚いた表情でしかしゅつくりと言葉を並べるのはモカ。

そういう彼女は彼女とは連絡先交換してなかったな。別に要らないけど。いや、仕事の話で使うかもしれないか。

「あれ？ モカと山田君は連絡先交換してなかったの？」

「あー……はい。そうですね」

する気がなかったからね。

「モカも連絡先教えてもらいなよ。山田君アタシに『いつでも替われるんで連絡下さい！』って言うってくれたしさ」

それはリサさんの為ならって意味なんですよおお!!

「おー、しよーくんは働き者ですな。なら、あたしも連絡先交換しておくことにしよーっと」

まあ、断る理由はないから連絡先は頂く事にする。

「これであたしも、しよーくんとバイト替えてもらえるようになった訳だ」

「言っておくがゲームするからとか遊びに行くからとかじゃ替わらないからな」

正直青葉モカという女の子に対しての好感度は低い。

色々適当だし、無茶苦茶だし、下らない事に夢中になる割には周りを見ていない、そんな女だ。

同い年だが断然子供に見える。リサさんは一つ歳上だけど、それだけじゃ説明出来ないくらいしつかりしてるんだ。

少しは見習えよって感じ。人の事言える人間じゃないけど、コイツよりはマシだと思う。

「流石のモカちゃんもそんな事で替わって、なんて言いませんよ」

「ならどんな時替わって貰う気だよ」

この前、リサさんが替わって欲しいって頼んで来た時の理由は聞かなかったけどな。リサさんなら無条件ですよ、はい。

「そのー、ほら、バンドの練習とか、ライブの本番とか？」

「バンド……？　ライブ？」

えーと、あの、音楽の？

ギターとかドラム並べてステージで歌う奴ですか。……コイツが？

「モカはねー、A f t e r g l o w^{アフターグロウ}つていうガールズバンドでギター弾いてるんだよ」
リサさんがそう言つて補足してくれた。彼女が言うなら嘘じゃないんだろうけど。

え？ え？ コイツが？

「マジか……」

「マジですとも〜」

こんなふざけた奴が？

どうせ適当にやってるんだろう。ゲーム感覚というか、遊びで。

まだそんなに長い付き合いじゃないが、コイツは多分そういう奴だ。

仕事を真面目にやっていないという訳じゃないが、態度からして真剣ではない。

大体バンドなんてのは人生を遊んでるチャライ奴等がやる事だろ？
まー、ピツタシなんじゃないですかね。

「この前は説明しなかったけど、アタシが山田君に代わってもらったのも急にバンドの練習が入っちゃったからなんだよねー。いや、本当にごめんね山田君」

リサさんもバンドやってんのかい!!!

え？ バンド？ 素敵な趣味だと思いますよ。

「えーと、二人とも同じ……？」

「あー、いやいや。アタシはRoseliaaっていう別のバンドでベースをやってるんだ」

成る程。ベース、素敵ですね。

しかしバイト先の先輩が二人、バンド活動をしているとは。

これアレかなー、俺も音楽やり始めてリサさんとの距離が縮んで行く的な展開あるかな？

今度ギターとか触ってみるか。友達が持ってたっけ？

「あ、そーだ！ 今度RoseliaとAfterglowも参加するイベントがあるんだけど、山田君見に来てみない？」

そして思い出したようにリサさんはそんな事を言う。

二人のバンドか。確かに気になるな。

「その日バイトがなければ是非行きたいですね」

バンド演奏なんてカラオケのプロモーション映像とかでしか見た事ないから、ちよつと楽しみだったり。

「……あー、その日アタシもモカも休みだから。……山田君バイトかも」
しかし、困ったような表情でそう言うリサさん。

そりやそうじゃん。二人が休みだったら俺がバイトの確率が高い。行けないかも。

「うーん、高木さんに替わって貰ったらー？」

別にコイツのバンドが見たい訳じゃないが。そうだな、高木さんに聞いておくか。

「休みに出来たら行きませすよ、リサさん！」

「うんうん、是非観てつてよ。Roseliaは最高だから」

「いやー、Afterglowも負けてないっすよ〜」

それで、日付を聞いてみれば来週の土曜日らしい。後で高木さんに連絡しないと。

「それじゃ、アタシは上がるね。二人共お疲れ様ー」

「お疲れ様です」

「お疲れ様〜」

少し時間が経って、リサさんは上がりの時間に。

今が五時で八時半くらいに入れ替わりの人が来る訳だが、九時までは俺とモカの二人で働く時間だ。

……正直怠い。

「あ、そうだ肉まん作らなきゃ」

この時間からは仕事帰りとか、遊び帰りの学生が多くて肉まんが売れるピークの時間である。

出来上がるのに三十分程掛かるので、早く棚に乗るだけ肉まんを並べなくては。

肉まんは四時間で廃棄だから、俺達が上がりの時間になって残っていたら処分しなければならぬ。

だけどこの時間なら残るところか足りなくなるのが肉まんだけだ。肉まん美味しいからね。

「えーと、八個八個」

「あー、しょーくくん、今日は肉まん二つくらいで良いと思いまーす」

俺が肉まんの準備をしていると、モカが後ろからそう口を挟んでくる。

いや、お前この時間だぞ。先週も肉まん八個作ったって足りなかつたくらいなのに。一体どんな根拠があつてそんな事を言うんだ。

「マニユアル無視はダメだろ。ほら、そこ邪魔」

先輩だろうが関係ない。言われた事を言われた通りにやるのが仕事である。敷かれたレールの上を走ればそれで良いんだよ。少なくとも、俺は。

「え、あ、おうのーう……」

「何か文句でも？」

肉まんをきつちり八個蒸し器に導入する俺を見ながら、彼女は慌てる振りみたいな素振りをしていた。

何がしたいんだコイツ。

「あー、いやー、そのー、ですねー」

「とつとつと言えよ」

「今日は、近くのパン屋さんがセールをやるらしいのでー、肉まんちゃんは売れないかもしれないのですよー」

なんだそれ……。

「そんな事で売れ残ったとしても一個か二個だろ……。そのくらい問題ないと思うし、足りない方が問題だろ」

世の中そんな物だと思うぞ。

「そうだと、良いんだけどねー」

そんな彼女の心配は杞憂に終わる――

「……嘘だろ」

——そう思っていた。

現在午後八時五十分。深夜帯の人達が奥で準備をしているのだが、件の肉まんは俺の目の前に八個丁度並んでいる。

そう、一個も売れなかったのである。五時から九時までの四時間。店に客が来る事はあれど、誰一人肉まんは買って行かなかった。

なぜ……。どうして……。

彼女の言う通り、近くのパン屋がセールをしたから？

そんな事でこんな事になるものなのか……。

「うーん……」

モ力は俺に何も言う訳でなく、ただ蒸し器と睨めっこをする。

言いたい事があれば言えば良いじゃないか。

確かに店としては損失だが、俺はマニュアル通りにやったんだし。

それに、たかが肉まん八個だ。

「………勿体ない」

う……。

「おー青葉、山田君、もう上がって良いぞ」

休憩室から制服姿で出て来た店長が声を掛けてくる。

あ、やば、廃棄しないと。

「あー………すいません。肉まん八個廃棄しないと」

「ん、おい青葉。何個作ってた。客はお前じゃないんだぞー」

「あ、いや、これは俺が——」

何故かモカが怒られたので、俺は間違いを正そうと口を開いた。確かにコイツは無茶苦茶な奴だが、今回悪いのは完全に俺である。

「いやー、すみません。突然肉まんが沢山食べたくなっちゃいました。……全部買ってください、お許しを〜」

「——え、ちよ、お前」

俺を庇ってくれてるのか……？　なんで……？

「しよーくん、しー……だよ？」

はあ……？

「……つたくしような奴だな。一個廃棄にしとくから七個分の値段で買ってけ、青葉」

「はーい」

ゆつたりとした口調でそう返事をして、七個分の肉まんの値段を払うモカ。

一つの値段は大した事ないが、七個も買うと四桁を超える値段だ。彼女はなんの躊躇

もなくその金を払う。

そして別に俺を怒る訳でもなく、ただ買った肉まんを美味しそうに眺めていた。

「あー、山田君。暇だったら青葉を家まで送ってやってやれよー。ほい、帰れ帰れ」

店長にそう言われてから、モカと順番で更衣室を使って着替える。

廃業ギリギリの肉まんが出す湯気は、普段見ている肉まんよりも小さく見えた。

「それじゃー、帰りましょー」

着替え終わったモカはその内の一つを一瞬で食べてからそう言う。

……何も言わない気なのか？

「…………ぐう。…………お、送って行くか？」

「…………およよー？ しよーくんは優しいのですな。はい、それでは行きましょーくん」

いや、行きましょーくんってなんだよ。

なんなんだコイツは。

何を考えてやがる。

……分かん。

「お疲れ様でしたー」

「……………れーしたー」

店長に挨拶をしてコンビニを出ると、モカは肉まんを食べながら左の道に曲がった。我が家とは逆方向か。……まあ、別に良いけど。

その後は無言で——というかモカは三つ目の肉まんを食べながら歩いていく。なんと行って話を切り出せば良いのか。

謝る？ お礼を言う？ そもそも彼女の目的が分からない。

えーい、なるようになれ。

「あの……………」

「どーしたの？　しょーくん」

いや、どうしたの？　じゃなくて。

「……なんで、その……庇ってくれたんだ？　その肉まん八個作るのを強行したのは俺なのに」

これが一番意味が分からない。

八個全部買おうとしたのも意味が分からないけど、俺を庇う理由はない筈。

「……つい？」

だが、返って来たのはそんな曖昧な言葉だった。

首を横に傾けて、とぼけるような仕草でゆったりとまた四個目の肉まんに手を付ける。

もう肉まんは湯気を上げておらず、見ただけで冷めているのが分かった。

それでも彼女はその肉まんを美味しそうに口にする。……気を使ってるのか？

「いや……つい、じゃなくて」

「しょーくんが責任を感じる事でもないしー、あたしは肉まんが食べたかったから、丁度

いいかなら、と?」

いや、なんだそれ……。

「だからって八個全部買う事ないだろ……。えーと、言うこと聞かなくて悪かったよ、その……モカの方が先輩なのに生意気言っでごめん」

「えー、謝る所? しょーくんは真面目だね」

いや普通だろ!!

ダメだ、話を通じないこの人!!

「あー……。……えーと、八個も処分するの大変だろ? 俺も半分金払うよ。えーと、いくらだっけ?」

「え、あたしから肉まんちゃんを奪う気?」

なんでそんな驚いた顔してるの?! 違うよ?!

「これはモカちゃんが買った肉まんちゃんなので、しょーくんにもあげる事は出来ないのでーす」

「全部食う気かよ!!」

どんな腹してるんだ!!

「……あー、でも一つタダで貰ったんだっけ〜?」

突然そう言うのと、モカは袋から肉まんを一つ取り出して俺と肉まんを見比べる。え、何?

「……しようがないから、一つだけ、特別に、しよーくんにプレゼントしちゃいます」

いや、そんなドヤ顔で冷めた肉まん貰えても嬉しくないよ?!

「……あ、ありがとう」

しかし、お礼を言わなければいけない気がして、俺は小さくそう呟いた。

肉まんに対してではなく、バイト先で庇ってくれた事に対してだが。

「どういたしましてー? それじゃ、美味しく肉まんちゃんを二人で頂いてしまいましょうねー」

そう言いながら、モカは五つ目の肉まんを食べ始める。

それを見ながら俺も肉まんを口にするが、やはり廃棄後の冷めた肉まんはそんなに美

味しくなかった。

それでも美味しそうに食べるな、コイツは。

適当な奴だと思つてたけど、案外良い奴なのかもしれない。

「……あー、もう肉まんちゃんがなくなつてしまった」

もう七個食べたんですか。

「しよーくん、さっきの肉まん返してー、つて言つたら、怒るー?」

「困るわ!!」

いや、ただの変な奴だわ。うん、変な奴。

「あ、ここあたしの家。送つてくれてどうも。しよーくんも夜道にはお気を付けて
」

「なんで襲われそうになつてんの俺。……まー、良いわもう。うん。疲れた。……お疲れさん」

「あ、しよーくん」

なんだ、もうツツコミ疲れたぞ?!

「来週のライブ、来てね〜?」

「……あー、はいはい。行けたらいきますよ」

なんというか、ただの滅茶苦茶な奴だと思ってたけど——少し興味が湧いて来たかもしれない。

この青葉モカという変な女の子に。

A f t e r g l o w

「……帰ろうかな」

人混みに揉まれて三十分。

立っているのも中々苦しい。息苦しいというか、なんか酸素濃度が低い。

少し暗めの広場にどう考えてもキヤパオーバーの客が敷き詰められ、人が一人動くのも困難な状況に陥っている。

肉まん事件（俺命名）の一週間後、俺はCサーiックRクCクLルEルという音楽スタジオに来ていた。リサさんのバンドやモカのバンドが演奏するという事で来てみたんだが、なんかもう帰りたい。

こう、お客さん達皆テンション高いし。うるさいし。音楽の専門家みたいな人が腕組んでステージ見てるし。

そっち系のウエイな方々が沢山居る中で、俺はボツチで人混みに揉まれている。こんな事なら誰か友達でも誘ってくるんだった。

いや、マジで帰りたい。

「あと何分だったか……」

確か演奏の順番はリサさんのバンドが一番最初で、モカのバンドは……ほぼ最後じゃねーか。

リサさんのだけ観て帰ろうかな……。いや、流石にそれはダメか。

そうこう考えながら、飲み物片手に人に揉まれていると突然周りの灯りが消える。

その瞬間、周りで騒いでいたお客さん達が同時に動きを止めてこれまでの喧騒が嘘かのように静まり返った。

その中で何人かの足音だけがステージから聴こえて、その足音が消えると同時にステージを照明が照らす。

現れたのは黒装束の女の子達。俺とそんなに変わらない歳だろうか？

リサさんを含めて全員まだ中高生といった感じだ。

それでも、ボーカルを担当する銀髪の女の子が足を一步前に出しただけで周りの空気が一瞬で変わる。

なんの前振りもなしに同時に演奏が始まり、静かになった筈の会場はまた喧騒を取り戻した。

しかし、そのどれもが個人個人の口が混ざった「うるさい」と思えるものではなく――

「すげえ……」

――会場に居る人達が一つになったのかのような熱のこもった歓声。

会場に居る全ての人がステージに釘付けになって、まるで取り込まれていくかのように全体が盛り上がっていく。

魔法でも見ているかのような、そんな感覚。

体感時間が一瞬に思えて、気が付いたらボーカルの女の子が今歌った曲の紹介とメンバー紹介を終えていた。

これから二曲連続でまた演奏が始まるらしい。そう思ったら、それもまた一瞬で終わ

る。

これがバンドか……。

会場が一つになって大歓声上がる中で、それでも会場一杯に響く、尚且つ綺麗な歌声。

ギターとか楽器とか触った事ないから、周りの人が言ってる「流石Roseliaは技術が違うな」とか「やつぱりボーカルが凄い」とか、よく分からないけど。

とにかくリサさん含めて五人共凄かった。語彙力が無いとかそういう話じゃなくて、そもそも何が凄いのかなんて分からないし。でも、とりあえず凄いつて思ったんだよ。

何か一つ言おうとすれば――

「結婚してえ」

――リサさん滅茶苦茶素敵!!!

そんな風を感じながら人混みが嫌だったのも忘れて楽しんでいたのだが、流石に最後の方になってくると初心者俺はもう体力も限界です。

それで次がやつとモカのバンドの番。

えーと、なんだっけ？ これなんて読むんだっけ？ あふたーぐろう？

最初と同じようにステージの灯りが消えて、足跡が消えてからまた照明がステージを照らした。

モカはボーカルの子の直ぐ隣にギターを持って立っている。中々格好良いな。

そういえば、結局俺はあの肉まん事件からシフトが合わなくてモカと顔を合わす事になかった。

この会場の事だつてリサさんに教えて貰った訳である。

チケット代？ 自分で払いましたよ？ リサさんが招待してくれるとかそんな甘い展開はなかった。泣きたい。

だから、俺は彼女の顔を見るのも一週間ぶりになる。

特に話す事もないから、交換した連絡先に連絡する事もなかった。

そのせいかな？

確かに目の前にいるのはモカだとは思う。

その筈なのだが、どうも本人に見えなかった。

なぜなら——

「アイツ、あんな顔するんだ……」

——彼女が普段の惚けたような表情からは、想像もつかないような真剣な表情をしていたから。

ただ生真面目になったって訳じゃなくて、仲間や周りには普段のような柔らかい表情を振りまいて、それでも真っ直ぐに『今』この瞬間に真剣に向き合っている。そんな表情。

そして、五人は息もピッタリに演奏を始めた。

正直、音楽の事はよく分からない。

周りの人が疲れてるのかもしれない。会場はリサさんのバンドの時の方が盛り上

がっていたと思う。

後ろの人がチラツと言ったように「Roseliaの方が技術は高い」のかもしれない。

隣にいた人が言ったように「今の所ちよつとズレてた」のかもしれない。

ただ俺にはそんな事分らないし、違いだつて分からない。どっちも技術は凄いじゃん？ 俺なんてリコーダーも吹けねーよ。

でもさ——

「……格好良いな、アイツ。すげえ……楽しそう」

——でもさ、俺は『今』を全力で生きて、『今』に真剣に向き合っている五人を確かに感じていた。

この目に、この耳に、この肌に、彼女達五人の今が流れ込んでくる。

歌声は迫力があって、今の自分の心を叫んでいるようで。

ベースの音は明るくて、今を目一杯楽しんでいるようで。

キーボードの音は必至に奏でられていて、今がとても大切だと感じさせるようで。

ドラムの音はしっかりとっていて、今そこにいる皆を大切に支えているようで。

そしてギターを弾く真剣な表情のモカが、笑って、汗をかいて、全力で演奏しながら、今居る大切な仲間達と目を合わせる。

滅茶苦茶格好良いって思った。

技術とかレベルとか、そんな物はよく分からない。俺から言わせればここで演奏して
た人は全員凄い。

ただ、なんでかは分からないけど。

彼女達——Afterglowの演奏だけは感じ方が違う。

今を全力で生きている、そんな彼女達の等身大の演奏に惹かれたのかもしれない。

今、何も熱中出来ていない俺だから、そんな彼女達が羨ましかったのかもしれない。



「……いかん、帰ろう」

ライブが終わった後、俺は放心状態で気が付いたら周りの人は殆ど居なくなっていた。
た。

いや、流石に疲れたのかね。まだ頭の中で音が鳴ってるし。

帰って寝るとしますか。明日バイトだし。

そんな事を思っていると、突然スマホの通知が鳴る。誰かと思えば——モカか。

『しよーくん』

短文。

初めての連絡の通知が名前を呼んだだけの短文。

「主語も述語も何もない」

ただ、言ってる最中にまたメッセージが送られて来た。しかし、全部短文で。

『来てくれた?』

『もうご帰宅ですかね?』

『どー?』

「んう……」

会ってくれる気なんですかね?

いや、しかしね、なんというかさ。

あんな物見せられた後だと、別次元の世界に存在する人なんじゃないかと思っちゃう訳ですよ。

近寄りがたいというか、話しにくいというか。

「『帰った』と」

凄い奴なんだって、分かってしまったから、遠慮してしまう。だから俺は嘘をついた。もしかしたら舞台裏とか誘われて、バイトの友達ですってあの格好良いメンバーに紹介してもらえるかもしれない。

そんな事を思ったけども、やっぱり俺にはそんな勇氣もなければ資格もない。

俺には彼女達みたいに今全力で取り組んでる事なんてないから。

そんな俺には彼女達が眩し過ぎて、正直直視出来る気がしない。

『残念』

だから、俺が彼女達と接点を持つ事なんてないと思う。

生きてる世界が違うんだよ。

「『なんていうか、滅茶苦茶格好良かったわ。すげーな。お疲れさん』と」

本人が目の前に居ないのでとりあえず褒めておいた。送ってから後悔したけど。

で、既読はついたんだけどちよつとの間返事が返ってこない。帰りの支度でもしてるのだろうか？

『どういたしまして』

『ありがとう』

そんな短文が返って来たのは俺が家に着いてから。

なんというか、やはりあんな文を送って後悔中です。恥ずかしいわ。

当分モカには会いたくない。

『また明日ノシ』

あ……。

「明日モカと被りかよ!!!」

本気で休もうかと思いました。



「いや、最高でした。リサさん滅茶苦茶格好良かったです!!」

「もー、そんなに言われると照れるなー。来てくれてありがとうね、山田君。ちゃんと客席にいた山田君見つけてたよ」

マジかよりサさん!! 俺の事見ててくれたのな?!

「一瞬見えて直ぐに見失っちゃったけど、アレは山田君だったよ!」

あー……:そうですよねー。俺の気配なんてそんなもんですよねー。

いや、見つけて貰えた事に意味があるからね?

「ギリギリセーフ」

「モーカー、二分钟前だよ。早く着替えて来てねー？」

「はい」

久し振りにバイト先で見たモカは、昨日とは違って惚けたような表情で笑いながらバイト先に出勤。

俺を見るなり変な笑顔を見せてから、モカは休憩室に歩いていく。

……昨日のメッセージとかりサさんに見せるなよ？

というか俺、リサさんとは全然連絡取り合えてないんですけど。

仕事の事とか、音楽スタジオの話しかしてません。全部業務連絡ですよ。進展が何もないよ!! 辛い!!

「そういうえば、Roseliaの話ばかりしてたけど……山田君はAfterglowの演奏見てどう思ったの？」

何故か意地悪そうな表情でそんな事を聞いてくるリサさん。

何も言わない訳にもいかず、ただRoseliaより良かったなんて言える訳がな

い。

だからってAfterglowを悪くいう事は俺には出来なかった。

「やっぱり、その、演奏は……Roseliaの方が良かったんですよ」

だから、俺は昨日聞いた周りの評判を頼りにそんな事を言う。

これ聞かれたらモカは怒るかもしれないが、あの場所に通い詰めてそんな人が言ってたしこれは事実なんじゃないかな？ よく分からないけど。

「うんうん、それで？」

「えーと、なんていうか……Afterglowは、必死さが伝わってきて良かったです。楽しそうっていうか、今この時間を全力で生きてる……みたいなのが伝わってます」

そんな、俺が昨日思った事を伝えると、リサさんは悪戯な笑みを浮かべて「そっかあ」と呟いた。

え、ちよ、ちよつと待って、いや、Roseliaの方が最高でしたよ！ 勿論ですとも!!

「おやー、お二人さん、このモカちゃんを抜いてなんのお話ですかー?」

そんな会話の途中で、着替えが終わったモカが現れる。何このタイミング。

彼女の表情は普段と一緒で——でも、今日の彼女を見てしまったからか、これまでとは全然違うようにも見えるんだ。

「モカには内緒ー、だってなんか悔しいし」

「え、いやいや!! そういう事じゃなくてですね?!」

「えー、そうかなあ? だって今さつき山田君、これ以上にならない真剣な表情してたし」

これ以上にならない真剣な表情……?」

「俺が……?」

「うん」

……そうなの?

「ちよつとー、モカちゃんを置いてけぼりなんて、バチが当たりますよー?」

眉間にしわを寄せるモカだが、全然迫力がない。Afterglowのボーカルの子

の方が素でも迫力ある。

そういうえばあのキーボードの子、天使みたいだったよね。こう、応援したくなるっていうかき、妹に欲しい。

あとドラムの子はイケメンだった。途中まで男だと思ってた。でもめっちゃ美人。

そしてベースの子が滅茶苦茶おっぱい大きかった。ヤバい。演奏終わってから気が付いてずっと目で追ってたからね。もうそれしか見てなかったです。はい。

って、なんで俺はAfterglowの事ばかり考えてるんだ。

「あつはは、ごめんごめん。モカ、バイト上がりはやっぱり皆と?」

「そーなんですよー。今日モカちゃんだけバイトでー、ライブの次の日で打ち上げやろうって日にこの仕打ち、しくしく」

俺、しくしくとか言う人初めて見たよ。実在するんですね。

「アタシは昨日ファミレスでご飯食べて終わりだからなあ。ちよつとだけAfterglowが羨ましいよ」

あー、仲間内で打ち上げの話ね。

「つて、山田君ごめんごめん。話着いてこれないよね？」

なんでそこで気が利けるんですか。どんなコミユ力だよ。

「あー、いやいや、俺には構わず」

二人と俺は別の世界の人間なんだろう。

俺には何も無い。確かな技術も、全力で向き合える今も。

「……ふーん」

ただ、そう言う俺の表情をリサさんは興味深そうに覗いてきた。

え、な、なんですか？ 俺の顔になんか付いてます？

なんか恥ずかしい!!

「いやー、しかし、しよーくん久しぶりー。シフトが合わなくて、会えなくて、モカちやんちよー寂しかったですよー」

「いや、俺は別に」

別次元だとかどうだとか以前の問題で、モカと居ると疲れるし。

「えー、あたしはしょーくと話してると、しょーくんが適切なツツコミを返してくれるので、楽しいんだけどなー？　こう、幼馴染達からは来ない、ズバツとしたツツコミが、モカちゃんのハートにググツと来たのだよ」

「ツツコミ担当を探しているボケ担当かよ」

「そう、それだよ、流石しょーくん」

いや、驚かれても困る。

「なーんだ、アタシはハートにググって来たって言うから、モカが山田君に恋しちゃったのかと思ったのに」

縁起でもない事言わないで下さい。

「……。……あー、それは、ないです」

少し考えるそぶりをした後、澄ました顔でそう言うモカ。うるせえよ！　こつちから願い下げだよ!!

「……ぬう」

「ふふっ」

あ、今リサさんに笑われた気がした。
違うんです。ただ悔しかっただけなんです。こんな変な奴に劣等感を覚えている自分
が嫌になっただけなんです!!

「昨日も皆にしよーくんを紹介しようとしたのに、しよーくんは先に帰ってしまっ
たのですよー。しくしく」

「泣き真似が下手過ぎて何も伝わって来ないんだけど」

ライプステージの上でのモカは何処へ行ったんだ。

「今度はちやーんと、蘭達にしよーくんを紹介するので、その時は気の利いたお土産を期
待してますよー」

「いや、良いから。てかお土産にししか期待してないだろ」

肉まん事件で知ったが、コイツかなりの大食いらしい。なぜ肥らない。

「いやいやー、本当にしよーくんを紹介したいんだよー?」

「いや無理に接点持とうとは思ってないから。あー、サインとかは欲しいかも」

モカがどうこうはともかく、正直あの日見たバンドの中では俺は A f t e r g l o w

が一番気に入ってしまったんだよな。

「サインならこのモカちゃんが直々に書いちゃいますよ〜?」

「ごめん、あのボーカルの人のサインが欲しい」

理由は自分でもよく分かってないし、昨日思った事だつて結局は曖昧だけでも。

「モカちゃん、ショック」

「全然落ち込んでるようには見えませんが?」

それでもやっぱり、彼女達は俺にとって遠い存在なんだと思う。

「……………ふーん」

「ど、どうしたんですか? リサさん」

「いやー、なーんにもー?」

俺は彼女達と違って、何もないのでから。

やりたい事を探して

「それではモカちゃんは帰宅しまーす」

昼間の忙しい時間が終わったので、モカは帰宅。

「……おつなりー」

「いやどんな挨拶だよ」

「お疲れー」

コンビニには俺とリサさんだけの二人になった。

もう一度言う、リサさんと二人きりになったのである。

青春か。

「ねー、山田君」

「う、うお?! な、なんですか!」

そして突然話し掛けられた俺は物凄く吃った。恥ずかしい。

頑張れよ山田。せっかくのリサさんと二人きりだぞ! 頑張れよ山田!

「……もしかしてさ、アタシ達に劣等感とか感じてる？」

ただ、覗き込むように俺の顔を見ながらリサさんはそう言ってくる。

この人はどれだけ周りの事を見ているんだと、正直怖くなった。

「……そりゃ、まあ。あんな物見せられたら」

リサさんも *Rose lia* も、モカも *After glow* も、他のバンドも全部、俺からすれば手が届かない。

あんなに大勢の前で演奏して、歌って、全力で取り組む彼女達を見て、何もしていない俺が馬鹿らしく思える。

俺はこれまで何をしてきたのか。一度だって彼女達のように何かに全力で取り組んできたか？

ただ、なあなあと人生を生きてきただけだ。

そんな自分に吐き気がする。

「俺、趣味とか無いんですよ。ある程度適当なゲームとか友達と遊んで、勉強もある程度

して、適当に生きてたから。……あの日、あの会場で見た皆が眩しくて」
今を全力で生きる彼女達が眩しかった。

自分には持っていない物を持っている彼女達が。

俺にはそこまで何かに熱中する事は出来ない。した事がない。今も、きっとこれから
も。

「そっかあ……。実は、アタシも偶に思うんだよね」

「リサさんが……?」

「なんで?」

リサさんだって、あの会場で音楽関連の人達が褒めちぎってたRoseliaのメン
バーの筈。

「アタシも、友希那や紗夜みたいにバンドにあそこまで真剣に取り組めないでいるから
さ。あこや燐子みたいな才能もないし」

「り、リサさんが……?」

いや、リサさんの演奏凄く格好良かったと思うんだけど。

それに Roselia の中では一番笑っていたのも彼女だったと思う。

「うん。演奏だって Roselia の中では一番下手だし、きつと足を引つ張ってると思う」

そんな事はない——なんて事は言えなかった。

だってそう思っているという事は、やっぱりリサさんだって音楽と真剣に向き合ってるからだろう。

俺にはその違いが分からない。だから、そんな事を言う権利は俺にはない。

「たださ、Roselia に対する想いだけは本物だよ。確かに音楽の練習だけして生活は出来ないし、先の事までは正直見えてない。才能もない。……それでも、Roselia がアタシの居場所だって思ってる」

ただ、とリサさんは言葉を繋げた。

「それでもやっぱりアタシにとつては Roselia の皆が眩しい。自分の持っていない物を持ってて、羨ましく思う事もあるよ」

それは、俺が眩しいと思っていた彼女の普通の部分。彼女の眩しくない部分。

少しだけ、彼女が何を言いたいのかわかる。

「きつとこれは誰もが思う感情で、なんていうかその、当たり前なんじゃないかな？ 友希那には友希那の、紗夜には紗夜の、あこにはあこの、燐子には燐子の、アタシにはアタシの、それぞれ光ってる物があつて、それは一人一人違って、きつとお互いが眩しい筈。チョコレートにはチョコレートの、生クリームには生クリームの甘さがあるみたいだね！」

人それぞれで本気になる物は違うし、大きさも形も違うんだ。きつと彼女はそう言いたいのだろう。

……でも、なら俺は？

俺は何かの本気を出しているか？

「でも俺には、何もありませんよ……」

「山田君、何か話を勘違いしてない？」

え？ 何が？

「アタシは結局 Roselia の事しか言っていないんだよ。で、Roselia が結成されたのって何時頃だと思う？」

「え、それは……。すみません、分かりません」
どういう意味だ？

「……最近だよ。本当に、……最近」

つまり……？

「もし Roselia が無かったら、山田君はアタシに劣等感を抱いていたかな？ アタシが皆に抱いていたような劣等感を、Roselia がない私に山田君は抱いていたと思う？」

「そ、それは……」

きつと、そんな事はない。

あのバンドを見なければ、俺はリサさんもモカもただ普通の高校生。バイトの同僚としか見ていなかった筈。

こんなにも輝いて、眩しくは見ていなかった筈。少なくとも、あのバンドを見るまではそうだったのだから。

「だからさ、山田君も探せば良いんじゃないかな？　自分が今全力でやりたい事をさ」

「自分が今、全力でやりたい事……」

「そしたら、きつとその気持ちも少しは紛れるんじゃないかな？　それはアタシだけかもしれないけど。もし良かったら、探してみようよ」

両手でガッツポーズを取りながら、リサさんはそう言った。

全力でやりたい事か……。何があるかな？

目を閉じると、今を全力で生きていた彼女達の姿が思い浮かぶ。そんな中でも、何故か一番最初に思い浮かんだのはモカだった。

「お節介だったらごめんね。アタシってなんかいつもこうでさ」

「いい、いやいやいや、とんでもない！　ありがとうございます。なんか、気分が晴れそうですよ！」

実は少し後悔していた節がある。

なんであんな物を見てしまったのだったのか。

でも、こうして考えるとむしろ良かったのかもしれない。

今、俺が全力でやりたい事……か。



「相変わらず死んだ魚みたいな目だな、翔太」

平日の学校。昼休憩の時間。

「うるせーよ、生まれつきこの目なんだよ」

学校の机で昼飯を食べていると、茶髪のチャライ男が話しかけて来た。

「そりゃ、どんな赤ん坊か見てみたいな……」

「きつと前世で相当酷い目にあつたんだよ、俺は。……で、何用ですかね圭介君」
橘圭介。俺とは小学生からの仲で腐れ縁。

中学までは俺と同じなんの取り柄もないただのガキだった筈だが、高校デビューしてから一気に様変わりしたウエイ系の人間である。

ただやっぱり腐れ縁というのは中々切れるものじゃなくて、住む世界が変わってもこうして偶に話す仲ではあつた。

「いや暇だったから」

「俺は凄く忙しいんだよ。シツシツ」

人を暇潰しの道具にするんじゃないよ。

「なんだ、釣れないな。どうせ暇なんだろう？」

決め付けられてらあ。

いや、まあ、そう思われても仕方ないんだけども。

だが今の俺は違うぞ。

「今俺はな、趣味を探してるんだ」

「風邪でも引いたのか……」

「デコをくっ付けるな！ 額に手を当てるな！ 本気で心配した顔をするな！」

お前俺の事なんだと思ってるの?!

「どうしたんだ翔太……。無趣味を具現化したようなお前がいきなり趣味なんて」

「俺達友達だよね？ そこまで言う?」

「ふ、友達だから……さ」

キザな口調でそう言う圭介だが、不意に真剣な表情になって俺の顔を覗き込む。

なんでそう言う事平然と言えるかな。

「……何かあったか?」

「い、いや……」

「あー、恋か」

「ちやうわ」

誰にだよ。

いや、リサさんには確かにベタ惚れだけでも。

……モカ？　ないない。

別に恋してるから悩んでる訳じゃない。

何も無い自分が嫌になってるだけだ。

「なんだ。てつきりバイト先の先輩に振られてナイーブになってるのかと」
縁起でもない事言わないでくれる？

「ちげーよ。まあ……なんだ。バイト先の先輩二人がさ、バンドしててさ」

「へえ、バンド。ガールズバンド？」

「そうそう」

流石ウエイ系。話が早い。

「それで、全然歳も変わらない筈なのに凄い熱を感じて。何も趣味がない自分が……その、嫌になった」

「陸に上がって冷え切った筈のお前が何かに熱を感じるなんて……。調理されてるのか

？」

「今真剣な話してるんだけど?! 俺は死んだ魚じゃねーよ!」

扱い悪くない?

「ならば、バンドをやれば良いんじゃないか? 翔太も」

「……は?」

い、いやいや。何言ってるのこイツ?

「だってお前、ライブを見て『熱い』って思ったんだろう? それはつまりバンドに興味があるという事でもあるんじゃないか?」

「それは……」

いや、しかし、でも、だな。

そうか、バンドか。ギターの練習とかを理由にリサさんに近づくチャンス?

「お前趣味なさ過ぎて最近バイトしかしてないし、給料入れば安物のギターくらい買えるだろ?」

「でも俺一人でギター買ってもしょうがなくなかね? お前も買えよ」

「俺はベース持ってる」

ウエイ系怖い。

「じゃあ、バンドやるか」

「嫌だ」

「お前が言ったんだよなあ?!」

なんなのお前!

「飽き性の翔太が続くとは限らないからな。もしお前が俺が認めるくらい上達したら、バンド組んでやっても良いぞ」

「……なんだそれ。別に良いじゃんかよ」
んなろお、見てろよ。

よーし、決めた。

俺もバンドマンになる。そして圭介と一緒に音楽に真剣に取り組んでみようじやな

いか。

「まあ、お前が続いたらな」

「見てろよお前、俺の本気見せてやるから」

将来の夢……とかじゃないが、今はこれを全力でやってみよう。

今、全力でやりたい事を探すんだ。

——彼女のように。



「たけーよ」

一週間後、奇跡的にバイトの無い平日。

無趣味なのでシフト表には毎日出れますとしか書いてない俺はそれなりの初給料を頂きました。

それでバイトの無い日に楽器の売っている店に来てみたは良いが値段が想像の五倍

くらいする。

「これ、モカのと同じやつじゃね？ え、なに、こんなにするの？」

バイト代で買えるものなんですかコレ。桁が想像より一個多いんだけど。

「お客様、どういったような物をお探しですか？」

「五万以内で買えるものを」

目の前の奴、本当は一目惚れしたんだが。高い。全財産の三倍くらいの値段がするもん。

「中古品でもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。え、大丈夫です」

今からバンドマンになろうとしている男がこんなに吃つてどうする。

「今お客様が見ていらしたモデルの中古品で、少し状態が悪い物でしたら色はREDで五万円程でご用意出来るのですが」

今俺の目の前にあるのは、ライブでモカが引いた奴と似た感じのギターだ。

専門知識が全くないので、同じ奴かまでは分からないし。

そもそも状態とか気にしてる場合でもない。

「あ、じゃあそれで」

だから、俺はこの後は店員に言われるがまま良く分からない専門用語を聞き流してギターを購入。

ギターケースまで買って、初任給が殆ど吹き飛んだんですけど。もう二千円しか残ってないよ。

いや、だがコレもバンドの道に進む為だ。店員さん曰くこのモデルがこの値段で手に入る事は稀という事なので、大切にするとしよう。

それにケースまで持ってギター背負ってる俺、格好良い気がするね！
なんかこう一歩前に進んだ気分だ。

そんな訳で帰宅して、直ぐにケースからギターを取り出す。えーと、弦の調整するんだっけ？

あー、いかん。聞き流してたから意味が分からん。ネットで調べるのも怠いし。

明日のバイトでリサさんに教えてもらうか。ギター背負っていつたらきつとビツクリするだろうな。

それじゃ、格好だけ付けるために持ち方の練習だけしとこつと。

「……あんた誰」

そして、帰って来たお母たまにそんな事を言われました。俺だよ俺。

「俺だよ俺。あんたの息子だよ」

「オレオレ詐欺には引つかからないわよ！」

「目の前に親しんだ顔があるだろうが!!」

自分の息子の顔くらい覚えて?!

「え、何、ギター? 突然どうしちゃったの」

「あ、俺、バンドマンになるから」

「いや本当にどうしたの」

うるせーよ、夢を追いかけて見たいんだよ。

「それで、初給料吹き飛ばしたと」

「いや、悪かったですよ。反省はしてますよ。あ、これ、一応初給料で買ったコンビニの

肉まんです。お母たま」

初めての親孝行、肉まん一個を贈呈。

勿論、冷めてます。

「りんごカードにしなさいよ。課金するから」

「どうせ出ねーよ」

ソシヤゲってのはな、課金すると出なくなるんだよ。ソースは俺。

「しかしあんたがバンドとはねえ。え？　なんか弾けるの？」

「いや、さっぱり。今から勉強する。でもさ、こう、持つてるだけで格好良くない？」

「そのギターが置物にならない事を祈るわ」

皆してそう言うのは何故だ。いや、そういう信頼を積み重ねて来たのは俺だけどさ。

今度こそ俺は自分の趣味を見つuckerんだよ。

あのライブで感じた感動を、俺だって誰かに与えたい。

だから、とりあえず格好良く持つイメージトレーニングだな！

「あー、なんだろ。ギターって格好良いな！」

なんか五割り増しくらい顔が良くなってる気がする！

「………続けば良いけど」



「山田君ギター買ったの?!」

翌日のバイト先で、俺はついにリサさんにギターを見せました。

「まあ、なんていうか、憧れちゃったというか」

「へえ、そつか! いや、本当にびっくりしたよ。それ確かモカの奴と同じモデルだよね
!」

しまったー! 本当に同じ奴だったー!

「え、あ、そうなんですか……?」

「え、知らずに買ったんだ」

知ってたら別の選んでたかな！

「でも山田君がギターかあ。本当にびつくりしちゃったよ。バンド始めるの？」

「うおー、グイグイくる。良いねえ。ギター持つてるだけで人生変わるものだねえ。」

「いやあ……あつはは、まあ……。練習して、上手くなったら友達とバンド組むって約束
しまして」

「えー、良いじゃん！ ライブする事になったら呼んでよー！」

ギター最高かよ。

「それで、どのくらい弾けるようになったの？」

う、それを聞かれると痛い。

まだ一ミリも理解してません。さて、どう言って教えてもらうか、だな。

「それがですね——」

「うおー、しよーくん、それは、まさか、あたしと同じギターなのでは」

この最悪なタイミングでモカが来たああ!!

「あ、見てよモカ！ 山田君がモカと同じギター買って来たんだよ！」
それを言わないで!! なんか恥ずかしいから!!

「なんと、しょーくんとお揃いになってしまおうとは。いやー、ペアギターだねー」
望んでこうなった訳じゃないからな?!

「それで、どれだけひけるんだっけ？」

「いや、まだ全くもって右左も分からない状態なんですよね……」

「ここでモカに話を振られたら計画が台無しだし、無理にでもリサさんに頼み込もう。
そうしよう。」

「だからリサさん。俺にギターを教えてください！」

「ごめん。アタシは無理かな」

振られた。

「な……」

「あ、いやいや。変な言い方してごめんね。アタシが弾いてるのって、ギターじゃなくて

ベースなんだよね」

何それ、ベース？ ギターとベースって何が違うの……？

僕知らない。

「ギターはモカが弾いてるから、教えてもらったらどうかかな？」

「え、あ、はい」

どうしてこんな事に？

「それじゃ、モカちゃんが手取り足取り教えてあげます」

「は、ははは……よろしくお願いします」

い、いやいや、元々俺はギターを練習する予定だったんだ。別にいい！ リサさんに教えてもらう事だけが目的じゃないしい？！ うん！！

そんな訳で、俺はこのバイト終わりにモカにギターを教えてもらう事に。
わーい、女の子と遊べるぞー！

ギターって凄いな!

畜生!!!

「んじゃ、お手柔らかに教えてくれよ。モカ先生」

「ふっふっふ、モカ先生は厳しいですぞ」

ただ、ちよつとこの先が楽しみな気がして。

今この瞬間が楽しい。

そんな事を感じたんだ。

夕焼けを見て思う

「で、モカ先生。どこで練習するんですかね」

同日のバイト終わり。家から自分のギターを持って来たモカに俺はそう聞いた。

ギターって普通どこで練習するの？

スタジオとか借りてやるのが普通なんだっけか。いや、そこまでする物？

「カラオケとか？ スタジオ借りるような練習は、まだかな？」

カラオケ……だと?!

「え、えと、それって……二人で？」

「そーなりますなあ」

モカとはいえ女の子と二人きりでカラオケ……だと？

高校の友達グループで女の子が混じったカラオケの経験はあるけど、二人きりなんて経験ないんですけど。

ちよっと待ってハードル高い。

「……どつたの？　しよーくん、顔が赤いよ〜？」

「な、なんでもないよお?!　よ、よし、オーケー、準備オーケー。カラオケね。カラオケーね！」

残りのお小遣いが消える訳だが、問題はないだろう。

「オーケー、カラオケー……おー、今度、蘭に言つて聞かせてみよう」

「待って、俺が悪かった。ごめんて。気温低くしてごめんて」

女子と二人きりでカラオケでギターの練習なんて……ほら、なんていうか、青春じゃない？

☆ ☆ ☆

小さな個室。密室。

ギターを椅子に置く事もあり、モカとの距離はかなり近い。

ちよつと良い匂いするんだけどナニコレ。

「それじゃー、何か歌う？」

「ギターの練習に来たんだよ?!」

なんで開幕早々脱線してんだよ。

「いやー、しよーくんには一度モカちゃんの生演奏を間近で見てもらおうかなーと」

ドコト?

言いながらモカは自分のギターを取り出して、何やら上の方を弄って調整しだした。何をしているのかはよく分からないが、なんか格好いい。

「しよーくん、この曲歌える?」

そして、タブレットを触り曲の選択画面で止めてからモカはそれを俺に渡してくる。

画面に映っているのは確か大人気ゲームの主題歌になっている曲で、それ以前に有名な曲だ。これなら歌える。

「歌えるけど……。何? 俺が歌うの?」

「いいからいいから。ほら、今週の山場、ポチツとな」

「お前絶対それ世代じゃな——つと、始まるわ。マイクマイク!」

俺の疑問は晴れる事なく、画面に曲名が表示された。

突然で上手く歌える気がしないんだけど。ていうか、なんで俺が歌う事に。

そしてモカはモカで音響バランスを調整するツマミを思いつきり回してミュージックのメーターがみるみる下がっていく。

ていうか聞こえない。ミュージック聞こえない。

「逆でしょ?! 回す方逆でしょ?!」

「いやいや、これでいいのだ」

「だから世代じゃないだろ!」

「始まるよー」

そう言いながらモカはギターを構えて、表情を変えた。

カラオケのミュージックは流れていないのに、俺の中に曲が入ってくる。

モカが弾き始めた曲が、カラオケ映像で流れってくる歌詞に並んで――

「――っ」

俺は気が付いたら歌い出していた。

ギターの音と俺の歌声だけが個室に響く。

俺はつい立ち上がって曲を歌い出して、モカもまるであのバンドの時のように真剣にギターを演奏していた。

モカが代わりに演奏をしてくれているのか?!

楽しい。

なんだこれ。めっちゃ楽しい。

今この瞬間がずっと続けばいいのに。そんな事を思つて、それでも時間は一瞬で過ぎ
ていく。

「しよーくん、歌上手いね〜」

曲を歌い終わって演奏を終えると、モカはのんびりとした口調でそう言ってくれた。

時間にして四分もない。そんな時間だったけど、俺はきつと全力で楽しんでいたと思う。

「い、いや、モカの演奏が良かったからってというか……。すげー、格好良かった！」
だから、感極まっていたのかも知れない。

ずっとモカの事は凄い奴だと思ってた。手の届かない凄い奴だと思ってた。

でもそれを認めたくなかったのか、悔しかったのか、俺はそういう事をメッセージ以外で言った事は無かったと思う。

でも今回は口に出して言ってしまった。

言ってから後悔して、俺は少し後ずさる。恥ずかしかったのもあるが、モカが目を見開いたまま固まっているのも、なんとというか気まずい。

「あ、いや、その――」

「目潰し」

「ぎゃあああああ!!!」

——そして俺は何故か目潰しを喰らっていた。

何故?!

どうして?!

「バ〇ス。かつこ、物理」

「目がああああああ！ 目があああああ?！」

なんで?! なんで俺今破滅の呪文放たれたの?!

なんで?!

「しよーくんつてー、そういう事恥ずかしげもなく言うよね。後で後悔とかしない?」

「後悔しとるわ!! 今まさに理由は分からないけど後悔しとるわ!!」

なんなのこの人?! なんなの?!

「おー、よしよし。誰にやられたんだい?」

「お前だよお?!」

助けてリサさん。

「ほらほら、立ち話もなんだから座って座って」

「くそ……俺なんかした?! 俺モカ先生になにかした?!」

やっと痛みの引いてきた目でモカを見ると、ギターの演奏で火照っていたのか少し顔が赤い。

そんな彼女の表情を見ると、またバ二本の指〇スが飛んでくる。

「あぶね?!」

「……おー、やるなおぬし」

「先生。俺達何しに来たんだっけ? ん?」

「えー、コントの練習じゃなかったっけ?」

「あーそうだったそうだった。俺達でお笑いの高みを目指そう——ってちげーよ!!」

「……素晴らしいノリツツコミ」

落ち着いて? ワンチャンあるみたいな顔しないで?

「冗談ですよー、しよーくんはせっかちさんだなく。ギターは教えるけど、一回こうい

事も、してみたかったんだよね〜」

のんびりと呟いて、しかしくしゃつとした笑顔を見せながら「だから、ありがとう」と呟くモカ。

そんな笑顔が眩しくて、つい演奏をしていたモカが脳裏に映った。

全力で、今この瞬間を本気で楽しんでいたと思う。……それは、俺もものに――

「さーて、ギターの練習しますかー。とりあえずやる事は――」

――なのに、どうしてこうも彼女だけが遠く見えるのだろうか。

真剣さが足りないんだ。

彼女みたいに真っ直ぐに音楽に向き合えてない。

今だってさっきの楽しかった演奏が頭を過って、せつかくギターの事を色々教えてくれるモカの言葉が頭に入ってこない。

さっきのコント染みた会話の方が楽しく感じてしまう。

——結局俺は、その時が良ければそれで良くて、のうのうと生きているだけなんだ。

ギターを買ったのだって、不純な動機で。それに真剣に向き合う気持ちなんて全くなかったんだと思う。

「な、なあ、モカ」

「どったの〜？」

「もう一曲、歌わないか？」

——現にこうやって、俺は今が楽しければ良いとギターから逃げた。

「……。……うん、良いよ」

そしてモカは一瞬ポカンとした表情をしたが、俺に合わせて首を縦に振ってくれた。それがとても嬉しくて、俺はギターを直ぐに閉まってマイクを手を取った。

だからといって歌手になるだとか、バンドでボーカルを務めるだとか、そんな事を思っている訳じゃない。

ただ、今が楽しければそれでいい。

そんな不純な動機。

きつと俺は、何かに真剣に向き合う事なんて出来ないんだと思う。

——それが、分かってしまった。



「いやー、歌ったね〜」

「ほぼ歌ってたの俺だけだな」

結局、俺達はカラオケで歌い尽くして時刻は夕暮れ。

カラオケを出ると夕焼けで空は真っ赤に染まっている。

「いやー、めんごめんご。結局、しよーくんのギターの練習、殆ど出来なかつたね〜」

「まあ、また今度で良いって。また教えてくれよモカ先生」
「ふふーん、モカちゃん先生にまかせなさい」

数歩歩いて振り向きながらそう言うモカを夕日が照らして、彼女がとても眩しく見えた。

まるで現実に戻されたみたいで、俺は少し嫌な気分になる。

夢みたいに楽しかった。

でも、太陽が沈めばそれも終わりだ。

今にすら真剣になれないのに、明日を考えないといけなくなる。明日になったらギターに真剣になれると思うか？

答えは分かりきっていた。

だから、これまでになんの意識もしてこなかったけれど。

俺は夕焼けが嫌いなんだと思う。

「綺麗な夕焼けだね〜」

ただモカは笑顔でそう言った。

今が楽しそうで、これからの今も全力で生きることの出来る彼女の笑顔はやはり眩しい。

「……俺は、夕焼け嫌いだよ」

「……しょーくん？」

だから、俺はそう言って歩き出す。

「……。……暗くなる前に帰ろうぜ？」

「……あー、うん」

首を横に傾けるモカだが、名残惜しそうに夕焼け空を見上げてから俺について来てくれた。

とりあえずモカを送り届けないとな。

「今日はその……ありがとう」

「いえいえー。あまり教えられなくて、モカ先生は少し反省してます」
少し歩いて彼女の家の前に。

ギターってこんなに重かったっけか。

今まではこれを持つてるだけで気分が浮かれて、重さなんて気にならなかったのに。
今はもう、ただの重荷に感じてしまうんだ。

「また今度教えるから、今日の所はご勘弁」

「あー、まあ、えーと、良いんだよ。はは……。それじゃ、またな」

俺がそう返事をして片手を上げると、モカは何かを不思議に思ったのか首を傾げる。
そんな彼女に手を振って、俺は振り向いて家に帰る為に歩き出した。

「しよーくん」

ただ、モカは短く俺の名前を呼ぶ。

振り向くと彼女は笑っていた。

「……なんだよ」

「今日はありがとう。超楽しかったよ」

「……そっか。俺も、楽しかった」

そう返して、俺は背を向ける。

ああ、楽しかったんだよ。

本当に最高に楽しかった。

でも、だから、自分が情けなくなる。

何がバンドマンになるだ。何がギター持ってる俺格好良いだ。

——俺は何も出来ないんだよ。

「……しよーくん、凄く楽しそうだったのにな。……うーん。あたしも、楽しかったなあ」

山田翔太はそういう奴だ

「まあ、続かないと思つてたけどな」

「辞めた訳じゃねーし」

「同じ様な物だろ。小さい頃からお前はそういう奴だった」

平日の学校の帰り際、圭介とそんな話をした。

思えば確かに俺は小さな頃からそういう奴だったと思う。

小学生の頃、恐竜が好きだった。

恐竜博士になるんだとか、言っていた記憶もある。

中学生の頃、野球選手になりたいと思つていた。

入った部活はバレーボール部。野球部がなかったのである。

上の学年が三人しかいなかったので、俺は一年の後半から三年生になるまでレギュラーだった。

それなりに取り組んでいたとは思う。ただ、それは、俺を頼りにしてくれる先輩と話すのが楽しかったからだ。自分を認めて、必要としてくれるのが嬉しかったんだろう。

その時が良ければ良かった。だから、先輩が居なくなつて、急に熱が冷めて、俺はレギュラーから外される。

結局、その時楽しければ、それで良かった。

だから、本当に何かに真剣に取り組んだ事がない。

全部中途半端で、勉強も運動も遊びも全部、俺には何も無い。

部屋に飾られて、一週間触っていないギターは少し埃を被っている。

それを見ても俺は何も思わなかった。

ただ、部屋にギターが置いてあるって格好良いなつて。

「結局置物になってない？ それ」

「うっせーな、格好良いだろ。オシャンテイだろ。……バイト行つてくるわ。昼過ぎに終わる」

趣味もないから、休日はバイトだ。休みたい理由もない。

ただ、遊ぶお金が欲しい。ほら、またモカとカラオケ行つたりさ。

それで良いんだよ。今何かに全力で取り組んだつて、きつと俺はまた飽きて、何も残らない。

だつたら適当に、今楽しかったら、それでいい。

「あー、昼ごはん用意しといたから。私出掛けるわよ。鍵持っていきなさい」

「へーい。……どこ行くの？」

「シヨツピングモールでレーダー起動するとダンジョンが貰えるらしいのよ！ ついでにお買い物。夜までぶん回すから、帰つてこないわよ」

熱心な事だ。てか、普通目的が逆だろ。

父親は今日も今日とてパチンコ屋である。なんて家族だ。こうはなりたくない。

それに、どれだけ熱心になっても、どうせいつか――

「んじゃ、先行くから」

――そんな物、意味はなくなる。



「……しゃあー」

ついに「……つしやーしたー」すら超越した。

「流石にアウトだろ」

「通常の三倍早く言う事により、モカちゃんはこの領域に突入したのだよ。名付けて、赤い――」

「流石にアウトだろ」

許される範囲というのがある。

「しょーくんはお堅いなー、そんな事では頂点は目指せないよ?」

「なんの頂点だよ。お笑いか?!」

「どーもー、モカショーです」

「勝手にコンビ名を作るな！」

しかもカツプリングみたいな名前だし。恥ずかしいわ！

「今、モカちゃんとしょーくんでモカショーだと思いましたが？ 残念、違います」

「は、ひ、ふ、へ、はあ?! 違うけどお?! そんな事微塵とも思ってませんけどお?! む、

むしろどういう意味なんだよ！」

こいつ読心術でも持つてるのか。

「モカちゃんのショーで、モカショーです」

「ワンマンプレイ！ 確かにお前にピッタリなコンビ名だな!! もうええわ!! ありが

とうございまして!!」

「おー、完璧な締め方」

「——ハッ、俺は一体何を?!」

モカに日々鍛えられている成果が出てきたのかもしれない。

何してるんだお前は。

「こらー、二人共ー、仕事中だよ」

そんな話をしていると、店の外からリサさんがそう言いながらやってきた。時計を見るともう昼過ぎ。バイトの時間はもう終わり。

最近、モカと働いてると時間がかかり短く感じるんだよな。

こうやって馬鹿みたいな話をしてるからだと思うけど。

「すみませんリサさん！」

「お喋りはもう少し控えめに、バレない程度が基本だよ！」

お喋り自体は良いんですね！

「てか、リサさん早くないですか？ モカとの交代二時間後ですよね？」

もしかして俺の顔を見に来てくれたのかな？!

「山田君がモカと一緒に帰れるように、早めに来てみたんだ。ほら、山田君ギターの練習！」

何この人優しさの塊かよ。逆に怖いわ。

だけど、ギターは……。

「つまり、モカちゃんは今もう帰って良いと」

「そーいう事！ ほら、昨日のバイト中に先週は全然ギターの練習出来なかったって言ってたじゃない？ 今日は何処かで教えてあげなよ」

これ、アレですかね。俺はまたギターをモカに習う流れですかね。

嫌という訳ではない。いや、しかし、だな……。

「つまり、商店街でしょーくと食べ歩きが出来る」

「いやリサさんギターの練習って言ってるからね？」

「あつはは、別にそれでも良いけど。バイトの事はアタシに任せて、今日は二人で出掛けるなりしなよ」

姉御おお！ 大好きです!! 付き合ってください!!

と、言えない自分が憎い。

「リサさん、しょーくんの事は任せてバイトに行ってください。……しょーくんは、私が倒します」

「なんで倒すの?! てか普通に逆じゃない?!」
「どういふ設定だよ。」

「そのやり取りを聞けて、早めに来た甲斐があったよ。ほらほら、お客さんが居ない間に！」

そう言つて俺とモカを休憩室に押し込むリサさん。更衣室があるとはいえ、男女を個室に閉じ込めるのはどうなんですか。

「さて、リサさんにそう言われたものの。……どーする? しよーくん。またカラオケ行く?」

更衣室に向かいながらモカはそう言う。

カラオケ、カラオケかあ……。かなり魅力的な話だが、残念ながら俺にはお金がない。ギターにはほぼ全財産を使つてしまったのだ。あのギター売ったらいくらになるかな? そんな事を考えてしまつて、冷静になる。

……俺に彼女と遊ぶ権利があるのだろうか?

「……いや、ごめん。金なくてさ」

ただ、リサさんにあんな事を言われてしまった手前だ。今からモカと遊ぶのを断る事なんて出来ない。

それに、モカ自身が俺と遊んでくれると言っているのだから。むしろ断る権利の方が無いだろう。

だって、彼女と居るのは楽しいから。

「そーいえばしよーくん、ギターは？ 一週間前は持って来てたのに」

「……っ」

更衣室から出て来たモカはゆっくりとした口調で、俺の顔を覗き込みながらそう言った。

シヨートパンツと薄着のシャツにパーカー。

一見すればボーイッシュな彼女の格好だが、やっぱり骨格は女の子で近付くと所々丸くて柔らかさそうで——いや、俺は何を。

「……しよーくんっ？」

「ギターは……その」

視線を下げて、俺はそんな彼女から目を逸らす。

やはり、どうしても直視するのが眩しい。

ギターの事を聞かれてしまうと、そんな気持ちがまた浮かんでくるんだ。

「……忘れて来ちゃったの?」

「そ、そうなんだよ! いや、モカがまた練習付き合ってくれてくれるって思ってたなくてさ、あはは。あーと……だから……」

だから、なんだ? 商店街に遊びに行くか? 金もないのに。

いやそもそもモカが俺と出掛けてくれるのはギターの練習の為なんだぞ。

取りに行くか?

でも、ギターの練習をするのか?

「それじゃー、今日はしよーくんの家に行こう」

頭の中で葛藤していると、突然モカはそんな事を言い出す。

え? 家?

「……俺の家?」

「うん。まずは、あたしのギターを取りに行つてから、しょーくんの家。まだ練習だし、近所迷惑にはならない筈。……多分?」

「いやいやいやー、待つて。流石に俺の家はね?」

「……どしたの? しょーくん」

「い、いや、何でもないよお?!」

「い、いかん、何とか断らないと。だって俺の家、俺の家は今——」



「おじやましませーす」

結局断る事が出来ず、モカのペースのまま我が家へ。

——俺の家は今誰もいない。

そう何度か伝えようとしたのだが、モカのペースに流されて伝える事が出来なかつた。

結局モカの家からギターを取ってきて、商店街でモカが弁当を買って我が家に到着。というかモカさん、どんだけ食うんですかね。それ男の俺でも食べ切れる気しないんだけど。

「……あれ？ ご両親は？」

「出掛けてると言おうとしたんだが、モカが言わせてくれなかった」

「……。……そ、そっか」

少しボーツとしてから、モカは家に入って行く。気にしないんですか?! 良いんですか?!

言うて殆ど大人な高校生二人が誰もいない密室とか、大丈夫なんですか?!

「と、とりあえず鍵閉めて」

「……あわ」

ん？ 今なんか不安そうな顔したか？

「ど、どうかしたか？」

「い、いやー？ なんでもー？ あ、つまらない物ですがどうぞ」

そう言いながらモカはお土産に買ってきたお菓子を机の上に置く。いや、だから誰もいないんだって。

……気にしないんですね。モカはそういうの気にしないんですね。アレか、眼中にないでございますか。そうですか。

俺だって本当はリサさんと二人きりが良かったからな?! 勘違いするなよお?!

……嘘。見栄張りしました。俺はめっちゃ気にしてます。

「しよーくんの部屋、どこー?」

「あーっと、その扉——ちよつと待て!」

俺は、指差した扉を開こうとするモカと扉の間に入って両手を広げた。

「……しよーくん?」

「ステイ。ステイステイ。……ちよーつと待ってて?」

そうやって俺は素早く扉を開け閉めして部屋の中に入る。

べ、別にエロい本が置いてあるとかじやないからな?! 普通に掃除だ。ほら、流石に
なんの用意もしてなかったからお部屋が汚いじゃん?! うん!!

あとアレだ。ギターが埃被ってるのは見られなくなかったから、さつとタオルで拭い
ておく。

「もーいーかーい」

「オーケー、オーケーオーケー。悪い悪い」

扉を開けると首を横に傾けたモカが待っていた。

そして彼女は俺の部屋を眺めて、目を細くした後――

「……えつちな本でも隠してたんですかねえ」

――そう呟く。

「んなもんねえよ!!」

無いから。そんなもん無いから。

絶対に無いから!!

「おー、格好良く飾ってあるねー」

部屋に入るなり、やはりモカの視界に映ったのはギターだった。

綺麗に埃の落とされたギターは元々中古だが新品みたいに綺麗に立て掛けて飾られている。

いや本当、格好良い飾り物だよ。

「だろ。なんかこう、部屋にギターがあると格好良いよな！」

「あー、それは分かるかも。いやー、しよーくんも立派なギタリストだ。……あたしの知らない所で大きくなって、ぐすん」

「……形だけな」

俺が小声でそう言うと、モカは首を横に傾けた。

覗き込むように寄ってくるモカから逃げるように振り向くと、彼女は「しよーくん？」と小さく呟く。

「……ギターの練習、しないの？」

「……っ」

したくない訳じゃない。
別にギターが嫌いになった訳じゃない。

いや、違うな。まず、初めから好きでもなんでもなかったんだ。
ただ不純な動機で買ったギターを好きになる事なんて出来るわけなくて。

結局、置物になってしまっている。

「……ゲームしね？ ほ、ほら、まだ昼間だしさ！ 昼ごはんも食べてないし！」

「……。……そーいえば、モカちゃん空腹で倒れちゃいそうだったんだよ。よし、食べよう。ご飯食べよう」

よし、なんとか話を逸らす事が出来た。

……って、俺は何をしてるんだろうな。

そんな訳で俺達は昼食を済ませてゲームをする事に。

大人気格闘ゲームが我が家にはあるので、それで対戦でもするか。パーティゲームを

二人でやるのは流石に辛いだろう。

流石に女子相手に本気で対戦ゲームをするのは大人気ないので、かなりハンデを与えて始めたのだが――

「お、落ちる落ちる落ちる！ 無理無理無理ああああ!!」

「はい、モカちゃんの勝ち〜」

――惨敗した。

い、いやいやいやいや、ハンデが強過ぎたかなあ?!

「モカ……まさか経験者か貴様」

「ふっふっふ、メテオモカちゃんとはあたしの事」

「コイツ始める前「えーとー、どうするんだっけー?」とか言ってたくせに!!

「騙したな貴様あ!! 再戦じゃござらあ! 俺まだ本気出してないからあ!!」

「掛かってくるがよい。モカちゃんは、まだ二回も変身を残している」

その後ハンデを無くしてリターンマッチ。

中々良い勝負になって、俺の勝利。

それでモカも火が付いたのか再戦してモカの勝利。

そんな風に二人で楽しんでいると、あつという間に五時間が経過。外ちよつと暗くなってるんだけど。うわ、やつちまったよ。

「おー……なんてこった。しよーくん、ギターギター」

流石のこれにはモカも慌てたのか、ゲームは打ち切りに。

ギターの練習の為にリサさんにバイトを代わってもらったのに、これでは合わせる顔がない。

「……しよーくん?」

だが、いざギターと向き合うとどうしてもそれが眩しく見える。

俺なんかが手にとったって、彼女達みたいにはなれない。そんな事は分かっているのに、練習する必要があるか?

一度そう思うと、その考えはもう頭から離れない。

「……ギターの練習、しないの?」

「……………」

そんな事言われたってな。

「…………ギター、飽きちゃった？」

「…………っあ、ち、違、違う！ そ、そうじゃなくて」

ただ、その言葉を認めたくなかった。

もしそれを認めてしまったら、もうこんな時間は二度と来ないと思ってしまったから。

ギターがなかったらこうしてモカと遊ぶ事も出来ないと思ったから。

「…………しよーくん？」

「え、えと…………違うくて、だな。別に、ギターに飽きたとか、そういう事じゃなくて」
彼女と遊ぶのが凄く楽しい。バイト先で話すだけで、今が楽しいって思える。

それがなくなってしまう気がして、俺はただ言い訳を考えた。

「……なら」

「……っ」

なんで、なんでだよ。

なんでお前はあんなにギターに、バンドに熱心になれる。今を全力で生きられるんだ。

そんなに頑張ったって、最後には残らないかもしれない。バンドだっていつまでもやれる訳じゃないだろう。

なんで今、そんなに全力で何かに取り込めるんだ。

今じゃなきやダメなのか？

今そんなに頑張る必要がどこにある？

「うーん、難しいって思っちゃうかもだけど。大丈夫、しよーくんだって練習すれば——」

「俺とお前を一緒にするな!!」

気が付いた時には、手を伸ばしてくる彼女を払いのけていた。
彼女はそれにビツクリして倒れこむ。

「え……。……しよーくん？」

何かが引つかかったのか、倒れた俺のギターが鈍い音を立てていた。

今だから

「え……。……しよーくん？」

「……っ、あ、あ、ご、ごめんモカ！」

倒れたモカに手を伸ばす。

しかし、その手は取られる事はなかった。

ただ、彼女の瞳が俺の顔をじっくりと覗いている。

やってしまった。バイト先の楽しい時間も、今みたいな楽しい時間も、もう終わりかもしれない。

ただ、今が楽しくて。それを失いたくなくて。

俺は何をしてる。

俺は何をしているんだ。

結局そんな事すら俺は続ける事が出来ないんだろう。

俺は何も全力で取り組む事なんか、出来ない。

「……………ごめんね、しよーくん」

ただ、モカの口から出てきたのはそんな言葉だった。

「な、なんでモカが謝るんだよ」

「嫌々ギターの練習させてたのかなー、と」

「ち、違…………俺は…………」

それを肯定してしまえば、きっとこれまでの関係ではいられなくなる。

何故かそれが無性に嫌で、俺はただその場に崩れ落ちた。

「良いんだよ」

「え……」

モカと目が合う。彼女の微笑みの背後で、日は沈みかけて空を赤色に塗り替えていた。

「あたしは、嫌な事を続ける必要はないと思う。だって、そんなのつまんないじゃん？」
「いや、でも、ほら、態々時間作ってくれたりサさんやモカに申し訳ないというか……」
「んもう、あたしはしょーくんが嫌なのか嫌じゃないのか聞いてるんだけどな」
眉をひそめながらモカはそう言う。

嫌なのか？

そうだよ。嫌なんだよ。

どうせやったってモカ達みたいになれる訳じゃないし、ギターが弾けるようになって大した得はしない。

今そんなに頑張る事か？ 熱中しなきゃダメな事か？

俺はそれが分からなかった

「分からないんだよ。ギターの練習なんかして、それが何になるとか。バンド組む訳じゃないし、将来ギターで生きていく訳でもない。なのに態々面倒くさい練習をする理由が分からない。そこまで熱中出来ないんだよ俺は」

「しょーくん……」

一度言葉が溢れてくると止まらなくなる。ダメだと分かっているけど、止められない。

「なんで皆はそんなに今真剣に取り組めるんだ？ 続けられるんだ？ それがなんになるってんだよ。バンドなんていつまでだつてやれる訳じゃないだろ。終わったら全部無駄になるんだ。俺なんかバンドすらやらないのにギターの練習なんかして、何の意味がある？」

ギターを見ているだけでもイライラする。

こんな物——

「こんな物持ってたつて……っ！」

壊れてしまえばいい。

立ち上がって、持ち上げて、それから——

「——しょーくん……っ!」

——目をつぶって床に叩きつけた。

ただ、ギターは鈍い音を立てるだけで感触がおかしい。床なんてもつと硬い筈で、なんでこんなに柔らかい——

「——っ、痛あ……」

「モカ?! おま、バカ、何……して……っ?!」

目を開けると、倒れ込んだモカがギターの下敷きになっている。

痛みに表情を崩しながらも、彼女は唾然とする俺を見て何故か安心したような表情をしていた。

なんで、そんな表情をしている。

「お前、バカ! 何してんだよ!」

バカはお前だ山田翔太。何をしてるんだお前は。

自分が情けない事を物に当たって、それでモカを殴っただと?

ふざけるのも大概にしろ。お前は何もないどころか最低の人間だ。

「モカ……ご、ごめん……俺………何して。だ、大丈夫か?! 怪我とかしてないか?!」
直ぐに彼女の身体を持ち上げて声を掛ける。頭から血とか出てないよな。俺は本当に何をしてるんだ。

「いやあ、想像以上に、痛い。うう……」

ただ、モカは瞳に涙を浮かべながらも微妙に笑みを浮かべている。
な、なんで笑ってるんだ。怒る所だろ?

「モカ……ご、ごめ——っ?!」

「えい」

同じ目線でちゃんと謝ろうと口を開く俺に、何故かモカは突然抱き着いてくる。

は?

もう一度説明すると、モカは何故かこの状況で抱き着いてきた。

え、何。なんで？　なんか凄い良い匂いするし、なんか柔らかい。え、ていうかなんで？

なんで?!

「……良いんだよ」

そして、俺の耳元でモカはそう言う。

「楽しくなかったらしくなくても良いんだよ。あたしだって、楽しくない事はしないし」

「いや、でも、モカはギター弾けるだろ？　その為に嫌でも沢山練習したんだろ？」

「そんな事する訳ないじゃん？」

ええ……っ?!

「あたしは皆と楽しみたかったから、バンドの練習も楽しいからしてたんだよねえ。逆に、例えばー、そうだなあ、ひーちゃんが良くご飯の写真映りとか気にしてるけど……あたしはそーいうの興味ないから、楽しくないし、やらないよ？」

楽しくないから……やらない？

「変な事言っちゃうかもだけど。今楽しくなかったら、意味無いよね〜って、そう思うんだよ。今を全力で楽しみたいっていうか？」

「今を全力で……」

「うん。むしろ、今だから全力でやりたいんじゃないかな。確かにしよーくんの言う通り、バンドだっていつまで続けられるか分からないよ？ あの五人がいつか離れ離れになっちゃうかもしれない。……だからこそ、この今だからこそ全力で楽しみたいんだよ」

今だから全力で……。

「だから、あたしはしよーくんがギターを楽しくないって思うならやらない方が良いと思う。しよーくんが今楽しいと思う事をやれば、良いと思うなあ。カラオケで歌ってた、ゲームやってたしよーくんは、とつても笑顔で、楽しそうだったよ？」

「でも、それじゃ俺には何もないままだ」

今が楽しければそれでいい。

それはそんな考えだ。

い。
モカみたいに、今だから全力でやりたい事をしてる訳じゃない。結局俺には何もな

「探せば良いじゃん？」

「探したんだ。それがギターで、それもダメで……」

「他に探せば良いんだよ。あたし達だって、きつとつぐが『バンドやろう！』って言わなかったら色々探して右往左往してたかもしれないし。今何もしてないかもしれないし。

……本当に今全力でやりたい事って、そう簡単に見つかる事じゃないと思うよ？ だから別に、無理にギターを頑張らなくても、良いんじゃないかなあ？」

「ずっと俺の耳元で言ってくれていたモカはふと離れて、俺の表情を伺うように顔を覗き込んでくる。」

「しよーくんが、今本当に楽しいって思った事を、全力でやれば良いと。モカちゃんはそう思うんだよ」

俺が今本当に楽しいと思ってる事……か。

それはきつと——

「そしたらいつか、きっと、何か見付かると思う。だから、楽しむ事を投げ出さないで欲しいなあ……」

「ごめん……」

いや本当、何してるんだかね俺は。

たった一つの事が上手くいかなかったからって物に当たって、モカに痛い思いをさせて。

別にギターじゃなくても良いじゃないか。リサさんだってモカだって、偶々それがバンドになっただけだ。

俺は、俺が今全力でやりたいと思った事をすれば良い。

——それで良いって、モカはそう言ってくれた。

いつか本当に、今しかできない——今だから全力でやりたい事が見付かる筈。

「……ありがとう、モカ」

「えへへー、どういたしまして？」

少し涙を浮かべているのは、やっぱりさっきのが痛かったからだろう。

だ、大丈夫だよな？ 本当に怪我とかしてないよな?!

「いや、なんか、その、本当にごめんモカ……。痛いよな？」

「うーん、案外痛くない？ モカちゃんタフなので、しよーくん程度ではダメージを与えられないのです」

それ普通に傷付くんだが。

いや、そんなに痛くなかったのなら本当に良かったんだけども！

「ギターはねえ、持つてるだけでもなんか、こーう、エモいから。大事に持つてて欲しいなあ。ほら、おそろなんだよー？」

「いや、そんなお揃いのギターつてのは恥ずかしいだけなんだが。……まあ、確かに、部屋の置物としてはオシャンティだな。ははっ」

なんだろうな、やっぱり、今楽しい事と言ったら――

「おー、笑った。しよーくんはやっぱり笑顔の方が良いかなあ」

いやあ、なんだろうねこの敗北感。気持ちは良いけど、やはり悔しいので、少しからかってみるか。

「まあ、今何が楽しいかって言うところ……こうやってモカと下らない話してたりするのが楽しいっていうか。モカとカラオケとかゲームするのが楽しいって言う——」

「目潰し」

「——ぎゃあああああああああ?! あいえあああああ!!! なんでええええええええ!!!」

突然目潰しを食らった。

ごめん。マジでごめん。本当に意味が分からない!!

なんで?! なんでこの状況で目潰し喰らったの俺。なんで?!

「しよーくん、そういう所だよ……?」

「なんで諭されてるみたいになってるの……? なんで声が怒ってるの?」

普通怒るならさつきじゃない?

「お置ききとして、足の裏を擦ります」

「ま、待て！ それだけは辞めろ!!」

「こしよこしよこしよ」

「アヘエツ?!」

足の裏は弱いんです!! 止めてえ!!

「……おー、これはこれは」

目潰しのせいで見えてないけど分かるぞ?! 凄い得意げな表情してるだろお前!!

「……こしよこしよこしよこしよこしよこしよこしよこしよ」

「イヤアアア!! ラメエエエエエエ!!」

ひいい!! 死ぬう!! 死んじやううう!!

「ふっふっふ、参ったかあ」

「……はあ、はあ……て、テメエ。許さねえ。足の裏出せやゴラア!!」

やっと目が回復したので反撃しようと言ったのだが、モカは平然と俺のベッドに座りながら足を向けてくる。

馬鹿め!! ご近所様に擦りの翔太君と呼ばれている（捏造）俺の力を思い知らせてや

るぜ!!

「いしよいしよいしよ」

「……ふっふっふ、効かぬ」

「ば、馬鹿な?!」

学校の友達を何人も昇天させてきた俺のテクニックが効かないだと?!
何処を触つてもなんの反応もない。

「……次はモカちゃんの番だねえ」

「ちよ、ちよつと待て。まだ俺のターンは終わっちゃ——いやん?!」

今度は俺の腰に手を入れて擦ってくるモカ。俺は逃げようと部屋を歩き回るが、結局
ベッドに倒れこんでマウントを取られた。

待って、モカさん強すぎじゃない?!

「ヤメテええええええええ!!」

マジで死ぬ。笑い死ぬ。こんなに笑ったのいつぶりだろう。

「あつはは、しよーくん凄い笑顔」

「て、テメエ……とりあえずそこを降りろ」

人の上に乗りながら爆笑してんじやないよ。

「いやいや、もう少し」

しかしモカはまだ俺を弄ぶ気だった。

それなら俺にも考えがあるからね?!

「——よろしい、ならば戦争だ」

俺だつて揶つてやるぜ。モカの脇腹に手を添えて——なんかこれ以上のお触りはアウトな気がするが、悪いのはモカなのでこのまま執行する。

「(っ)しよ(っ)しよ(っ)しよ」

「……ふっ」

しかし、モカには脇腹こちよこちよすら効かなかった。

ば、馬鹿な。そんな人間が居る訳がない!!

「……モカちゃんは、ふふ、無敵なのだ」

——ん？ 今。

「……そこか」

きつと、俺はその瞬間凄い悪い顔をしていただろう。

何箇所か擦つてみたが、モカが微妙に反応した場所があった。

——ならば、そこを集中して狙う！

「くらええええ!!」

「——な、……っ、ひっ、あは、あはは、やめ、あははっ」

よっしやヒットお!! このまま地獄に落ちろお!!

攻守交代。悲鳴をあげるモカに俺はやられた分だけ擦りをやり返す事にした。
やられたらやり返す、倍返しだって言葉もある。

「——や、やめ、あはは、しょーく、ぎぶ、……あひいつ」

「ふはははは!! さっきのお返しだああ!!」

——そんな時だった。

何かが入ったビニール袋が落ちる音が玄関から聞こえる。

俺の部屋の扉は今空いてるんだが、そこから見えるのは開いた玄関の前で呆然と俺の方を見ている両親の姿だった。

一方、僕の姿といえば女の子にマウントを取っているという姿。さらにその女の子のモカは撥りのせいで衣服は乱れ、顔は真っ赤に紅潮している。

はい、どう考えてもアウト。ピッチャーフライ。

山田翔太君の次の人生にご期待下さい。どうもありがとうございます。

「強姦魔よ。強姦魔が私達の家で女の子を襲っている。お父さん、警察呼んで」

「待て待て待て、あんたの息子だ!」

「人の家で女の子を襲うなんて。……まったく、親の顔が見てみたいな」

「だからあんたの息子だって! 鏡見る鏡い!!」

この誤解を解くのに十数分を費やしたとかなんとか。ただ、俺とモ力はなんだかんだ笑っていたと思う。



気が付けば夕日は沈んでいて、誤解を解いた両親に「ちゃんと送ってから自首してこい」と言われた。

誤解が解けていない気がするが、きつと気のせいだろう。

「いやあ、面白いご両親だねえ」

「面白過ぎて困るわ」

実の息子を警察につき出そうとする両親なんてそういない筈だ。

「……なあ、モ力」

「なーに？」

「ギター、さ。また教えてくれないか？」

「……。……嫌じゃない？」

嫌かどうかといえば、正直分らない。

自分一人で勉強するってなったらきつとやらないと思う。俺はそういう人間だ。

ただ、きつとモカと練習するなら楽しい。

モカと一緒になら、楽しいと思う。

ただのバイトの同僚だけど——いや、ただのバイトの同僚だからこそ。

この関係がいつまで続くか分からないからこそ。

今だから全力でやりたい事を、したい。

きつと何かが見付かる筈だ。

だから、今俺が楽しいと思う事をする。

モカがそう言ってくれたんだ。

「ダメ……かな？」

「うーん」

途端にモカは少しだけ走って、腕を後ろで組んで笑顔で振り向く。

沈んだと思っていた太陽は向こう側にまだ少しだけ残っていて、モカの事を真っ赤な夕焼けが照らしていた。

「良いに決まってんじやーん」

やっぱりその姿は眩しくて。でも、そんな彼女を見て劣等感を感じる事はもうない。ただ、眩しい夕日が綺麗に彼女の後ろに見える。

「モカちゃんは今を楽しむ君を応援します」

「ははっ、なんだそのCMみたい感じ」

「モカちゃん義塾」

「そのネタはアウト。てか分かりにくい」

「うええ。渾身のネタだったのに」

「もつと分かりやすくだな」

今だから全力でやりたい事、か。

きつと見付かる。

いや、もう見付かつてるのかもしれない。

今年の学校の文化祭で、俺と圭介と数人でミニバンドを結成して俺がギター兼ボーカ
ルを務めたのは——また別のお話。

接客業をしてると偶にこういう事があるという話

拝啓お父様お母様。

お二人が始めて働いたのはコンビニのバイトだったみたいですね。それが二人の出会いだったとか、そんな事はどうでも良いんですけども。

「ここにあるお菓子、ゼーんぶ貰うわー!」

コンビニのバイトしていると偶に凄い客が来るんですよ。

お二人はこんな経験……ありますか？

「えーと、今……なんて?」

「だから、このお店のお菓子を全部買うのよ!」

金髪ロングの少し小柄な女の子が、凄く眼を輝かせて俺にそんな事を言ってきた。

俺こと山田翔太はコンビニでバイトをしております。

接客業という事で、ちょっと変な客くらいは偶に見るんですけどね、はい。

その中でも中々。五本の指には入りそうな客が来た。

お菓子全部ですね！ 毎度ありがとうございます。お店は大儲けだぜやったね店長！

いや違うだろ?! そんな事を許して良い訳がないでしょ?!

「えーと、お客様……? もう一度お聞きしてもよろしいですか? お菓子全部で間違いないです?」

きつとオカーシゼンブという銘柄の煙草の事だ。間違いないね。

いや、そんな煙草ねーよ。あつたとしてもこの娘はどうみても未成年だよ。

「ええ、勿論よ!」

少女は目を輝かせて両手を目一杯広げる。

いや、誰も了承してないからね。待って、お店のお菓子箱に詰めないで! 誰かその子を止めて!!

なんでこんな日に限って一人なの俺?!

「お、お客様あ！ 困りますお客様——ふあ?!」

少女を止めようとレジから出る俺の前に、黒い服とグラサンの如何にも怪しい人達が突然立ち塞がった。

待つて下さい。ヤクザさんですか?! もしかしてヤバい人なんですか?!

「あ、こころ! ……こんな所に」

店の扉が開き、焦った様子で新しいお客さんが入ってくる。

黒い髪の少女は金髪の少女に近寄ると、呆れたような表情でその奇行を止めてくれた。

「待つた待つた。何してるの」

「ここにあるお菓子をライブ中に会場にばらまくの! そしたらきつと、いつもより皆が笑顔になるわ!」

何言ってるのあのヤバい。ライブ? ライブってライブ?

「あー……はいはい。それじゃ、飴だけにしよう。ほら、一粒ずつで。そんな袋ごと投げたら危ないから」

「それは良い考えだわ！」

そう言つて少女は飴を数袋レジに持つてきて「なんか……すみません」と苦笑いをする。

「あ、いえいえ」

良かった……助かった。この娘には感謝しても仕切れない。

「流石美咲、ちゃんと考えてるのね！　これでお菓子も揃つたし、あとはミツシエルが来てくれるのを待つただけだわ！」

「あ、いや、だからミツシエルは……。……あー、行つちやつたよ」

お店を出て行く二人に、黒服の人達はそろそろと付いて行く。

一体何者だつたんだ。

「……ご来店しゃーしたー」

いや、しかし――

「またのご来店をお待ちしやーす」

――二度と来ないで欲しいと思ひました、まる。



「モカちゃんは、ちよつとお花を摘んでくるね〜」
ある日のバイト中。

客が居なくなつた途端、モカはそんな事を言いながらレジを離れた。

「いや、どういう事だよ」

「仕事中だぞお前。頭の中がお花畑なのかな?」

「もー、女の子にそれを聞いちゃいますか。……しよーくん、もしかして変態さん?」

「……。……はっ?!」

「そう言われて、俺はやつとお花お手洗い摘みの意味を思い出す。

「いやいやいやいや、分かりにくいから! 勝手に行け!」

「顔が赤いのは気のせいかなー?」

「良いから行けええええ!!」

「あ、新商品のネコまん、ちゃんと宣伝しといてね〜」

男の子は繊細なんだよ!!

変な想像しちゃうだろうが!!!

「……つたく」

あまり男の子をからかうんじゃないやありません。

さて、モカがお花を積んでいる間にお客さんが来たので接客しなければ。

「いらつしやいませー」

お客さんは銀髪の綺麗な女の子で、歳は俺と同じか一つ上くらいだ。

何処かで見た事がある気がするが……。

「……お願いするわ」

来て早々必要な物を手に揃えた彼女は、思わず聞き入りそうな綺麗な声で商品をレジの前に出す。

滅茶苦茶美人さん。

俺は緊張してしまい「あ、ありがとうございます。ネコまんもご一緒にいかがですかあ?」と、フライドポテトを進めるノリで話し掛けてしまった。

山田の馬鹿野郎！

こんな感じのクール美少女が可愛いネコの姿した肉まんなんて食べる訳ないだろ!!
モカに宣伝しておいてとか言われてしまったから、変な事言ってしまったじゃないか。

「ネコ…………まん…………」

ほら、ちよつと引いてるよ彼女。マジでごめんなさい許してください。

「あ、す、すみませ——」

「一つ貰うわ」

……………なん……………だと。

え、そんなキリツとした顔で——いや、めっちゃニヤニヤしてる！

ネコまん見ながらめっちゃニヤニヤしてるよこの人!!

「……………何をしているの？ 早く頂戴」

「あ、は、はい！ かしこまりましたあ！」

人間、見た目にはよらないのだ。

丁寧に包装して紙袋に入れたネコまんを、店の外で急いで開ける銀髪の彼女。食べるのが勿体ないとでも言いたげな崩れた表情に、最初のイメージがガタ崩れである。

「上手に詰めましたあ。……あー、湊さんちゃんとネコまん買ったんだねえ。良かった良かった」

「……お帰り。って、なんだ……？　モカはあの人の知り合い？」

何処かで見た事があるとは思ったが。Afterglowのメンバーじゃないし、一体どこで……。

「湊さんはRoseliaのボーカルさんだよ？　しよーくん、ライブ見てたでしょ？」

「——はっ?!　そうだ、Roseliaのボーカルだ！」

あの時のライブでなんかそれ系統の人達が絶賛してたRoseliaのボーカル。なぜ気付かなかったのか？

気付く前にネコまんて変貌した彼女を同一人物に思えなかったからだ。
人間イメージが大切なのである。

「……湊さん、ネコが大好きなのにあたしやりサさんが居るとネコ系統を控えちゃうんだよねえ」

「モカ、それで花摘みに……」

「さあて、なんででしょう」

面白い物を見る目で Rose lia のボーカルの彼女——湊友希那——を見るモカ。
なんやかんやでモカは優しいんだよな。

「勿体無くて、食べれないって顔してるねー」

「いや、どんだけネコ好きなんだよ」

「……見てて面白いなあ」

前言撤回、ただ楽しんでただけだったわ。

……それがモカらしいんだけどな。

その後、ネコまんは意を決したような表情で泣きながら食べられました。



「山田君お疲れー」

休日の忙しい時間帯も終わり、一緒に働いていたリサさんは上がる時間に。

「お疲れ様ですリサさん。バンドの練習頑張ってくださいー」

「オツケー、任せてよ！ あ、そうそう休憩室にクツキー置いておいたからさ、高木さん達と食べていいからね！」

——リサさんのクツキー……だと?!

「な、な、な、な、あ、あ、ありがとうございます！」

いやヤスってなんだよ昭和か！ 昭和ですらないわ！

ふへ、ふへへ、リサさんのクツキー。手作りクツキー。

「それじゃ、またね山田君！」

「ありがとうございますあ!!」

「……ん？ あーと、うん！ 残りも頑張つて！」
女神だ。

「さて、今日も一日頑張るぞい」

リサさんからのクツキーもあるし、今日の俺はいつもの五千兆倍は働けるぜ。

どんな客でも来いよ。今日の俺に勝てる奴は居ないね！

「たのもー！」

——ごめん、なんか初手でヤバい人来たかも。

片手を上げながら少し片言で声を上げて店に入ってくるのは、とてもスタイルの良い白髪の女の子である。

な、何だ?! モデルさんか何かなのか?! なんだそのポテンシャル。え、外人さん?!

しかもなんで道場破りみたいに入ってくるの?!

「い、いらつしやいませえ……」

「ここが困った時に来るコーバンという場所ですね！ オマワリさん、実は頼みたい事

があるんです！」

わーい、何言ってるか分からないぞお！

「申し訳ないんですが、ここはコーバンでもないし。俺はオマワリさんではないです」
多分交番の事を言っているんだろう。なんでコンビニと交番を間違えてるのか。

『ここ』しかあつてねーよ。

「なんと！ そうなんですか。困りました……」

俺の言葉を聞いて、彼女は残念そうに俯いた。

申し訳ないが俺は日本語が通じる相手で安心している。このまま押し切られたらどうしようとか思っていた。

「道にでも迷ったんですか？」

「はい、そうなんです！ とあるお店を探しているんですけど、中々見付からなくて」
どんな店を探しているのだろうか。

俺はオマワリさんじゃないが、力になれるなら助けてあげたい気持ちもある。

「案内……は、出来ないけど。バイト中だし。……知ってる店なら道くらい教えますよ」
「本当ですか！ 流石、困っている人を見たら放っておけない。日本人の心の底に眠っているブシドーの真髓を見ている気がします！」

ごめん何言ってるかさっぱり分からない！

日本人を勘違いしてる外国人って本当に居るんだな、そう思った。

日本語ペラペラだが。

「ぶし……どー？ 武士道……？ はて、俺にそんな気高い精神はないが。……えーと、お客さん。探しているお店っていうのは？」

「確か、色々な物が売っている場所だったと思います！」

アバウト過ぎる。

「い、色々な物……？」

「はい！ 雑誌や日用品、お弁当やお菓子も売っているみたいなんです！」

スーパーとか、か？ ショッピングモールって可能性もあるな。

「ほ、他に特徴は分かります……？」

「えーと、確か……二十四時間休まず営業。日本人のおもてなしの心得がひしひしと伝

わってくる、そんなお店です！」

二十四時間休まず営業。おもてなしの心得。

「そういや俺達は当たり前だと思っていたが、外国人から見たら二十四時間営業ってそんな風に捉えられるんだな。」

さて、色々な物が売ってて二十四時間営業。そんな店は限られてくる筈だ。

……つて、いや——

「——コンビニじゃねーか！」

「わあ?! ど、どうかしたんですか?」

驚いてしまう彼女を見て俺は頭を抱える。

「いや、ここですよ。コンビニ(コンビニ)！」

「なんと、ここがコンビニだったのですね! ではなぜ、彼女はそこにあるコーバンで聞いてみると良いと言っていたのでしょうか?」

首を横に傾げる彼女だが、疑問に思ってるのは俺だ。助けてくれ。

「あ、イヴさん先に着いていたんですね！ お待たせしてすみません」
俺が頭を抱えていると、新しいお客さんが目の前の彼女を見て手を振る。
眼鏡に茶髪の、どちらかという和白髪の彼女とは正反対の女の子だ。

「マヤさん！ 大丈夫です。心優しきブシのような方とお話をしていたので！」

俺の何処に心優しき武士の要素があつたんですかね?!

「それでは、待ち人とも会う事が出来たのでこれにてタイサンしますね！ ありがとう
ございました、オマワリさん！」

「いや、だからオマワリさんじゃ——って、あ……行つちやつたよ」

あんな素直な人がまだ人類に残っていたとは。しかし、ここを交番だと教えた奴は誰
だよ。

「あ、高木さんこんにちわ。ちよつとトイレ休憩行ってきて良いっす？」

そんな事を考えていると、バイト仲間が来たので少しトイレ休憩に行かせてもらおうと
する。

リサさんからのクッキーも食べたいしな！

それで、休憩中なんとなく携帯を開いてみるとメッセージが一件飛んで来ていた。開いてみるとそこには――

『白髪の美人さんは無事に待ち人に会えた?』

と、謎のメッセージ。差出人は――モカ。

「――お前かよ!!」

モカが俺をからかう為に、白髪の彼女にこの場所を交番だと教えたというオチだった訳です。

今度拳骨だな。



突然だが、高木陽子さんは俺のバイト仲間だ。

六十五歳の女性なのだが、まだまだ元気が有り余っているのでコンビニバイトを続け

ているらしい。

ちなみに初日にモカが俺と間違えたのがこの高木さんである。いや、何処に間違える要素があるんだ。

「高木さーん、リサさんの手作りクッキーがあるんで休憩がてら食べて良いっすからね」
「ん、リサちゃんのクッキーかえ。ほえ、しかし、わたしが貰ってもええんかい？」

高木さんは少しクッキーに想いを馳せるも、そんな返事をする。
なぜそんな事を言うのか。理解出来なかつた俺はただ首を横に傾けた。

「女の子の手作りクッキーなんて、男は独り占めしたいものさね。そういうものだろう？」

「そこまで捻くれてねーよ！」

「なに?! 山田君あんた、リサちゃんの事が好きじゃないんか？」

「ガハッ」

な、なぜそんな判断を——

確かにリサさんは理想の女性。スタイルも良いし美人だし綺麗だし凄い話しかけて

くれる。

優しいし、可愛いし、年頃の男児なら誰もが憧れる存在だ。

惚れておかしい要素はない!! リサさん最高!!

「それとも、別に好きな娘がおるんかねえ?」

「は、はあ?! なんてそうなるんです」

しかし、高木さんはそんな事を言うので俺は否定しようと思いを開く。

リサさん以上に魅力的な女性なんてそういないぞ。

「そうじゃなきゃ、建前抜きならクッキーは独り占めしたい物。恋心とは、そういうものだよ。もしそう思わなかったら、あんたは他の人に恋をしてる」

「ん……」

そう言われれば確かに、リサさんの手作りクッキーだということにそこまでの執着はないかもしれない。

だが、それが他の人に恋してるなんて事につながるのだろうか?

「まあ、本音は……老い先短いババアに食わせるより山田君に食って貰った方がリサちゃんも嬉しいだろうよって話よ」

「バカ言わないで下さいよ、高木さん。長生きしてもらわないと、バイト代わって貰えなくて俺が困っちゃいますって」

「おろ、まさかあんた……わたしに恋を！」

「張り倒すぞババア!!」

「ケツケツケ、冗談さ冗談」

なんでこのバイトメンバーこんなに個性的なの?!

「まあ、でもねえ。若い内は色々な事を楽しみな。歳を取ったらそんな事も出来なくなる。……今だから、やれる事を精一杯やりな」

「今だから……」

俺にそう言った高木さんは、リサさんのクッキーを取りに休憩室に向かって行く。

モカにも言われたんだ。早い所何か見つけないとな。

そんな事を考えながら、客が来ない事を確認してリサさんのクッキーを頬張る。

「あー、リサさんのクッキー美味い」

ただ呆然と考えて、ふと思った事は――

「モカにも食わせてやりてーな」

――そんな事だった。

ポイントカードでパンパン

何故、人は働くのだろうか？

世の為人の為？ 違う。

己を磨き上げる為？ 違う。

働くのが趣味だから？ バカか!!

答えは簡単——

「——金だ」

「山田君なんでそんな悪い顔してるの……？」

リサさんがドン引きするような表情で給料明細を見ている俺は、不敵に笑った。

もうそれは魔王の如く、この世を支配したとも言いたげな笑みで。

「やっぱ世の中金ですよね」

「まだ高校生なんだからそこまで悲観しないほうが良いぞー」

冷静に流されるが、俺は至極真面目である。

コンビニバイトを始めてから二ヶ月。初任給をギターに費やして貧乏生活を極めていた俺は、目の前に表示された二桁を超える給料に率直に舞い上がっていた。

「人ってお金を手に入れると変わりますよね」

「あつはは、宝くじで一億円当たったとかそのレベルなら分かるけど。んー、でも、山田君凄い働いてたし。給料いっぱいあるんじゃない？」

そりやもうね。無趣味を良い事に法律に触れる寸前まで働いてましたから。

もはや仕事が趣味だったと言っても過言ではないだろう。お仕事楽しいです!!
まあ、個性豊かなバイトメンバーのお陰で本当に暇はしないし楽しいのだが。

それはともかく、だ。

俺はこの二ヶ月目の給料が入ったら、ある事をするとか心に決めていたのである。
心を落ち着かせ、深呼吸。目を開き、眼前の美少女の眼をしっかりと見た。

「——リサさん、帰りに一緒にご飯食べませんか?」

俺はもう告白するくらいに勇気を振り絞って、リサさんを食事に誘う。

バイト帰りにモカと遊ぶ事はよくあるんだが、リサさんと出掛けた事が何故か一度もない。

このまま終われるかよ。俺はリア充になる夢をまだ諦めてないからね!

そんな訳で、一世一代の大勝負。頭を下げてまでリサさんを食事に誘ったのだが——

「……え、えと、ごめん! アタシ今日は友希那と約束があつて!」

——あつさりと振られた。

申し訳なさそうに視線を色々な所に向けながら謝ってくれるリサさん。

いや、もう謝らないで下さい。むしろ辛いです。なんかもう本当にごめんなさい。調子乗ってごめんなさい。

「や、山田く——ん! 戻って来て——!」

体操座りで項垂れる俺をリサさんが元気付けてくれた。それだけでもう幸せですよ。

——んな訳あるか畜生め!!

「パンく、パンく、モカちゃんのパンく、モカパンく」

俺が休憩室で項垂れていると、意味の分からない歌を歌いながらモカが財布を持って歩いてくる。

給料を引き下ろしてきたのだろうか。彼女の財布はもうそれはパンパンに膨れ上がっていた。パンだけに!!

——いや、ごめんて。

「およろ、どうしたの?　しよーくん。せつかくの給料日にそんなに項垂れてく」

「あー、いやこれは——」

「リサさんを食事に誘ったら断られたのさ。……ふ、笑えよ」

気を利かせてリサさんが口を開こうとしてくれたが、自分の事は自分で話す事にした。

それを聞いたりリサさんは物凄く慌てた様子で俺とモカを見比べるが、俺はそんなに変な事を言ったか?

「……リサさんを、食事に」

ボソリと呟いたモカは、手に持っていた財布を床に落とす。中に入っていた沢山のカードが地面に散らばった。

なんだこれ？ ポイントカードか。なんでこんなに種類持ったんだよ。てかかなに財布落としてるんだよ。

「お前なにしてんだよしやうがねーなあ」

床に散らばったポイントカードを拾い集める。普段からポケーつとはしているが、しかしこんな鈍臭い奴じゃなかったと思うが。

「……てかスゲー種類のポイントカード。そら財布もパンパンになるわな」

集めたポイントカードは、カードゲームのデッキみたいな厚さになっていた。なんだこれは。

「ほら、何してんだよモカ」

「……え、あ、いや、あー……うん」

ハキハキとしない返事。何故か元気がないモカを、リサさんはとても心配したように

見ている。

ん、やっぱりなんか元気ないよな？ いや、さつきまでモカパンとか言つて歌つてたのに。……何故？

「どうかしたのか？」

「……あー、いやー、その。リサさんと出掛けるのかなー、と？」

「いや、振られたつて言つたろ。人の心を扶るなよ」

「あ、あははー……えーと。あ、アタシ用事あるから先に帰るね!! ご飯はモカと行くといいよ、うん!!」

そう言うとりサさんは急いで荷物を纏め、モカの肩を叩いてから店を出ていった。

そ、そんなに俺とご飯に行くのは嫌でしたかあ?!

「……俺、立ち直れないかも」

「むう……モカちゃんじゃ不足ですかねえ」

「は? いや、そういう意味じゃなくて。……ん? ドユコト?」

「……なんでもありませんよー」

なんでそっぽむくんですか。

「それはともかく。ほら、落ちたポイントカード。お前どんだけの種類の店行ってんだよ」

「……ふふーん、これはモカちゃんの軌跡の戦利品なのだよ」

俺からポイントカードのデッキを受け取ると、それをに入れて財布を閉めようとするモカ。また意味の分からん造語を。

しかし様子が変で、何度もチャックを開け閉めしては表情を歪ませる。

……おっとこれはまさか。

「……壊れた」

「そりやその量のポイントカードが入ってたらなあ」

高価そうな財布……ではなさそうだが。ずっと使っていた物が壊れるって少しショックが大きい。

その気持ちから分らない訳ではなかった。

「モカちゃん財布が。殉職なされてしまった」

それは本気で悲しんでるんですかね。偶に表情と声が合わなくて感情を疑うんだが。しかし、モカが財布を落としたのはもしかしたら俺のせいかもしれない。理由は全く分からないが俺が何か言った瞬間落とした訳だし。

それに俺はとてモカに助けられてるし、少しくらいお礼をしても良いんじゃないだろうか？

幸い俺の財布はお金でパンパンである。懐が暖かいと人間は調子に乗るものだ。

「なあ、モカよ」

「……………んえ〜？」

「……………その、さ」

な、なんで財布を買ってやるからショッピングモールに行かないかって言うだけになんな緊張してるのよ俺は。

さつきりサさんを食事に誘った勇気の内少しでもいいから搾り取れい!!

「———ショッピングモール行かね？ 財布買ってやるよ」

これ後で思ったんだけどこれ、完全にデートの誘い文句だったよね。

◆◆◆
近くにある大手ショッピングモール。商店街と客の奪い合いをする様は、まさしくこの世の闇である。

「いやあ、まさかパンまで奢ってくれるなんて」

誤算だった。

バイト上りが昼過ぎだったので、ショッピングモールに来たついでに昼ご飯を食べようと思いきやパン屋に。

せつかなのでパンくらいならそれも奢ってやろうと口にしたら、モカは凄い量のパンをカゴに入れ出す。

「ちよ、おかしくない?」

「いやいや、冗談だよ。ちゃんと自分で払うって」

「いやそうじゃなくて、人間が食べる量じゃない」

「人間と同じにしてみらっただけは困る。モカちゃんは今、モカちゃん星人なの?」

疑問形。して、モカちゃん星人とは何か。

「は、払うぞ?」

「調子に乗つてるとまたお金無くなつちゃうよ?」

それを言われると痛い。

うーん。しかし、モカには沢山恩があるし、このくらい俺は良いんだけどな。

「またしよーくとカラオケも行きたいしー、こうやって遊びに行きたいし? それにー、お財布買つてくれるだけでモカちゃんは嬉しくてモカちゃんポイントを発行しちゃうよ」

な、なんかそう言われると恥ずかしい。

「……い、いや、モカちゃんポイントってなんだよ。溜まるとなんかあるの?」

「えーと、十ポイント溜めるとモカちゃんが頭を撫でてあげるサービスです」

「いらねえ」

そんな恥ずかしいサービス要らん。

「ついでにひーちゃんの寝顔の写真。あー、ひーちゃんは、ウチらのバンドのベース担当

ね」

「どうしたらポイント貯まりますかねえ?!」

上原ひまりちゃんの寝顔の写真だと?! あの A f t e r g l o w のベース担当のうわ、超おっぱ——じゃなくて、超欲しい!!

「……今のでマイナス一ポイント」

「なんでだああああ!!」

ひまりちゃんの寝顔の写真は遠い。

「……はあ。……お、あそこ座れそうだな」

シヨッピングモールのフードコートは昼間という時間の都合上とても賑わってた。

そんな中でなんとか席を見付けて向かい合って座る。モカがお水を持ってきてくれて、とりあえずゆっくり食事を取ることにした。

……しかしなんというか、恥ずかしいな。

周りの目線が痛い気がする。可愛い女の子と冴えない男子が二人で居るから? 違

う——

「メロンパンも美味ですな〜」

——モカがめっちゃパン食べてるからである。

机の上に広げられたパンは十個以上。どうしてそうなった。それを全部平気で食べようとしてるから、さらに視線が集まる。

帰りたい!!

「……本当によく食べるよな」

「食べる子と寝る子は良く育つって言うしね〜」

太らないんですね。

俺がチョココロネを一つ食べ終わる前に、モカは他のパンを五つも食べ終わっていた。お前の腹は異次元ホールか。

「そんなに買って、結構な値段したろ？ 大丈夫なのか？」

「ふつつつぶ、その為のポイントカードだよショータン君」

「ワトソン君みたいに言うなモームズ先生。ネタが分かりにくすぎて俺じゃなきやスルーされてるぞ。そして語呂が悪過ぎる」

成る程ポイントカードか。あの量だとこのショッピングモールの全ての店のポイントカードを持っていても不思議じゃない。

「えへへー、そんなしよー君だからこそだよー」

「なんの話だよ。……てか、そりゃその量のポイントカードを財布に入れてたら壊れるわ」

財布パンパンだったからな。

「最近また増えてきたしねー」

そう言いながら財布の中身を取り出すモカ。やばい、財布からトランプ取り出してるみたいになってる。

しかしチラツと財布を見てみると、ポイントカードはしっかりと整理されているのだが。

レシートとか小銭やお札が混ざってごちゃごちゃに入っていた。財布の中ちゃんと整理してないと財布って直ぐに膨れ上がる訳で。

「レシートとか捨てろよ」

「忘れるんだよね。あ、これ一年前のレシートだ。懐かし〜」

嘘……………だろ？

「アレだな、使いやすい大きめの財布にするか」

「デザインとか知らん。……………ていうか、女の子に財布をプレゼントするってこれ実際どうなんだろう。」

まあ、気にしない方向で。

「……………えーと、本当に買ってくれるの？」

珍しく遠慮がちに聞いてくるモカ。なんと言ったら良いのか、しかしここで引き下がる訳にもいかないし。

「何度も言わせんな。……………その、これまでのお礼だつて。……………モカがいなかったら、なんか……………こんな前を見て生きてないっていうか」

「しよ〜くんつて偶に凄く恥ずかしい事平然と言うよね〜」

「人が真剣に感謝してるって時に貴様……………っ!!」

俺の勇気を返して。

「えへへ、ありがとう」

素直に笑顔で言葉を漏らすモカが羨ましい。

コイツはアレか、恥ずかしいという感情がないのか。いや、若干喜怒哀楽の表情がおかしい気がしなくもないが。

「そんじゃ、飯も食ったしそろそろ行くか。色んな店があるし、良い感じの財布の一つくらい見つかるだろう」

「エモい財布を探しに行こ」

女の子とショッピングモールで買い物って、これ——なんて思ったが考えるのはやめた。

俺はただモカに恩を返したいだけだし。

——それに、今こうしてるのが俺は楽しい。

モカつとくる財布を探して

財布と二文字にまとめても、色々な種類がある。

長財布だったり、折り畳む財布とか、がま口とか。見た目も沢山種類があつて、俺には良く分からないけどブランド品とか云々。

要するにファッションの一部のような物なのだ。お金を入れる物にお金を使うという発想が、俺にはなんかもう良く分からないが。

「そもそもポイントカードが多過ぎるんだよ。それ、本当に全部使うのか？」

「そりゃもう——役に立たないカードなんて、一枚もない。……キリッ」

一瞬間が変わったけど。カードゲームしてそうな濃い顔になったけど。いや、ポイントカードの話ですよね？

「カードは拾ったってか……？」

「このカード達は、モカちゃんをこれまで支えてきてくれた、大切なカードなのだよー」

ポイントカードの話ですよね？

んで、そのポイントカードが多いものだから財布を選ぶのも一苦労である。

とりあえず大前提としてポイントカードが沢山入る財布。

あと女の子の財布なんだから、そこそこ見た目にも気を使わなければならない。

あまり高い物を選ぶと俺の財布が死ぬ。財布を買う為に財布が死ぬとはこれいかに。

値段はともかく、ポイントカードが沢山入って可愛いデザインの財布つてのが難易度高過ぎると思うんだ。

「この店は……良さげなのはなさそうだな」

「こう、モカっとくる物は、中々見つかりませんな」

モカっとくる物つてなんですか。

ショッピングモールつてのは色んなお店があるので、色々見て回るつもりなんだが、かれこれ三件目のお店でも、モカっとくる財布は見つからなかったらしい。

俺にはモカっとくる財布がなんなのか分からないので、選ぶのはモカに任せるしかない

いです。

「あー、しよーくんしよーくんしよーくん」

「はいはい、しよーくんですよ」

何度も呼ぶなよ恥ずかしい。

「あのお店寄っていつても、良き〜?」

「良き。……って、服の店か。財布売ってなきそうだが」

モカが次に選んだのは、洋服の売っている店だった。なんかイケイケ系（死語）の、格好良い服が売ってる店。

財布は売ってなきそうだが、別に急いでる訳じゃないし寄り道くらいしても良いだろう。

ゲーセンとかで遊ぶのもアリだし、そういえば集めてる単行本の新刊が昨日出た筈だから本屋も寄りたい。

せっかくショッピングモールまで足を運んだんだ。色々な店を回っておきたい。

お店に入りながら、モカは「おー、これはこれは」と服を眺める。

そんな姿を見ては、モカもやつぱり女の子なんだとか考えたり。これは言ったら怒られそうだ。

「似合う〜?」

俺がそんな事を考えていると、モカがボーイッシュなパーカーを胸の前で構えてそう聞いてくる。

元々そういう服装が多いというか、むしろスカートを履いている姿を制服以外で見た事がないので違和感はない。

しかし、なんかいつもと同じ感じで、感心するような事もない。

なんとさえばいいのか、そう——モカってこないのだ。

「似合ってはいるけど、えーとどれどれ」

俺はそう答えながら、近くのハンガーに掛かっている服を漁る。

それを見てモカは首を横に傾けるが、俺は手頃なワンピースを手にとって、そんなモカに突き付けた。

「こんなのどうだ。ほら」

それこそ当たり障りのないワンピースだったが、普段制服以外で殆んどスカート姿を

見ないのでこれはまた新鮮である。素直に可愛いかもしれない。

「……ほい」

しかし、モカはそんなワンピースを左手で受け取ると、手首を捻って前後を入れ替える。

「……ん？」

「似合ってるよ」

そして、彼女は右手の親指を立てながらそんな事を言った。

「いや俺が着るんじゃないよ!! モカに似合うかなと思って選んだんだけど!!」

「ええく? しよーくんが突然そっちに目覚めたかと思つたのに」

「そんな事あつてたまるか!!」

どういふ心の心境があつたら突然女装しようと思ふんだよ!! 見ろ、店員さんが俺達を見て笑ってるぞ。恥ずかしいからやめてくれ!!

「でも、似合ってるよ?」

「似合つてたまるか。……モカはこういうの着ないのか?」

とりあえず話の路線を変えよう。店員の笑顔がキツイ。

「あたしは、ほら。あまりにも可愛い服を着ちゃうと、モカちゃんパワーがマックスになっちゃうからねー」

「モカちゃんパワーがマックスになるとどうなる?」

「……知らないのかー?」

知らんわ。

「……モカちゃんがパワーアップする」

「良いから着てみるよ」

スルー安定です。

「モカちゃんがパワーアップしても、本当に良いのか?」

「パワーアップしたモカ、見てみたいしな」

「……なんと、スーパーモカ星人をご所望だったか」

「突然金髪になるのか」

毛も逆立って、凄いオーラが出る奴。

「オラ、ワクワクするぞ」

「似てなさ過ぎる」
のんびり口調では合わな過ぎた。

「……うーん、しよーくんがそこまで言うのなら。スーパーモカ星人ブルーをお見せしよう」

もう完全にアウトです。

そんな訳でモカは試着室へ。なんとというか、普通に楽しみだな。

モカが着替えている間、ふと店員さんを見ると、何故が俺を見ながら満面の笑みになっていた。

何が面白いのかね……。いや、モカは面白いけども。

考えていると、試着室が開いてモカが出て来る。普通に当たり障りのないワンピース。ス。

しかし、表情はそのままに後ろで手を組んだモカはいつもより女の子っぽくて――

「……普通に可愛いな」

――なんて、恥ずかしい事を呟いてしまった。

「普通ー? セっかくモカちゃんがおめかしをしたんだから……超絶可愛いよーモカちゃん、くらしいの反応が欲しかったな」

「俺はアイドルの追っかけか」

いや、まあ、普通っていうか、想像以上に可愛いんだけども。そんな事を面と向かって言える訳がなく。

しかしモカはそんな俺の態度に不満そうだ。セっかく俺が選んだ服を着てくれたんだから、もう少し何か感想を言ってもバチは当たらないだろう。

「えーと、アレだ。……スカートも似合ってる」

「……。……えい」

「目があああ!!」

何故か目潰しされた。

アイエエエエ! メツブシ?! メツブシナンデ?!

「ふっふっふー、モカちゃんの可愛さに目を焼かれましたねー」

「いや物理だったけど?!」

滅びの呪文もなにもねーよ。

「……えーとー、似合うと思う?」

「はいはい、超絶可愛いよモカちゃん」

真面目に褒めると眼球が破壊されるので、このくらいにしておこう。

「ふふ、そちらのカップルの方。商品はお気に召しましたか?」

モカと話し合っていると、件の店員さんがそうやって話しかけてきた。

……んや、ちよつと待て。今なんて? カップル?

「い、いや、ち、違いますけどお?!」

「あ、それは失礼しました。……それでは、ご兄弟でいらつしやいますか?」

俺が返事をする、と、店員さんはそんな事を聞いてくる。

モカと兄弟とか、同じ屋根の下で暮らすって事になる訳だが。体力が持たないよ。

「あ、いや、兄弟でもないです。……ただの、バイト仲間? な、モカ」

「……。……いや、モカちゃんとしょーくんは、そんなちやちな関係じゃーないよ」

おい待てお前は何を言い出す気だ。

「あたしとしょーくんは、なんか謎の組織——コンビニクラークのバイト戦士……っ
！」

コンビニ店員じゃねーか。

「……。……仲が良いんですね！」

店員さんがどうしたら良いかわからなくなってるよ!! なんかもうごめんなさい!!

「モカ、脱いできなさい」

「こ、こんな所で、あたしの身包みを剥がそうとー? しょーくんの鬼、およろ」

「試着室で着替えて来なさいって意味じゃボケエ!!」

いちいちボケるな!! ツッコミが疲れる!!

「可愛いお友達ですね」

「面白いお友達の間違いですよ」

いや、まあ、可愛いのは否定しないけどな。

——それに、俺なんかがこうやって遊んでもらってるのは勿体ない。そのくらい、今を全力で生きてる奴だ。

だから、俺も何か早く全力で取り組める事を探したいね。

とりあえず探すのは財布だが。



「あ、すまん。ちよつとだけ本屋寄って良いか？」

財布を探して小一時間。通りかけに本屋を見つけたので、俺はモカにそう言って少しだけ立ち寄らせてもらおうとする。

「いいよー」

「まあ、一冊買うだけだが。確か昨日発売の単行本が……あった」

漫画の新刊コーナーを探すと、お目当ての漫画は簡単に見つかった。

「おー、それは、しょーくんの家にあつた漫画の新刊」

「よくそんな事覚えてるな」

「あたしも単行本は買ってないけど、週刊誌で読んでるからね〜」

「マジかよ。これ、青年誌だった気が」

ゴキブリ人間と人間が戦うバトル漫画なんだが、モカってこんな感じの読むんだな。

「モカちゃんは、こういう漫画好きなんだよね〜。あ、久し振りに読み直したいから、今度またしよ〜くんの家に行きたいなあ」

「まあ、意外ではないかな。……あれだ、良かったら全巻貸すけど?」

「……。……いやー、持っていくのも面倒くさいし。読みに行くのがー、モカちゃんの
はベストだとおもふのだよ」

そうか……。? それなら、良いけど。

またギターでも教えてもらいながら、家で遊ぶとするかね。

そんな訳で、単行本を買ってから財布探しを再開する。

結構な店を回ったが、中々良い物は見付からない。

「無いのか? モカっとくる財布」

「うーん、これは中々……。難しい問題だよ〜」

俺は財布の形とか気にした事ないからな。そしてモカつとくるがもう意味分らないから、探すのを手伝う事が出来ない。

もう見る店も少なくなってきたし、そろそろ見つからないと厳しいんだけどな。

そして最後の店もあえなく撃沈。これは、不味いですよ。

「困ったな……。どーするよ」

時間が余ればゲーセンでも寄ろうと思ったんだが、これはまた一周してでも本気で探さないといけなそうだ。

「うーん、モカつと来ない財布は使いたくないから。今日は探すよやめようかな。……付き合わせて、ごめんね?」

「んあ〜……気持ちの良い終わり方じゃないがな」

壊れたままだと不便だろうし、お礼の面もあったからなんだか悔しい。

さっきの服でも買ってプレゼントしようかとも思ったが、突然モカは俺の手を掴んで引く張る。

「何々?!」

「それじゃー、最後はゲーセンで遊ぼー」

そんなノリでええんかい!!

財布は良いんですか。俺は結構真剣に考えてたんだが!!

モカに連れ去られ、俺はショッピングモールのゲームセンターへ。

何度も来た訳ではないが、女の子とゲームセンターつてちよつと気恥ずかしいな。

まあ、財布の事は今考えても仕方がない。

今は、全力で遊ぶ事にした。

「フルコンボだドゥン」

「上手過ぎでは?!」

音ゲーしたり。

「——私は、一発の銃弾。そして双剣カド双銃トラのモカ」

「アウト。てか、一人で二個銃を持つな!! 俺のは?! 俺の方のゾンビも倒して?! 死ぬ!! 死んじゃうううう!!」

射撃ゲーしたり。

「ハハツ、流石にレーシングゲームは負けねーぞ! コーナー二個も抜けりやバックミラーから消してみせ——お、なんか翼が生えた青色の亀さんがああ?!」

「亀さんはモカちゃんの味方なのだ〜」

レーシングゲームしたり。

「必殺、モカちゃん拳〜」

「適当なコマンドで必殺技を出しただと?!」

格ゲーしたり。

「一匹残らず、駆逐してやる!!」

「巨人じゃなくてモグラだけどね〜」

なんか凄いレトロゲーしたり。

コイン落としとか、ホッケーとか、目に映ったゲームを全部やるくらいに楽しむ。本当にそれだけなのに、それだけがとても楽しくて。時間を忘れて遊んでしまった。

「しよーくんやい」

「ん、なんだ？」

「プリクラとかー、撮ってく？」

定番ですね。

いや、女の子同士の友達とか野郎共の悪ふざけとかなら分かるけどもさ。

男女の友達でプリクラって、気恥ずかしくないですかね。

最近の若者はこれが普通なのか。いや、俺も最近の若者の筈だけど。

「……嫌？」

そんな、上目遣いで言われると断れない。特に断る理由もないので、良いのだが。

「んじゃ、撮ってくか」

特に変な事も考えずに。

正直俺には、写真を撮るだけの為にお金を払うつてのが理解できないんだが。だつ

て、携帯で撮れるじゃん。

ただこういうのって、その場の雰囲気が大切なんだろうなって。そんな事を考えた。

「あーこれ写真のシチュエーションを機械が選んでくれるのね。変にポーズ考えなくて済むのは楽だな」

三種類くらいポーズを取ってくれるらしい。

最初は二人でピース。当たり障りのない感じで何よりです。

「はい、坊主」

「坊主」

さて、次はどんな坊主か。いや、ポーズか。

「——壁ドン……だと」

表示されたのはそんな三文字。いや、そうだよねえ、プリクラってそうだよねえ!!

「えーと、モカさん。流石に恥ずかしいんですが」

「しよーくん、こんな事で恥ずかしがっちゃモカショーとしてグランプリ優勝は遠いよ

「?」

まだそれ引きずってたのかよ。

しかし壁ドンは流石にですな——

「——ひゃつ?!」

と、間の抜けた声を出したのはモカではなく——俺だった。

突如伸びて来たモカの手が、俺の首元を横切つて壁を突く。

突然の事に驚いた俺は、腰が低くなってモカを見上げる形になって。

俺を見下ろすモカは、キメ顔で口角を吊り上げていた。

普通逆ではああああ?!

「撮るよ」

嫌だ、ときめいちゃう。

二枚目成功。

「ようやるわ」

「モカちゃんにかかれば朝飯前だよ」

そんなじゃ、最後に無茶振りされても頼むとするかな。

「……。……あー」

「ん？ どうしたモカ。……あー」

しかし、最後に出て来たシチュエーションが酷過ぎた。流石にこれは従うつもりにはならない。

「お姫様抱っこつてお前な」

そんな事出来るか!! 男女友達だぞ!! てかこのシチュエーション出来る二人組の方が少ないだろ!!

「流石にこれは無理か」

「失礼なー、モカちゃんの体重は……えーと、りんご一つ分だよ?」

「いや体重の問題じゃないからね」

羞恥的な問題だ。

「それじゃー、しよーくんはあたしのことお姫様抱っこ出来るのー?」

「出来るわ!! 男舐めんな!! やってやろうかゴラァ!!」

そこまでひ弱じゃないからな。スポーツだって嫌いな訳じゃないし。

「……。……それじゃー、どーぞ?」

ま、マジでやるんですか……?」

「じ、じつとしてろよ」

動かないモカの首元に手を回して、と。ズボンだからそこまで気にせず、膝上にも手を回して――

「――よつと」

「……うお」

モカの身体を持ち上げる。想像よりはキツイが……よ、余裕ですよ。男の子だもん!!

「ほ、ほれみろ……」

「…………う、うん。写真、撮る？」

「ぼ、ボタン押して…………」

「…………案外ギリギリだなー？」

うるせえ。

写真を撮って、モカを下ろした。

嫌だ、直接顔を見るのが恥ずかしい。

そんな訳で、後はよく分からないのでモカに任せて写真をプリントしてもらおう。

三枚目、これは黒歴史だ。いや、二枚目の方が酷い。モカが見てニヤニヤしているのは絶対これだろう。

二つは見るだけで恥ずかしいので、俺は無難な一枚目にだけ焦点を合わせた。

本当に無難な写真なんだが、自分でも信じられないくらい満面の笑みの男が写っている。誰だこれ。

「……楽しいな、全く」

俺、こんな顔するんだな。

どこかで見た顔だけど、どこだったか。

確か、あの時のライブハウスでのモカの顔が——

「しよーくん、しよーくん、これは……これは、モカつと来てしまったのだよ。早く、見て見て」

なんて考えていると、突然モカが俺をクレイニングゲームコーナーまで引つ張ってくる。珍しく興奮しているようなモカに驚きながらも、彼女が指差すその先には——

「モカつとくる財布、発見」

——モカつとくる財布がクレイニングゲームの景品として飾られていた。

それはきつと彼女達の笑顔に憧れたから

「モカつとくる財布、発見〜」

突然だが日本語って難しいよね。

現地によって謎の喋り方があったりするし、さらに人によって謎の単語が頭の中に入っていたりする。

外国人の方に「モカつとくる財布、発見」と外国語で伝えたとして。モカつとくるってなんですか？ と、帰ってくるに至。

そもそもモカつとくるって他の国の言葉でどう言えば良いかすら分からない。

そもそも日本語でもモカつとくるの意味が分からないので、この話題自体そもそも意味が分からないのだ。

閑話休題。

曰くモカつとくる財布を見付けたモカは、珍しく息を荒げてその財布を眺める。しかし、その手が商品に届く事はなかった。そもそも、その財布は商品ではなく景品だったのである。

ガラスケースの向こう側。

上から吊るされたアームの下にあるのは、黒がベースで赤の混じった一つの財布だった。

よくあるクレイニングゲームの景品って奴である。特に珍しい景品という訳ではないが、景品の説明欄を見て俺は絶句した。

「……ポイントカードが沢山入る、お洒落な財布」

ピンポイント過ぎる。

モカつとくるの意味は分からないが、とにかくモカのお気に召した事だけは間違いなかった。

さて、ここで問題が二つ。

まずクレイニングゲームの景品であるから、どうしてもゲームで勝ち取らなければならぬという事。

一回二百円なので、上手くいけば二百円で取れるが、そんなに上手く訳がない。そもそもクレイニングゲームって取れないようになってるからね。こんなのゲームじゃないからね。

ところで景品だが、現品限り。残り一つしか残っていない。これがもう一つの問題点だ。

よしんば目星が付いたのは良い事でも、放っておいたら明日には無くなっているかもしれない。今日ここで取らなければ、二度と手に入らないかもしれない代物である。

「マジか」

「マジのマジよ〜」

総じてクソゲーだった。

「この財布は、バンドの練習帰りに寄った山吹ベーカーリーで、奇跡的に残っていたチョコロネと同じくらい……価値があるっ！」

「物凄く例えが分かりにくいです。それって凄く価値なんですかね」

だが、ここまで来て別ののしろなんて言える訳もなく。

そもそもおいくら万円だろうが買ってやるつもりだったんだ。良いだろう、この際だやってやるぜ。

伊達に無趣味だった訳じゃない。クレイニングゲームにハマった時期だったし、金ならある。

「まあ……俺は昔大きいポテチを落とした事があるんだ。任せろ」

「それはとても頼りになるねー。ファイト、しよーくん」

そう言うモカの前で、俺は二百円をゲーム機に入れた。ゲームスタートの音楽がなり、アームが一度揺れる。

アームは二本指の至ってシンプルな形だ。

一方で景品だが、二本の棒に乗る形でその下が穴になっている。財布は箱に入っていて、箱には丸い取っ手のような物が付いていた。

棒から落として穴に落とせば良いのだが、この手のクレイニングゲームはアームの力が弱かったり、棒がゴムだったりして中々動かない。

箱に付いている取っ手を掴んでもアームが弱過ぎて簡単に離してしまおうだろう。だからここは、ズラして棒から落とすのが正解だ。

「……だああ!!」(※ゲームセンター等公共の場所で大声を出すのはやめましょう)

アームの位置を調整、俺は叫びながらアーム降下のボタンを押す。

行け、アーム。謎の迫力と共に。

真っ直ぐに降りたアームは、景品の真横を通り過ぎた。

的外れ。そう思われるかもしれないがこれで良い。

広がるアームの外側が、景品に当たる。この動きで落とすのが俺の狙いだ。

さあ、落ちろ! ボタンを押した後は何もする事がないので、俺はただ念じる。

期待を乗せたアームが――

「――アホくさ」

結論だけ言うと、アームは当たったが景品が動くどころか景品に当たったアームが止

まった。

アーム弱過ぎ。はいクソゲー。

「……これは、難敵だねえ」

「ま、まあ、正攻法で少しずつズラして行けば……いずれは」

いくら掛かるんだろうって話だが、それ以外の選択肢がないのでやるしかない。

プレイは一回二百円だが、五百円入れると三回プレイ出来るおまけが付くので五百円投入。

今度は素直に景品の上を狙ってアームを動かす。アームは真っ直ぐに伸びて、弱々しくも景品を掴んだ。

さて、どうなるか。

「おおおおお?!」

なんと、アームは財布を完全に持ち上げて上がっていく。

開く力は弱かったけど、掴む力はめっちゃ強かった奴か。これは勝った。勝った。今晩の飯はカツ丼だ！

「これは、モカちゃんのご念動力が上手く伝わっている……っ」

「そんなもんじゃないだろ。いや、この際なんでも良いからそのまま終われ！」

三百円無駄になってしまいが、全然構わん。七百円で財布が手に入ったなら万々歳だろう。

というか、プレゼントの財布の値段が七百円で良いのかって問題もあるが。

世の中そんなに上手く行く訳がなく——

「え」

「あー」

間の抜けたような声が重なった。一番上まで登ったアームは、その衝撃で揺れて。

——財布、落ちる。

普通に元の位置に戻りやがった。一ミリたりともズレてないの。逆に凄いなと思う。

うん、知ってた。

「……やってやろうじゃねえか」

もうこの感じの奴は根気との勝負だろう。裏技も正攻法もない。

ただ金を掛け続けて、落ちるのを待——

「なんなんこれ」

——五分で二千円飛びました。もう挫折そうです。

「え、えーとしょーくん。無理はしなくても、いーよう？」

「馬鹿野郎……。五千円でも一万でも掛ければ取れるんだ。別に、モカが気に入ればそのくらいの値段でも買うつもりだったし」

ただ、この作業みたいなゲームをするのが辛くなっただけだ。

いや、弱音を言ったのは失態だったね。モカに変な気を使わせてしまうだけだし。

「しょーくん……」

「俺はさ、なんでも好きな事には全力で取り組んでるモカに救われたんだよ。だから、そ

の……モカつと来たんだろ？ なら、妥協しないで欲しい」

そう言つて俺はまた五百円を投入する。

「だから、その、弱音吐いてごめん。絶対に取るからさ、待つてろ」

そんな格好良い事を言つてみるが、それで俺の技術が上達するなんて格好良い展開はない。

平凡で何も無い俺なりに、地味に地味に財布をズラした。

全然動かなかつたり、アームが当たりもしなかつたり、もう少しで落ちるかなと思つたら位置が戻りやがつたり。

それでも挫けずにお金を放り込む。特に奇跡が起きる訳もなく、九千七百円を投入して三回中の二回目でやつと財布が落ちてきた。

どれだけ時間を使つたか分からない。だいぶ待たせてしまっただろう。

それでも、俺達は途中からそれすらも面白くて。

お互いに笑いながら、偶にモカが挑戦したりもして「もう少し」「あと少し」「行け」「やったあ」と、五十七回目のチャレンジでついに景品を手に入れる事が出来た。

一回余ってるが、一回じゃどうしようもないし、そもそも景品が残っていない。最後の一つだったし。

「ほら、モカつとくる財布」

余った一回を適当に動かしてから、俺は景品をモカに手渡す。

女の子にプレゼントするものがゲーセンの景品ってどうなのよとか言われるかもしれないが、別に友達なんだから良いのだ。

てか、友達なのか俺達は。ただのバイトの同僚だろう。なんかよく分からない関係だけど、それでも別に良い。

「……。……えへへ、ありがとう、しよーくん」

「どういたしまして」

かなり時間が掛かってしまったが、なんとかプレゼントを渡す事が出来て良かった。

モカは早速財布を取り出すと、珍しく目を輝かせて財布の中身を確認する。

こりや確かにポイントカードが沢山入りそうだ。

「確認するのも良いけど、今日はもう帰ろうぜ？　時間も時間だし」

「あー、どうりでお腹がペコちゃんな訳だ〜」

いや、ペコちゃんってなんだよ。てか、昼にアレだけ食べたのに。

そんな訳で、感傷に浸る時間も惜しく帰路へと足を向けようとした矢先。

「あれ？　モカ、こんな所で何してるの？」

背後からそんな風にモカが呼び止められる。

アレですよ、良くあるアレ。出掛けてたら知り合いとぼったり会ったって奴。

モカは特に驚いた様子もなく「あ、ひーちゃん。それにトモちゃんも」と手を挙げた。

ただ、知人の知人が俺の知人という事はなく。

その場合知人と知人の知人がぼったり会って話し始めて、知人の知人とは知人ではない俺はどうしたらいいか分からないという状況だ。

これも良くある話ではないだろうか。てか、知人ばかり続いて意味が分からん。

「よ、モカ。一人か？」

片手を上げて快活な笑顔でそう言うのは、赤い髪を背中まで伸ばした背の高い女の子。

何処かで見えた事があるような気がする。脳裏に浮かぶのは、真つ暗な会場で皆を引つ張る格好良いドラマーだった。

—— After glow のドラム担当?!

「今日は、しよーくとデート中?」

なんて事を思い出していると、モカは当然爆弾発言を降下する。

は?! で、で、デート?! はあ?!

「ちよ、お前待——」

「デートお?! モカが?! え、誰? 誰々?!」

俺が反論する前に、凄いい付きを見せたのは赤髪の女の子の隣にいたもう一人の女の子だった。

ピンクの髪が可愛らしい、そして何より胸元に豊富なメロンを二つ抱えた少女。忘れる訳がない、俺があこのバンドの演奏が終わってからずっと目で追っていた娘なのだから!

上原ひまりちゃん!!!

「そこに居るのが、噂のしょーくんか？」

ひまりちゃんの登場で若干トリップしていた俺の意識を戻したのは、赤髪の娘のそんな言葉。

彼女とひまりちゃんの視線が俺に集まって、期待の眼差しが突き刺さる。

待って。

「いや、ごめん、ちょっと待って。現状が理解出来ない」

「モカと付き合ってるの?！」

グイツと身体を近付けながら、ひまりちゃんが俺にそう聞いて来た。

近くで見るとめっちゃデカい。いや、何がとは言わないけど。デカい。

そうじゃなくて、なんでそんな事に?!

「ひまり、困ってるだろ」

俺が表情を引きつらせていると、赤髪の女の子が彼女を引き戻す。助かったけど、この状況何。どうという状況。

「だつて。巴は気にならないの？」

「相手はモカだぞ。それに、しょーくん困ってるみたいだし」

「あつ」

モカの信頼の無さよ。

赤髪の女の子は巴という名前らしい。同い年、だよな確か。Afterglowは皆幼馴染って言ってたし。

「もー、トモチん酷いなあ。男の子と二人で遊ぶつて、普通にデートじゃん？」

「そうだけど！ そりゃ確かにそうだけど!!」

「じゃあ、付き合つてる訳じゃないつて事？」

「そ、そういう関係ではございませんね」

謎の敬語が出てしまった。バイトの癖だよ。

「アツハハ、モカにいつも振り回されてるつて感じだな。話は良く聞いてるよ」

「マジか」

そんなに話のネタになってるんですかね。

……あの日のギターの一件が頭に浮かぶ。いや、マジでごめんなさい。本当にごめんなさい。

「……顔色悪いけど、どうかしたか？」

「……あ、いえ、なんでもございませぬ」

アレは完全に俺が悪いので、何か追求されたら首を吊るしかないのだが。モカは話さないでいてくれるのか。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。アタシは宇田川巴。モカと同じバンド——Afterglowでドラムを叩いてる。こっちは上原ひまり、同じくAfterglowでベース担当」

「宜しく、しよーくん！ えーと、しよーくんはモカからのあだ名なんだけ？」

「あ、ああ、宜しく。山田翔太って言うんだ。凄く平凡な名前だと笑ってくれ。モカとはバイト仲間で、その……はい。偶に遊んで貰ってます」

自己紹介なんて久し振りにしたが、やっぱり俺の名前平凡過ぎないだろうか。

「えーと、上原さんに……宇田川さんね」

「アタシは巴で良いよ」

「私もひまりで良いよ！ 宜しくね、翔太君」

両親を恨む。いや、キラキラネームになりたかった訳じゃないけど。

「ひまりちゃんに、巴さん」

「なんでアタシだけさん付け……？」

いや、だって、ね？

「何というか、その、ですネ？」

「そんなに畏まらなくて良いって。いつもモカが世話になってるって話だし、ありがとう」

「トモチくん、それじゃあたしがしよーくに迷惑掛けてるみたいじゃーくん」

半分くらい否定出来ないんだけど。

「モカちゃんもバイトの先輩として、厳しく、しよーくんを育て上げたのだよ」

「本当かあ？」

「嘘だ。教え方が適当過ぎて参考にならなかった」

「しょーくんの裏切り者っ」

事実だ。

「噂の翔太君に会えたのは嬉しいけど、付き合ってたのは残念」

女の子ってそういう話好きだよね。

「モカが良くお話するから、好き同士だと思ってたのに」

「……。……モカちゃんはAfterglowの皆が、ラブー、だよー？」

「また適当な事言っつー！」

モカってどこに居てもモカなんだな。まあ、それが彼女の良い所なのかもしれない。

「……。よーし、ひまり。もう帰るぞー。時間も時間だし」

「あ、本当だ。モカ、明日練習だからね」

「もちー」

そういうえばバンドメンバーだった。

あのAfterglowの面々が目の前に居ると思うと、ちよつと興奮する。またラ
イブを見に行きたい。

なんて事を思っていると、巴さん——巴が思い出したように手をポンッと叩いた。

「そうだ翔太。来週の日曜、またアタシらのライブ見に来ないか？ あこ——あー、妹に渡す予定だったチケツトがあるんだけど。その日Roseliaの練習みたいでさ。チケツトが余っちゃったんだよ」

「え、マジで？ 良いの？」

丁度ライブに行きたいと思っていた所にこの申し出は嬉しい。

しかし、ふと思い出す。

「……いや、その日バイトだわ」

「マジか」

「あ、いや、待ってくれ。誰か代わってくれる人探してみる。……来週の日曜だよな？是非見に行きたい」

リサさんとかに頼んでみるか？ とりあえず何としてでも行きたい。

そんな事を思うのはなんでだろうか。

A f t e r g l o wは俺にとって大きな存在だったか？

そんな疑問が浮かぶが、それでもどうしても行きたいという気持ちは変わらない。

「それじゃ、チケットはモカに渡しとく。バイト代わって貰えたらモカから貰ってくれ」
「分かった。ありがとうな」

ライブ、楽しみだな。絶対に行こう。

「うん。それじゃ」

「じゃあね、翔太君。モカ、また明日！」

「またおととい」

そんな簡単な挨拶を済ませて、俺達も帰る事に。

てか、モカは巴達と帰れば良かったのにな。

「……ねー、しよーくん」

「ん、なんだ？」

「言い忘れてたんだけど」

何を？

モカは渡した財布を大事そうに持ちながら、くしゃつとした笑顔を見せて口を開く。

「今日はありがとう、しよーくん。……楽しかった」

「……俺もだよ」

なんでAfterglowのバンドを見たいのか、少し分かった気がした。

俺は彼女の、その楽しそうな笑顔が見たかったんだと思う。

今を全力で生きてるAfterglowというバンドに憧れてるんだ。きっと。

「……えへへ」

「さて、帰るか」

「帰りにパン屋寄ろ〜つと」

「晩飯食えよ」

「パンはきつと別腹」

「きつと」

だからライブは絶対に見に行きたい。また、彼女達の顔を見たいから。

きつと。

ライブハウスにて

「ごめん山田君！ その日はバンドの練習があつて」

「Rose^{ロゼ}l^ゼl^{リア}ia……。そ、そりやそうですよね。すみません、いや、本当にすみません」
巴の妹——宇田川あこ——は、リサさんと同じバンドに所属しているらしい。

そんな巴の妹がバンドの練習の為にライブに来れなかったのなら、リサさんも練習があるという事で。

そんな彼女にバイトを替わってください、なんて言つて了解が貰える訳がないのである。

「しまった……」

「本当ごめん山田君、モカのライブ行きたいんだよね。んー、どうしたら良いかなあ」

リサさんは俺の為に真剣に悩んでくれているのか、腕を組んで唸った。いや、申し訳ない。

「あ、いえいえお構いなく。こちらこそ無理言つてすみません」
そんなに悩ませるのも悪いと思つて、俺は両手を上げて謝る。
だがライブを諦めきれないのは事実だ。さて、どうするか。

「なんだいなんだい、痴話言かい？」

俺とリサさんが話していると、休憩室から出て来た一人の老婆がそう口走つた。残念ながら違います!! 本当に残念ながら!!

「あ、高木さんおはようございまーす。山田君がどーしても来週の日曜日にバイトを替わつて欲しいって話しててー」

そしてリサさんは華麗にスルー。もう少し反応してくれても良いんですよ?!

「そんな事ならわたしが替わつちやるけ」

「え、ええ? 良いんですか高木さん?!

高木さんはもう六十過ぎだが未だに働いてる元気なおばあちゃんである。

そして、若者がバイトの日に用事がある時はよく替わつてくれるとても優しい人だ。

「えーえー、どーせ老い先短いババア的时间なんざ好きにすればえー」

ただしブラックジョークが酷い。酷過ぎる。

「あ、あははー。高木さんが良かったら、替わってもらったら？」

「そうする事にします。高木さん、なんかデザート奢りますよ！」

「それじゃ、プリンパフェでも買ってもらおうかねえ」

なんでそんなガツツリなんだよ。いや、良いけど。

本当に元気なおばあちゃんだ。

「五百二十円になりまーす」

笑顔で接客してくれるリサさんにお金を渡して、俺はプリンパフェを高木さんに渡す。

当店一押し商品ですよ。ずっと看板下がってるからね。

「あんやー、やつぱりプリンパフェは最高さね」

「お気に召していただき光栄にございますマドモアゼル」

「あつはは、山田君ドラマに出て来る執事さんみたいーい」

楽しい職場だ。

「まあ、なんだい。若者は遊んでなんぼさ。若い内に好きな事をしておかないと、わたしみたいに年を取るとこういう楽しみしなくなるからねえ」

「そんな寂しい事言わないで下さいよ」

しかし、一理あるか。

今だからやれる事っていうのも、あるのかもしれない。

「それに、おっ死んだらそれこそ何も出来なくなるからねえ。その時後悔しないように、今を楽しみな」

「縁起悪いわ!!」

「もー、まだまだ長生きしてくださいよー。はい、これアタシからも奢りでーす」
さて、これで約束の日にはライブに行く事が出来る。

今だからやれる、か。

そういう考え方もあるのかもしれない。



「ハーピーー！ ラツキーー！ スマイル！ イエーイー！」

俺は……ライブハウスに居るんだよな？

「皆！ 今日は集まってくれてありがとう。楽しい時間はまだまだ続くわ！ 最後まで笑顔で楽しみましょ！」

ステージで歌って踊って跳ねまわる金髪の少女。

なぜかクマ（？）のキグルミまでステージの上立ってるし、自分が何をしに来たのか分からなくなってきた。

ステージから落ちそうになった金髪の少女をキグルミが慌てて引き戻す。ギターを持ったイケメンと、ベースを持った元気な女の子、健気そうな水色の髪のドラム担当も皆笑っている。

そんなお茶目なパフォーマンスや少女の明るさも相まって、俺も含めて観客は彼女の言う通り笑顔になっていた。

これも一つのバンドの形なのかもしれない。会場の雰囲気掴みはバッチリだろう。しかしあの金髪の子、どこかで見た事がある気がするのは多分気の所為じゃない。

彼女達が去った後もライブは盛り上がり続けた。

掴みが良かった事もあり、観客の熱は初めから好調。次のバンドも、その次のバンドも熱は続く。

あつという間の小一時間。別に音楽が特別好きな訳じゃないけれど、やっぱりライブの雰囲気っていうのは楽しくて好きだった。

それで、次がアフターグローの番。

心臓が跳ねる。

今気が付いただけでさっきからそうだったのか、それとも彼女達の出番になったからなのか。

それは分からないけれど、とにかく気分が高揚していつて。ステージをライトが照らした時、初めに視界に映ったのはモカだった。

「楽しそうだなあ、やっぱり」

そんな彼女が巴と視線を合わせたかと思えば、巴とバンドの皆が頷きあつて。

ドラムを叩く音が響く。釣られてギター、ベース、キーボード。

声を掛け合う訳でもなく、ただ自然に音が合つて重なつた。

やっぱり技術とかは分からないけれど、彼女達の演奏が俺は好きなんだろう。

迫力のある歌声に釘付けになって、リズムに乗って身体は勝手に上下に動いた。

本当に楽しそうに演奏する五人の中で、彼女はやっぱり笑顔で笑う。

楽しい時間は一瞬だ。

それを噛みしめるように、彼女達は全力で演奏する。

音が切れる瞬間、終わってしまったらと思う余韻すら楽しくて。

ライブは本当に全体的に楽しかったのだけど、やっぱりAfterglowの演奏は俺の中で何か違った。

その何かは分からなくて、少しモヤモヤする。

『しよーくん』

短文。

見覚えのある連絡の通知に、俺の心臓は再び跳ねた。

この前ライブに来た時は控え室とかに呼んでもらえるのでは？　なんて思ったのだけど。

彼女が遠く感じて逃げたんだよな。いや、今も遠い存在だと思ってるんだけども。それでも、なんだか今は彼女に会いたい気分なんだ。

『助けて』

ただ、次に送られてきたメッセージはそんな短文。
跳ねていた心臓が止まりそうになる。

「——は？　どういう事？　……助けて？」

モカに何かあったのか？

バンドで張り切り過ぎて倒れるなんて話はよくある話だ。
そんな嫌な予感が脳裏を過って、俺は何も考えずに走る。

「——っ、モカ！」

控え室は何処だ。

ふと視界に映ったのは、一番初めに演奏していたバンドでドラムを叩いていた水色の髪の女の子。

「ちよつと君！」

周りをキョロキョロ見渡している彼女の前まで走って声を掛ける。

ビックリさせてしまったのか「ひゃあ?!」と悲鳴を上げさせてしまった。

いや、ごめん。マジでごめん。でも今それどころじゃない。

「控え室って何処か分かるか?!」

「え、ええ、あーと、ふええ?!」

テンパってしまっている。流石に焦り過ぎたか、まだ何かあったって決まった訳でもないのに。

「えーと、私も今から、その、向かう所で……」

「あ、それじゃ、連れてつてくれないか?」

「あ、ひゃい」

なんだこの小動物みたいな女の子可愛い。いやそうじゃなくて。

彼女に書いて行くと、スタツフルームという看板が立っている所に辿り着いた。……
スタツフルーム？

「……………」

「あ、違う。多分逆方向……で、その。あれえ……う。ふえええ〜」

どうしてそうなる。

目を回している少女を他所に、俺はライブハウスのスタツフさんに控え室の場所を教
えて貰った。

それで彼女を連れて控え室に。どうして俺が彼女を案内しているんだろう。

「あら花音、どこに行っていたの？ もう帰りの準備は出来ているわ。家に帰るまでが
ライブよ！」

「ご、ごめんねこころちゃん」

で、どうやら彼女はバンドの仲間に合流出来たようだ。何故かクマのキグルミに頭を
下げられる。キグルミ……暑くないですか？

そんな事より今はモカだ。あれ以降メッセージもないし。

ふと控え室を見渡すと、赤色の長い髪が見える。アレは巴だな。となると、あそこに Afterglow が居る筈。

急ぎ足で彼女達の前に向かうと、目を疑うような光景が広がっていた。

「蘭ー、この仕打ちは酷いよ〜?」

涙目のモカ。黒髪の少女が、ベールを片手にモカの頭を抑えている。

多分……モカはあのベールが食べたいんだろう。それを黒髪の娘が邪魔をしていると。

何が「助けて」だよ畜生。心配させやがって。

「……何してんだモカ」

「お、翔太じゃん。来てくれてありがとな」

無意識に出した声に反応して振り向いてくれたのは、衣装姿の巴だった。

お腹も出した露出の多い衣装が印象的で、俺は彼女のそんな姿に見惚れてしまう。

ステージの奥に居る姿を見ると間近で見えるのって、やっぱり違うよね。

「お、おう。こんにちは」

「なんで硬くなってるんだ？」

お気になさらないで下さい。

「……っ、山田翔太?! アンタが……?」

巴と軽く挨拶をすると、モカを押さえつけて居た女の子が振り向いて低い声で唸るように口を開いた。

赤いメツシユの入った髪、何か不機嫌そうな表情がもうなんか怖い。え、怖い。てか、なんか怒ってない? 怖い!!

「ひいつ?! は、はい。山田翔太と申す者でございます……」

「しょーくーん、ヘルプミー」

いや今助けて欲しいのは俺だからね。

「そんな睨むなよ蘭。翔太がビビってるぞー」

「……だって、この人があのショークンなんでしょ?」

なんで俺 Afterglowのメンバーに周知されてるの。いや、何となく犯人は分

かるけど理由は分からない。

なので、この女の子に睨まれている理由も分からないのです。

Afterglowのボーカル担当、美竹蘭。

歌声は迫力があつて格好良くなつて思つていたんだが、そんな彼女に睨まれるとなんか……蛇に睨まれた蛙の気分だ。

「そーだよ！ この前デパートでモカと翔太君がデートしてるの、私達が見たもん。ねー、巴」

腰に手を置いて自慢げにそう話すのは、ピンクの髪とメロンが特徴的なベース担当上原ひまりちゃん。

しかし、その言い方だと語弊があるんですけど。俺とモカが付き合ってるみたいになつてるぞ？

「いや、デートつていうか……アレは」

そうだ巴、なんとか言ってくれ。

そんな俺の願いを知ってから知らずか、巴はモカや皆を見比べてから溜息を吐いて口

を開く。

「デートだな」

なんでだよ!!

「ほらほらー! 言ったじゃーん」

「……で、デート」

蘭さんの表情が凄いききつってるんだけど。まさか、俺を睨んでる理由と関係あるのか？

「ちよつと待って! まだそうと決まった訳じゃないよね?」

そんな最悪の雰囲気の中、声を上げたのは茶髪の大人しそうな女の子だった。

一生懸命な声で俺達の間に入るその娘は、ひまりちゃんと蘭さんに落ち着くように手を向ける。

「……なんか、あの、俺はお邪魔ですかね?」

モカが何をしたのか知らないが、何やら俺が居て良いような雰囲気じゃない気がした。

なので退散しようと思ったのだが、蘭さんが俺の手を掴んでそのまま睨んでくる。いや本当に俺が何をしたんですか?!

「……じゃあ直接聞く。モカははぐらかすし」

おいモカ、お前は何を言ったんだ。

「モカとデートしてたって、本当?」

して、彼女からの問いはそんな簡単な質問。

デート、デートですか。いや、女の子と一緒に遊びに行く事がデートなら、アレはデートなんだと思う。

して、ここで本当の事を言って良いのだろうかと思う訳だ。別に彼女はモカの父親でもないんだから、怒られる事はないと思う。

変に誤魔化すより、真面目に答えるのが正解な気がした。

「お、おう。してた」

「……っ?!」

俺の返答を聞いた彼女は、目を見開いて俺とモカを見比べる。そして突然瞳に涙を浮かべたかと思えば、彼女は俺を押し退けて走り去ってしまった。

「ら、蘭ちゃん!」

茶髪の娘の声も届かず。

少し騒つく控え室で、俺はただ口を開けて固まってしまっていた。



「説明しろ」

美竹蘭以外の Afterglowメンバーと共に、近くのアミレスに来た俺はモカにそう問い詰める。

視線をそらすモカは、気まずそうにゆっくりと口を開いた。

「えーと、そのー、蘭に……勘違い、されちゃって?」

「勘違い……?」

何を？

「今日さ、モカのバイト先のしよーくん……つまり翔太がライブを見に来てたって話のアタシがしたんだよ。そしたら蘭のやつ、誰だそのどこの馬の骨とも分からない奴はつて」

モカのお父さんなのかな？!

「い、いや巴ちゃん?! 蘭ちゃんそんな事言つてなかったよ?!」

そう訂正してくれるのは、さつき声を上げた茶髪の女の子。

Afterglowのキーボード担当、羽沢つぐみちゃんである。

一生懸命な表情が可愛い。妹に欲しい。

「あー、そうだっけ。でも、そんな気迫だった」

「それは……否定できないけど」

出来ないんかい。

いやしかし、俺がモカと遊ぶ事に対してなんでそんな実の父親みたいな反応をするんだろうか？

嫉妬？ いや、同性ですよ。いや、そういうのを否定する訳じゃないけど。

「も、もしかして私が……モカと翔太君がデートしてたって言ったから?!」

「それは……あるかもな」

巴に肯定されて、ひまりちゃんが今度は涙目になる。

そんな彼女を見て慌てるつくみちゃん。どうやら携帯電話で誰かに連絡を取ろうとしているみたいだけど、電話は繋がらないみたいだ。

しかし本当にどうして俺とモカが遊んでいただけでこんな事に。

「蘭を寂しからせちゃったのかな……」

ポツリと、俺のとなりでモカはそんな事を呟く。

それがどういう意味か、俺には理解出来なかった。

「……なんというか、バンドの雰囲気が悪くしてごめん」

それで、俺には結局打つ手がなくて、ただ謝る事しか出来ない。

これがアニメやドラマの格好良い主人公なら、パパッと問題を解決するんだろうけど

も。俺にそんな力はない。

「だ、大丈夫！ 翔太君は何も悪くないよ！」

「そうそう。気にすんな、アタシ達の友情はこんな事で壊れたりしない！」

どこからそんな自信が湧いて来るのか。

しかし、なんだかそんな友情が羨ましくも思える。

「あ、明日になったら学校で会えるよね？」

「アタシが一緒に謝ってやるから、心配すんな」

「やっぱり私が悪いの……うう……」

友達を怒らせた事を気にするひまりちゃんと、そんな彼女を氣遣う巴。

携帯の画面を見て、つぐみちゃんは件の彼女からの返信を今か今かと待ち続けた。
た。

こんな友達がいるって、なんか凄いなって。そんな場違いな事を思ってしまった。

「……あたしが蘭を、傷付けちゃったのかな」
そんな言葉が、短く漏れた。

美竹蘭の憂鬱

特に代わり映えもない、いつも通りの月曜日だ。

朝起きて、朝ごはんを食べて。

騒がしい両親を見ては「新婚かよあんたら」と微笑ましく思う。

学生の本分は勉強だというが、それなりに授業を受けて後はやっぱり遊びたいよね。ただ、昼飯を友人と食べる時に。俺はふと質問してみた。

「なあ、大親友」

「突然なんだ気持ち悪いな」

あんまりじゃないだろうか。あんまりだよ。

「俺と圭介けいすけの仲だろ？ な、大親友」

「キモいぞ。どうしたんですか山田君」

「他人のフリしないで?!」

あとその如何にも最近の若者みtainな顔で敬語使うの止めろ。

「で、実際なんだ突然」

昼飯のゴミを綺麗に畳んで折り曲げ、謎のオートを作りながら圭介が聞いてくる。

いやお前がなんだ突然。そんな特技あったの?!　そこそこの付き合いだ、知らない事もあるもんだな。

「例えばさ、俺がお前の知らない女の子とデートしてたらどう思う?」

「どうでもいいな」

泣いて良いですか。

「俺は彼女居るし、特に羨ましいとも思わない」

「初耳なんだけど。羨ましいんだけど!!」

え?!　いつのまに?!　俺がバイトに青春を費やしてる間に何があったの?!

「つて、俺が言うとお前はそう思う訳だ」

「……あー、ああ。なるほど」

嘘かよ。

「つまり、俺とお前ですら考えは違うのに。男の俺の考えを聞いて何になるって話さ」

「待って、なんで俺がこの質問をした意図を読んでいるの？ エスパーか何かなの？」

こんな質問をしたのはやっぱり、美竹蘭の事が気になっっているからだ。

まだ昨日の話で、俺が知らない間に解決してるかもしれないけれど。

彼女があんな行動に出た理由が俺には分からない。

俺が何か理解したとして、何か彼女達の役に立てるかどうかといえは答えは否だけでも。

「そんな質問をしてくるって事は、大体何かあったという事だ。それくらいは分かる。

……ついでに、彼女がいる事は本当だ」

「マジかよ。羨ましい。リア充爆発しろ」

「お前な……」

くそ!! 俺だって、俺だってなあ?!

「さて、冗談抜きでアドバイスをするなら……そうだな。俺は友人がリア充になろうがどうでも良いが、一つだけ思う事はあった」

「一つだけ……?」

どうでも良いのは否定しないですね。

「最近、お前と遊べなくて寂しい」

「惚れてまうやろお!!」

「キモい」

そういう流れじゃなかったかー。



モカ達のバンド、Affterglow^{アフターグロー}は彼女達が中学生の時に結成されたバンドらしい。

日曜日にファミレスで聞いた話である。

彼女達が中学二年生の時のクラス替えて、幼馴染五人組の内一人だけが別のクラスになってしまった。その一人こそ、美竹^{彼女}蘭^女だったのだとか。

彼女は一人になったのが心細くて、授業に出なくなる程になってしまったという。

そんな彼女を元氣付ける為、また五人で居られる場所を作る為。そうして結成されたのがAffterglow^{アフターグロー}という訳だ。

ドラマかよ。

「モカ、遅刻」

「あー……うん。ごめんねー」

仕事が終わってコンビニでバイトをしていると、モカが少し遅刻気味でやって来る。いつもなら遅刻しても言い訳を垂れる癖に、今日に限ってそんな返事をされると色々察してしまった。

「あの娘は？」

「学校には来てたんだけど……。話してくれなかったな」

思っていたより悪い状況だな……。

「なんであんな事になったんだ？」

正直、今でもなんで彼女があの時走り去ってしまったのかが分からない。

確かに俺とモカはデートしてたんだと思う。付き合っているとかそういう訳じゃなくて。

モカと彼女が付き合っていた——とかなら、まだ理由は分かるけど。それは違うみ

たいだし。

「理由分かるか？」

「うーん、分からなくはないんだけどなー。蘭は気難しさんだからなー」

困ったようにそう言うモカ。

気にはしてるけど、そこまで深刻ではないって感じた。

俺が深く考える事でもないのかもしれない。

「しよーくんはさー」

「んー？」

棚卸しをしながらなんとなく話を聞く。特になんともない、いつもの事だ。

「あたしの事、どう思ってるー？」

「と、突然なんだよ」

変な事を聞かれてしまったので、俺はおにぎりを一個落とすくらいには動揺してしま
う。

そのおにぎりは後でスタツフ^俺が代金を払って美味しく頂きました。

「いいからー」

「……バイトの同僚、つてのは関係だよな。えーと、なんだ……友達、で良いのかな？
あー、違う。俺は友達だと思ってる。モカがなんて思おうと」

なんかその、恥ずかしいんですけども。

モカはそんな事を思っていないかもしれないけど、俺にとって彼女は大切な友達なんだ。
だ。

「……そっか」

ただ、モカはそう短く返すと俺から視線を逸らす。

少し寂しげな表情が何故か印象的だった。

「えーと、大切な友達？」

「友達に大切も大切じゃないもあるかよ。……大切な友達だよ」

それがどうしたというのか、彼女は顔を持ち上げてまた俺の目を見る。

モカは普段から何を考えているか分からないが、今日は特に分からないかもしれない。い。

「それじゃー、そんなしよーくんに質問でーす。しよーくんの大切な友達のもかちゃん、他の友達と遊ぶようになったら、しよーくんはどう思う？　もかちゃんともう遊べなくなっちゃうんだよー？」

「そりゃ、寂しいよ」

からかっているんだろうが、その手には乗らんど。俺が恥ずかしがってばかりだと思わないよ。

しかし俺のそんな気持ちに反して、モカは「多分、それなんだよ」と呟いた。それで、やっと俺は理解する。

「俺にモカが取られて、Afterglowで——あの五人で居られなくなるんじゃないかって心配させちゃったのか？」

「うん、あたし的には多分そう。……だから、これはあたしが悪いのかなーって」

一度本当に失いかけた幼馴染がまた離れて行くんじゃないかって、彼女はそんな心配

をしてるんだ。

そんな訳がないのに、なんて俺が思うのも変かもしれないけど。でも、やっぱりそんな訳がないって、俺は思えてしまう。

だからやっぱりコレは俺が手を出すような問題じゃないんだ。彼女達に任せれば良い。

ちよつと狡いかもしれないし、実際は俺も関係してるんだから何かしらした方が良いとは思うけども。俺にそんなラノベの主人公みたいなスペックはないです。

「しかし、しよーくんはモカちゃんが他の友達と遊ぶと寂しいんだねー」

そんな事を考えていると、モカは突然得意げな表情で口を開いた。

「真面目な話の後で掘り出すなよ?! てか悪いかあ!! 俺のハートは割とガラスなんだよ。些細な事で寂しいと思つて死んじゃうんだよ!!」

「別にー」

絶対馬鹿にしてるよね?!

「——あたしも寂しいし」

「え？」

「なんにもー。あ、お客さんだよしよーくん。モカちゃんはお花を摘んでくるので、接客宜しく〜」

「働けよ。……つて、あー、Rose^ロlie^ゼria^{リア}の友希那さんか」

ネコの形した肉まんが温まつてるのを横目で見ながら、俺はレジに着く。

「いらつしやいませー、ネコまん如何つすかー」

何も変わらない月曜日だ。



「送ってこうか？」

「山田大尉、護衛を頼むでござるよ〜」

「軍人なのか侍なのかどっちかにしろ」

バイトから上がる時間が被っていたりすると、モカを家まで送って行くなんて事もあったりする。

ほら、一応女の子だしな。

「ネコまん一個奢ろうか？」

「モカちゃん的には十個くらいよゆうでいけるんだけどな」

「店長、ネコまん二個下さい」

「いけず」

「やらんぞ……」

一応女の子だしな……。

学業の後バイトをやっていれば、終わった時には夕焼けの時間なんてとつくに過ぎていたりもする訳で。

外灯の下ではあるが、俺達はそれなりに暗い夜道を二人で歩いていた。いつものよう
な、何気ない会話をしながら。

ふと、視界に一人の少女が映る。

「……モカ」

黒い髪に、赤いメツシユの入った女の子。
少し俯いた表情で、美竹蘭はモカの名前を呼んだ。

「やつほー、お茶してくー?」

そんな時間じゃないだろ。

「うん、そうする」

乗るんですね!!

流石長年の幼馴染……。モカの扱いが上手い。

「そ、それじゃ、俺はこの辺で——」

とにかく、俺がいても邪魔そうなので、今日は二人に任せて帰ろうとしたのだが。
振り向いて歩き出す俺の手を二人の手が掴む。

なんでモカも掴んでるんだ。

「……アンタも、来て」

「……ひ、ひゃい」

そうなるかあ……。

そんな訳で、俺達は近くの公園のベンチに三人で座る。

真ん中にモカ、その左に美竹さんが座って、俺はモカの右側。

「……その、昨日と今日は……ごめん」

外灯が照らすベンチの上で、彼女は少し口籠ってから口を開いた。

「あたしは気にしてないよー」

凄いい気にしてたと思うけど……。

いや、ここでそれを肯定してもいい事はないか。

「あたしは、二人がその……デートしてたって聞いて。モカが、あたし達から離れて行くんじゃないかって気がして」

それだけ大切な友達なんだろう。彼女は瞳を少し濡らしながら、俯いてそんな言葉を漏らした。

少し大袈裟な気がするが……うん、それだけモカの事を大切に思っているんだろう。

それは、彼女達のライブを見たから分かっているつもりだ。

今この時を全力で楽しもうって表情が、とても伝わって来たんだから。

「でも、モカをあたしが縛ったらダメだよ。……いつかは皆、離れていくかもしれない。ずっと一緒なんて、難しいし」

んー???

ちよつと待つて。なんでそこまで話が飛躍する。

デートしたつて言つても、俺達付き合つてる訳じゃな——いや待てよ？

俺はモカと付き合つてないなんて一言でも言つたか？ 昨日の会話を思い出す限り、

答えは否だ。

もしかして彼女、俺達が付き合つてると思つてるのでは？

「だから、あたしは山田がモカを幸せにするつて約束してくれるなら、ちゃんと割り切るつもり」

あああ!! やつぱりだ!! 凄い勘違いされてる!!

確かにデートつて言葉を否定しなかつた俺も悪いけど!! 凄い勘違いされてるう!!

「あー、そのー、蘭ー？　ちよつと待——」

「モカは黙ってて」

「あちゃー」

いやモカ頑張つて?!　ちゃんと説明して!!

しかしよく考えれば、モカがちゃんと説明出来ていたら彼女もこんな勘違いはしなかった筈なんだ。

モカがのんびり口調なのもあるが、多分彼女も頑固で話を聞こうとしなかったんだろう。

だからってどうしてこんな事に……。

「山田……」

「はい、山田です……」

どうしたら良いんだ。何を言ったら良いか分からないんだけど。いや、本当に。

「あたし達からモカを奪って、それでもモカを泣かせたら……あたしが許さない」

「蘭……」

いやモカよ、感動してないで説明してくれ。

あー、畜生。俺がなんとか言ってるしかないのかよ。分かったよやってやるよ!!
別に深い事とか言う必要はない。ただ思ってる事を言うだけだろう。頑張れ山田、それくらいやれ山田。

「あの、さ。ちよつと良いか?」

「……何?」

そんな怖い目で見ないでください。

「俺、Afterglowが好きだよ」

「ちよ、本当にいきなり何?!」

いいから黙って聞け。今から凄く恥ずかしい事言うから黙って聞いててくれ。
じゃないと俺の心臓が持たない!!

「初めてライブを見た時……いや、昨日のライブもだ。Afterglowの——五
人のライブを見てさ、凄い楽しそうだって思ったんだ。今しかないこの時間を、今だけか

「そこそ全力でやってるっていうか。……なんにも趣味がなくてさ、何かに全力で取り組む事なんて知らなかった俺は、そんな五人を見て、大袈裟かもしれないけど救われたんだよ」

そんな言葉を、彼女とモカは顔を赤くしながら黙って聞いてくれた。

なら、最後までちゃんと言おう。

モカにだって言った事ないけれど、ちゃんと伝えようじゃないか。

「あの五人は、本当にあの場所が大好きなんだって。殆ど他人の俺だって分かる。……もしモカや他の誰かに好きな人が出来たりしたって、そんな簡単に壊れる物じゃないと思うんだ」

綺麗事だと思うだろうか？

確かにそうかもしれない。だとしても、俺はそう思った。どう思おうが勝手だろう。

「確かにバンド活動はいつまでも続けられる物じゃないかもしれないけどさ、Afterglowは——少なくとも俺が見る限りで皆は、あの五人で居るのが本当に楽しいんだろうなって感じだったよ。例えばバンド活動を辞めたって、なんやかんやで五人が完全に別れ離れになる事なんてないって、そう思った。……だから、もつと自分の気持ち

を信じろ。皆同じ事を思ってると思うぜ」

言い切ってから凄く恥ずかしくなったが、言いたい事は言ったつもりだ。

彼女達五人は、本当にAfterglowって居場所が大切だと思ってる。あの場所に居る今を本当に楽しんでるって、そう思ったんだ。

「皆同じ事を……？ モカも？」

「当たり前じゃーん？」

「皆も……？」

「聞かなくても、蘭なら分かると思うけどなー」

諭すような表情でモカは彼女に微笑む。

彼女は少し涙目になりながらも、小声で「そっか、そうだよね」と納得してくれたよ
うだ。

彼女達Afterglowの友情はとも見えていて心地がいいんだよな。

「これからも、いつも通り居られる？」

「そーだねー。いつも通り、だよ」

さて、夜も遅いし帰るとしましょう。

慣れない事をして疲れた。

「ねえ、山田。一つ気になったんだけど」

「……あー、やっぱり？」

さりげなく伝えたつもりなので、ツツコミは入らないと思っていたのだが。

世の中そんなに甘くないよね!!

「……山田とモカって付き合ってるんじゃないの？」

「違います」

とりあえず即答する。

全部勘違いだ。その事に気が付いた彼女の表情はみるみる真っ赤になっていった。

「いやー、だからー、そのー、蘭？」

「なんで初めにそう言ってくれなかったの?!」

涙目で、顔を真っ赤にしてモカの肩を強く揺らしながら叫ぶ美竹蘭。

恥ずかしさでどうにかかなりそうな彼女を見てるのは、なんだか面白い。性格が疑われそうだが。

「いやー、いつも通りですなー」

「全然違う……っ!!」

楽しそうで何よりです。

良かったなど、俺はそんな事を思っただけでモカと目を合わせるのだが。

彼女が少しだけ寂しそうな表情を見せてから笑ったのが、少しだけ印象的だった。

そんな、少しだけいつも通りじゃない月曜日の話。

ショッピングモールにて

突然だが、出掛け先で知り合いの知り合いに会った時ってどうしたら良いか分からないよな。

友人の友人が友人であるのかという事は置いておいて、だ。

無視するのも悪い気がするし、目が合ってしまったら尚更である。

「は、ハロー」

「あ、山田。……うん、はろー？」

なんでハローとか言ったの俺。普通にこんにちはとかで良くない？ 日本人だろお前は。

「今日はバイト休み？」

そして「はろー」と返してくれた黒髪に赤メッシュの彼女——美竹蘭は、近付いて来て首を横に傾けながらそう聞いて来た。

場所はいつかモカと来たショッピングモール。そして土曜日。青春を殆どバイトに

割いている無趣味の俺にしては珍しく、お出かけ中である。……一人で。

「いや、夕方からなんだよ。バイトまで時間を潰そうと思って」

ただ、この通り夕方からはバイトなのだ。法律ギリギリくらい働いているので、半日以上フリーなのも珍しい。

かといってやる事もなく、何の目的もなしにショッピングモールに辿り着いて今に至る。

「そう」

納得したような素振りでも返事をするのは良い。いや、これからどうするんだ。

偶然すれ違ったから声を掛けてしまったけれど、特に話の話題がある訳でもない。

「あたしも、夕方からバンドの練習だから。モカがその時間までバイトって事は……入れ替わり？」

俺が一人頭の中で悶絶していると、蘭がそう言って話題を振ってくれる。なんて頼れる人なんだ。

「そういう事だな。なるほど、その為のこのシフトって訳だ」

珍しく俺が夕方からって理由が判明した気がする。
バイトの後にバンド練習って、モカも大変だな。

「……そういえば、この間の話の続きなんだけど」

いや、よく考えたら最低な話題だった。

「ひいつ」

「そんなにビビらないですよ……。変な勘違いして、その……なんていうか、ごめん
目を逸らしながらそういう蘭は、なんだか恥ずかしそうである。

とんでもない勘違いをしていたから、当然といえば当然か。

「まあ、ちゃんと説明しなかった俺も悪いんだけども。そもそもモカと幼馴染の蘭なら、
あのモカが誰かに恋だとか、しかも俺なんかと付き合うとか……考えられないだろ？」
「……。……あー、うん。そうだね」

ふと遠くを見てから、目を逸らしながら彼女はそう言った。幼馴染に肯定されてるの
だから間違いない。

適当な話題もなんとか切り抜けたし、ここいらでおいとまするとしよう。

確かに夕方まで時間があるが、その時間まで彼女と居られる程に俺のコミュニケーション能力は高くない。

いや、低い訳じゃないけど。そもそも住む世界が違うというか、そもそも友人の友人であつて友人ではないというか。

「それじゃ、俺はこれで」

「うん。バイト頑張——」

「あ、蘭に翔太君じゃーん！ こんな所で奇遇——」

話の区切りが付いた所で、蘭の言葉を遮つて俺達の間の子が一人入つて来た。

なぜこの絶妙なタイミングで現れたんですかね。視界に入るピンク色の髪からは、なんだかとても甘い香りがする。

Afterglowのベース担当、上原ひまりちゃんだ。

「あ、ひまり。おはよ」

「おはよー。蘭も暇潰し？ 私も丁度夕方まで予定が無かつたんだよねー。翔太君と何してたの？」

何もしてないですバッテリー会っただけです。

「今さつき偶然見付けたから、話してただけ。ね？」

「お、おう。その通り」

「えー、何々？ なんの話してたの？ あ、そうだ！ 今からお茶しない？」

これが今時の女子高生のノリか。いや、俺も今時の男子高生だけでも。

「おー、それじゃ楽しんで。俺はこの辺——」

「翔太君も一緒に、ね？」

目を輝かせて俺の肩を掴み、そう口にするひまりちゃん。

オーウ、さらば俺の平和なフリータイム。



山田翔太は正直言ってモテない。

そもそも学校では目立たないし、隣に橘圭介とかいうイケメンがいるので高校ではイケメンの友人という印象しかないのだ。

だから女子と話す機会はあまりない。遊ぶ事がない事はないが、グループの一員としてとかそんな感じである。

よって、女の子とマンツーマンというか。むしろ女の子二人とこうファミレスでお茶なんて俺にはハードルが高いのだ。

モカとなら、彼女の性格上ネタに困らないのだが。普通の女の子とお喋りする技術なんて俺にはない。てか何を話したら良い。俺は何をしたら良い。

三人共ドリンクバーを頼んで、ひまりちゃんは追加でケーキを一つ。

俺と二人が向かい合う形で座って、注文を終えて直ぐにケーキが運ばれてくる。

直ぐに携帯を取り出したひまりちゃんは、少し触ってからその携帯を俺に渡しながら口を開いた。

「翔太君、写真撮って貰っても良い？ 私のピースが映る感じで！」

SNSにでも上げるのだろうか。

言われた通りカメラを向けると、画面に大きなイチゴが乗ったショートケーキとピースサインの右手——それに大きなメロン（比喻表現）が二つ映る。

これこの状態でシャッター押しても良いんですかね。もう少しズラしてメロンが写らないようにした方が良いですかね。でもそうなると不自然か。いや、どうしたら良いんだよ!!

「どうかしたの?」

「あ、いや、なんでもないですはい」

えーい、どうとでもなれ。普通にイチゴとピースとメロンを写して、俺はひまりちゃんに携帯を返した。

彼女は「ふふーん」と鼻歌を歌いながら、それをSNSに上げる。心配は杞憂に終わったようだ。

「それでー、なんの話してたの?」

そして当然のように嫌な話題を振ってくる。勘弁してください。

「いや、その……モカの話かな。アイツが今バイト中で、皆と練習の時間になったら交代するってシフトになってるって話をしてたんだよ」

「そっかー。モカといえば、なんでモカと翔太君はデートしてたの?」

いや、アレはデートではなくて——と言いたいのだが、実際はデートだったのだからから否定は出来なかった。

しかしそのせいで蘭に変な勘違いをされる事になったんですよ。ほら、隣で蘭が顔赤くしてバレないように飲み物飲んでるよ。バレバレだけどね。

「あー、私も気になるかも」

冷たい飲み物で頭を冷やした蘭も、何食わぬ顔で話に乗ってくる。どうしてこんな事に。

して、モカと出掛けた理由を思い出してみると大変な事に気が付いた。

俺はモカに財布をプレゼントする為に、実質モカとデートした訳である。

結果としてゲーセンの景品を渡すという最低な結果になったが、話だけ聞いたら本当に付き合ってる男女のデートですよコレは。

「暇だったからその……げ、ゲーセンに行こうと思つてな」

よつて、嘘を吐いてみた。罪悪感はあるが、また変な事を言われるよりはマシだ。

「なるほど、モカらしいって言ったらモカらしいかもね。翔太君とモカは良く遊ぶの？」
前のめりになってそう聞いてくるひまりちゃん。メロンが揺れる。視線のやり場に困るからやめて欲しい。

「ま、まあ……そこそこ」

「ふえー、モカが男の子とよく遊んでるんだってー蘭！ そのまま本当に恋愛に発展し

たらどーしよー！」

女子高生特有のキヤツキヤツなテンションで、ひまりちゃんは頭の中にお花畑を作り出していた。

モカと恋愛だあ……？　　ないない。絶対ない。そもそもモカがそういうのに興味なさそうでもないな。

「ひまり、山田が困ってる」

「えーっ。翔太君はモカの事どうとも思っていないの？」

「ひまり……」

どうとも思っていない——なんて事はないかもしれないが。これが恋愛感情なんて事はないだろう。

俺にとってモカは、とつても輝いて見えて近いのに遠い存在なんだ。

むしろ可愛いとか美人みたいな感情は、ひまりちゃんとかりサさんに向いてるしな。

「思っていない……かな」

だから、俺はそう答える。

肩を落しながら「残念」と呟くひまりちゃんの横で、何故か蘭が怖い顔で俺を睨んでいるような気がした。

何か悪い事でも言ったのだろうか。心当たりがない。

「別に、あたしはどうでも良いけど。……モカを不幸にする奴は、許さない。モカだけじゃなくて、皆だけど」

「もー、蘭ったら大袈裟だよー」

彼女にとってはそのくらいA f t e r g l o wの皆が大切なんだろうな。

その後、共通の話題というか主にモカの事やA f t e r g l o wの事を話している間に夕方に。

新鮮な話が聞けて楽しかったし、なにより蘭との蟠りも解消されたようで安心する。ひまりちゃんも結構話上手で、俺と蘭が逐一反応するって感じだったけどそれでも楽しくて。

気が付けばかなり長居してしまった。急いで行けば間に合うが、今からバイトだと考えると少し怠い。

「もーこんな時間。急がなきゃ!」

「ひまりが長話するから」

「蘭も聞いてたじゃーん!」

「と、とにかく会計済まして急ごうか。そっちもスタジオの予約とかあるだろ?」

急いで会計を済ませて、俺達はファミレスを後にする。

俺が着く頃にはモカとすれ違う時間だろうから、彼女と話す時間はあまりない。なぜか、そんな事が気になってしまった。

「どーする? モカ迎えに行く?」

「……。ん、山田も居るし行かなくて良いと思う。先に行つてよ。つぐみがもう着いたつて言ってるし」

「早っ」

そう言いながら分かれ道。

「山田、モカが練習忘れてたら叩いといて。それじゃ、また」

そんな事を言つて、蘭達はスタジオの方に歩いていく。

暴力は良くないですよ……。

ただ、任されたからにはモカがちゃんと練習に行けるようにしなきゃな。

そんな訳で、なんとか十分前にコンビニに辿り着いた。出入り口でお客さんとすれ違って、モカの「……しゃーしたー」が聞こえてくる。

「よ、お疲れモカ。お客さん丁度居ないし、今の内に上がれよ。今日練習だろ?」

直ぐに着替えて、俺はモカにそう告げた。まだ上がりの時間まで七分くらいあるが、お客さんも居ないし問題ない。

タイムカードは着替えてから押せば良いのである。良い子の皆は真似したらダメだぞ。

「いやいやー、ちゃんとお給料分は働かないとね〜」

しかし、モカはそんな事を言っただけ俺の横のレジに立った。

モカが良い子だったので反省である。

「今は客居ないから、働く事もないがな」

「立ってるだけで、モカちゃんは働いているのだ〜」

「なんて楽なお仕事でしょう」

マネキンかよ。

「ふっふっふー、美少女が店員をやっているコンビニがあると近所で評判なんだよ？」
「それ、リサさんだわ」

「しょーくんが酷いよー」

無駄にリアルな泣き真似やめい。

「でも、今日バンドの練習だろ？」

「そうだけど……あたし、しょーくんに言つたっけー？」

首を横に傾けながら疑問を呟くモカに、俺は「今日ショッピングモールで蘭とひまりちゃんに会つてな」と事情を説明した。

「なるほど、しょーくんも両手に花で隅に置けないですなあ」

「茶化すなつての。まあ、モカのお陰でAfterglowの皆と話せるようになったのは嬉しい事だけだな」

今でも夢のようだとか思ってるし。

「モカ神様に感謝しても良いよー？」

「なんの神だよソイツは」

「パンを供える事で美少女の笑顔が見れます」

「ありがたいんだかありがたいんだか」

モカがパン食べて笑顔になつてただけなんだが。

そんな話を話していると、時間なんてあつという間である。

しかし丁度モカが上がりの方に、三人組の学生と思わしき男子達がコンビニに入ってきた。

モカはそれを見てレジの前に立つが、お客さんが商品を見ながら話している間に俺はモカに後ろから小声で話かける。

「あの感じは商品選ぶのに時間もかかるし、もう帰つて良いぞ」

「……えーと、でも——」

「皆が待つてるんだろ？ モカの大切な場所はここじゃなくて、Afterglowなんだから」

俺がそう言うと、モカは目を見開いて暫くしてからゆっくりと頷いた。

「それじゃ、アレだ。……ここは俺に任せて先に行け」

「あはは。それ、しよーくん死んじやうよ」

「馬鹿野郎。最近は逆に生き残るフラグなんだよ。てかコンビニのバイトで死んでたま

るか」

俺がそう言うと、モカは微笑んで休憩室に入っていく。

それで良いんだ。あの場所にいるモカは一番輝いていて、俺はそんな彼女が――

「――あたしの大切な場所、か」

――見ていたいのだから。

羽沢珈琲店にて

青葉モカはよく食べる。

それはもう、その身体のどこに入っていくんだと思う程に物理法則を無視して食べ物が腹の中に吸い込まれていくのだ。

普通そんなに食べたら太ると思うんだよね。しかも、食べているのはパンである。炭水化物だ。

「一生パンを食べ続けたい人生であった……」

「そんな人生で良いのか」

いや幸せかもしれないけども。

日曜日のバイト終わり。午後三時にモカと同時に上がって、俺達は少し遅めの昼ご飯を食べている。

バイト先のコンビニで賞味期限切れ間近のパンを自腹で買うというのは、別に勤め先の儲けが云々というよりそのまま破棄されるのが勿体ないと思ってしまう気持ちの方

が大きい。

「さて、帰るか」

今日は早めの上がり、これ以上働く事はない。

心の何処かで、まだ少しここに居たいなんて思ってしまったのはアレだ。——心まで社畜になつて居るのかもしれない。

「しよーくんつてさー、この後暇だつたりするー?」

「俺を誰だと思つてる。勿論、暇だ」

「格好付けて言う事じゃないよねー」

だって本当に趣味がないんだもん。もはや働く事が趣味になつて来てるからね。将来は立派な社畜になると思う。

ただ、モカにこの後暇か聞かれたというのが少しだけ嬉しかった。

もしかしたら何処かに遊びに行こうとか誘われるかもしれないなんて、そんな事を期待してしまう。

「それじゃー、丁度良かった。……山田よお、この後一杯どうだあい?」

目を細めて口の前で手をクイッと捻るその動作は、完全に夜飲み屋に行くおっさんのそれだった。

「おい未成年」

「勿論ノンアルコールのお店だよー？」

なんだノンアルコールのお店つて。ノンアルコールビールつて奴ですか。そんな物で全国のおっさんは満足できるんですか。

そんな訳で、俺はモカにノンアルコールの飲み屋に連れて行かれる事に。唐突過ぎて頭が追いつかないが、そんな事はいつもの事である。

連れて来られたのは商店街の一角。

辺りに見えるのはパン屋や精肉店、とこやさんやクリーニング屋さんがあるような場所。飲み屋があるようには見えない。

勿論本当に飲み屋に連れて行かれても俺は困るのだが、モカが何を考えているのか分からなかった。

いや、分かった事の方が少ないのだが。

「ご到着〜」

とあるお店の前で彼女は止まって、両手を向けながらそう言う。

お洒落な雰囲気のお店は珈琲店で、丁度おやつ時だからかお客さんで賑わっていた。

いや確かに飲み物を売る店だけど。飲み屋ではないね。いや間違っていないのかもしれないけど。

「……羽沢珈琲店、か」

羽沢ってどこかで聞いた事があるような気がする。なんだったかな。

「説明して下さい青葉先輩」

「ここはワシのお気に入りのお飲み屋なんじゃよー」

キャラ変わってんぞ。

「珈琲店だけどな」

「へい、大将ー。やってるー?」

そんな事を言いながら入店、すると出迎えてくれたのは茶髪でショートカットの女の子だった。

「あ、モカちゃんおはよう! 巴ちゃんはあっちの方で待ってるよ。後ろにいるのは

……山田君？」

エプロン姿のその女の子は、モカに親しげに挨拶をして俺達を店に招いてくれる。そうだ、何処かで聞いた事があると思ったら羽沢って——

「羽沢つぐみちゃん……」

——Afterglowのキーボード担当、羽沢つぐみちゃんの苗字だったんだ。つまり、おそらくここは彼女の両親とかが経営する珈琲店という事。

多分Afterglowの皆の溜まり場にもなっているんだろう。

つぐみちゃんが一瞬視線を送った先には、赤い髪を伸ばした女の子が座っていた。

「直ぐに飲み物持つて行くから座っててね！」

そう言うのと、彼女は別の客の所に注文を確認しに行く。

せかせかと動くその姿はとても頑張っているように見えて、見ているとなんだか元気付けられた。

「へーい、トモちゃん、奇遇だねー？」

「いや、昨日約束してただろ？ 翔太はその顔だと、何も知らずに連れて来られたって感

じか」

前日からここに集まる約束をしていたのだろう。

モ力が来た事に対して驚く事もなく、逆に俺を見ると何やら不敵に笑いながら巴は机を小さく叩いた。

そこに座れという事だろう。

机には既に少しだけ飲んであるジュースが一本置いてあつて、俺達が座つてから直ぐにつぐみちゃんやんがジュースを三つ持つてやつて来た。

エプロンは外されていて、花柄の可愛い服がとても似合っている。こんな妹が欲しい。

「お母さんがね、もう上がつても良いよつて言つてくれたんだ。このジュースはサービスだから、遠慮しないで大丈夫だよ！」

幼馴染の巴やモ力はともかく、俺までサービスしてもらつて良いのだろうか。

そもそも何のために連れてこられたのかすら分からないし、後で臓器を売れとか言われるんだらうか。

「大丈夫、取つて食いやしないよ」

心の中を読まれてるんじゃないだろうか。

席は四人分なので、巴の正面にモカが座って俺がその隣。俺の正面で巴の隣につぐみちゃんが座る事になる。

なんだか孤独というか気恥ずかしさというか、一人だけ浮いてる気がするが大丈夫なんだろうか。

「翔太が来てくれたのは結構頼りになるな。アタシ達だけじゃ限界があるし」

「うん、そうだね。モカちゃん、山田君を連れて来てくれてありがとう！ 山田君も、来てくれてありがとうね」

笑顔が眩しいのは大変宜しいし、喜んでくれたのは嬉しいんだけども。

——俺、何しに来たか分かってないからね。

「ま、翔太は何しに来たか分かってないみたいだけどなあ」

「え」

つぐみちゃんは、不敵に笑いながらそう言う巴とボケーつとジュースを飲むモカの二人を見比べながら目を見開いていた。

なんというかももう本当にごめんなさいとしか言えません。

「も、モカちゃん……?」

「そういえば、理由を言ってませんでしたな……。忘れていた」

忘れてたのかよ!!

「そういう事なので、説明して頂けると嬉しいでございますね」

詫びれもなくジュースを飲むモカに呆れながら、俺は目の前の二人に事情を聞く事に。

幼馴染達の間でも、モカは変わらないらしい。

「え、えつとね……その……」

ただ、つぐみちゃんは少し顔を赤くして人差し指同士を突き出す。何その可愛い動作。

恥ずかしかつてるといふ事はアレだろうか——男関係。

こんなに可愛い女の子を世の男子が放つて置く訳がないし、彼氏が居たっておかしくない。

そして俺が居ると頼りになるという事は、答えはかなり絞られていた。

——ズバリ、彼氏へのなんらかのプレゼントの相談だな！

いや、俺名探偵になれるんじゃない？

「つぐのお父さんがもう少して誕生日なんだよ」

「え、お父さん」

お父さんって、おとうさんっていう人名じゃなくてファザー的なお父さん？

「つぐもさつきみたいなのに、もう手伝いじゃなくてバイトしてお金貰ってるし。ちゃんとしたプレゼントを用意したいんだってさ。でも、何を渡したら良いか分からなくて、こうしてアタシ達に相談したいって事なんだよ」

そう説明してくれた巴は、恥ずかしがるつぐみちゃんの頭をガシガシと強く撫でる。その姿がもうなんかお父さんだが、それは置いておいて。

「いやー、つぐは今日もツグってるねー」

「ツグってるってなんだ……」

「ツグってるはツグってるだよー。……動詞？」

「動詞?!」

父親に誕生日プレゼントなんて、なんて良い子なんだつぐみちゃん。いやマジで妹に欲しいわ。

「優しいんだな、つぐみちゃんは」

「そ、そんな事ないよ！ でも、いつも頑張ってくれてるお父さんに何かお礼がしたいなってずっと思ってたんだよね」

「む、胸が苦しい……」

「え、山田君……？」

何この天使。

一方で俺は父親の事をパチンカス呼ばわりし、父親が趣味で稼いだ金で飯に行く始末。

恥ずかしくなってくるわ。そういうや、初給料でギター買ったせいで両親に渡した物が肉まん一個だった俺。最低かな？

「それで、プレゼントに何を渡したら良いか。男の俺がいると参考になるって感じか」「そういう事ー。いやー、モカちゃんの素晴らしい采配だねー」

説明されてなかったけどな。

「それじゃ、早速だけどアタシから提案するな。……ズバリ、豚骨醤油ラーメンを二人で食べに行つて奢るなんてどうだ！」

巴は自信満々にそう言った。どうしてそんな考えに至つたのか教えて欲しい。

「ら、ラーメンで良いのかな……？」

これには流石につぐみちゃんも困り顔である。

「ちつつちつちートモちん。考えが甘いよー。そこはやっぱりパンを食べに行つて奢るが一番だよ」

「いや、ラーメンの方がつぐのお父さんは喜ぶに決まつてる」

俺はつぐみちゃんの父親を知つてる訳じゃないから、そこはなんとも言えない。

「パンの方が美味しく食べられるよー？」

「いや、ラーメンの方が美味しく食べられる」

「お前ら自分の好物の話してるだけだな?!」

脱線してるぞ。

「そもそも、せっかく貰うものなら形に残る物にするべきだろう」

「巨大パンの人形とかー？」

「ラーメンの食品サンプル？」

「お前ら飯の事しか考えてないな?！」

そんなもん貰って喜ぶ奴はあまりいないんじゃないかな。特に食品サンプルなんてどうしたら良いんだ。

「流石しよーくん、的確なツツコミ」

「真面目に考えてんのかお前ら」

「アタシは超真面目だぞ」

巴が若干モカに近いつて事が分かって俺はシヨックだよ。

「形に残る物……。アクセサリーとかかな？」

つぐみちゃんは女の子だなあ……。

隣にいる飯の事しか考えてない二人にも見習って欲しい。

「それも良いかもしれないが……。アレだ、アクセサリーとかより普段から使う物の方が嬉しいんじゃないかな。時計とか、財布とか」

財布で少し恥ずかしい事を思い出すが、それは今は置いておいて。

その手の普段から使う物なら、子供からのプレゼントを毎日見たり使ったりする事になるし嬉しいんじゃないだろうか。

喫茶店を経営したりして、接客業をしてるなら腕時計とかがあると便利かなとも思った。これは俺の考えだが。

「時計、良いかも。お父さん喜んでくれるかな?」

「俺だったら泣いて喜ぶね」

試しにこんな妹が居て、妹からいつも頑張ってるお兄ちゃんになんてプレゼントを貰う妄想をしてみる。

普通に涙出て来たね。不毛な妄想過ぎて。なんで一人っ子なんだよ俺は。

「あ、あれ? 山田君泣いてる……?」

「すまん、目に珈琲の豆が」

頭を抑えながら言うが、自分でも何言ってるのか分からなかった。俺にボケの才能はないらしい。

「……とにかく、俺は時計に大賛成だ」

「モカちゃんは断然巨大なパンがいいと思うけどな」

巨大なパンの人形が巨大なパンになってるぞ。

「分かった、モカの誕生日には巨大なパンを買ってやるから今は口出しするな」

「それ、モカちゃん的には超エモいんですけど」

良いのかそれで。

「あつはは。凄い、山田君が居てくれたおかげで簡単に決まっちゃったね！」

「モカと巴が普通に人選ミスなだけだと思うけど、男子と女子じゃ考え方が違うつてもあるかもな」

これって逆もまたしかりで、男子が女子にプレゼントをするのも考え方の違いで難しかったりするんだよな。

俺なんかゲーセンの景品をプレゼントしてるし。いや、本人に喜んでもらえるかが重要な訳だけど。

「おい翔太、それはどういう意味だ？」

「モカちゃんのパーペキな助言が聞こえてなかったようだね」

「二人共乙女過ぎて男心が分かってないって事だ」

そんな事は微塵ともないのだが、女を怒らせそうになったらとりあえず褒めておけとお父様に言われているので実行する。

「そ、そ、そうかあ？」

「いやー、モカちゃんの美少女オーラが漏れ出してしまってるんだねー」

言い付けを守ったら争いを回避出来ました。ありがとうお父様。初めて感謝した気がする。

「おいモカ、髪に水滴付いてるぞ……。多分ジュースだけど、どうやって飲んだらそうなるんだ」

「えー、取ってー」

「ふふっ、山田君ってなんだか凄いね！」

唐突に、つぐみちゃんはそんな事を言った。

「凄いって……」

正直、なぜそんな事を言われたのか分からない。

ただ純粹に人を尊敬するような眼差しが飛んで来る。

でも、俺はそんなに凄い人間じゃない。

もつと言えば彼女達 After glow を俺は尊敬してるんだ。

一見控えめそうな彼女だって、ステージでは格好良くキーボードを弾いている。俺はそんな彼女達を見て凄いつて思う事しか出来ない。

「今日はありがとう、山田君！」

——ただ、こんな俺でも誰かの役に立てたのはなんだか嬉しかった。

「部下の手柄は上司の手柄だから、つまりこれはモカちゃんの手柄なのでわー？ 山田、良くやった」

「待って、お前はただの先輩だからね？ 青葉先輩」

「あつはは、モカちゃんもありがとうね！」

「コイツなんかしたかな?！」

「巴ちゃんも！」

「アタシはあんまり役にたつてないかもしれないけど、つぐの悩みが解決したのが嬉しいよ」

なんやかんや悪口言ってしまったが、やっぱり巴は姉御肌で格好良いと思う。

そんな事言い合える友人関係ってそんなになんじやないかな。

ここに居る三人だけじゃなくて、Afterglowの五人がとても仲良しっていうのがここ数日で分かった気がした。

その後少し話してから、俺達は羽沢珈琲店を後にする。
丁度夕暮れ時。まだ多少だけど時間はあるな。

「ちよつと俺、シヨツピングモール行つてくるわ。二人は遅くなる前に帰れよー」
キョトンとする二人だが、顔を見合わせると同時に不敵に笑った。多分考えてる事がバレてるのだろう。

「付き合うぜ」

「モカちゃんの神采配を再び見せる時が来たようだねー」

「……。……よーし、ラーメンとパンを奢ってやる!!」

いやあ、良い友人を持ったよね。



「へい、お父様お母様。今日も元気かい」

「どうしたんだ突然」

「私達が育児放置し過ぎて構って欲しいのよ、きつと」
んな訳ないだろ張り倒すぞ。

「その呼び方は止めてくれ」

「んじゃ、パチンカスと課金厨」

「なんで我が子はこんなに極端なの。誰が育てたの」
あんたらだよ。

「その、なんだ」

ただ、つぐみちゃんに少し気付かされたのだ。ぶつちやけ初給料で両親に渡した物が冷めた肉まんって最低だよなって。

そんな訳で。

「いつもありがとうございます、と。少し遅れましたが感謝の気持ちです」

働くって大変だって知ったし、そうしながら俺を育ててくれた両親に感謝くらいして良いと思った。

そんな、些細な話である。

学生の本分は遊ぶ事である

学生の本分は勉強である——

「んな訳ないけどな」

——と、思ってる学生は多分ほとんどいないだろうが。

実際学生がしなくてはいけないのは、お金を稼ぐ事よりは学ぶ事だ。

テスト期間。

学生が多数働く我がバイト先では完全にシフトから外れるような事は出来ないが、それでもかなり少なめのシフトで組んで貰える。

社畜だがブラック企業ではないのだ。この考えは危険な気がするが気にしないでおこう。

バイトも少なくなったのでとにかく遊んでやろうかとも思ったのだが、一応近々テストを控えている学生だ。

ある程度勉強してから遊ぼう。幸い、成績は悪くない方である。中の上くらいの成績はある筈だ。

苦手な英語アメリカ語以外は適当に教科書でも読み直しておけば良いとして。

アメリカ語をどうするかだな。てか英語ってなんだよ。俺は一生日本から出ないからそんな物習う必要なんて皆無だと思っただよな。

アイドントスピークイングリッシュとだけ言っておけば世の中何とかかなると思う。完全にダメ人間だ。

さて、閑話休題。

そんな訳なので久し振りに休日を手に入れた俺は、少しだけ勉強でもしてからゲームでもしながらゴロゴロしよう和本日の予定を立てる。

しかし朝からそんなにやる気を出して勉強をする訳がなく、ゴロゴロ漫画を読んでいたら時刻は昼。流石に勉強しようとベッドから離れた所で携帯にメッセージが届いた。

『ジョーくん』

短文。

『暇?』

「暇っす」

即答で返す。

勉強? 何それ? 中華料理か何かですか?

せつかくの休日に勉強なんてしてられるか。遊びに誘われたら遊ぶに決まってるよね。

何が学生の本分は勉強だ、だ。遊べる時に遊ぶのが学生なんだよ。きっとモカも同じ気持ちの筈である。

学生の本分は遊ぶ事だ!!

『一緒に勉強しよー』

「畜生!!」

——学生の本分は勉強である。



昼飯だけを家で済ました俺は、勉強の為の参考書だとかノートの入った鞆を持って羽沢珈琲店に。

そこには既にAfterglowのメンバーが全員揃っていて、隅の方にあるテーブルでノートや参考書を開いていた。

モカと数人だと思っていたのに、まさか全員揃っているとは。女の子五人に混ざる勇気がないです。

帰りたい。

よし、帰るか。

「お、翔太！ 遅いじゃんかー、待ってたのに」

巴に見つかった。

「ぶ、ヒーローは遅れてやってくるんだよ」

こういう時、何故か自分を守ろうとして痛い発言をしちゃう事があるよね。大体倍くらい恥ずかしい目に合うんだけど。

「……モカが二人になった」

ふざけ過ぎて蘭にモカと同類扱いされたんだけど。辛い。

「えー、モカちゃんもつとクールに登場するよー?」

「クールって、どんな?」

ひまりちゃんの問い掛けに、モカは「ふっふっふー。見せてあげよう」と立ち上がり俺の隣まで歩いてくる。

そして彼女はどこか気品のある立ち振る舞いで――

「ふ、ヒーローは遅れてやってくるんだよ」

――格好付けながら一言一句同じ言葉を吐いた。

「同じじゃん!」

「えー、違うよひーちゃん。分かんないかなー? つぐは分かるよね?」

無茶振りだよ!! つぐみちゃん可愛そうだからやめなさい!!

「え、えーと――ニュアンスが違うよね……っ!」

優しい!! つぐみちゃん優しい!!

「バカやってないで早く座れよー」

何故か俺もモカと同類扱いされたが、おかげで自然に混ざる事に成功する。

それは良かったんだが、なんで俺呼ばれたんですかね。

特に頭が良い訳でもなく教え方が上手い訳でもない。彼女達とは仲良くさせて貰ってるが、漫画のモブキャラみたいなの俺が呼ばれる理由が思い当たらない。

そもそも学校が違うので、テスト範囲がズレていたりする可能性もあるのだが。

「で、俺が呼ばれた理由はなんでしようかね……」

そんな訳で、率直に聞いてみる事にした。

初めて羽沢珈琲店に来た時はつくみちゃんの父親へのプレゼント選びのアドバイスだったっけ。

「勉強の後にお——」

「遊びの前にお勉強だよー、ひーちゃん」

遊び……？

「いやさ、同じ教科でも学校や先生によつて教え方が違うから。それを見比べたりした

ら理解が深まるんじゃないかって……つぐが」

そう説明してくれる巴の隣で、つぐみちゃんは照れ臭そうに俯く。可愛い。

「ひまりちゃんが困ってて、でも私達だけじゃ同じ教え方しか出来ないって気付いたんだよね。だから山田君……お願い！」

そんな上目遣いで言われたら頑張るしかないじゃないか……。

「……オーケー、アメリカ語以外なら任せろ」

「アメリカ語……？」

気にしないでくれ。

「てか、他の学校の友人は居ないのか？」

「しょーくんが一番暇そうだったしー？」

そうだよ暇だったよ畜生。

そんな訳で、お勉強会に参加。教えるのが得意という訳ではないが、特に下手という訳でもないの力で力にはなれた筈だ。

逆もまた然りで、俺も苦手な所を皆に教えて貰う事に。つぐみちゃんのノートは綺麗過ぎてそれを教科書にしたいレベルですよ。

意外——ではなかったのだが。というか、予想通りというか。

モ力は頭が良かったです。

授業中結構寝ているらしいが、それでもテストとかはいつも高得点らしい。いつどんな勉強をしてるんだ。

というかモ力が勉強をしている姿が思い浮かばない。今だってブーツとしてるか、ひまりちゃんを弄ってるかのどっちかだし。

「大体こんなもんかー」

背中を伸ばしながら、突然巴がそう言う。

時計を見てみると時刻は午後五時を回って居た。雑談を交えながらだったけど、我ながらとても勉強したと思う。

これはいつもより好成绩が取れるのではないだろうか、内心自信に満ち溢れながら俺は帰宅の準備をし始めた。

カバンを背負って立ち上がる。

成り行きとはいえ、五人の邪魔をするのも悪いしな。

「何してんの？ 山田」

そんな俺を見て、蘭はきよんとした顔でそう聞いてきた。

いや、帰ろうとしてるだけなんですけど。

「鞆なら置いて行つて良いよ山田君。邪魔になるでしょ？」

そして突然つぐみちゃんがそんな事を言う。

「え？」

ちよ、ちよつと待つてくれ。え、何これ。カツアゲ？ 帰るなら鞆は置いていきな、的な？ 参考書とノートしか入ってないけど!!

ていうかつぐみちゃん、そんな笑顔で人の鞆を奪おうとするような女の子だったの?! ショックで口が開かないよ!!

「何してるの翔太君？ 早く鞆置いて行こうよー!」

ひまりちゃんはそう言いながら、俺の鞆を奪ってきた。

つぐみちゃんもひまりちゃんも笑顔で、それが怖くて逆に抵抗出来ない。

え、何？ どこに行くの？ どこに連れて行かれるの?! 小便漏らしそうなくらい怖
いんだけど!!

「山田？」

「ははーん……まさかモカ、また何も説明してないな？」

首を横に傾ける蘭の隣で、巴が俺とモカを見比べる。

どういう事だつてばよ……。

「……せ、説明しろ」

「えー、モカちゃん説明したと思うけどなー」

人差し指を口に向けて、天井を見上げるモカ。

携帯を確認するが、連絡アプリに來ているメッセージは『しょーくん』『暇?』『一緒に勉強しよう』の三つだけだ。

「あ」

途端にモカは思い出したように声を上げて、携帯を取り出してボタンを四回ほど押す。

すると、俺の携帯にメッセージが届いた。

『終わったら商店街のお祭りねー』

どう考えても今の動作では打てない文章が届く。

「貴様まさか……」

「いやー、送信ボタンを押すのを忘れてたみたいだねー」

「俺凄く怖かったんだけどおお!!」

モカの肩を揺らして抗議するも、モカは視線を逸らして知らん振り。

つぐみちゃんやひまりちゃんは笑っているが、俺はその笑顔に漏らしそうになってたんだからね?!

「ってな訳で、祭り行こうと思うんだ。モカは聞かなかったみたいだけど、アタシ達と一緒に行かないか?」

「それは、是非とも行こうって話だが。……今度からモカの連絡は監視しといてくれると助かる」

「モカちゃんは悪気があった訳じゃないのにー。かなしみー。えーんえーん」
くっそ下手くそな泣き真似はやめろ。

そんな訳で俺達は荷物を置いて羽沢珈琲店を出る。商店街は普段より少し盛り上が

りを見せていた。

なんでもお祭りというか商店街を上げたセールみたいなのをやっているらしい。少ないが出店も出て回っている。

それで、出店や特定の店で買い物をすると思値段に応じて福引券が貰えるっていう良くある感じのイベントだ。

福引とかティッシュしか当たった事ないので、あまり期待しない。一等はハワイ旅行だつてよ。豪華だな。期待しない。

「いやー、屋台って普段より美味しく感じるよねー」

そして俺の横には、両手に唐揚げ棒とフランクフルトとりんご飴と綿菓子を持ったモカが歩いている。

その組み合わせを同時に食べる人初めて見たんだけど。

「私は何食べようかなー」

「あんまり食べると太っちゃうよー、ひーちゃん」

「その姿で言っても全然説得力ないけどな?!」

なんでモカが太らないか、むしろ不思議だよ。

「金魚掬いがあるよ！ 可愛いなあ」

「よし、アタシに任せとけ！」

「モカちゃんも負けないよー」

「俺は昔（ご）近所さんに金魚山田と呼ばれていたんだぜ！」

ところでつぐみちゃんが見つけた金魚掬いに、巴とモカと俺で参加する事に。つぐみちゃんに格好良い所を見せるしかない。

最初は巴の番。中々上手いのだが、二回目で網が破れてしまった。

意外だが、モカは一回目で失敗。これ相当網が弱い奴かもしれない。

最後は俺の番。

モカすら失敗したという事で、慎重に獲物を見定める。

大量にいる金魚達の中から、出来るだけ水面に近くて小さくて動きの遅い奴を観察。

「——コイツだ！」

斜めに入れて、淵を使って掬い上げた。

見事に網に乗った金魚を皿に乗せる。後ろで歓声が上がるのが気持ちいい。

どうだ見たか金魚山田の実力を。別に格好良くないし、普段なんの役にも立たない特技だけだな!!

ただ、俺も三回目で網が破れてしまった。まあ、こんなもんだらう。

「……二匹しか取れなかった」

「それでも凄いよ!」

人に褒められるって嬉しいですね……。

「持ち帰るか? 要らないなら返すけど」

「可哀想だから返してあげようかな……?」

なら、返してやるか。人間の娯楽に付き合わせてごめん。強く生きろよ!。

「……ジ」

金魚を店の人に返そうとすると、モカはそれをじっくり見つめていた。

「なんだ? 欲しいのか?」

モカって魚とか育てる趣味あるのか?

「……美味しそう」

「ダメーっ！」

モカの爆弾発言につぐみちゃんも思わず声を上げる。

金魚が可哀想なので、直ぐに返してやった。

さつきあれだけ食べてたのになんでそんなに食欲があるんですか。

買い食いもそうだが、こういう出店も数人でワイワイやっていると楽しくて時間は一瞬だ。

日も落ちて来た夕暮れ時。そろそろ帰宅ムードになって来た所で、蘭が足を止める。

「福引きって……なんだ」

そしてさも興味なさそうな声でそう言った彼女の視線は、ハワイ旅行に釘付けだった。素直じゃない。

「丁度福引券は六枚だし、一人ずつ引いてみようぜ」

そんな蘭に向けて笑顔で福引券を六枚見せる巴。当の蘭は「皆が引くなら」とやっぱり素直じゃない。

ただ、その視線は一等のハワイ旅行に向けられていた。五名様招待と書いてあるしA

fterglowの皆で行きたいんだらう。

「それじゃ、このモカちゃんが蘭の為に一肌脱ぎますかー」

「いや、別にあたしは……」

意味もなく袖を捲りながら、モカは福引券をスタッフの人に手渡した。

舌で唇を舐めてから肩を回して、手回しの抽選器を勢い良く回す。

小さな玉を一個だしてその玉の色で景品が決まる、お馴染みのガラガラだ。ハワイ旅行 一等は言わずもがな金色である。

「いけー！ モカーー！」

ハワイ旅行なんて実際当たる訳ないが、ひまりちゃんの応援と同時にモカはガラガラを止め——黄色い玉が出て来た。

同時にスタッフが手に持ったベルを大きく鳴らす。

う、嘘だろ?! 本当に当てたあ?!

「おめでとうございます！ 五等の山吹ベーカーパン五つまで無料券です!!」

金色じゃなくて黄色だった。とても紛らわしい。

残念と肩を落とすひまりちゃんの隣で、蘭はとても悔しそうに俯く。なんか、こう惜

しいと余計に辛いよね。

そんな彼女達の態度とは裏腹に、モカは大喜びしていた。パン、好きだもんな……。

「やったね、モカちゃん。次は私がやってみるよ……っ！」

両手を胸の前で握りながら、つぐみちゃんは福引券を握りしめてスタツフに渡す。

福引きとかはあんまり意気込むと後で虚しいのだけど、たまには良いのかもしれない。

「いけー！ つぐー！」

ひまりちゃんの応援と同時に、ガラガラから赤い玉が出て来る。

「おめでとーございます!! 四等の高級ハムセットでーす!!」

景品が上がったあ?!

「う、うえ?!」

「凄いやーん、流石つぐー」

つぐみちゃんもモカも景品出すとか、ちよつと帰りが怖くなつて来た。

ほら、運を使い果たしたって思ったりするだろう。少なくとも俺はそんな幸運が続く

とは思わないタイプだ。

「これは流れ来てるかもな。いける……いけるぞ！」

ただ、彼女達は違うようで。巴がやる気になつて隣でひまりちゃんが腕を組んで前に出る。

次はひまりちゃんが引くようだ。

「頑張れアタシ達のリーダー！」

え、ひまりちゃんがリーダーだったの？

「ひーちゃーん、期待を裏切らないでねー」

「任せててっ！」

やる気満々でガラガラを回すひまりちゃん。ガラガラから出たのは——白色の玉。
「残念。残念賞のティッシュだよ」

ティッシュを受け取って、ひまりちゃんはカクカクとした動きで戻ってくる。

とても申し訳なさそうな表情をする彼女は「ごめーん……っ」と蘭に泣き付いた。

世の中そんなもんである。

「いやー、期待を裏切りませんな」

「もーっ。モカー！」

「あはは。まあ、そんなもんだよな。次はアタシか」

そう言う巴もティツシユを当てて、内心一番意気込んでいた蘭もティツシユを当てた。世の中世知辛い。

さて、俺もティツシユを貰って帰るとするかねえ。

「翔太、あとは任せた」

巴はそう言いながら、俺に福引券を渡して来る。

いや、無理ですって。俺にそんな期待されても、ここでそんな運を使ったら明日死ぬ気がするし。

ただ、あまりにも蘭が不憫だし。明日頭に鳥の糞が落ちて来るくらいの不幸が起きても良いから、一等当たらないかなあ……くらいの気持ちで引いてみるか。

あまり期待せず、ガラガラをゆつくりと回した。

金色じゃなきや意味がない。そして、普通に出て来たのはどう見間違えても金色じゃないです。ちよつと光つてるけど、白——

「おお、おめでとうございませす!! 二等の六名様某遊園地タダ券でございます!!」

残念、一等じゃな——何? 二等?!

遊園地タダ券?!

「え、嘘……山田……?」

「やったよ翔太君!! やったやった——!」

「す、凄いよ山田君!」

「ま、まじか翔太……っ」

ちよ、ちよつと待つて。普段ここはハワイ当てて皆に感謝されるシーンじゃないの?!

「いやー、しよーくん。……もつてるなあ」

「ドユコト……」

ただ一つ分かる事があるとすれば——

「皆で遊園地だねー」

——明日俺の頭には鳥の糞が落ちて来るだろうという事だけだった。

長い一日の始まり

こんな話がある。

辛いつらの字に一本線を引けば幸しあわせになると。

とても素敵な美談じゃないか。惚れ惚れするね。

ようするに、逆も然りで幸せから一本引くだけで辛いになってしまうのだ。

何が言いたいかというと、世の中幸せも辛いも変わらないというか。

基本的には半々で、良い事ばかりが起きる訳じゃないという事である。

たとえテストが上手く行っても、その日に鳥の糞が頭に降ってきたら気分は最低だ。プラマイゼロどころじゃない。むしろマイナスである。

「……不幸だ」

これからもっと不幸な事が起きるかと思うと、なんだか恐怖で震えてきたよ。

ただ――

『しょーくん』

短文。

『今度の遊園地の日程だけど』

――ただ、この程度の不幸ならどんと来い。

そのくらい俺は、今幸せだ。楽しい。

「女の子と遊園地だああああ!!」

「鳥の糞を頭に付けながら何騒いでるんだ……」

友人にドン引きされるも関係ない。

俺はこのリア充イベントを全力で楽しむ。その為なら鳥の糞くらいなんぼのもん
じゃい。

「うんこくらいで俺の幸せから一本引けると思うなよ!」

「おい翔太、足元見ろ」

友人の声と同時に嫌な感触がして、足元を見る。

……誰だよ、犬のうんこそのまま放置した奴。

「お前、週末にはうんこに突っ込むかもな？」

「……嫌だ」

流石に限度があると思うよ。



快晴だ。

登り始める太陽を、高速道路を走るバスの窓から眺める。雲も少ないお出かけ日和に、今日までの不幸がどこかに消し飛びそうだ。

鳥にうんこを投げられたのも、いぬのうんこを踏んだのも、うんこした後のトイレに携帯電話を落としたのもこの日の幸運と引き換えと思えばなんの苦でもない。

いや、酷すぎるだろ。あんまりだよ。これ以上はないほど不幸だよ。てかなんで全部うんこなんだよ。

俺はなんかうんこに恨まれる事でもしたのだろうか。うんこの親を殺した覚えはない。うんこの親って何。自分か！

閑話休題。

不幸の連続を乗り越えて、俺は今日 After glowの面々と遊園地に向かっている。

女の子五人と遊園地だ。それはもう楽しいに決まってるし、全力で楽しむしかないだろう。

これまでの不幸も今日の為と思えば我慢できた。

「おー、あのジェットコースター凄いなー」

後ろに座っていたモカは、窓の外に映る長いレールを見てにやけ顔でそう呟く。隣でそれを見て震えているひまりちゃんをからかっているに違いない。

俺の横には巴が座っていて、前には蘭とつぐみちゃんが座っていた。

商店街の福引きで当てた遊園地のタダ券。

俺は最初 Afterglowの五人で行って来たらと皆に手渡そうとしたのだが、五人はせっかくだからと俺も誘ってくれたのである。

巴やひまりは姉妹がいるみたいだし、誰かしら仲のいい友達を誘っても良い筈なのに俺を誘ってくれたのはとても嬉しかった。

社交辞令かもしれないけど。

いや、ほら、当てちゃったのが俺だから、連れて行かないのは申し訳ないな。

そう考えると悲しくなるが、ここはポジティブに行こう。

そんな訳で、テスト期間も終わりバイトもリサさんに代わってもらった俺達はこうして遊園地に赴く事になったのであった。

「着いたー！」

バスが止まると、ひまりちゃんが両手を挙げて満面の笑みで声を上げる。他の人も居るんだからやめなさい。

順番にバスから出ると、遊園地の出入り口は目の前で既に入場が始まっていた。

この辺りじゃそこそこ大きな遊園地で、アトラクションも一日じゃ回りきれない程に豊富である。

最後のバスの時間が二十一時なので、それまで目一杯遊ぶつもりだ。

観覧車で夕焼けとか見れたら、彼女達には良い思い出になると思う。

「入場者の方にポイントカードを差し上げます。一回来る毎に一ポイント、十ポイント貯めると入場料がタダになりますよ」

遊園地の受付に向かい、福引で手に入れたタダ券で入場するとスタッフの人が紙で出来たポイントカードを手渡してきた。

なんともお得なポイントカードだが、あいにくそんなに遊園地に来るような人間でもない。皆も同じようで、少し微妙な反応をしている。

「……ポイントカードっ」

しかし、モカだけは別のようで。スタッフさんが手渡してくれたポイントに珍しく眼を輝かせていた。

そして彼女は財布を取り出して、笑顔でポイントカードをその財布にしまう。

「ふっふっふー、モカちゃんのポイントカードコレクションが増えてしまったのだー」

「モカちゃん、新しい財布買ったんだね」

「ポイントカードがちゃんと整理出来る、ちよーエモい財布なんだよー」

「本当だ。凄いね！」

俺がゲーセンで取った財布を自慢げにつぐみちゃんに見せびらかすモカ。

機能的には確かに良い財布ではあるが、物はゲーセンの景品だ。そんなに自慢しているものではない。

「しよーくんに貰ったんだー」

「そうなの？」

やめて!! ゲーセンで取った奴だから!! 恥ずかしいから!!

「ま、まあ……アレだ。大切にしてくれよな」

「もちー」

恥ずかしいけど、喜んで使ってくれてるならなによりだよ。

「よーし、今日を楽しむためにアレやつとくー?」

一番テンションの高いひまりちゃんが皆の前に出て、唐突にそんな事を言った。アレ

?

「えい、えい、おー！」

……。

……。

……。

「よし、さっそく入場しようぜ」

まさかのスルー。

「なんでええ?!」

「いや、こんな人が居る所でやる訳ないじゃん」

蘭の冷静なツツコミに肩を落とすひまりちゃん。

そんな彼女をつぐみちゃんが励ましながら、俺達は遊園地の出入り口に向かう。

「なんとというかひまりちゃん、ドンマイ。あと、靴紐ほどけてるぞ」

「うう……ありがとう翔太君。翔太君だけでも一緒にやらない?」

「ごめん、やらない」

「もー…」

それはAfterglowの皆でやってくれ。

商店街の粋な福引きで貰った景品のおかげで、入場料はタダ。

別に俺はそこまでお金に困っている訳ではないが、やっぱりお得なのは嬉しいのだ。

それに、タダ券がなかったら来ようという話にもならなかったしな。

「さーて、どれから回る?」

「コーヒーカップでお昼寝しよー」

ひまりちゃんの問題掛けに、モカは直ぐにそう答える。

コーヒーカップは俺達の目の前にかけて、思わず二度見したね。

本気で言ってるのか、目の前にあったから適当に答えたのか。やっぱりモカはどこか掴めない。

「いや来て早々かよ」

モカらしいチョイスではあるけども。

「私も、コーヒーカップは久し振りに乗ってみたいな」

意外にもモカに乗ってきたのは、つぐみちゃんだった。

実家が珈琲店だとコーヒーカップも違う目で見られるのかもしれない。

「おっけー、それじゃコーヒーカップにしよっか」

「バスから降りたばかりだし、疲れを取る為にもゆっくり楽しむアトラクションの方が良いと思うんだよね！」

コーヒーカップは馬鹿みたいに早く回して楽しむものだと思っていたけれど、これは野郎の考えか。

ああ……女の子と遊園地に来たんだなって、再確認するよね。

「それじゃー、あたしはつぐと乗るねー」

どうせならと、コーヒーカップは二人ずつ乗る事に。

必然的にAfterglowの誰かと俺が乗る事になるのだが、モカが別の人と乗ってしまうとやっぱり気難しいな。

「よっし、どれだけ早く回せるか対決だな」

おっと、俺以外にも一人だけ野郎の考え方してる奴がいたよ?!

「翔太、アタシ達と勝負だ。ひまり、一緒に——」

「私は蘭と乗るね！」

巴は俺に宣戦布告しながらひまりちゃんを誘うが、ひまりちゃんは蘭の手を掴んで先に行ってしまう。

不服そうに「なんだよー」と口を尖らせる巴。

どうも皆はゆっくりと遊びたいらしい。

「ま、なんだ。勝負は出来ないけど俺とどれだけ早く回せるか試してみようぜ」

「そうこなくっちゃ。それじゃ、アタシは翔太とだな！」

そういう訳でチーム分けはつぐみちゃんとモカ、ひまりちゃんと蘭、巴と俺に。

コーヒーカップに乗る前に俺の肩を叩いたモカは、まるで戦場に息子を送り出す母親のような顔で「無事に帰って来るんだよー」と泣く振りをしていた。

どういう事だつてばよ。

やろうとしてる事は野郎の考える事だが。

女の子とコーヒーカップに座るってなんかほら、デートみたいで少し緊張する。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、巴はコーヒーカップを回すパイプを子供のような笑顔で眺めていた。楽しそうで何より。

巴も本気だし、この際だから俺も全力で回してみようじゃないか。

軽快な音楽が流れ、コーヒーカップが動き出す。

不規則に回るカップの上で、そのカップを手動で回すのがこのコーヒーカップというアトラクションだ。

モカ達のはのんびりと景色を楽しむようにカップを回しているが、俺達は開幕から綱引きでもするようにパイプを引っ張りカップを高速で回転させていく。

遠心力が身体をカップの外に放り投げようとする程に、コーヒーカップは物凄い速度で回り始めた。景色が瞬時に入れ替わっていく。もはや景色というか残像だ。

「早っ?! やべっ、うはっ」

これ楽しい。ここまで来るともはや小さなジェットコースターである。

スリルのある絶叫系は苦手だが、コーヒーカップくらいなら問題ない。もはやギリギリのラインで絶叫系な気もするが。

「あつははつ、楽しいなあ！ よっしや、もっと行くぜ！」

「え」

ちよつと待って、もう限界でしょ。これ以上は遠心力で身体が吹っ飛ぶよ。カップが壊れるよ。

てかこれ以上早く回せるの?!

「ソイソイソイソイソイ……ッ！」

謎の掛け声と共に、俺の乗るコーヒーカップは更に高速で回転し始めた。

なぜかコーヒーカップで浮遊感を感じる。

三半規管は一瞬でやられ、もはや自分が座っているのかすら分からない。

高速で入れ替わる景色は線になって、浮遊感も増し、自分が何処にいるかすら分からなくなつた。

「待って待って?! 怖い怖い怖い!!」

「ソイソイソイソイソイ……ッ！」

俺の制止の声は聞こえず、コーヒーカップは時間制限まで高速で回転し続ける。

俺はただ、カップにしがみ付いて吹き飛ばされないようにする事しか出来なかった。

少しずつゆっくりになっていくカップの上で、自分がちゃんと座っていることを確認して自分が無事に生還出来た事への感謝で涙が出て来たよ。

……開幕死ぬかと思ったんだけど。しかもコーヒーカップで。

「う、うお……お、ひい……」

「なんだよ翔太、情けないぞ?」

いやなんで回してた本人は平気なんだよ。

「だ、大丈夫山田君?!」

「多分……」

つぐみちゃんが優しく背中をさすってくれる。やべえ、なんか出て来そうだ。流石にダメ。

「巴、無茶苦茶やり過ぎ」

「結構手加減したつもりだったんだけどなー」

苦笑いの蘭に巴は腕を回しながらそう答える。アレで手加減していただと？ お前、途中からコーヒーカップが音立ててたからね。アレ以上早く回したら壊れるわ。

「しよーくん、無事？」

「どつちかという和无事じゃない。トラウマ植え付けられたわ。なんでコーヒーカップには安全装置が付いてないんだ」

「コーヒーカップに安全装置は誰も考えないと思うよー？」
ですよねー。

いや、でも、安全装置がない分コーヒーカップは他のアトラクションより危険だと思うんだ。

今日最大の恐怖体験をしたと思う。

—— 答だった。

コーヒーカップを堪能した俺達は、まだ昼飯には早いともう少しアトラクションを回る事に。

巴の目に留まったのは、高さ百メートルを椅子に座ったまま垂直落下するというマゾイアトラクション——俗に言うスカイフォールである。

「これは……怖そうだな」

遊園地なんて絶叫系がほとんどだから、そろそろ心の用意をした方がいい。

この後ジェットコースターとかも待っていると考えるなら、この選択は妥当だ。

そもそも、あのコーヒーカップより怖いアトラクションなんてそうないだろう。

そんな訳で俺達は数分並んでスカイフォールへ。

丁度良く六人が横に並べる椅子のアトラクションだったので、俺達は適当に椅子を選んで座った。

順番的には右からひまりちゃん、巴、つくみちゃん、モカ、俺、蘭である。

俺が一番端に座ろうとしたのだが、蘭に取られた。どういう事だつてばよ。

全員で安全レバーを下げてスタッフの人が安全を確認すると、俺達の座った椅子はゆっくり上昇していく。

このゆっくり登っていくのがまた怖くて、少しずつ小さくなる地上にこれから落ちていくと思うと表情も引き攣るつてもんだ。

蘭の表情が真つ青なのが見えて、色々察したよね。皆に見られないように俺を挟んだなお前。

「ねーねー、こんな話知ってるー？」

登っている間、皆が現実逃避に勤しんでいるとモカがのんびりとした声で誰に言うでもなく問い掛ける。

怖いもの知らずかよ。

「このスカイフォールって、地面に着く前にちゃんと速度が落ちるようになってるんだけどねー。偶に、そのままの速度で地面に落下するんだってー」

「なんで今そんな怖い話するの?! バカなの?!」

それ事故じゃない!! 偶にでもそんな事あつてたまるか!!

「嫌あああ!! 私まだ死にたくないよおお!!」

「お、お、お、落ち着いてひまりちゃん! 大丈夫だよ!!」

「あ、アタシ達が付いてるぞひまり!!」

一緒に落ちるんだけどね!!

「もう無理……嫌だ……帰りたい……」

蘭が泣いてるんだけど!! 俺何もしないのに凄い罪悪感感じるんだけど何コレ!!

「お、おいおいやめろよモカ」

「それともう一つ」

まだ何かあるの?!

「その偶に、の条件なんだけどね」

なんで平然とゲームの小ネタみたいな話にしようとしてるの?!

「一番上に着いた時にガタンって音がしてー」

「今ガタンって音した!! い、今本当にガタンって!!」

「嫌ああああ!! 助けて巴えええええ!!」

蘭とひまりちゃんのSAN値が大変な事になってるからもうやめてあげて!! ていうかやめて!!!

「突然落ち——」

「」「」「嫌ああああああああ!!!」「」「」

絶叫と共に、俺達は落下した。

一瞬のようでとても長くも感じる時間、浮遊感と共にほぼ全員が悲鳴を上げる。流れ落ちる涙よりも早く、俺達は地面に吸い込まれていった。

もしそのままの速度で地面に叩きつけられたら、椅子ごと木っ端微塵である。

—— 勿論、そんな事になる訳がないのだが。

「うわあああああああ……あああ?！」

突然強い重力を感じたかと思えば落下速度が急に遅くなり、しかし地面に叩きつけられた訳でもなく、ゆっくりと地面に近付いた。

どうやらそのまま地面に叩きつけられるなんて事はなかったらしい。いや、そんな事があつたら困るが。

「……た、助かった」

「みたいだな。大丈夫か、蘭」

「……べ、別に? 全然、怖くなかったけど」

嘘こけ。

「あつははー、怖かったねー」

いや誰のせいだよ。お前のせいで数十倍怖かったよ。命の危機を感じたよ。

「モカ、さっきの嘘だな……?」

「大正解。皆に楽しんで貰おうと思ったモカちゃんなのジョークだよ」

いや、普通に怖かったのでやめて下さい。

「モカ……っ。次変な嘘吐いたら叩くから……っ!」

「めんごめんごー。もうしませーん」

涙目で蘭が本気で怒ってるので、モカなりに反省してるのか彼女は素直に謝る。

全然反省している色が見えないが、モカはこうやって謝る時はちゃんと謝るのだ。

「だ、大丈夫? ひまりちゃん……。ひまりちゃん……。ひまりちゃん?!」

それで、逆の端っこからひまりちゃんを心配する声が聞こえてくる。

何があつたのかと覗き込んでみると、ひまりちゃんは形容し難い表情でピクリとも動かない状態になっていた。

「き、気絶してる……」

「モカ、やり過ぎ」

「これはちよつと……本気でやり過ぎたねー。ごめんよー、ひーちゃん。天国であたし達を見守っててねー、およよー」

「——死んでないからああ!! うええん、怖かったよおお!!」

まさか二つ目のアトラクションで気絶者が出てくる羽目になるなんて。

いや、本当に楽しい『長い』一日になりそうだよ。

メリーゴーカート？

遊園地には様々なアトラクションがあるのだが、このアトラクション以上に絶叫と無縁のアトラクションはそうないだろう。

激しく揺れる馬に跨り円内を駆けると語れば本来恐怖しかないが、こらはアトラクションであり本物の馬に跨る訳ではない。

回転する床に備え付けられたのは、回転に連動して上下するだけのただの馬の形のものだ。

俗に言う回転木馬。通称——メリーゴーランドである。

「これ！ 私これ乗る！」

メリーゴーランドを見付けてそう声を上げるのは、いかにも乙女という感じのひまわりちゃんだった。

もはや絶叫は懲り懲りといった感じである。休憩したいってのもあるか。コーヒーカップとスカイフォールに乗っただけなだけだな……。

「あたしは良い……」

何が恥ずかしいのか、蘭はメリーゴーランドから目を背けて自分は乗らないと手を振る。

その思春期特有の感情が分からないではない。俺も流石に、男としてこれに乗る勇氣はない。

「お、俺もパスで」

「これはアレかなー、皆パスでひーちゃん一人で乗って来る奴？」

「そんなーっ。酷いよモカー！」

「冗談ですよー。さーさー、ひまり姫、モカ王子の手を取って下さいな。素敵な騎乗の旅にお連れするよー？」

「モカ……うう、ぐすん。ありがとう」

モカはメリーゴーランド側に立って、片膝立ちでひまりちゃんの手を取った。そういうのは巴の方が似合う気がする。

「らーんー、恥ずかしがらないで皆で乗ろうよー。赤信号も皆で渡れば怖くない、つて言

うしきー」

それ使い所間違つてると思うよ。

「いや、だつて、恥ずかしいし……」

「大丈夫だよ蘭ちゃん！ 私も一緒に乗るから！」

「そういう問題じゃなくない……？ あー、分かった。乗るつて……」

つぐみちゃんに純粹な瞳を向けられて完全敗北した蘭とニヤケ顔のモカは、チラツと俺に視線を向けてきた。

あー、はいはい。乗りますよ。

「よーしそれじゃ、皆で乗るか」

いつのまにかスタッフの方に話を付けていた巴が笑顔で皆を案内する。

巴は大人っぽい所あるから、恥ずかしがると思っていたけどそんな事はないんだな。というか、皆で遊ぶ時間を大切にしてるつて事か。

やつぱり、Afterglowつて良いな。

時間も時間だからか、メリーゴーランドは貸切状態だ。

それぞれ好きな馬を選ぶ事になるのだが、別にどれにしても変わらんだろう。

「よし、君の名前は今日からジョンソン・マッケンジーだよ」

何故か木馬の頭を摩りながら、モカがメリーゴーランドの馬に名前を付け始めた。どういう事だつてばよ。

「ひーちゃんの馬は？」

モカは振り向いて、後ろの馬に乗っていたひまりちゃんにそう話しかける。

いや、全員が全員馬に名前を付ける訳ないだろ。

「え?! 私の馬? えーと……プリティ!」

乙女か。てか名前付けるんか。

「それじゃ、この子はプーチンだね!」

つぐみちゃんが悪乗りした!!

「ふっふっふー、それでは競馬レースを始めます」

「え」

「負けた人は買った人の言う事を何でも聞く、ねー?」

モカがそう言うと同時にメリーゴーランドが動き出す。

「えーと、競馬?」

「え、ええ?! ま、負けないよ!」

啞然としたまま馬に揺られるつぐみちゃんの隣で、ひまりちゃんは謎のやる気を出して低姿勢で馬にしつかりと座った。

待て、落ち着け。

「さー、走り出した馬達。前に出たのはジョンソン・マッケンジーだ」

「が、頑張つてプリーティ! 負けないで!」

いや、落ち着けて。

前述した通り、メリーゴーランドは回転する床に『固定』された木馬が上下するだけのアトラクションである。

木馬は誰が何をしようが何を言おうが固定された床に沿って動くだけの為、何が起きても目の前の馬を抜く事はあり得ないのだ。

突然勝負を言い渡されて、その事に気付かないひまりちゃんはアトラクションが終わるまで必死に木馬^{プリティ}を応援する。

つぐみちゃんはそれを呆然と眺め、モカはニヤケ顔で勝ち誇ったような表情をしていた。

勝敗の起因を強いて言うなら、選んだ木馬の位置である。

「負けたーっつ。ぶ、プリティは悪くないのつ。私がちやんとしなかったから……」

「ひーちゃん、ナイスファイトだったよー」

「も、モカーっ」

なんで友情芽生えてんの。

「負けは負けだけどねー」

「モカーっ!!」

ひまりちゃんつてコロコロ表情が変わるな。

「あの二人何してんの……?」

「競馬、かな」

説明のしようがないよ。

その後、事の真実に気が付いたひまりちゃんがモカを追いかけ回したのはまた別の話。



昼飯前に何か後一つアトラクションに乗ろうという事で、俺達がたどり着いたのはゴーカートというアトラクションだった。

名前で想像出来る通り、車に乗って道を走るだけのアトラクションなのだが。

この遊園地のゴーカートはなんと対戦形式である。

二人ずつでカートに乗って、合計三台の車が同時にスタート。

コースを一周して最初にゴールした人が勝ち。ルールは単純だ。

一応入賞者には申し訳程度の缶バッチが配られる。

男の子ってこういうの好きなんでしょ？

うん、大好き。

「今度はちゃんと勝負で勝つからね、モカ！　巴、頑張ろ！」

「よっしゃ、任せろ」

「よーし。えい、えい、おー！」

「モカは翔太と組むのか？　お互い頑張ろうな」

見事なえいえいおースルーだ。

「モカは俺で良いのか？」

「モカシヨ一の力を見せる時が来たようだよ、しよーくん」

そのコンビ名、確かモカちゃんのシヨ一であつて俺関係ないよな。

「打倒、ひーちゃんとトモちゃん」

巴強そうだなあ……。

「私達はゆつくりドライブしよつか」

「そうだね」

そんな訳でチーム分けが決定。

ひまりちゃんと巴チーム、俺とモカチーム、つぐみちゃんと蘭チームでゴーカートで

挑戦する事に。

アトラクションの肝であるカートは二人乗り。

前後に座り、後ろに座った人がなんとペダルを漕いで動力になる——自転車である。形は車だが。

そして必然的に、前に座った人がハンドルを握る。これは役割分担が重要って訳か。

「まあ、男の俺が漕げば間違いはないだろう……。巴に勝てるかは別として」

コーヒークップでは遅れを取ったからな。まあ、ドラム叩いてるから腕の筋力は相当なものって訳だ。

だが足ならまだ勝てる筈。ていうか勝てないと俺のプライドがスタボロになる。

案の定ひまりちゃんと巴のチームは巴が後衛漕ぐ人でひまりちゃんが前衛ハンドルを握る人だ。つぐみちゃんと蘭チームはつぐみちゃんが後衛らしい。頑張れ。

各自カートに乗り込み、目の前の赤信号が光る。これが青になると安全バーが外れてスタート出来るって訳だ。

レーシングゲームでよく聞くカウント音が流れ、信号が青になった瞬間俺は全力でペダルを漕ぐ。

「ハンドルは任せるぞモカ!!」

「ゲームで手に入れたモカちゃんのドライビングテクニクをおみせするよー」

不安になる言葉やめて?!

いや、ゲーセンのレーシングゲームでモカの腕は確認済みだ。大丈夫。

いや、あのゲーム……ドリフト機能あつたか。

「言っとくけどドリフトなんて出来ないからな?!」

「え」

「うわあ?!」

カーブ手前で、当然ペダルが重くなる。こいつ思いつきりブレーキ踏みやがった!!

「行くぜひまり!! ソイソイソイソイソイ!!」

「待って!! 待って巴!! 早い!! 早過ぎ!! 嫌ああああ!!」

一方でひまりちゃんは、あまりの早さにハンドルを切る事が出来ずに壁に衝突する。何してんだ。

「しょーくん、この車故障してない？」

「ゲームじゃねーんだよ……」

「えー、リアル的車もドリフトして走る物じゃないのー？ モカちゃんの将来の夢がー」

「お前は一生車の免許を取るな」

車の運転はゲームで覚えたって話、怖いよね。

どうしてもドリフトしたがるモカと、ハンドルを切れないひまりちゃんはある意味互角で。

それはもうよく分からない白熱した勝負を繰り広げる。

巴は暴走し、俺は苦笑いを浮かべ。

ひまりちゃんは悲鳴をあげて、モカはそんなひまりを見て笑いながら。俺達はほぼ同着でゴール。

い、一位はどっちだ。

無駄に疲れて息を荒げながら、俺達は向かって来たスタッフさんを凝視する。

「優勝は、この二人です。おめでとうございます!」

スタッフの人が缶バッチを渡したのは――

「やったね蘭ちゃん!」

「えーと、うん。やったね?」

――つぐみちゃんと蘭だった。

「ズゴーツ」

どうやら俺達がバカをやっている間に普通にドライブしてゴールしていたようである。

満面の笑みで喜ぶつぐみちゃんが眩しい。蘭は少し苦笑いで俺達を見ていた。

やめろ。そんな目で見ろな。



時間の頃合いも良いので、俺達は少し早いが昼食を取る事に。

それにしたって遊園地とかそういう場所の中にある食事場って高いよな。場所代つてのものもあるんだろうが。

「買い食いを始めようとするモカをなんとか止めて、食券で頼むタイプの広々としたお店に入る。」

意外と沢山の料理があるらしく、俺は無難にカツカレーにしておいた。

「巴お前……ここに来てラーメンだど。」

「モカちゃんスペシャルセット〜」

モカがお盆に乗せて来たのは、大きなバーガー二つとポテトフライにチキンとジュース。

「アメリカンな本格的バーガーはとても食欲が湧くが、どう考えても女子が食べる量じゃない。」

「お前の給料つて殆ど食費に行ってるんじゃない……」

「その為のポイントカードだよしょーくん。この財布が目に入らぬか〜」
紋所みたいに財布出されてもなんの威厳もないよ。

高級ブランドとかならともかく、ゲーセンの景品だからな!!

「その財布お気に入りなんだね、モカちゃん」

「この財布はちよーエモいからねー。二度と手に入らないと思うし、モカちゃんの家宝みたいな?」

やめて!! 恥ずかしいからやめて!!

「いやー、遊園地は楽しいな。次は何に乗る?」

そう言う巴は、ラーメンを勢い良く啜る。隣ではひまりちゃんは綺麗なパスタを写真に収めていて、SNSに投稿していた。

全くもって対照的な景色が横に並んでいるのは、見ていて面白い。

「食事の後だから、あまり激しくないアトラクションが良いよね」

「コーヒーカップとか?」

アレは激しいアトラクションです。

「ウォータースライダーなんてどうだ?」

巴は激しくないのラインが低過ぎだ。

「私はなんでも良いけど……」

「らーんー、今なんでも良いって言ったね？ 怖いのも、大丈夫ー？」

ニヤケ顔でそう言ったモカは、蘭に詰め寄って口角を上げる。

「べ、別に。絶叫系なんて怖くなんかないし」

さつきスカイフオールで真っ青だったよな。

「ふっふっふー、それじゃーねー、このモカちゃんがあまり激しくない絶叫系にご招待するよー」

それがどんな場所かも告げずに、食事を食べ終えた俺達の先頭を歩くモカ。

途中食べたばかりなのに買い食いをして寄り道をしながら俺達が辿り着いたのは――

「え、ちよ、嫌なんだけど」

「えー、蘭怖くなんかないって言ってたのにー？」

「お化けは違うくない?！」

――お化け屋敷だった。

「わ、わ、わ、わ、私止めところかなあ?！」

「だ、大丈夫だってひまり。これは作り物だから」

「お化けはもうたくさんだよお……っ」

ひまりちゃん、何故かガチ泣き。

お化け屋敷。

建物内に作られた迷路を進んでいくアトラクションなのだが、その途中途中にはお化けを連想させる仕掛けが仕組まれている。

スピードや激しい動きではなく、恐怖心で楽しむ絶叫系アトラクションだ。確かに激しくはない。

吊り橋効果というのがあるが、カップルにも人気のアトラクションでもある。

きやー怖いー、を女の子にしてもらって男は優越感に浸るのだ。

「や、やっぱり二人ずつに別れて行くのかな……っ?」

そしてつぐみちゃんにそう言われて、俺はその事を意識してしまう。

誰と行く事になるんだ……?」

「え、行く事確定なの?!」

「せっかく遊園地に来たんだよー? 大丈夫、ひーちゃんにはあたしが付いてるから」

「うう……絶対に勝手に先に行ったりしないよね?！」

モ力は楽しみたいからか、一番怖がっているひまりの手を取って歩き出した。少し、残念だと思ったのはなんでだろう。

多分ひまりちゃんとは俺が行きたかったからだな!

「……。……それじゃ、アタシは蘭と行くのかな」

そんな二人を見てから、少し考えて巴は陰で震えている蘭の肩を叩いてそう言った。それだけでビクツツと跳ね上がった蘭は「い、良いけど?」と半分泣き顔で前に進む。

と、なると……俺の相手は——

「よ、よろしくね! 山田君!」

——つぐみちゃん!!

俺がA f t e r g l o wの中で一番守ってあげたいと思う女の子だ。

ふ、ふふ……これは楽しいお化け屋敷になりそうだぜ。

「お、おう。頑張ろう」

いや、何を頑張るんだよ。

「うん！ 頑張ろうね！」

何を頑張るんだろう。

「このお化け屋敷、イージーモードとエキスパートモードがあるんだってー。ひーちゃんはやっぱリエキスパートモード？」

「そんな訳ないじゃん！ イージーで良いよ！」

なんでハードじゃなくてエキスパートなのはきっておき、レベルが極端過ぎると思んだが。

皆お化けが苦手なのか、イージーモードを進むらしい。エキスパートはお預けだ。

まず最初にモカとひまりちゃんが入って、その後に巴と蘭が向かって行く。

今更ながら緊張してきた。つぐみちゃんとお化け屋敷……。ちゃんと男を見せないとな。

「ど、ドキドキするね！」

「お、お、お、おう。だ、大丈夫だ」

全然大丈夫じゃない人だよこれ。

「四人は無事にゴールにたどり着けるかな？」

このお化け屋敷は謎を解きながら奥に進んで行くタイプのお化け屋敷で、入り口はイージーとエキスパートで二つ、何処かで合流するのか出口は一つしかない。あと、何処かで階段でも登るのか見た目だけなのか二階建てらしい。

左からイージーの入り口、出口、エキスパートの入り口と並ぶ扉の奥は不気味に薄暗く入る前から緊張してしまう。

頑張れよ山田翔太。男を見せる時だ。

「ひまりちゃんのあの様子だと、最悪戻——」

「嫌あああああああ!!!」

突如何人分かの絶叫が聞こえる。嘘だろイージーモードだぞ。

その声に驚いて俺達も「うわあ?!」と声を出して、その数秒後に蘭と巴が入り口から出て来た。リタイアかな。

「あ、蘭ちゃん巴ちゃんどう——」

「無理無理無理無理。なんか居た……っ。なんか居た……っ」

涙目で巴の腕に抱き着きながら、蘭は首を横に大きく振る。

普段格好付けてるけどやっぱり女の子なんだなあ……。

ところで、お化け屋敷だからなんか居るのは当たり前だと思うぞ。

「アレは怖かったな。ひまり大丈夫かな？」

「嫌ああああああ!!!」

巴が心配して入り口を覗き込むと、なぜか別の扉からひまりちゃんが飛び出して来た。巴が心配して入り口を覗き込むと、なぜか別の扉からひまりちゃんが飛び出して来た。

見間違いでなければ、エキスパートの入り口の扉から出て来たんだけど。どういう進み方をしたらそうなったの。

「ひまりちゃん?!」

「つぐううう、助けてええっ!」

大泣きでつぐみちゃんに助けを求めるひまりちゃん。かなり怖かったのか、全く会話

にならない状態である。

そういえば――

「……モカは？」

――ひまりちゃんと一緒に入ったモカの姿が見当たらない。

俺が聞くと、ひまりちゃんは途切れ途切れの声で「モカが……モカがあ……」とお化け屋敷を指差した。

ま、まさか本物の幽霊でも出て襲われたんじゃないだろうな……。

「モカ……っ?! た、助けないと……」

ひまりちゃんの言葉を聞いて、蘭は震える身体に鞭打ってお化け屋敷の入り口に向かうとする。

やっぱり皆の事が大切なんだな。身体中震えているのに、目はしっかりとお化け屋敷を見ているのが印象的だった。

しかし何があったんだろう……。普通に怖い。

「ら、蘭ちゃん！ 大丈夫だよ！ モカちゃんは私達が探して来るから！」
そんな蘭の前に出て、つぐみちゃんはハッキリとそう言った。なんて頑張り屋なんだろう。惚れ惚れするね。

——いや、ちよつと待て。私達って……俺も？

「山田君、モカちゃんを探しに行こう！」

「……お、おー?! おー!!」

こうして俺達のお化け屋敷探索が始まったのである。

「つぐみ、頼んだよ……」

「気を付けろよー」

「ううう……モカああ……モカああ」

いやモカに何があつたんだよ。

ところでここで一つだけ語って置きたい事があるのだが——

「行こう！」

「お、おー……」

——俺はお化けが大の苦手なんだ。

羽沢つぐみとツグってみる

そもそもの話、幽霊なんてものは存在しない。

魂なんて物理的に証明出来ないし、目に見えないだの触れないだのそんな事が起きる訳がないのだ。ていうか存在していたら困る。

では、なぜ人は幽霊を怖がるのか。

実証が出来ないからだ。

目にも見えないし触る事も出来ない。いないと思っけていても、もし本当に居たとしたら？

五感で感じ取れない存在はまず対処が出来ない。襲われても反撃出来ないし、逃げようとしても何処へ逃げればいいのか分からない。

何をされるのかも分からないし、どんな姿をしているのかも分からない。よしんば見えちやいけないものが見えてしまったとして、常識を逸脱したその存在に恐怖を覚える事しか出来ないだろう。

そんな訳で、俺は幽霊が苦手だ。

スタッフさんに案内され、俺とつぐみちゃんはイージーモードの入り口へ。近くで見
た感じ、二階建てらしい。

薄暗い室内は数メートル先がもう見えない程で、この時点で俺の身体はプルプルと震
えている。

しつかりしなさい山田翔太。つぐみちゃんの前だぞ！

「い、行こうか……」

「そ、そうだね。モカちゃんの事も探さないと……っ」

お互いに震えながら、とりあえず奥に進むとスタッフさんが後ろで扉を閉めた。
少しだけ暗くなって寒気が増す。

——ヤバイ、もう帰りたい。

いやいやいやいや、男を見せろ！

「と、とりあえず俺が前を歩くよ。大丈夫、付いて来てくれ」

そうやって歩き出すと、足元に水溜りがあつてそれを踏んだ嫌な音が響いた。

ば、馬鹿め！ その程度で驚くと思うなよ。いや、心臓止まったかと思つたけど。

マジで何踏んだかと思つたわ。血とかだつたら悲鳴あげてたよ畜生。

「や、や、や、や、山田君……ま、ま、前！」

足元を見て水溜りを確認していると、後ろにいたつぐみちゃんが震えた声で話し掛けてくる。

水溜りを見るために下を確認していたので前を見ていなかったから、何が起きているのか分からない。

ただ嫌な予感だけがして、俺はゆっくりと首を持ちあげた。そこにあつたのは――

「びええええええええ!!!! 首いいいい!!!! ぴゃああああああ!!!! モカあああああ

?!」（俺の悲鳴）

――首だけしか視界に入らないほど首が長い女の子。俗に言うろくろつ首である。

眼前でくねくねと動くソレを見て、俺は腰を抜かしてその場に倒れ込んだ。

なぜって、そのろくろつ首はなぜか灰色の短髪で何処となくモカっぽいイメージが見られる。

もしかしてモカがろくろつ首になってしまったのではと、俺は恐怖と悲しみでそれは

もう漏らしそうになっていた。

「や、山田君?! ど、ど、どうしよう……っ?!」

そんな俺を見てさらに不安になってしまったのか、つぐみちゃんは震えた声で前後に視線を揺らす。

逃げたい気持ちと、モカを助けたい気持ちで揺れているのかもしれない。

俺は今すぐにでも逃げたいが、いかんせん腰が抜けて立つ事も出来ない状態になっていた。

ああ……これ死んだかも。俺もろくろっ首にされてしまう。

眼前の短髪ろくろっ首は、薄暗いこの場所でも分かるように口角を釣り上げて「キヒツ」と奇妙な笑い声を上げた。漏らしそうなんだけど。

ただ、ろくろっ首は何もせずにとただ薄気味悪い声を出しながら暗闇の奥に消えていく。

よく考えれば、これはお化け屋敷。全ては作り物だ。

たまたま。たまたまモカに似たお化けがいただけ。

ひまりちゃんのおしき声の理由も、今なら何となく分かるが——これは作り物。作り物。

「だ、大丈夫？ 翔太君」

「お、オーケーオーケー。何の問題もない。至って大丈夫だ。先を急ごう。手でも——
—あ、いや、やっぱりなんでもないです」

手でも繋ごうと言おうとしたのだが、チキンが発動してその先が言えない。

男の子っていうのはな！ デリケートなんだよ!! 慣れてないからそういうの!!
俺だけ?! うそお?!

「あ、見て山田君。扉が二つあるよ?」

少しだけ前に進むと、行き止まりというか扉が二つある小部屋のような場所にたどり着く。

その前にはメモのような看板が立っていた。

「えーと、本当に必要な物を選んで前に進むべし……?」

「扉にも文字が書いてあるな。……『おかし』と『おふだ』ねえ」

多分扉を開けるとそのどちらかが貰えるのだろう。

「どういう事なんだろう?」

「お札があると、襲つて来る幽霊を退散させる事が出来るつて書いてあるな」

辺りを見渡すと、壁にそんなメモが貼つてあつた。

なるほど、お札の意味は分かつたぞ。しかしおかしつてなんだろう。お菓子?

「本当だ、そんな所にヒントが。凄いね山田君!」

「たまたま目に入っただけだよ。……しかし、まあ。一つ問題があるな」

俺がそう言うと、つぐみちゃんは不思議そうな顔で首を横に傾けた。

普通に考えて、これはこのお化け屋敷を楽しむための仕掛けに過ぎない。イージーモードだし、怖い人はお札を取れば良いだけである。要らない人はお菓子を貰えば良いだけだ。

正直物凄く怖いし、お菓子なんか要らないからお札を取れば良い。普通にお化け屋敷を進むだけならそれで良かったのだけでも。

「つぐみちゃん、どつちを選ぶ?」

「え？ えーと、お札かな。やっぱり心強いし」

「そうだよなあ。……だけどき、モカならどっちを選ぶと思う？」

俺がそう言うと、つぐみちゃんはハツとした表情で口を抑える。

そう、俺達はただお化け屋敷を進むだけじゃダメなんだ。ひまりちゃんが置いて来てしまったモカを探さないといけない。

つまり、道が分かれていた場合はモカが進みそうな道を選ばなければならなのである。

幸いそこまで巨大な施設でもないし、扉の向こうは小さな個室にアイテムが置いてあるだけでその向こうはつながっていると思うが。

モカが個室で立ち止まっていたりしたら、そしてその逆の道を選んでしまったら、俺達はモカと入れ違いになってしまうのだ。

普通に大声で名前を呼べば良い気がしたが、他のお客さんもいるしね？

「も、モカちゃんならお菓子の方を選ぶよね……」

「……だろ？」

幸い、モカはなに考えているか分からないがむしろこういう所での行動は読みやすい。

物凄く不本意だが、このお化け屋敷で進む時はモカが進みそうな道を選ぶしかないのである。

「それじゃ、おかしの方を開けるぞ」

震える手をドアノブに向け、俺はゆっくりと慎重にその扉を開けた。

同時にカチリと隣の扉から音がする。多分、片方を開けると片方の扉の鍵が閉まる仕掛けなんじゃないかな。

試しにつぐみちゃんがもう一つのドアノブを回そうとするが、やはり扉は動かなかつた。

ところで想像通り。その奥はエレベーターくらいの大サイズの個室で、真ん中にはう〇い棒がたくさん入った箱が置いてある。

ご丁寧にお一人様一つまでなんて書いてあるが、モカはちゃんと一個だけ持って行ったのか不安だった。

「明太子味でも貰つとくか。モカは……居ないな」

「次に進もつか」

こんな小さな部屋に隠れられる訳もなく、つぐみちゃんは前に進もうと出口の扉を開こうとする。

「——あれ？」

しかし、ドアノブは鍵が掛かっているのか開かないようだった。静かな空間にガチャガチャと音だけが木霊する。

「振り向かない者のみが前に進める、だつてさ」

お菓子が置いてある机に置かれたメモを見ると、そんな事が書いてあった。

どうすれば良いのかは分かるのだが、どうも気がすすまない。

だつて個室つて怖いじゃん。絶対に何かあるじゃん。

「入り口が開いたままだから開かないって事かな？」

「そういう事だと思う。これ閉めるのは不本意だが」

何かあったら直ぐに逃げる為に開けて置いた扉だが仕方がない。

ゆつくりと入って来た扉を閉じる。すると——

「何も起こらな——嫌ああつふうう?!」

——突如鈍い音と共に床が数センチ陥没した。心臓が跳ね上がって、変な悲鳴が漏れる。

同時に薄気味悪い「ひっひひひ」なんて声みたいな音がして、俺はその場で腰を抜かして崩れ落ちた。

漏らしたかも。

「び、びっくりしたあ……。あ、でも扉が開くようになってる」

驚いた表情をしながらも、ちゃんと前に進むうとするつぐみちゃんは俺より遅しいかもしれない。

「山田君、大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。古傷が開いただけさ」

何言ってるんだ俺は。

「それって大変じゃない?! 痛いの?!」

痛いのは俺の発言です。本当に申し訳ありませんでした!!

「先に進もう。モカを探さないといけないし」

立ち上がって、俺達は狭い通路を歩いていく。

ついでにいうと、やはり出口の隣にはもう一つ扉があった。どちらを選んでも同じ道にたどり着くのだろう。

何度も左右に曲がるクネクネした道には、所々に骸骨だの妖怪の模型だのが設置されていて時折急に動くのは本当に勘弁して欲しかった。

本当は俺がすっかりしないといけないのに、つぐみちゃんが前を歩いてくれたり心配してくれたりもう散々である。

「あ、山田君。また道が二つに別れてるよ……う？」

そうして突き当たったのは、またしても扉が二つある小部屋。

「物足りないと思った人はここからエキスパートモードに移行出来ます。イージーのままで良い人は左、エキスパートモードに行きたい人は右に行きましょう……か」

さっきのように設置された看板にはそんな事が書かれていた。

いやそんな機能要らないよ。イージー選んだんだから最後までイージーでいさせろ

よ。

しかし、困ったかもしれない。

「モカちゃんならエキスパートを選ぶかな……？」

「その可能性は高いな」

お菓子と違ってこれは確定的とはいえないが、モカならエキスパートを選ぶ可能性が高い。

となるとモカに合流する為にはエキスパートに行くしかないのである。ふぎけろ。

「ど、どうしよう……」

「進むしかない……かな」

「そ、そうだね。モカちゃんを助けないと！」

自分からエキスパートを選ぶ奴を助けに行く必要はない気がしたが、このノリはもうモカを探すしかないのだ。

つぐみちゃんが息を呑みながらドアノブを掴む。

本当はこっちに進みたいなとイージーマードの扉をふと見てみると、俺はある事に気

が付いた。

「つぐみちゃんストップ。少し待ってくれ」

俺はそう言いながらしやがんで、床に落ちていた和菓子のカケラを確認する。

それをつまんでつぐみちゃんに見せると、彼女も察したのかイージューの扉を凝視した。

モカの奴、さつきのお菓子を食べながら歩いてやがるな？

その破片がイージューの扉の前に落ちていているという事は、つまりそういう事だろう。

「こつちか」

「凄い。よく気が付いたね、山田君！」

「た、偶々だよ」

本当はこつちちに行きたいだけだったなんて、口が裂けても言えないよね。

そんな訳で、俺達はイージューモードの扉を開いた。

扉の先はさつきと同じ個室で、やはり後ろの扉を閉めないと前には進めないようである。

「し、閉めても良いかな？」

「オーケー南無三。悪霊退散。まじ来るな」

「え、えい！」

勢い良く閉められる扉。

数秒間身構えたが、何も起きる気配はなかった。

「まったく、なんだよ畜生め」

怖がらせやがってと、俺は前に進む為にドアノブに手を掛ける。

つぐみちゃん「待つて」の声は俺には届かなくて、この手は止まらずにドアノブを捻り扉を開け——

——扉の先に骸骨が落ちて来た。

「アイエエエエエエアアア!!!」

「ひゃあ?!」

怖すぎて、俺は無意識につぐみちゃんに抱き付いてしまった。悲鳴で我に返った俺は

条件反射で土下座する。

やつちまた……。

「ごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい!! まじでごめんなさい!!」

「あわわ、そ、そんなに謝らないで! 私もびつくりしちやっただけだから! う、うん
!」

なんて優しいんだ。むしろ将来が心配だよ。悪い虫に捕まらないか心配だよ。

「……俺本当に良い所ないなあ。本当にごめん」

「そんな事ないよ山田君!」

どうあがいてもフォロー出来る要素はないが、それでもつぐみちゃんは真剣な声でそう言ってくれる。

でもさ、俺には本当に何か誇れる趣味もないし特技もない。ダメなんだよな、本当に。

「俺なんてどうせ……」

「私は……周りの事がちゃんと見れてるの、山田君は凄いなって思う」

俺が俯いていると、つぐみちゃんはそんな言葉を口にした。
周りの事がちゃんと見えてる？ 俺が？

「……ドユコト？」

「さつき、モカちゃんが食べてたお菓子のカケラも見つけてくれたし。遊園地に入る前、ひまりちゃんの靴紐が解けてるのも教えてくれたよね。そういうのって、普通簡単には見付けられないと思うんだ」

真剣な表情でそう言ってくれたつぐみちゃんは、俺に手を伸ばして「山田君だって凄い所あるんだよ！」と喝を入れてくれた。

その手は少し、震えている。

なんて情けない男か山田翔太よ。お化け屋敷に来てまでこんな醜態を晒してどうする気だ。

男を見せる。少しくらい格好付けても良いだろう。幸いまだ挽回のチャンスはあるんだから。

「……ありがとう、つぐみちゃん。ちよつと自信湧いた」

他人からすれば本当に下らない事かもしれないけど、俺にとってつぐみちゃんのその言葉は本当に嬉しいものだった。

「なんだ、その。……手でも繋ぎますか?」

「えーと、そうしてくれると嬉しいかな。怖いけど、頑張つてモカちゃんを探そう!」
つぐみちゃん、怖いのに俺が怖がってたせいで頑張つてたんだな……。申し訳ない。

今からは俺がしつかりしないと。そんな思いで、彼女の手を引いて歩く。
ところで自然に手を繋いで貰ったけど、これ色々と大丈夫なんですかね?

そんな事を思いながら、扉の先に進んだ矢先だった。

つぐみちゃんの手を握っているのとは違う方の手が何かに掴まれて引つ張られる。
つぐみちゃんは隣にいる訳で、それが第三者である事は確定的だった。

恐る恐る振り向く。

そこに居たのは――

「――置いてかないでえ〜」

――灰色の短髪 of 髪。

「嫌あああああああああ!!!」

思い出すのは、入り口で現れたろくろっ首だった。

6番目の——。出口にて

条件反射というものがある。

自分の意思とは関係なく、身体が勝手に動く事だ。

火傷するほど熱いものを触った時、自分を守る為に意思をすつ飛ばして身体を守る。つまり、身の危険を感じてしまったのだからこれは仕方ないのだ。

「……あつあつだねえ」

「見慣れた少女は、お互いに涙目で抱き合う俺とつぐみちゃんを見て目を細める。青葉モカ。その人だった。」

「モカあ?!」

開いた扉と壁の間に座り込んでいたモカは、その手を俺に伸ばしながらジト目で笑う。

お化け屋敷の雰囲気もあつて、これが中々怖い。仕掛けかと思つたもんね。

「わ、わあ?! ち、違うんだよモカちゃん!」

急に俺から離れて、つぐみちゃんは物凄く焦った表情で手を上下に振った。可愛い。

「どしたのー? つぐみ」

「え? あれ? えーと、何でもないよ!」

どうしたの……。

そんな事より。

「どうしてこんな所に座り込んでる訳よ。お化けかと思つたぞ」

「しょーくん酷い。……えーと、そのー? モカちゃんはひーちゃんが居ないことに気が付いて、ここで待つていたのであつたー」

こんな意味の分からない場所で待つてないで下さい。てか、ここに来るまでひまりちゃんとはぐれた事に気が付かなかつたつてどういう事だよ。

そしてなぜか鞆をこそごそしだしたと思つたら、食べかけのスナック菓子を取り出すものだからもうツツコミが追いつかない。

「はあ……とりあえず立てよ。ゴールまで行こうぜ」

モカの手を取つて、その身体を持ち上げる。少しだけ違和感を感じた。

「そ、それじゃモカちゃんも見付かったし行こっか!」

焦った様子で俺達の前を歩こうとするつぐみちゃんは、突然モカに手を掴まれて「ひゃあ?!」と声を上げる。

お化け屋敷で身内を脅かすのはやめなさい。

「……も、モカちゃん?」

「皆で居れば、怖くないよ。幸せなら手を繋ごう?」

幸せなら手を叩こうだよ。

言いながらモカはつぐみちゃんの手を取って、何故か俺の左手に重ねた。手を繋げという事でしょうか……。

そしてモカは俺の右手を握って、つぐみちゃんに微笑みかける。

当のつぐみちゃんは「モカちゃんらしいや」と笑って、俺の手を握ってくれた。

……これが両手に華か。

「モカ、鞆開いたままだぞー」

「あ、本当だ。……一体誰が。もしかして、幽霊く？」

「んな訳あるか！ お前お菓子出してただろうが。なんか落とす前にしまいなさい」

「ふふつ、山田君お父さんみたい」

無事にモカも見付かった事だし、俺達は三人で手を繋いだままお化け屋敷を前に進む。

両手が塞がっているので何か出てきても逃げれないのだが、今日くらいは格好付けて二人を守ろうじゃないか。

——握った手の震えは、少しずつ小さくなった。

「……次はなんだ」

身が凍りそうな程のお化けが並ぶ道を歩いて、俺達は行き止まりにたどり着く。

まさか引き返せなんていう訳じゃないだろうな。道を間違えた？ いや、一本道だった筈だ。

まず急になんか出て来たり変な声が聞こえるような廊下に戻るなんて論外です。

勘弁してください。格好付けて歩いて来たけどもう限界だ。というか外から見た以上には広くない？ おかしいと思うんだけど。

「ど、どうしよう……。行き止まりだね」

「戻るしかないか。またお化けさん達に会いに行けるね」

「バカ言え。もう二度とあんな所に戻ってたまるか」

しかし、現に道は行き止まりである。三方向全て壁だ。

よく見てもよく見なくても壁は壁である。仕掛けがありそうにも見えない。

目の前の看板にはこれまで通りヒントが書かれていた。

「ここはどこでしょう？」

馬鹿にしているのか。

「お化け屋敷……。だよね？」

「もしかしたら知らぬ間に冥界に来てしまったのかもね」

「ええ?!」

純粹なつぐみちゃんを怖がらせるんじゃないやありません。

「大丈夫。三人いるからなんとかなるよ」

「そ、そうかなあ……」

なんとかしたいのは山々なんですけどね。

しかし、何か引つかかるな。モ力は今なんて言ったっけか。

「知らぬ間に冥界……ねえ」

「山田君……?」

「いや、怖がらせるつもりじゃないんだけど。……なんか気になるんだよな」

何かある気がするんだよ。何処かで変な事を見落としている。

「ここはどこでしょう……。もしかして——つぐみちゃん、ゴーカートの優勝商品ちよっと貸してくれないか?」

一つだけ可能性を見つけ出して、俺はならばとつぐみちゃんにそんな事を要求した。

つぐみちゃんは首を横に傾けながらも、鞆から丸い形の缶バッチを取り出して渡してくれる。

俺はそれを来た道に立てて、倒れないように少しだけ転がした。

普通ならバランスの悪い缶バッチは倒れてしまうのが当たり前だが、缶バッチは倒れずに俺達が歩いて来た道を転がっていく。

「なるほどなあ……」

それが倒れる前に拾って、俺は看板———というかその下を見た。
思った通り何かありそうだ。

「何か分かったの？ 山田君」

「ハハ、二階なんだよ」

俺がそう言うと、つぐみちゃんとモカは目を見合わせて驚いた様子で真下に視線を送る。

このお化け屋敷に入る前、建物的には二階部分がある筈だったのだが俺達は一度も階段を上っていない。

ならあの建物の二階部分が飾りだったのかというところでもなくて。俺達が歩いて来た道が微妙に坂になっていて知らぬ間に冥界———じゃなくて二階に来ていたという事だろう。

道が妙に長いと思ったんだよ。二階部分を歩いていたら納得できるし。

そしてここが二階という事は、ゴールは下にあるという事だ。

壁にばかり気を取られていたが床を見てみると、どうもヒンジのような物が見える。

看板をドアノブのように上に持ち上げると、床が扉のように開いて階段が姿を現した。

「す、凄い！」

「いやー、モカちゃんヒントのおかげだねー」

否定出来ないからツツコメめない。

「さて、やっと出口か。もう流石に何もないだろう——なんて油断なんて絶対しないからな。絶対最後に何かあるからねこれ」

流石にここが最後の仕掛けだろうが、これまでの傾向的にこの先には絶対に何かがあるとみえる。

「俺が先に降りるから、付いて来てくれ」

警戒しながら歩いて俺の後ろにモカ、その後ろにつぐみちゃんの順番で一列になって階段を降りた。

そこまでは何もなし。下の階に降りて辺りを見渡すと、奥に扉があつてそこまで一直

線の道が繋がっている。

しかもなんか吊り橋になつてるし。辺りが暗いからどうなつてるのか分からないが、もしかして凄く揺れたりするんですかね。

どう見ても何かありそうな道です本当にありがとうございます。

ただ、ゴールは目の前。この橋を渡らないと帰れない。何がイージーなのか教えて欲しい。

「いやー、今にも腐つて落ちそうな吊り橋だねえ〜」

「余計な事言うんじゃないや。えーと何々、二人以上で渡ると落ちてきます」

モカにチョップを放つてから、俺は橋の前に立っていた看板を読む。ヒントという脅迫だ。

「ひ、一人ずつ行かないといけないって事かな?」

「流石に落ちる事はないだろうが……。そうしろというならそうするしかないか。俺が

先に行こうか？」

不本意極まりないが、少しくらい格好付けよう。

「いやー、ここはモカちゃんが一番バツターとして先陣を切ろうではないかー」

そう思ったのだが、余裕そうな表情でモカが足を前に出した。

止める暇もなく彼女は揺れる橋をスタスタと歩いて行く。

途中で呻き声のような音が聞こえ出して、モカを見守る俺達も怖くなってくる。

これよく考えたら残されてる方が怖い気がしてきた。次はつぐみちゃんに譲ろう。

——なんて考えていたその時だった。

「ひゃあ?! や、山田君!!」

「ん? なんだつぐみちゃ——うおわあああああああ!!!」

つぐみちゃんに呼ばれて振り返ると、視界に細長い円柱が映る。

くねくねと浮遊するその先には、不敵に笑う人の頭がくっ付いていた。ろくろ首。

モカはまだ橋の上。でもそんなの関係ねえ!!

「逃げろおおおおお!!」

「うわああっ」

つぐみちゃんの手を引つ張つて橋に向かう。驚いて振り向いたモカは「ええ、落ちちやうよくっ?」と呑気に首を横に傾けていた。

「モカあああ走れえええええ!!」

「ええ、そんな事言われても、橋が揺れて——」

「ひゃああっ」

つぐみちゃんが悲鳴をあげる。辺りを見渡すと、骸骨やら妖怪の類が上から下に何体も落ちていくのが見えた。

二人以上で渡ると落ちて来ますつてそう言うことね!! でも今は知らん!! 後ろから来てるから!!

「良いから走つて?! お願ひ!!」

「しよーくんはせつかちさんだな」

「お前がマイペース過ぎるだけだボケエ!!」

後ろから伸びてくる首がお前には見えてないのか!!

揺れる橋と落ちてくるお化けと追いかけて来るろくろっ首に、俺とつぐみちゃんは悲鳴を上げながら橋を渡る。

モ力が橋を渡りきると同時に、俺は二人の手を繋いで目の前の扉に走った。後ろから追いかけて来るものを確認しようと振り向くと、眼前に人の顔が映る。

「もう嫌ああああああ!!」

格好とかどうでも良いよもう!! 怖い!! お化け屋敷怖い!!

二人を連れて扉の前に。ドアノブを勢いよく回して、二人を押し込んでから自分も扉の向こうに飛び出た。

扉を閉めようと振り向くと、目の前に不敵な表情が見える。そのまま扉の向こうから出てくる気すらして、俺はその顔に当てる勢いで扉を閉めた。

同時に「またね。ひひっ」と笑い声。

「はあ……はあ……はあ……。死ぬかと思った」

怖すぎだよ。本当に作り物かよあれ。

「こ、怖かったね……。大丈夫? 山田君」

「オーケーオーケー。なんの問題もない。これは作り物だ」
作り物……だよね？

「二人ともそんなに怖かったの〜？」

「も、モカちゃんは怖くなかったの……？」

「お前……あのろくろつ首見て怖がらないってどんな心臓してるの」
しかし、俺の言葉にモカは首を横に傾ける。

「ろくろつ首……？ そんなの居たー？」

「は？」

「え？」

お前……何を言っているんだ。

「お疲れ様です。怖かったですかー？」

出て来た俺達を確認して、スタッフの人が労いの言葉を掛けてくれる。

いや、ちよつと待て。これは確認しておこうか。物凄く嫌な予感がするし、確認しない方が良いのかもしれないけれど、それはそれで怖い。

「めっちゃくちや怖かったです……。特に、最初と最後のろくろっ首が」

「えーと、ろくろっ首？ このお化け屋敷にろくろっ首はなかった気がしますが」

首を横に傾けるスタッフさんの返事を聞いて、俺とつぐみちゃんはお互いに顔を見合わせてからお化け屋敷の方を見た。

「あ、あはは」

乾いた声が漏れる。

「もしかしてー、二人共……見ちゃったのではー？」

「嫌ああああああ!!！」

モカの言葉で察してしまった俺とつぐみちゃんは、迎えに来てくれた蘭達を無視して全速力でお化け屋敷から離れるのであった。

いやもう本当。

「もう二度とお化け屋敷なんて入らない!!！」

見ちまったよ。

大切な財布を探して

楽しい時間というのは本当に一瞬である。

お化け屋敷が楽しかったのかはさておき。いや、むしろあの事は忘れたいんだけども。

アクシデントもあったが俺達は昼からも遊園地を満喫していた。

ウォーターライダーやジャイアントフリスビー等、もう悲鳴しか上がらないアトラクションに乗り続けて喉も耳も痛い。

けれど、楽しいからそれで良いのである。ひまりちゃんの絶叫はちよつと癪になるよね。

それで、そろそろジェットコースターに乗ろうという事に。

「け、結構並んでるね」

「こーう……待たされるとまた怖くなるよな」

流石のジェットコースターは人が沢山並んでいて、俺達は少しずつ進む列の後ろで話していた。

もう少ししたら夕暮れだろうか。そうなったら、観覧車とか乗りたいなって。

「いやー、待ち遠しいな。……ひーちゃんの悲鳴が」

余裕そうに鞆からお菓子を取出して食べながらそう言うモカに、ひまりちゃんは「モカの意地悪う！」と涙を浮かべる。

ひまりちゃん弄りは恒例と化してきたが、そのお菓子は何処から出て来たんだ。まさかお化け屋敷にあった奴を大量に持ってきたとかじゃないだろうな。

「それ、お化け屋敷にあったお菓子？」

「違うよー？ これはモカちゃん持参。三百円までのおやつです」
つぐみちゃんの質問にそう返すモカ。遠足か。

「お前のカバンの中はどうなってるんだ……」

「あー、あんまり見ない方が良さぞ。ていうか、見せない方がいい」
ふとした俺の疑問に、巴は忠告するようにそう言う。

気になる言い方をされるとむしろ見たくなくなるよね。見せない方がいいとは一体。

「モカちゃんの鞆はねー。夢と希望とおかしが詰まってるよー」

物理的にお菓子しか詰まってるんでないんだけど。

「あと去年のプリント？」

「掃除しろ」

女子とは思えない鞆の中身に戦慄するわ。中を見た訳じゃないが、男友達の鞆の中をを思い出した。大体そんな感じなのだろう。

そういう話をしている間に、俺達の出番がやってきた。

前から順に巴とつぐみちゃん、俺とひまりちゃん、蘭とモカ。

これは隣から絶叫が聞こえてくる奴だね。

ゆっくりと出発したコースターは、少しずつ車体を斜めにして傾斜を登っていく。

スカイフオールもそうだったが、この手のアトラクションは始まるまでの間の方が怖かったりするんだ。

もう真下を見ればそれだけで「嫌あああああああ!!!」この有様である。

「落ち着いてひまりちゃん?! まだ登ってる途中だからね?!」

「助けて翔太君!!」

いや俺にどうしろと!!

そうこう話している間に頂上に到着。後はもう四方八方、俺の口からも悲鳴が上がるだけだった。

形容し難い浮遊感と重力が交差して、目紛しく変わっていく景色は嫌でも目に焼き付いていく。

それは本当に一瞬の出来事で、しかし長かったような短かったような不思議な感覚だ。

恐怖こそ人災の最高のスパイスというが、無事にコースターが止まった時の安堵感というのは癖になるかもしれない。

前略。めちゃくちゃ怖かったです。

「さて、次はどうする?」

前方を元気に歩く巴は、振り返って皆にそう問いかけた。

若干血の気の引いている蘭とひまりちゃんは無言でベンチに座って、二人の背中をつぐみちゃんが摩っている。

そんな二人を心配しながらも笑っているモカ。どちらにせよ皆お疲れモードだ。

そろそろ締めだろう。

「少し休憩して、観覧車に行かない？ ほら、そろそろ夕焼けも見えると思うんだ！」

つぐみちゃんのそんな提案に異論を唱えるものはいなくて、近くの休憩所で俺達は日が落ち始めるのを待つ事にした。

「らーんー、ひーちゃん、大丈夫？ 飲み物飲むー？」

少しダウン気味の二人にそう言うってから、モカは返事も聞かずに近くの自動販売機まで歩いて行く。

人が怖がる所を見て楽しんでいるかと思いきや、なんやかんや大切な友達が心配らしい。彼女はそういう奴だ。

「……………あれ？」

ただ、自動販売機の正面に立って鞆を開いたモカは固まって首を横に傾ける。

そして某青狸よろしく鞆の中に手を突っ込んで中身を弄るのだが、少ししてやはり彼女は首を横に傾けた。

「どうかしたの？ モカちゃん」

不思議に思ったつぐみちゃんがモカに話しかけると、彼女は眼を何度も閉じたり開いたりしながら振り向く。

あのモカが動揺しているように見えて、何だか嫌な予感がして俺もつぐみちゃんの後続いた。

「……財布がない」

「ええ?!」

やけに淡々と落とした言葉に、つぐみちゃんは驚いて声を上げる。

聞こえていたのか後ろにいた三人も心配そうな顔で直ぐに近寄ってきた。

「お、落としたの?!」

「鞆の中はちゃんと見たのか?」

「モカの鞆汚いから、それありえるけど」

巴がモカの鞆を開いて、蘭がその中に視線を落とす。

俺も中を見て見たが、面白いくらい散らばっていて本当に秘密道具でも出てくるんじゃないかと疑う程だった。

しかし、物がなくなるにも限度がある。こんな小さな鞆に入っている筈の物が見付からない訳がないんだ。

ひっくり返して中身を全部確認しても、やはり財布は出てこない。

つまりこれは――

「落とししたか、取られたか……」

――完全に失くしたって事になる。

「ど、ど、ど、どうしよう?! 警察?! 消防車?!」

「落ち着けひまり。ここは遊園地だから、落とし物は管理センターか何処かに届けられる筈」

慌てるひまりちゃんを制して巴がそう言うと、蘭は「それじゃ、直ぐに行こう」と遊園地の地図を見て管理センターの場所を確かめた。

「(イヤ)、じゃないかな?」

つぐみちゃんが指差した地図の場所は、ここからそう離れてはいない。頼りになる幼馴染達が先導を切って管理センターに向かつていく。

しかし、当のモカは頭が付いていけないのかその場で固まっていた。

「どうした？ 早く行くぞ」

「財布……」

いつもポーっとしているが、その時のモカは本当に心ここにあらずといった感じで。

財布とかを失くした時、本当にどうしたら良いか分からなくなる気持ち分からない訳ではない。

それに遊園地を楽しんでいた状態でそれが発覚したのだから、思う所はあるのだろう。

何か話そうとしたが気の利かない俺の口から出て来たのは「いくら入っていたんだ？」だった。

もう少し気の利いた言葉は浮かんで来なかったのかね。

「四百三十二円」

「買い食いのしすぎだよ」

全然入ってないじゃないか。しかし、彼女の場合大量のポイントカードとか入ってるからな、失くした時の実際の被害額はそれ以上だろう。

「と、とりあえず付いて行こうぜ？ な？ 見付かればそれで全部解決だつて」

たらればなんて、人を元気付けるには最低レベルの事を言いながら俺は彼女の手を取って歩き出した。

見付かってくれればそれで良いのだが、そうならなかった時の事をまるで考えていない発言である。

ただ、本当に気の利いた言葉が出てこない。

真つ先に動いた幼馴染達はモカを俺に任せってくれたんだろうけれど、情けないが俺に彼女を元気付ける力はなかった。

トボトボと歩く彼女は前を見ていなくて表情が見れない。

どんな気持ちなのか。

俺も財布を失くした事がある。その時は中に五千円くらい入ってたし、お守りみたいな物も入れていたっけ。

お金よりもそつちの方がショックで、必死に探したけど結局見付からなかった。あの

時は本当に滅入っていたかな。

だから、モカの気持ち分からない訳じゃない。ポイントカードを集めるのが趣味とか、正直意味分らないけど。

彼女にとつてそれはとても大切な物の筈。何か大切な物が手元からなくなつてしまったとなれば、俺ならもう泣く。

「……………めんね」

小さな、震えた声でした。

消え入りそうな声はとてもじゃないがモカの声に聞こえない。

お前はうるさい方じゃないけど、そんなに静かな奴じゃないだろう。笑つてくれよ。そんな顔すんなよ。

「なんで謝つてんだよ。ほら、着いたぞ」

管理センターの中では蘭達がスタッフの人達に事情を説明していた。

しかし、彼女達の表情は芳しくない。……ダメか？

「どうだった……………」

「ダメ。届いてないみたい」

苦虫を噛んだような表情で蘭はそう言う。世の中そんなに上手く行かないものだが、こういう時くらい上手く回ってくれたって良いじゃないか。

いや、愚痴は後だな。この後どうするかだ。

「最後に使ったのっていつだったけ？」

「えーと……その」

ひまりちゃんの質問に対して、しかし齒切れ悪くモカは視線を左右に動かす。動揺しているのか、いつものマイペースっぷりはどこかへだった。

「ちよつとモカ、ハッキリしなよ」

「あー、うん。……ごめん」

「いや、だから——」

「はいストップ。蘭ストップ。落ち着こうぜ、な？」

モカらしくない彼女に喝を入れる蘭を巴が止める。あまりこの空気は吸いたくない。

「ご、ごめん」

「た、確かお昼ご飯の時に使ってたよね！」

「あれ？ でもジェットコースターに乗る前に何か食べてなかった？」

つぐみちゃんが思い出してから、ひまりちゃんがそんな疑問を投げかける。

そんな彼女に蘭は「アレはモカの持参だったでしょ」と言った。

と、なると失くなったのは昼飯の後か。

「手分けして、行った場所とその周り、そのスタッフさんにも話を聞いてこようか。アタシとモカはジェットコースターに行ってくるよ。三十分後くらいにここに集合か、何かあったら連絡してくれ」

そう言つて巴は、モカの手を取つてそそくさと歩き出す。

なんて行動力か。流石は姉御肌つて所だろう。

「それじゃ、あたしはつぐとウォーターライダーとかジャイアントフリスビーの所に行ってくるね」

「山田君と蘭ちゃんはお昼ご飯を食べた場所と、お化け屋敷を探してくれる？」

「分かった」

短く返事をして、蘭は俺の前を早歩きで歩き出した。

少しイラついているようにも見える。

「……蘭？」

「……あんなの、モカじゃない」

というか、拗ねてるのかな。

「その気持ちは分かる」

モカにあんな顔されたら調子狂うよな。

「モカには笑ってて欲しいから……」

不器用過ぎるだろ。

「それじゃ、なんとか財布を見つけていつものモカに戻ってもらわないとな。……しかし、あのモカがあんなに落ち込むなんてな。ポイントカード集めてそんなに大切だったのかねえ」

「……山田ってさ」

俺の前を歩いていて蘭は、突然立ち止まったかと思ったら振り向いて口を開いた。なぜか凄い眉間に皺を寄せて。

「バカなの？」

「ええ?!」

「なんで?! なんで今ここでバカ呼ばわりされた?!」

「はあ……。最悪。……行く」

「お、お、おう」

わ、訳が分からん。

「ただ、とにかくやる事は一つだ。財布を見つけて。モカにいつもの笑顔を取り戻すために。」

観覧車から見たそれは——

世の中つてのはそんなに上手くいかない。

いい事づくめだと思っていたら、突然ドン底なんてのは良くある話だ。

楽しい事だけじゃないって、そんなのは誰でも知っている。

ただ、実際に自分がそうなった時ってさ——

「こちらには届いてませんね……。もし他の場所でスタッフが見付けていれば、管理センターに運んでいると思うのですが」

「……そうですか」

——本当にどうしようもなく、やってられないんだ。

「……どうだった？」

「ダメだな。お化け屋敷のスタッフさんは拾ってないとき」

昼飯を食べた場所を見てもらっていた蘭に収穫なしを伝えると、彼女は落胆して肩を

落とす。

目に見えて落ち込んでいるのはモカもなのだが、蘭は蘭で表情にハッキリ出ている分、印象的だった。

自分の事じゃないのにな。やっぱり、皆の事が大切なのだろう。

「さてどうするか……」

しかし、どれだけ真剣に考えても物が見つからないんじや意味がない。

携帯を取り出して連絡を確認してみるが、他の二組も見付けられなかったようだ。

「とりあえず集合、かな。モカ……どうしてるだろ」

「巴が一緒なら大丈夫なんじやないか？」

皆の事をそれほど知っている訳じゃないが、あの時の巴はモカを自分から連れて行ったように見えたし。

彼女なりに何か考えがあつたんだと思う。

「そうだね。……あ、空が」

とぼとぼと歩き出す蘭は、日が沈んできた空を見上げて溜息を吐いた。

もうそろそろ夕焼けが見える筈。

それは彼女達にとって特別な事で、きつと今日で一番楽しみにしていた時間なんじゃないだろうか。

う。
それを守る事も出来なくて、結局俺はその場に居て楽しいを貰うだけだったんだと思う。

こんな情けない事があるか。

「……行こうぜ」

「……うん」

何かできないのかよ、畜生め。



作ったような笑みだった。

「せっかくだしー、皆で観覧車に乗ろうー」

観覧車前に集合した俺達の前で、モカはいつも通りみたいな表情でそう言う。

納得いかなそうな蘭の手を後ろから取って、観覧車の方に走っていくのはひまりちゃんだった。

「よーし、夕焼けを見るぞー!」

「ちよ、ひまり! 引つ張らない——ひまり?!」

「良いから良いから!」

あつという間の早業で蘭を連れ去ったひまりの後を、巴とつぐみちゃんが追いかけて行く。

この流れだと俺がモカとなんだけど。

「山田君、モカちゃんの事宜しくね!」

「翔太、後は任せた!」

「おい貴様ら」

なんで俺なの?! なんでこの状態で俺に振るの?! 俺にどうしろっていうの?!

あー、畜生め!!

こういう時くらい格好付けてみろつてか。どうしろつてんだよ。観覧車の上から財布みつけてみろつてかい。無理よ。

「どーしたの？　しょーくん」

ただ、モカは普段の調子で首を横に傾けた。

それでもやっぱり、違和感は拭えない。蘭の言葉を借りるなら、こんなのモカじゃない。

少しくらい気恥ずかしくても良い、気の利いた言葉くらい言えるだろ。

「……乗るか、観覧車」

「うん」

そろそろ夕焼けも見えるしな。

観覧車は止まらずに、人が出入り出来るほどゆっくり回っている。

だから俺とモカは巴達から少し遅れてしまった為に数台離れて乗る事になった。

スタツフさんは妙な笑顔で俺達を迎え入れてくれて、丸いゴンドラの中で俺達は向か

い合って座る。

少しずつ上がって行く高度に若干冷や汗を流しながら、これから見えてくるだろう景色はやっぱり楽しみだったり。

「トモちゃんにさー、怒られちゃったんだよねー」

困ったような表情で、彼女はそう言った。

「お、怒られた……?」

「そー。自分の気持ちはちゃんと伝えなきゃダメだぞー、って。それ、トモちゃんが言うー? って話だけどー」

なんだそれ。

「モカの気持ち……?」

「……うん。そう」

短く返事をする、モカは立ち上がってゆっくりと近付いてくる。

え、ちよつと待って顔が近い。何?! 何々?!

「……(づ)めんね」

「……はえ？」

突然の謝罪の言葉に、俺は真顔で変な声を出して固まった。

いや、ビックリしたよ。うん。凄いビックリ。ドキドキしたもんね。畜生。

「……なんで謝る訳よ」

ただ、俺は謝罪の意味が分からなくて目を細めて彼女に聞き返す。

モカは俯いてから、少しだけ間を置いて口を開いた。

「……財布、失くしちゃって」

「お前それ謝るの俺にだけじゃなくない……？ それに、確かに皆で楽しく遊んでた時に時間使っちゃったのは謝るべき事かもしれないけど。……えーと、Afterglowの皆がそんなの気にしてる訳ないだろ。皆必死になつてお前の為——」

「違うんだよ」

モカにしては少し大きな声で、俺の声は遮られる。

少しだけビックリした。

少しだけ泣いてるように見えた。

「しょーくに貰ったお財布だったから」

ゲーセンの景品——いや、関係ないのか。

人からの貰い物って、少し特別な思い入れとか出来るもんな。俺からの貰い物でそうなるのは、驚いたけど。

「せつかくしょーくに貰った財布を失くしちゃって……。もう、使えないんだと思っちゃったんだよね……。」

ゆっくりそう言う彼女の横顔を、赤い光が照らしだす。

空は真っ赤に燃えるように紅くて、どうもやっぱり俺には眩しかった。

「そういう事か。……。それで謝った訳か」

「うん」

困ったような顔で返事をした彼女は、椅子に座って再び俯いてしまう。

それはやっぱり俺の知ってる彼女の表情じゃないというか、それこそ俺の身勝手な考えだけど、彼女には笑っていて欲しいんだよ。

だから彼女の笑顔を取り戻す為なら、少しくらい恥ずかしくても格好付けようじゃな

いか。

「……ありがとな」

「……しょーくん？」

「その、なんだ。そんなに気に入ってくれてたなんて思ってたなくてさ」

「あー……いやー、そのー……」

何か言いたそうだが、知らん。今は俺のターンだ。

「俺は、皆に――モカに楽しい時間を沢山貰ってる。もしかしたら、今人生で一番楽しいかもしれないって思ってるくらいだ。いやまだ高校生だけど」

何もなかった俺が、まだ見付かかってないけど何かを全力でやってみたって。やっとそう思えたのは彼女達の――彼女のおかげである。

彼女に救われたと言っても過言じゃない。

「だからさ、またプレゼントするよ。また一緒にモカつとくる財布を探そうぜ？ ポイントカードは流石に代わりを渡せなくて申し訳ないけど……。モカが俺からのプレゼントを失くして落ち込んでるなら、その代わりくらいならまた渡すから」

それくらいしても良いくらい、俺は彼女に救われてるんだ。

「しよーくん……」

「アレだ、金なら沢山ある。社畜だから」

親指を立ててそう言うのと、モカは目を見開いて一度短く笑う。何がおかしい。

「しよーくん」

「ん？」

「格好付けるの下手だねー」

「えええええ?!」

嘘お?! マジで?! 俺凄いな格好良かったと思うのに!! いや、冷静に考えたら全然

格好良くないか!!

「挫けそう……」

その場に崩れ落ちると、しかし頭の上から笑い声がした。

「あつははー、しよーくんは面白いなあ〜」

ただ、それはいつものモカの笑い声で。

「……ほっとけよ、ははっ」

「いやいやー、ここで弄らないといつ弄るのかと、モカちゃんは思う訳だよ」
「なんとか、いつものモカを取り戻せたのかなって。」

「しよーくん」

「……ん？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

夕焼けは次第に薄くなって、空は黒と赤と青で分けられて行く。昼と夜の間。赤が少しずつ減って、星が見え始めた。

一番星を彼女は見付けて、また少しだけ笑う。

これで良いのか。

これで良かったのか。

お前は本当に全力でモカの為に考えたのか？

きつと、アレと同じ財布は手に入らない。それに、彼女が大切にしていた物もこのままでは失くなってしまふんだ。

「なあ、モカ……」

「どうしたのー？」

「俺って、格好悪いよな」

「えーとー……本当にどうしたのー？」

ポカーンとした表情でモカは聞き返してくるが、彼女は少し考える仕草をしてから「そんな事ないよ」と短く呟く。

「いや、格好悪いんだよ。結局何も出来なかつたしさ。お化け屋敷だつてつぐみちゃんの前で格好付けるって決めた瞬間——」

「しよーくん？」

あの時の事を思い出して、俺の中で何かが弾けた。

つぐみちゃんに元気付けられた後、俺達が進んだ先の扉と壁の間にモカは座り込んでいて。

そこで彼女が俺の手を掴んで驚かせてから、鞆を開けてお菓子を食べていた事を思い出す。

もしあの時――

「あの時に財布が落ちていたなら……」

モカが居たのは扉と壁の間で、一般客はおろかスタッフさんですら見落としそうな場所だ。

そんな場所に財布が落ちていたら、誰にも見付からずにまだその場所に落ちている可能性は充分にある。

ただ、やっぱりこれは可能性の話で。本当にそこで落としたのかまでは分からない。

それでも、今ある唯一の手掛かりだ。

観覧車は頂点を過ぎて今降りて行く所で、少しずつ地上が近くなって行く。夕焼けは完全に終わって、空は暗くなっていた。

もしこれをモカに話して結局見付からなかったら、彼女は落胆するだろう。

「モカ、俺やつぱりもう一度財布を探してくる」

それでも、俺はモカにそう言った。

「……しょーくん？」

「お前の大切な物、絶対に見付けるから。俺が全力で探してくるから、お前は皆と先に出口に行つててくれ」

時間的にはもう帰る時間だろう。

残された時間もあまりなくて、もしその場所になかったらそれ以上探す時間すらなかった。

だからこれで見付けてこなかったら、山田翔太は最高に格好悪い。

それでも――

「こんな時くらい格好付けさせろ。……そもそも俺は元々格好悪いからな。これ以上格好悪くなる事もないだろ」

自分で言っておいて自分で苦笑いしながら、俺は彼女の頭に手を置いてそう言う。驚いたような表情をモカがしている間に、ゴンドラは地面に辿り着いてスタッフの人が扉を開けてくれた。

お化け屋敷は——あつちか。

「お帰り、モカちゃん！ 夕焼け綺麗——」

「ごめんつぐみちゃん、ちよつと鞆持つてて」

先に下に着いていて俺達を待つていた皆が迎えてくれる。

俺が一番前にいたつぐみちゃんに自分の鞆を渡すと、全速力で地面を蹴った。

「え、ええ?! 山田君?!」

「モカ、翔太の奴どうしたんだ……?」

「しょーくん……。……トモちん達は、先に行つてて」

「え、モカまで?! ちよ、モカ——」

夜の遊園地を全速力で駆ける。

全力で。

大切なものを探して。

「……モカは山田に任せればいいんじゃない？ あたし達はお土産でも買いに行こ」

「蘭ちゃんがそう言うなら……」

「私はちよつと心配だけど……」

「翔太も何か考えて走っていったんじゃないかな？ なら、アタシはあいつを信じるよ」

夜の遊園地はライトアップされて、夕焼けとはまた別で綺麗な景色を醸し出していた。

絶対に見つけてみせる。

探せなくても

二度目は怖くないとか、分かっていたら怖くないとか言うけれどアレ嘘だからね。怖いからね。

もつと言うと前回あつた筈の仕掛けがなくなつてるとかむしろ怖いからね。

「ろくろつ首なんて出てこなかったねー」

「勘弁してくれ……。てかモカ、別に着いてこなくても良かったんだぞ?」

「モカちゃんはまだ、しよーくんとお化け屋敷に行きたかつただけだよ?」

「そうかい」

俺とモカは観覧車に乗り終わつた後、再びお化け屋敷に入っていた。

「……手でも繋ぐ?」

「しよーくん怖いのに?」

「怖いよ」

微かな記憶の中の微かな可能性に賭けて。もしかしたらまだ財布が見つかるかもしれない、しかし何が悲しいのかお化け屋敷である。

急に出てくる系の仕掛けは分かっていたら確かに恐怖も薄れるが、気味の悪い雰囲気だとか出てこなくなった仕掛け（だよな？）はやはり怖い。怖いものは怖い。

「これはお札に行きたいけどなあ」

最初の扉。財布があるとしたらあの場所だとは思うのだが、それでも俺はモカが通った道を歩く事にした。

もしかしたら道中で落としているかもしれないし。眼を凝らして先に進む。

聞いてみれば、やはりモカはおかしの扉を開いていたらしい。彼女らしいね。

さて、問題の二つ目の扉。

ここでモカはお菓子を食べながら先に進んでいたから、俺はその溢れカスを見付けて彼女が進んだ部屋が分かった。

しかし気になるのが、イージーとエキスパートの扉があつてモカがイージーの扉を選んだ事である。彼女ならエキスパートを選びそうではあるが。

「イージー、なんでイージーを選んだんだ？」

「……………特に何も考えてなかったかなー」

「ほう……………」

もつと気になる事を言うと、ひまりちゃんとはぐれた事に気が付いたモカがなんでもんな所に座り込んでいたのか。

まあ、これ以上聞くのは野暮な気がして俺はイージーの扉を開けた。この部屋では何も起きないが、出口の扉を開くと上から骸骨が振ってくる仕掛けになっている。悪ふざけも大概にして欲しい。

しかし、これに関しては分かっていたら怖くない。

扉をあけて、俺は他所を向いた。鈍い音がして、骸骨が扉の前に現れる。

ごめん、怖くないとか言ったけど普通に怖い。二度目とか関係ない。もう音が無理。

しかし怖がつてる場合じゃないか。

件の場所はまだ目の前だ。

「やっ……………」

部屋から出て、俺は自分で開けた扉のドアノブを持つ。

この扉と壁の間にモカは座り込んでいた。だから、財布が落ちているならこここの可能

性が高い。

モカまで連れてきてしまったんだ、これで無かつたから最高に格好悪いぞ俺。それでも良いから、ここにある可能性に賭けたんだけどな。

「あるかな……と——」

扉を閉める。眼をよく凝らした。お化け屋敷ではご法度だが携帯のライトも使つて探す。

黒い財布だし、良く見ないと見つからないかもしれないじゃないか。ほら、もう少しちゃんと探してさ。

「——なんでだよ」

分かつていて、口ではそう言いつつも俺は床を何度も見直した。

財布は落ちていない。

「なんでだよ……っ」

床を叩く。普通ここは見つかるところだよ。

なんでこうも格好が付かないのか。

結局俺には何も無いのか。何も出来ないのか。

「くそ……」

「しよーくん」

「なんだ——」

座り込んで意味もなく声を上げる俺に、モカは後ろから抱きついてきた。

顔は見えないけれど、俺の身体を包み込む腕はとても優しく感じる。

「…………ごめん。格好悪いな。元からか」

「格好良いよ。……ありがとう」

振り向くと、彼女は笑っていた。

作ったような笑顔じゃなくて、ちゃんとモカらしい笑顔で。

「しよーくんと財布探しに行くの楽しみだなー」

「また、探そうか」

格好悪いけど、俺はこのくらいで良いのかもしれない。

出来るならちゃんと探したかったけどさ。

「モカちゃんはちよつとー、お花を積んでくるのでー。しょーくんはここで待っててねー」

その後、一応注意しながら進むも財布は見つからず何事もなくお化け屋敷の外に出る。

むしろ何事もなかったのが一番怖いんだが、あのろくろつ首は本当になんだったのか。

外に出るなりモカと一旦離れた俺は暗くなってしまった星空を見上げていた。

「あ、キラキラドキドキ！」

「あーはいはい。もう夜だ——って、そうじゃなくて、コレどうすんだよ」

ふと脇から聞こえてくるのはそんな会話。女子高生が二人で歩いているのが見える。少しだけ気になった俺は、彼女達に視線を向けて耳を傾けた。

「お化け屋敷で拾った財布。ぜってー落とした人困ってるぞ」

「そうだったそうだった！ お化け屋敷本当に怖かったよー。途中行き止まりで、どうしようって戻った時に見付けた財布だっけ？」

お化け屋敷で拾った財布……だと？

話しているのは茶髪の猫耳みたいな髪型した女の子と、金髪のツインテールの女の子。

金髪の女の子が持っている財布に視線を合わせると、どうも見覚えのある形をしている。

「あつた……？」

直ぐには動かなかった。

「どうする？ とりあえず大声で財布落とした人探す？」

「馬鹿か！ 普通にスタッフの人に渡せば良いだろ?! なんて直接持ち主を探そうとすんだよ」

いや、忘れがちだが俺はコミュニケーション能力がある訳ではない。見知らぬ女子二人に話し掛ける勇気なんて持ってないのである。

「えー、だってー。落とした人困ってそうだし」

それでも――

「ちよつと、二人共。……その財布なんだけど」

――少しくらい、頑張れよ。

「この財布の落とし主さんですか！ 有咲ー、やったよ見付かったよ。はいどーぞー！」

俺が一声掛けただけで、茶髪の少女は俺に財布を手渡してくれた。しかし、金髪の女の子が「待てい」と言いながらその手を止める。

「え、ええ？ どうしたの？」

「どうしたの？ じゃねーよ。この人が本当の持ち主の人か分からねーだろー！」

「あ、そっかー！」

確かに彼女の言う通りで、この財布が俺の物という保証はない。というか俺の物じゃない。

モカが帰って来てくれれば話は早いのだが、どうもこのまま彼女達を引き止めるのは難しいし。

えーい、なるようになれ。

「それじゃ、中に入ってる物を言う。……引くくらい大量のポイントカードと、四百三十円くらい」

知っている限りの情報を提示すると、金髪の女の子は「ちよつと確認させてもらいますね。すみません」と断って財布の中身を確認しだした。

今更だがモカの名前とか入った物が出て来たらどうしよう。いや、青葉モカって別に男の名前でもいけるかもしれない。突き通すか。

「大丈夫……っほいですね。チラツと見えたプリクラに顔写ってましたし、疑ってすみませんでした」

ただ、中身を確認した彼女は満足そうな表情で礼儀正しく財布を俺に手渡してくれた。

隣の女の子と話してる時とのギャップが激しいけど、オンオフが出来る女の子なんだろう。

プリクラってあの時のか。なんで財布に入れてるんだ。お陰で助かったけども、なんだか恥ずかしく思う。

「ありがとう、助かったよ。……本当にありがとう」

手に取れば、それは間違いなく俺がゲーセンのクレイジーゲームで取ってモカに渡した財布だった。

こんな事があるのか。自力では見付けられなかったけど、本当に財布を見付ける事が出来るなんて。

「あ、いえいえ。本人さんに渡せて良かったです」

本人じゃないんだけどね。

「財布君、もう勝手に一人で迷子になったらダメだよー」

「いや財布が一人で動いた訳ねーから!」

俺が内心でツツコム前にツツコミを入れるとは、この金髪の子やり手だな。

「しかしさっきのプリクラで隣に写ってたのモカちゃんに似てたような……」

待て、知り合いなのか。いや、ここは変に関わらない方がいいな?! 絶対に変な勘違いをされるし、そうなったらモカに申し訳ない。

「本当にありがとう」

もう一度お礼を言っただけで彼女達と別れて、俺はモカが出て来るのを待つ。

アイツになんて言おうか。

格好は悪いけど、それでも彼女が喜んでくれるなら俺はそれで良い。

俺は――

「よ、モカ。良い知らせと悪い知らせがあるんだけど、どっちから聞きたい？」

「それじゃー、あたしは王道の悪い知らせから聞こうかなー」

「悪い知らせか。さつき蘭から連絡が来てな、もうバス乗るらしいからお土産を買う時間はない。あと走らないといけない」

「うえ〜……。モカちゃんもうクタクタだよ。しよーくんおんぶ」

「無理に決まってるでしょ?！」

よしんば出来たとしても恥ずかしいから嫌だよ!!

「それで、良い知らせは〜?」

「これ」

背中隠しておいた財布を持ち上げると、モカは目を見開いて固まった。

徐々に緩くなる顔が途端に近付いてくる。気が付いたら彼女に抱き着かれていて、おんぶが恥ずかしいとかそんなのどうでも良いくらいに恥ずかしい状態になった。

止めて!! 山田君ウブだから止めて!!

「しよーくん……っ!」

「なんだ」

「……き。……ありがとう」

小さくて聞こえない声の後に、ゆっくりとお礼を言うモカ。離れると彼女は満面の笑みで笑っていて、顔は少し赤くなっている。

「さて、財布との感動の再会は後だ。走れ。おんぶはしない」

「しよーくんのケチー」

——俺は、そんな彼女の笑顔が好きなんだ。



こんな話がある。

幸せの字から一本線を引けば辛いになると。

とても身もふたもない話じゃないか。飽き飽きするね。

しかし、逆も然りで辛いから一本足だけで幸せになったりするんだ。

何が言いたいかというと、世の中辛いも幸せも変わらないというか。

基本的には半々で、悪い事ばかりが起きる訳じゃないという事である。

「……幸せ、なんだろうな」

遊び疲れたのか、Afterglowの面々は五人全員がバスの中で睡眠中だ。

俺はそんな彼女達を他所に窓から景色を眺める。

夜空に光る星つてのは都会じゃそんなに綺麗なものじゃないと言われているが、街の灯に負けないように健気にも光ってる星を見るのもまた良いものだと思つた。

周りと比べるんじゃないで、その星がどれだけ光ってるかが重要なんだと思う。空気が汚いとか街の灯の方が明るいとか、そんな事を差し引いてもちゃんと俺の目に届いている光は——とても眩しい。

「と、しよーくんは詩的な事を考えるのであつた」

「なんで起きてるんですかね。てかエスパーかよ。怖いわ」

唐突に目を開いてそんな事をいうモカは、得意げな表情で笑った。やっぱり彼女には、そういう笑顔が似合う。

「楽しかったー?」

「楽しかった」

また、こうやって遊びに行きたいなと思う程には楽しかった。そんな日がまた来ると良いなんて、そんな事を思う。

「しょーくん」

「なんだ?」

「月が綺麗だねー」

「ん? あー、そうだな」

ただ、俺にはまだ少しその光は眩しいような気がした。

個人的主観だがギター弾いてる奴は八割変人

ギターを少し触つてて思う事がある。

今やボタン一つで音が鳴る時代だ。しかし、きつとこの楽器が生まれた時はまだそんな物はなかった筈。

何かを叩いたりして音を出していたのだろうけど、この弦楽器と呼ばれる——糸をはって、それをひいて鳴らす楽器なんて物を考えた人は相当な変態に違いない。

まあ、特に言いたい事はないんだけど。以上ですよ。

ただ、今回はギターって凄いやつて事をただ言ってみただけだ。

「そんな訳でバイトなのだが」

「そんな訳ってどんな訳〜？」

楽しい遊園地のイベントも終わり、俺は社畜な日常へと戻る。

月火出勤水休みからの木金を働き、今週の土日は休みなしだよったね！ 目一杯二

!! 日で十六時間も働けるぜ!! こんなに嬉しい事はないよ!! 僕一応学生なんですけど

今日はその土曜日。昼のピークをなんとか終えて、棚の整理をしながらふと呟いた。

「先週の遊園地を思い出してた訳よ。そしたら働くのが怠くなってきた」

「しょーくん、いつも気怠げじゃなくいい?」

「うるせーよ」

どこぞのいつもマイペースの人に言われなくない。俺はやる時はやる。

「いや仕事大好きだし? なんなら働くために生きてるっていうか? お仕事楽しいです!!」

「立派な社畜に育って、モカちゃんは鼻が高いよ」

将来が不安になってきた。

「モカちゃん、おっはよー!」

そんなやり取りをしていると、どうやらモカの知り合いらしいお客さんが店に入ってくる。振り向くと何処かで見えた事があるような気がする顔が視界に映った。

いや、なんだろう。本当に分からないけど何処かで見た事が。

「日菜先輩じゃないですかー、奇遇ですな〜」

いや奇遇もなにもあなたバイト中だからね。偶然外であった訳じゃないからね。

「本当！ 奇遇だねー！ こんな所で偶然会うなんて！ あつはは、不思議だー」

いや、あなた思いつき「モカちゃん、おつはよー！」って会いに来てたよね。入店前から声出してたのお兄さん見てたからね。奇遇って言葉の意味を知らないのかな？

「えーと、お知り合い？」

「学校の先輩なんだけどー、しよーくんってパスパレ知らないのー？」

ぱすぱれ？ なんか聞いた事は有るような、無いような。

「日菜先輩は P a s t e l * P a l e t t e s ってアイドルバンドのメンバーなんだよー？」

「アイドルバンド……あー、なんか、聞いた事がある気がする。学校で流行ってた」
「あー、これは興味が無い奴ですなー」

モカの言う通り、残念ながら俺にその手の趣味はないのだ。

いや、しかし、なんだ、つまりは――

「――芸能人?!」

「そだよー」

軽く返事をする彼女は短い薄水色の髪と三つ編みを揺らして、片手を上げる。

「握手して下さい!!」

「いいよー!!」

「良いのお?!」

知人の知人が有名人なんて事が実在するなんて。俺は知らないんだけど、Paste
I*Pallettesといえればテレビにも出て来るって話だし。

思わず握手を求めると、普通に受け入れられてしまった。普通に手を握ってくれたよ。良いの? そんなんで良いの?!

「あ、ありがとうございます……」

「ねーねー、なんで握手して欲しかったの?」

お礼を言うのと、彼女はそんな質問をしてきた。え、ドユコト。

「君……えーと、山中君は私の事知らないんだよね？」

「山田だよ?! なんで田の字が変形した?! 潰れちゃってんじゃん!!」

「ごめんね! あんまり良く見てなかった!」

酷い!!

「ねーねー、なんでなんで？」

「え、えーと、それは……」

そう言われると、特に深い意味もなく。そんな奴に握手を求められたとなると、現役アイドルの彼女に失礼なのかもしれない。

「すみませんでした。……つい、なんというか、芸能人に会えたのが嬉しかったというか」

「へー、嬉しかったから握手したかったんだね」

この言い方は凄く怒ってる奴なのでは?!

「ところで、なんで謝ったの？」

「はえ……? いや、失礼だったかと思ってる？」

怒ってる訳じゃないのか？

「失礼……？ んー、良く分からないけど、あたしは何も気にしてないよ？」
「お、驚かせやがって……」

なんだこの不思議な女の子は。モカと話してるみたいだ。

「それで、お客様。何かご用ですか？」

俺は一度咳払いしてから、彼女にそう伝える。

芸能人だろうがなんだろうが客は客だ。そして俺は仕事である。

「忘れたー！」

「こいつあひでーや。ミンチよりひでえ……」

開幕モカに挨拶してたから、彼女に用があるのだとは思うのだが。

このやり取りの中で忘れるくらいだから、大した用ではないのだと思いたい。

「んー、でも今思い付いたよー！」

「思い出して?! 今思い付いても別の方向に進むだけで行きかけた方向には進めないよー！」

それただの回り道だから。何か用があったのは確かなんだろうから、ちゃんと思いつ

してください。

「君と話しにきた!」

「帰れ!!!」

しまった、ついモカにやる勢いでツツコミを入れてしまった。

「山寺君面白い! あっはは」

「山田だよ!!!」

「まーまー、しよーくん。せっかく来てくれたんだしお茶の一つでも出したらどうだねー?」

「あー、そうですね。せっかくのお客さんですし——って違うだろ!! 客は客でもお店の客だから。ここ家じゃないから!!」

「あたし緑茶!」

「買え!!! そこにあるから買え!!! 強請るな!! なんだその子猫みたいな目は!! ダメだよ?! ダメだからね?!」

「それじゃー、コレ」

「百三十二円になりまーす」

「本当に買うのかよおおおお!!」

ダメだ。モカが二人になったみたいになってる。こんなの無理。捌けないから。俺にそこまでの能力ないから。

「それじゃ、帰るね！」

「何しに来たの?!」

散々好き勝手して、結局緑茶買って帰ろうとしてるんだけど。

モカに用事があった訳じゃないのか。まるで何考えるのか分からない。

「ねーねー、山岡君」

「田を複雑骨折させないで欲しい。……何ですかね？」

「また来るね！」

「二度と来るなああああ!!」

「あっはははは」

疲れるわ!!

「この人面白いねー、モカちゃん。良いなー、楽しそう」

「自慢の相方なんですよー。グランプリ目指してるから、日菜先輩も応援宜しくお願い

しまーす」

目指していないから。

「本当?! それじゃ、一緒にテレビに出られるねー!」

「モカシヨを宜しくお願いしまーす」

「出られる訳ねーだろおとおお!!」

「あつはは、面白い。山口君、モカちゃんの同僚さんで相方ね! 覚えた!」

「山田だああああああ!!!」

遂に田んぼの中が消えたよ。

「ねーねー、しよーくん」

嵐のような彼女が去ってから、モカは何故か手を伸ばして俺の名前を呼んだ。なんの真似ですか。

「ここに超絶美少女のモカちゃんが居るけど、握手求めなくて大丈夫?」

「さーて、仕事仕事」

「がーん、見事なスルー。モカちゃんシヨックだよ」

もうね、なんかね、疲れたよパト●ツシユ。

◆ ◆ ◆
小一時間経って、モカも帰ってしまい一人で店番。この時間はお客さんが少ないから仕方がないね。

なんやかんや言うが、モカと話してるのはやっぱり楽しいんだ。とても疲れるけど。そんな訳で一人何もする事なく道行く人の男女比でも調べようなんて謎の事を考えていると、お客さんが一人お店に入ってくる。

綺麗な黒髪を背中まで伸ばした、落ち着いた雰囲気の子。
そんな彼女は店内に入るなりペットフードが置いてあるエリアに直行した。
ペットの餌を探しに来たのだろう。あるいはオヤツか。

しかし、彼女はそれから店内を一周して訝しげな表情を見せる。
目当ての物が見つからないのか、何度も何度も店内を一人で歩いていた。
一緒に探してあげたいけれど、女の子に話し掛けるって勇気があるよね。

「このお店ってないんですか？ ペレット」

そして唐突に俺の前に詰め寄って来て、彼女はそう聞いてくる。

ペレット？ ペレット、何それ？

「な、なんですかそれ？」

「うさぎの餌」

あー、そういうえさうさぎの餌はそんな名前だったっけか。

しかし申し訳ないのだが、このコンビニにはうさぎの餌は置いていない。

置いてあるのは犬猫用くらいで、間違っても草食動物のうさぎにあげて良いものではないのだ。

「申し訳ございません。当店で取り扱いしておりませんね……」

「そんな……」

彼女はその場に突然崩れ落ちて、絶望したような表情で虚空を見つめだす。

そんなにシヨックだったの?! 普通にペットショップ行けば良くない?!

「ペットショップなのに」

「ペットショップじゃないです!! コンビニです!! なんでそこを間違えたんですか?!」

「え、だってケージに鳥も居るし。ワンちゃんの餌も置いてあるし」

「これは焼き鳥だああ!! 加工済みじゃ!! どこに焼いた鳥を展示してるペットショッ
プがあるんだよ!!」

「なんて酷い事を」

「うるせえ!! なんて言えばいいか分からないだろ!! なんかもうごめんなさい!! 食
材には感謝しておりますごめんなさい!! なんで今俺謝ってるの?!!」

「よく見たらケージにネコちゃんも居る」

「それはネコまんだああああ!!」

「食べ物だよ!! 猫の形しただけのちよつと割高のただの肉まんだよ!!」

「そんなに叫んでどうしたの?」

「あんたのせいだよ?!!」

「この店たまに凄い人来るから怖いんだけど。なんでこの町はこんなに個性豊かな人
が多いの?!!」

「……あれ? どうしてこんな所で働いているの?」

「彼女は俺を見るなり何かに気が付いたのか、驚いたような表情でそんな事を聞いて来
た。」

知り合いなのか？ 俺の記憶にはない。しかし、彼女の口調はまるで俺の事を知っているかのようである。

彼女の視線は俺の名札に向けられていた。もしかしたら、俺が覚えていないだけで小学生の頃とかの知り合いなのかもしれない。

「え、何処かで会——」

「サンタさんってやっぱりクリスマス以外は普通に働いてるんだ」

「は？ サンタ？」

何を言っている。どこからサンタが出てきた。

「ほら、名前」

そう言って、彼女は俺の名札の名字を指差す。

やまだ やまだ
山田の山は音読みすると山だ。

やまだ やまだ さんた
そうして読むと山田は山田と読む事も出来なくはない。

「いや普通に山田です!! どうしたらそう読む事になるの?! どこからサンタ出てきたの?!」

「あ、そうだ。シヨツピングモールのペットシヨツプならペレットも売ってるかな」
「無視かよおおおお!!」

終始自分のペースでただ話していた彼女は、俺の虚しいツツコミにも触れずにコンビニを後にする。

今日は良く名前を間違われる日だったなあ……。

「……疲れた」

明日も仕事だ。



「——なんて事がありましたね」

「そっかー、日菜が来てたんだね。でも日菜に気に入られるなんて、山田君もやるじゃん？」

日曜日のバイト先。リサさんに先日の愚痴を話すと、彼女は何故か俺を褒めてくれる。

「やるとは……。しかし気になるんですよ。何処かで顔を見た気がするんです」

「普通にテレビじゃないの？ パスパレ、最近結構テレビ出てるし」

「いや、俺そういうの見ないんですよね。でも、もっとうこう……。本当に最近どこか記憶に残るような……」

自分でも何を言っているか分からないが、それでもやはり彼女をテレビ以外で見た事がある気がするのだ。

しかしやはり分からない。一体どこで——

「いらつしやいま——あ、また来たのか」

そんな事を考えていると、昨日見た事のあるような薄水色の髪が視界に入る。

二日も連続で来るなんて余程の暇人なのか。一応芸能人でしように。

「もうコントをする気はないぞ。帰れ」

「え、山田君……。？」

モカ曰く先輩らしいが、昨日の態度からしてそんな事は関係ない。昨日ツツコミし過ぎて喉が痛いんだ。

「こんと……。とは、一体なんの事ですか？ もしかして今は営業中ではなかったのかし

ら」

「はあ？ あんた昨日散々煩くボケておいて今日はそんな態度か……。キャラチェンジですかコノヤロー」

昨日とは態度が一変した彼女に俺は目を細めてそう言う。キャラチェンジといえば、今日は髪型が違うらしい。というか、こんなに髪の毛長かったっけ。

「昨日……？ あの、何処かでお会いしましたか？」

「何言ってるんだ記憶喪失か？ 昨日散々人の名前を間違えてくれちゃったじゃ——」

「山田君ストツプ！ ストローツツプ!!」

俺が彼女に詰め寄ろうとすると、突然後ろからリサさんに肩を掴まれて止められてしまった。

「離してくださいリサさん！ コイツはお客様なんかじゃないんです！」

「いや違うから！ 日菜じゃないから！ よく見て!!」

「はえ……？」

そしてリサさんにそう言われ、俺は彼女の顔をもう一度よく見てみる。

薄水色の髪は確かに昨日の彼女と一致しているのだが、昨日肩ほどまでしかなかった髪は背中まで伸びていた。

そしてよく見ると、ようやく彼女をどこで見たか思い出す。

「Roseliaのギター担当……」

リサさんが所属するガールズバンドRoselia。そこでギターを担当する彼女の名前は氷川紗夜。

どこかで見た事があると思ったら、ライブハウスでだったのか。いや、待て、おかしい。氷川紗夜？ 日菜じゃなくて？

「昨日来たのは紗夜の双子の妹で、氷川日菜。別人って事」

「なん……だと……」

ふ、双子?! そんな、そんな馬鹿な?!

それじゃ、目の前の彼女は——

「——申し訳ございませんでしたああああ!!」

全てを理解した俺は、ジャンプしながら土下座を繰り出した。

まさか別人だったなんて。そうとは知らずに、俺はお客様になんて態度を取ってしまったんだろう。まずい。非常にまずい。

「あ、頭をあげて下さい。……大体の事は察しましたから」

そんな彼女——氷川紗夜は困ったような表情で言葉を落としました。

そういう事か。昨日氷川日菜を見て思った既視感にどこかで彼女を見た訳ではない。

彼女に似た——彼女の姉に見覚えがあっただけだったという事である。

「申し訳ありませんでした……」

「いえ、日菜には強くいつておきますので。ところで今井さん、この後の練習の件なんです——」

聖人のような振る舞いで俺の事を許してくれた彼女は背中にギターを背負っていた。

これから練習らしく、もう少しでバイトが終わるリサさんもそのまま練習に行くのだろう。

「またのご来店お待ちしております!! ありがとうございます!!」

何やら俺には理解出来ない会話をしてから、紗夜さんはフライドポテトを買ってお店を後にした。

「あつはは、山田君面白い」

「からかわないで下さいよ！ 本気で焦ったんですからね！」

もう僕決めた。お客様に変な態度は取らない。

お客様は神様精神で行くよ。本当に。

最近 After glow の面々と居て（主にモカのせいで）ツツコミが過激になつてたからな。自粛しよう。接客王に俺はなる!!



「今日は子猫ちゃんはいないんだね」

紫色の髪を後ろで一つにまとめた背の高い美形の女性は、レジに立つと同時にそんな事を言い放った。

顔が良過ぎて一瞬イケメン男子かと思つたよ。

「だからここはペットシヨップじゃ——ハッ！ 違う違う。いらつしやいませ。何か

お探してでしょうか？」

危ねえ。魂に張り付いたツツコミ属性が無意識に出て来やがる。

俺はちゃんと接客をするんだ。

冷静に、親切に、的確に接客をするのだ。

「捜し物？ そうだね。強いて言うなら迷える子羊ちゃんを探している、かな」

「だからここはペットショップでも放牧場でもないって言ってるだろおおおお!!!」

「ごめんなさい数秒も持たなかったよ。いや、だって、コンビニに猫だの羊だのを探しに来る奴なんてもう客じゃないよ。むしろ頭の病院に行け!!」

「そうとも限らないさ」

「いや限るよ?! どこからどう見てもコンビニだからね?!」

「かのシェイクスピアはこう言った。……ひとつの顔は神が与えてくださった。もうひとつの顔は自分で造るのだ、と」

「いやどういう意味ですか?!」

「つまり、そういう事さ」

「どういう意味かって聞いてんだよおおおお!!!」

もう嫌だこのコンビニ!! 僕辞める!! 辞めて近くのファミレスで働く!!

あ、でもこの辺りで接客業したら同じ事だよ。もうダメだおしまいだ!!

「ああ………夢い」

「山川君ー! 遊びに来たよー!」

「こら日菜、今日は謝りに来たのよ」

「この店をペットショップに変えたら早いと思うんだけど」

「おー、なんか今日は賑やかだねー。……大丈夫? しょーくん」

「全員今すぐ帰れええええ!!」

まあ、賑やかで何よりなんだけどね。疲れるけど、最近は楽しいよまったく。

かのシェイクスピアはこう言った。

どうとでもなれ。どんな大嵐の日でも、時間は経つ。

つまり、そういう事さ。

高校生バイト戦士の平和（？）な一日

最近家でぼーっとする事が多くなった。

学校やバイトが終わったり、それもなかつたりするとやる事もなく家でただ天井を見上げる。

ギターを手にとつてみたり漫画の単行本を手にとつてみたり、ゲームをしたりと時間を潰そうとするも結局何も捗らない。

気が付いたらバイトのシフト表を見て、次のバイトはいつだっけとか確認したりするんだ。

「——そろそろヤバいかもしれない」

もしかして俺、社畜なんじゃ。



「なんか面白い事ありませんかね」

「この歳のババアに聞く事じゃないねえ」

バイト先で一緒になった高木さんに唐突に聞くと、そんな返事が返ってくる。

おっしゃる通りかもしれないが、俺は下手したら高木さんより無趣味かもしれないのだ。

「まあ、強いていうなら……ポケ●ンGOとか」

「めちやくちやアクティブなんですけど!! 若者かよ!!」

「最近はスカイダイビングとか」

「あんた六十超えだよねえ?!

「あとは……トランプタワー作り」

「急に地味になったね?! 差が激し過ぎて参考にならねーよ?!」

一体どんな生活してるんだこの人。

「トランプタワーは昨日遂に十四段目が完成したさね。もういつ倒れるか心配で心配で。私が倒れるのが先か、トランプが倒れるのが先か」

「ブラックジョークやめて?! てか、思ったより凄い事してたよこの人!! ていうか本

当になにしてるの?!」

なんだよ十四段目のトランプタワーって。どんな絵面? ていうかなんで崩れないの?!

「死ぬまでには二十段行きたいねえ」

「縁起でもないからやめて?!」

もう百段くらい頑張つて欲しい。ギネス記録とかあるのかな?

「まあ、楽しいなんて自分で見つけるものさね。だから私は死ぬまで人生を楽しむ気にいる。山田君もまだ若いんだから、がんばんな」

そうとだけ言つて、時間になったので高木さんは帰つてしまう。

楽しむ、ねえ。

俺が楽しめる事つて、なんなんだろうか。

「元気ないねー、山野君」

「山田です」

学校終わりだったのか、モカと一緒にコンビニにやってきた日菜先輩は俺の顔を覗き込みながらそう言った。

あんた芸能人だよね？

「そんなつまらなそうな顔してたら人生ごと楽しくなくなっちゃおうよー？ もつとるんって顔してー！」

「この顔は生まれつきですよー！」
るんって顔って何。

「……なあ、先輩。何が楽しいんですか？」

「……ごめん山田——じゃなかった山崎君。質問の意味が分かんない」

「あ、すみません……。なんか、いつも楽しそうだから。……ていうか、名前間違えてるのわざとだなあんた」

「わざとだよ？」

この人追い返して良い?!

「うーん、楽しいかー。あたしも最近まではあんまりるんって来る事なかったんだけどね？ 何やってもなんとなく出来ちゃうし」

モカやりサさんに聞いた話なのだが、彼女——氷川日菜はなんでもかんでも見たただけで出てしまう天才少女らしい。

ただそれは、何をしても思い通りになってしまふという事で、きつと彼女からすると退屈だったのだろう。

そんな彼女が最近になって、曰く「るん」と来るようになったのは——

「——分からないって、面白いなって。山田君の反応もあたしが全然想像付かないから面白いんだよねー。だから、あたしはあたしじゃない人と関わるのが楽しい！」

弾けるような笑顔で、日菜先輩はそう言った。

人と関わるなんてそんな単純な事が楽しい。

でもそれは誰にでも言える事で、もしかしたら誰もが、自分とは違う誰かと関わるのが——全く感性の違う自分じゃない存在と関わるのが楽しいから、誰かと関わろうとするのかもしれない。

「日菜先輩は〜？」

「突然ネコまん買って帰った。電光石火みたいな人だな」

モカが着替えて出て来る前に帰ってしまった日菜先輩を想って寂しがつているのか、モカは少し暗い表情で首を傾げる。

一言くらい欲しかったのかもな。せつかくここまで付いてきてくれたんだし。

「良いなあ、ネコまん」

「そつちかよ」

バイト終わった時に残ってたら買ってやろうか。

ただこの時間。学校や仕事終わりの人達がコンビニに寄って来るため、普段より仕事は忙しい。

それでも二人でなんとか回せなくてはならないのだが、いつもみたいに話したりは出来ないのだ。

「しゃーしたー」

ただ、それでも家で何しないでいるよりかはマシだと思ってしまう。

横でふざけた挨拶をしているモカの頭にチョップを入れながら、俺はそんな事を考えていた。

「やつと落ち着いたよ。もうモカちゃんくたくたく。ねむーい。ねるー」

「まだ働く時間だからな。おい立ったまま寝るな。目を開けろ」

なんだその特殊能力。

「返事が無い。ただの屍のようだ」

「またコアなネタを持つてくる……。立ったままの屍なんて嫌だし普通に返事してるからね」

「モカちゃんゾンビ」

「めっちゃ食べそう」

食欲に支配されたモカ。もはや同胞すら手に掛けそうである。

「食べちゃうぞ」

「ネコまんて勘弁してくれ」

「三個で」

「食い過ぎだよ」

ネコの形してるだけで少し割高な肉まんだが、それがバレているのか一部のみにしか売れないんだよね。

そろそろ終了するなんて話も聞いているから、よくネコまんを買う人には少し申し訳ない気分だ。

「ずっと気になってたんだけど、ぶっちゃけお前なんで太らないの?」

普段の食生活を見ているとどうもその体系を維持出来ている理由が分からないというか。

一体彼女が食べた物のカロリーは何処へ行っているのだろう。

「カロリーをひーちゃんに送ってるからかな?」

「やめたげてよお」

ひまりちゃんが体重気にしてるのってそういう事なのか。いや、現実を見ろ山田。そんな事出来る訳ないからね。

一瞬だからあんなに大きいのか、とか考えてしまった。男の子だもん。

「モカって家で何してるんだ?」

「パンを食べるかー、漫画読むかー、パンを食べるかー、ご飯食べるかー、パンを食べるかー、ゲームするかー、パンを食べるかー」

「人間の生活じゃない」

少なくとも何かダイエットの為にしてるって訳じゃなさそうだな。

「しよーくんは何してるのー?」

「え……えーと」

何してるっけ。俺、家で何してるっけ?!

「ゲームか漫画……?」

「一緒じゃーん」

「いやパン食べまくってないから。一緒にしないで?!」

お前と一緒に生活してたら数日と待たずに何かしらの病気で倒れるわ。

「……暇だねー」

「棚越しでもするか。モカ、商品の陳列直しといってくれ」

少し話していたが客が来ないので、俺達は店の商品の整理をしだす。

商品を綺麗に並べたり、在庫管理したりするのも大切な仕事だ。

ところでモカは商品を綺麗に並べるのが凄く上手い。彼女が触った場所はみるみるお行儀が良くなって行く。

なんというか、購入意欲が湧いてくるから不思議だ。

「本当に綺麗に並べるよな」

「カップラーメンとかはー、ロゴが見えるように並べるのがコツなんだよね。あとー、文字がひっくり返らないようにするのとー、形が少し崩れてるパンを整えたり」

「言いながら作業を進めるモカ。並び方を整えながらパンに「早く買われると良いね」と声をかける姿はまさしく変人である。」

「だけど、彼女の優しさというかあまり見せない本性が出ている時なのかもしれないとも思った。」

「思えば俺がバイトを始めた頃に残ってしまった肉まんを「勿体無い」と食べていたっけか。」

「んー……」

「そんな事を考えていると、モカはメロンパンを目の前に人差し指を唇に当ててなにやら考え始める。」

「俺が見る限りそのメロンパンに何か変な様子はないし、綺麗に並べられていた。だからこそ、彼女のそんな不自然な行動が気になる。」

「どうかしたのか？」

「食べたい」

「やめろ」

腹減っただけかよ。

「なんかこー、商品棚見るとお腹減るよねー？」

そう言いながら、彼女はメロンパンを持ち上げて涎を垂らした。おい女子高生。

「同意を求めんな。お前だけだよ多分。……いや、本当に開けようとするな!!」

遂にメロンパンに手を出しそうになるモカを引きずってレジまで運ぶ。こいつ一人で働かせたら知らぬ間に商品が失くなる事件が発生するかもしれない。

「こんなに美味しそうな食べ物に囲まれてるのに、手を出せないなんて……。およろしく、

モカちゃん欲求不満で何か事件を起こしちゃうよ」

「クビだぞ」

将来絶対食べ物関係の職に就くべきではないな、モカは。

「でもしよーくん、例えばこのコンビニに並んでいるのが食べ物じゃなくて全部美少女

なモカちゃんだったら、きつとしょーくんも我慢出来ない筈だよー?」

「いや何を?! 何を我慢しないの?! ていうかなんでコンビニに人が売ってるんだよ人身売買かよ。しかも全部モカとか怖いわ!! 我慢出来なくて逃げるわ!!」

「量産型モカちゃん、千九百八十円」

「狂気のイチキュツパ」

一家に一台。残飯処理としてどうでしょうか。

人道に反するわ。

「超絶可愛いモカちゃんを一日中愛でれるなら安いと思うんだよねー」

「どんだけ可愛くても餌代の方が高く付くからダメなんだよ。猫だつて餌代は馬鹿にならないんだ。お前、しまいにはモカを野に放つ奴が沢山現れて日本中に野生のモカが繁殖しだすぞ。モカの野生化が社会問題になる」

野生になったモカは畑を荒らし、コンビニを荒らし、遂に日本は食糧危機に直面するのであった。想像したら凄い絵面なんだけど。

「超絶可愛いを否定しない辺り、しょーくんはお金があれば飼ってくれるのー?」

「俺社畜だから金あるし、ワンチャンあるか。……いや、可愛いのもあるけどモカといると面白——」

「目潰し」

「——痛ああああ?! ええええええ?! なんでだあああああ!!!」
突然の目潰しで俺はレジの下で蹲る。待って。なんで?! どうして?!

「しゃーせー」

しかもこの状態でお客さんキターー!!

「おー、珍しいお客さん」

え、何? どんなお客さんが来たの?

「えー、それ買うのー?」

なんでそんな気になる事を言うの?! 俺、今日が見えないんだけど。
「キャラ的にどうなのかなって思うけどなー」

キャラ的に?!

「な、何が来てるんだ……」

「熊」

「熊?!」

え、この街中で熊?! ヤバくない?!

「に、逃げるぞモカ! い、いかん、まだ目が見えない。お前だけでも逃げろお!」

「大丈夫、優しい熊さんだから。ほら、飴買おうとしてる」

「なんで熊さんが飴買おうとしてるの?!」

「いや、熊じゃないんですけど。いや熊なのか」

熊(らしき第三者の声)がシャベツタアアアアアアアアア!!!

「百八円になりまーす。毎度ありがとうございます」

そして熊(?)は飴を買って帰ったらしい。俺は結局その姿を見る事はなかった。

夜勤務の人が来て、俺とモカは着替えてバイトを終える。

毎回だが、更衣室の向こうで女の子が着替えていると思うとちよつといけなない気持ちになるよね。

「ネコまん買ってやるよ」

「三個で」

「一個だ」

「それじゃー、モカちゃんが三個買いまーす」

「なんでやねーん!」

何故かネコまんを四つ買い、帰路へ。今日も一日が平和(?)に終わりそうだ。

「送ってくよ」

帰りも遅いので、一緒の時間に帰る時はモカを送って行くのは恒例となっている。

モカもそこは遠慮せずに「ありがとー」とネコまんを頬張っていた。

特に長い道のリという訳でもなく、淡々と歩くだけ。

ネコまんを食べてるからそんなに会話もない。

ただ、それでも何故かそれだけの事が楽しく感じる。

家で何もしていないよりも、ずっと楽しく感じるんだ。

「ネコまん四つも食べるのか?」

買ったネコまんを彼女に渡しながらそう言うと、モカは「流石に夜ご飯が入らなくなるかなー」と珍しく常人のような事を言う。一応限度はあるんだ。

「なんだそれ。それじゃ、自分で食べちゃうからな?」

「ダメー、それはモカちゃんに貰うんです」

「どんだけがめついの?! 取っておいて朝ごはんにでもする気?!」

「その代わり、これをしよーくんにあげます」

「そう言いながら、俺からネコまんを奪ったモカは自分が買ったネコまんを俺に一つ渡してくる。」

「なんでやねん」

「交換だよー」

「笑顔でそう言いながら俺から奪った最後のネコまんを食べるモカ。俺もその横で意味も分からず笑いながらネコまんを食べた。」

「美味しいー?」

「美味しい」

別に中身は大して普通の肉まんと変わらない、ちよつと割高で形が変な肉まん。ただ、美味しく感じるのはその雰囲気だとか、そういう事なんだと思う。

「今日も楽しかったねー」
「そうだな」

友達と居る時間は楽しい。学校とか、バイト先とか。

そんな事は当たり前だ。

それじゃ、俺が本当に楽しいって思える事はなんなんだろう。

結局俺はまだ見つけられていないんだ。

——今だから全力でやりたい事を。

社畜の休日

豚に真珠猫に小判と言うが、豚や猫にその価値は分からないという意味だっただろうか。

ただ、その言い方だとまるで豚や猫を馬鹿にしているようなので、豚や猫にとって真珠や小判は無価値であるという考え方にすれば良いと思う。

どちらにせよ、個にとつての価値とは自分に必要か必要でないかのどちらかだ。

それではここで話題を変えよう。今日の前にある十万円。俺にとって必要だろうか？

「いや、こんなに使う事ないよ」

平日のバイト終わり。ふと思いついてコンビニ備え付けのATMで金を下ろそうとしたのだが——桁を一個間違えた。

一万円降ろそうとしたのである。そしたら、十万出て来た。疲れているのだろうか。

いかんせんここの所社畜生活でお金を使う事もなく、貯金だけが溜まっていく始末。これが経済が回らない理由だと言われると社会の闇を感じる。

「しよーくん？ 何して——え、何その大金」

「え、山田君何そのお金」

同じ時間にバイト上がりのモカとリサさんは、大金片手に固まっている俺を見て表情を引きつらせた。

「振り込む前にちゃんとオレオレ詐欺か疑わないとダメだからね！」

「なんで俺がオレオレ詐欺に引つかかるんですか?! 俺に俺だよ俺俺って言われてもどう反応したら良いか分からないですからね?!」

なぜか凄い勘違いをされてるんだけど。いや、普通高校生がこんな大金持ち歩かないからね。

「……課金？ しよーくん、パンドリがドリームパンフエステイバル中だから始めるなら今だよ」

「いや、やらないからね。そんな意味の分からないゲームやらないからね」

何その商店街のお祭りみたいな名前。

完全に誤解を招いているので、俺は二人に簡単に事情を説明する。

こんな所でドジっ子属性に目覚めても今更キャラなんて立たないのだが、やってしまった事はしようがないのだ。

「うーん、戻すのもコンビニでやると手数料掛かるしね。銀行で振り込み直すのが手っ取り早いんだけど——このさいだからパーっと使っちゃったらどうかな？」

「パーっと使う？」

「そうそう。山田君沢山働いてるし、その十万円が全部じゃないでしょ？ だから、たまにはどうかなって」

リサさんはそう言うが、パーっと使うと言われても中々思い当たる節がない。

ゲームのカセットとか買っても有り余るし、漫画の単行本をセットで買っても全然余る。

そもそも本当に無趣味だから、何かこれといって特別欲しい物が無いのだ。

「買いたい物がない……」

「え、ええ?! えーと、服とかさ。あと、アクセサリーとか」

僕は女子じゃないです。

「それか、そーだなあ。そういえば山田君って次の休みいつだっけ?」

「来週の月曜日ですね。今週の土日はフルで入ってるし」

「なんで?!」

「予定がないからシフト出す時に休みたい日を提出しないんですよ」

その結果、基本的に土日は出勤。休みも週一回か二回。立派にお給料も貰える訳だ。

「あ、あははー……そうだ、今度の日曜日! 今度の日曜日モカ休みだよな? 何か予定

ある?」

「ありますよー。パンを沢山食べる日」

「よし! ないね!」

「華麗にスルーされてる気がする〜」

リサさんは何をそんなに必死になっているのか。

「山田君、日曜日アタシが替わりにバイト出るから休んで!!」

「え、でも特に予定もないし」

「せっかく休日に休めるんだから、やりたい事やりなよ！」

「休日に休んで一人で家に居ても特にやる事ないというか。……休日ってどうやって楽しんだっけ」

暗くなっている空を見上げてそう言うが、いくら考えても答えが出てこない。

というか、バイトを始める前まで自分が休みの日に何をしていたか思い出せない。

「あちゃー、しよーくん完全に魂まで社畜になっちゃってなーい？ 将来が心配だなく」

「いや、そう言われてもな……」

認めたくないものなので、俺は必死に休日の過ごし方を思い出す。

しかし、遊園地以降これといって何処かで遊んだとかそういう記憶がないんだよね。もしかしてあれ以来土日全部出勤してるのではないだろうか。

「何処でもいいからモカと遊びに行つて！ ほら、モカも良いでしょ？」

「いや、モカ用事あるって言ってたし……」

「モカ!!」

「え、あ、はい……了解でありますー?」

リサさんの強行な態度にモカも折れたのか、彼女は珍しく唾然とした表情で受け入れてしまった。

用事があると言っていたのに申し訳ないが、休日の相手をしてくれるのは嬉しい。

このままでは本当に魂まで社畜になりかねないし、自分が学生である事を思い出す為にも付き合って貰おう。

「良い? 二人きりで遊ぶんだからね。他のメンバー呼んじゃダメだからね」

「えー、そんなー」

何故か横でそんな話を二人がしているが、理由は分からない。そうなるとデートになっちゃうんだけど、モカ的には大丈夫なのだろうか。

「……世話が焼けるなあ、もう」

そんな訳で、俺は久し振りの休日を手に入れる事になったのだった。



待ち合わせ場所である羽沢珈琲店に入ると、端の方の席に突っ伏しているモカの姿が

目に映る。

「何してんのアレ」

「開店一時間前に来て、ここで寝るゝつて寝ちやつたんだよね。山田君が来たら起こしてって言ってたけど」

バイト中のつぐみちゃんに聞くとそんな返事が返って来た。

待ち合わせ時間は開店一時間後だったのだが、なんで開店前に来てるの。前と後を間違えたの？ バカなの???

しかしコレって一応十分前にきたとはいえ、俺はモ力を約二時間待たせた事になるんだけど……。

「おはようございまーす」

モ力の寝ている席まで歩いて、座りながら彼女の頭を突く。

するとモ力はゆっくりと頭を持ち上げて、とぼけたような顔で「あと五分」とまた伏せた。

「おいアホ」

「あれー、なぜ私の家にしょーくんが? ……押掛女房?」

「どこからツツコミ入れたら良いか分からないのでやめて下さい。……待った?」

「ううん。今来たところ」

恒例の会話だけど、バレバレだからね。かなり待たせてるからね。

「つぐみちゃんに話聞いたんだけど、なんでそんな時間に来たのよ。というか普通開店前に集合しないよ」

「えーと……間違えちゃった」

可愛く言っても俺の罪悪感が増えるだけだからやめて。

「……なんだ、その。悪いな、態々今日付き合ってもらうのに」

「あれ……。うーん、えーと……。別に?」

「なんだよ許してくれよ……。一応俺は約束より前に来たんだから」

「しょーくんのにぶちん」

「え、何……?」

「なんでもー? そんな事より朝ごはんを食べよう」

食べる事しか頭にないのか、モカは目覚めるなりつぐみちゃんを呼んで今日のオスス
メを聞く。

朝からサンドイッチ三種類セットを頼む彼女に唾然しながら、俺はフレンチトーストとミルクティーを頼んだ。甘々である。

「さて、何するかねえ」

目の前でサンドイッチを幸せそうに頬張るモカを見ながら、俺はそんな情けない言葉を落とした。

「い。全くもつてのノープランである。約束の日から数日あったのだが、何も考えていない。」

「パンでも食べに行く〜?」

「今食べてるだろ?!」

「なんで朝食食べながら次のご飯の話してるの?! デブなの?! なのになんでそんなにスタイル良いの?!」

「あ、本当だ。しよーくん、名探偵?」

「名探偵に謝れ」

「眠りのモカちゃん」

怒られるからやめて。

「すまん、なんにも考えてなかったんだ。というか、思いつかなかった」

休日ってなににする日だっけ。

バイト先で働いてるか、そこでモカとバカみたいな会話をしているのが俺の日常になっていた。

しかし無趣味は無趣味だったけど、バイトを始める前は普通に休日を過ごしていた筈である。

どうしてこうなってしまったのか。

もしかしたら、俺は何も趣味がない暮らしより働いてる方が楽しく感じてしまっているのかもしれない。

「完璧に社畜じゃねーか！」

「えー、しょーくんが遂にエアツツコミを。誰にツツコミ入れてるの〜？ モカちゃんを置いてかないで〜」

ダメだ、頭を切り替えた方が良い。普通に、普通に何かする事を探せば良いんだ。

「じゃんけんでもするか、モカ」

「じょーくん、あなた疲れてるのよ」

泣きたくなって来たよ。

「予定がないなら、午前中は商店街のイベントライブを観に行ったらどうかかな？」

唸っている俺達の所まで来て食器を片付けながら、つぐみちゃんは一枚のチラシを机の上に置いてそう言う。

チラシには——商店街ライブ開催。商店街を笑顔にハロー、ハッピーワールド！——と書かれていた。

「ハロー、ハッピーワールド？ はて、どこかで」

「おー、これは盛り上がりそうですなー」

俺が首を傾げる横で、モカはニヤケ顔でチラシを覗く。モカ的には問題なさそうだし、このライブを観に行ってみるか。

「ありがとうつぐみちゃん。行ってみるよ」

「力になれて良かった。楽しんで来てね！」

そうとだけ言って、つぐみちゃんは仕事に戻って行ってしまった。

しかしなんでバイト中なのにこんなチラシを用意していたのか。

そのチラシだが、よく見てみるとライブ開始が三十分後に迫っている。そろそろ移動した方が良さそうだ。

そんな訳で俺達は会計を済ませて羽沢珈琲店を後にする。

外に出てみれば商店街は普段より盛り上がり上がっているように見えて、中央にある広場人が集まっているようだった。

なるほど、商店街の活性化にも繋がる良いイベントじゃないか。

「大盛況ですなー」

「そんなに人気なバンドなのか？」

「面白い」

「面白い」

俺のバンドのイメージと違うんだが。いや、そういえば何か記憶にあるような。

「わー！ 遅刻遅刻ー！」

モカと話していると、背後から少女漫画のような台詞が聴こえてくる。

何事だと俺が振り向くと同時に強い衝撃が走り、俺は地面に横たわっていた。何が起きたんですか。

「……何故俺は倒れている」

「あ、ご、ごめんなさい！ はぐみ、急いでて！」

体を起こすと、目の前で小さな女の子がわたわたしている。小学生くらいか？ オレンジ色のショートカットはボーイッシュな雰囲気を感じさせるが、可愛い服や幼い顔立ちには加護欲を掻き立てられた。

「あー、いや大丈夫だ。急いでるんだろ？ 気にせずに行つて良いぞ」

バンドを見に来た、とかだろうか？ しかしどこか見た事がある気がする。

俺がそう言うのと女の子は深くお辞儀をして、物凄い速さで走つて行つてしまった。

「しよーくーん？ 迷子になるよー？」

知らない間に逸れていたモカに呼ばれて、俺は彼女に着いて行く。というか、なんか俺がいた場所がおかしい。吹っ飛んでない？ 気のせい？

広場の前に辿り着くと、会場はまだかまだかと大盛り上がりの様子だった。

そんな中で突然聞こえるラッパ音。俺達はバンドを見に来たんだよね？

しかし、ラッパ音が聞こえるのはステージではなく商店街の道のど真ん中からである。ライブとは関係ないのか？

音がする方に視線を向けると、そこにいたのはマーチングバンドのような格好をした四人と一匹(?)だった。

「おー、今回も斜め上だね、ハロハピは」

先頭を歩く金髪の少女に続くのは背の高いポニーテールの女性に水色のサイドテールの女の子。

そしてさつき俺とぶつかった小さな女の子と、熊。ピンクの熊。そんなメンバーが、商店街の道の真ん中を歩いてステージまで向かって行く。

なんだこりゃ。

「皆ー！ 今日商店街にようこそ！ 楽しい時間はあつという間よ！ 皆で笑顔になりましょう！」

そして始まる明るい音楽。AfterglowやRoseliaとは違うけれど、心

が弾むような軽快なリズムに商店街は自然と盛り上がりつつあった。

「いやー、凄いよねーハロハピ。あたし達には真似出来ないわ。蘭が嫌がりそうだし」「容易に想像付くな……。でも、AfterglowにはAfterglowの良さがあるし、無理にやらなくてもな」

「でもー、蘭があんな感じに歌ってたら面白くない?」

「絶対面白い」

「想像するだけならタダだよ。絶対にやらないけど」

「それもそうか。」

試しにPastel*Palettesっぽい感じのAfterglowを想像してみる。

ひまりちゃんとかつぐみちゃんは良いかも知れないが、蘭や巴はイメージに合わな過ぎて吹き出しそうになった。

「しかしあの子、バンドメンバーだったのか……」

演奏に意識を戻すとさつき俺とぶつかってきた女の子はベースを演奏している。

小学生だと思っていただけと違うのか？
それにしたって、さつきとは全然表情も違って。

明るく元気な音楽だけど、彼女たち達もまたハロー、ハッピーワールド！として全力で演奏しているんだ。

俺はまだ、やりたい事も見付かっていない。

休日にやる事すらない。

俺は一体……何がしたいんだろうな。

第八十四回チョココロネ争奪クイズ

パンとは。

主に小麦粉を主原料とし、水等を混ぜこねて発酵させた後、焼いて食する食べ物の総称である。

これにどうアレンジを加えるか、さらにこのパンに何かを合わせて再調理させる事もあり食べ方は無限大だ。

して、現代多くの国地域にて主食とされているこのパンだが、お米の国日本でも専門店が存在する程に人々の生活に慣れ親しんでいる。

「さて始まりました第八十四回チョココロネ争奪クイズ。司会は私、山吹沙綾と山田翔太君の山々ペアでお送りします」

——だが、これは一体どういう事なのだろうか。

「ごめん、意味が分からない」

「あ、あははー。ごめんね、付き合わせちゃって」

そう言いながら両手を合わせるの、綺麗な茶髪を後ろで一つに纏めた同い年の女の

子。

山吹沙綾は俺が今居るこのお店——やまぶきベーカリーの店主さんの娘さんだ。

知り合いという訳ではないがこのパン屋は家族ぐるみで良く来るので、よく店を手伝っている彼女とは顔見知りではあるという不思議な関係である。

ちゃんと会話したのは今日が初めてだが。

閑話休題。

俺の眼前に映るのは、椅子に座った二人の女の子。

一人は青葉モカ。

もう一人は黒髪セミシヨートの大人しそうな女の子。名前は牛込りみさん。

その二人の正面には、何故か一つのパンが祭壇のような物に飾られていた。

もうこの時点で意味が分からない。

ちなみに置かれているのはチョココロネである。

「チョココロネだけは、譲れない……っ！」

「全てのパンはモカちゃんのもの……っ！」

二人は目線を合わせ、気のせいかわ火を散らしていた。大人しそうな女の子という紹介は撤回。怖い。

この現状では何が起きているか理解に苦しむと思うので、少しだけ時間を巻き戻す事にする。

それは、俺達がハロー、ハッピーワールド!のライブを見終わった後の事だった――



「パンを食べよう」

「朝もパンだったのに……。いや、良いけども」

ライブも終わり、お客さんが商店街に散らばっていく最中。モカは口癖のようにそう呟く。

「付き合ってもらってるし、奢るぞ」

「おー、しょーくん太ってる」

「太っ腹な?! その言い方だとただの悪口だからね?! ていうか、え、俺太ってる?!」

結構長い事ライブ演奏が続いていたので昼間は過ぎてしまったが、むしろ混雑は避けて丁度いいかもしれない。

それで、どこで食べるかと尋ねてモカが俺を連れてきたのがやまぶきベーカリーだった。

「あれ？ お客さん居ないねー」

しかし、店に着くと店内は客が居なくて寂しい状況に。

少し近付くと店が閉まっている訳ではないのだが、現状を理解するに十分な光景が視界に入る。

「パン、なくね？」

店に陳列されている筈のパンが殆どなくなっていたのだ。

大方ライブで商店街が盛り上がり生産が追い付かなかったのだろう。凄い盛り上がりだったからね、ハロハピライブ。

「どうする？ 他の店にするか？」

「待つてしよーくん、アレは——」

珍しく真剣な表情で何かを見詰めるモカ。その視線の先には、一つだけ売れ残ってい

るパンが寂しげに置いてあった。

「——やまぶきベーカリーのチョココロネ……っ！」

モカとは思えない速度で店内に向かつていく彼女を半目で眺めていると、その横からもう一人女の子が同じ速度で走って行くのが見える。

黒い髪を揺らしながら走るその女の子こそ、牛込りみその人だった。

そして、二人は一つのパンに同時に手をつける。パンを挟むトングがぶつかり合つて金属音が店内に響いた。

「……このあたしのトングに付いてくるなんて、やりますねえ〜」

「ちよ、チョココロネ……っ！」

二人はお互いをトングで牽制し合いながらも、その視線を一つのチョココロネに向ける。

なんて意地の張り合いだろうか。譲り合いの心というのはないのか君達は。

「はい、二人共ストロップ」

俺が遅れて店内に入ると同時に、二人の争いをやまぶきベーカリーの娘さん——山

吹沙綾が止めに入った。

己の欲望のままに争う二人を宥めるその姿は、同い年ながらお姉さんのような雰囲気
を醸し出している。

「君もチョココロネ？」

俺がチョココロネみたいな質問はやめて下さい。

「いや、俺はこのアホの付き添いなので。……えーと、そこにある塩パン下さい」

「それモカちゃんの一」

「他にパン売ってないんだけど!!」

「ご、ごめんねー。こんなに売れるなんて思ってたなくて」

大盛況だったらしい。

「さーて、どうしようか。いつも食べてるんだしり——」

「嫌」

名前を一文字呼ばれただけで即答した?!

「嫌」

何も言っていないのに即応したあ!!

「どっちも譲る気はなしか……。なら、仁義なきパン勝負しかないね」

さつきまで争いを収めようとしていた彼女だが、遂に怒ってしまったのか目を光らせて眼光が走る。

いや、パン勝負って何。

そして始まったのが――



「――ルールは簡単。今から出題されるチョココロネに関する問題に早押しで答えて貰うよ。先に三問正解した人の勝利で、チョココロネをプレゼント!」

――この八十四回チョココロネ争奪クイズだ。

八十四回もやってるのかこの謎の儀式。いや絶対やってないだろ。適当な数だろ。

「さーやー、しつもん」

手を挙げてモカがそう言うと、沙綾は彼女に手を向けて質問を許可する。

何処から出て来たかよく分からない（多分）伊達眼鏡を装備した沙綾は学校の先生に

も見えなくはない。

「早押しって、ボタンなくなーい？」

確かに、この手のクイズには誰が一番早くボタンを押したのか判定する機会が必要だ。

現状二人は椅子に座っているだけで、周りに何かがあつたりはしない。

「それじゃ、手を挙げて貰おうかな。あとはフィーリングで？」

それで良いのか。

「それじゃ、第一問目试试看よっか。ジャジャン！」

「ジャジャンも口で言うの?!」

「問題です。チヨココロネに代表されるコロネですが、何処の国——」

沙綾がそこまで言った所で、牛込さんが手を挙げる。え、何？ まだ問題最後まで出されてなくない？

「日本！」

「りみりん正解！」

嘘お?!

「問題は『チョココロネに代表されるコロネですが、何処の国で発祥された菓子パンでしようか?』でした」

「日本なのか、へえ」

なんか無駄にコアな所で博識になれそうなクイズだな。チョココロネ限定だけど。しかしこのクイズ、普段からマイペースのモカには不利だろうか?

「それでは第二問! ジャジャン!」

「やっぱりジャジャンは言うのか」

「問題です。チョココロネをチョココロネたらしめるチョコの原材料——」

沙綾が問題を最後まで言い切る前に、またも牛込さんが手を挙げた。

この問題は俺でも分かる。チョコの原材料はカカオだ。

このままじゃ圧勝されてしまうかもしれない。

「カカオ!」

「残念、不正解」

しかし、カカオと答えた牛込さんの答えはハズレだったのである。

一体どう言う事だ?

「それじゃ、問題の続きを言うね。チョコココロネをチョコココロネたらしめるチョコの原材料は——カカオですが、パンの原材料は何でしょうか？」

まさかの引つ掛け問題。早押しクイズってこういうのが怖いよね。

お手付きで動けなくて泣きそうな表情の牛込さんの隣で、モカは答えを言つてこれでクイズは同点になる。

二人の視線の先は相変わらずチョコココロネ。どうもあそこだけ空気が違うんだが。

「それじゃ、次行つてみようか。第三問！ ジャジャン」

「もうつつこまないからね」

「山田翔太君がやまぶきベーカリーでチョコココロネを買つてくれる時、個数はいつも一緒です。さて何個でしょうか？」

「問題がいきなりチョコココロネから遠ざかったね?! てかなんで俺が出てきたの?!」

確かに俺がチョコココロネ——というかやまぶきベーカリーで菓子パンを買う時は決まつて買う個数があるのは事実だ。

しかしそれを問題にした所でこの二人が答えられる訳がない。

モカはともかく牛込さんとは初対面だし、モカともやまぶきベーカリーに一緒に来た

のは初めてなのだから。

「はいー！」

「はい、りみりん」

牛込さんが意気込みながら手を挙げる。この問題はもう勘での勝負だが、先手を取れたのは大きいだろう。

適当な数を言えば当たる可能性もあるからだ。人が一度にパンを買う個数なんて限られてくるからな。

「五個、かな？」

いや多いよ。それは多いよ。流石に同じパンを五個も買わないよ。

「残念ハズレです。はい、モカの番」

「十個？」

食いすぎだよ。棚にあるチョココロネ殆ど持つてつちやつてるよそれ。

「もう少し普通の数かな。ね、翔太君」

「まあ、ヒントになつちやうかもしれないけど。普通つちや普通だと思う」

次の回答権は牛込さんだからモカは不利になってしまいが、しょうがない。というかなんだこの茶番。

「七個かな？」

「普通って言ったよね?! それ多分君の普通だよね?!」

「はい、十二個です」

「お前俺をなんだと思ってるの?!」

普通ってなんだろうとかいう哲学に話が逸れてしまいそうである。

「に、二十個？」

「増やすなああああ!!」

もはや人の食べる量じゃない。というか買い占めだよそれ。

「それじゃー、三個」

「モカ正解」

そして突然答えが出てきて、この問題を正解したのはモカだった。

ちなみに何故三個かというと、大概ここで菓子パンを買う時はお使いなので家族分を

購入するのである。我が家は三人家族だからな。

「これで、りみりんが一点。モカが二点でリーチになったね。翔太君はこの勝負をどう見る？」

「俺に振られてもね。……いや、まあ、このままだとモカが勝ってしまうし。牛込さんにも頑張つて貰いたいですね」

「ここまで来たら面白い展開を期待してしまうのが年頃の男の子なんだ。モカには悪いが、このまま簡単に終わつてしまつても面白くない。」

「それじゃ、第四問。チョココロネの正しい食べ方はどんな食べ方でしょうか？」

「え、なにその問題」

「そんなのあるの?! パンに正しい食べ方とかあるの?!」

「はいはい」

自信満々な表情で手を挙げるモカ。答えが分かっているのだろうか、沙綾に手を向けられた彼女は不敵に笑いながら口を開く。

「細かい方から食べます」

「残念不正解」

あの自信はなんだったのか。当たり前のように不正解を叩きつけられたモカは、不満そうな表情で「えー」と口を尖らせた。

いや、正しい食べ方とかよく分からないけどさ、細い方から食べるのは間違いなんじゃない？

チョコココロネは三角型になっていて、底辺に空いた穴からチョコクリームを入れたパインである。

細い方から食べるという事はその底辺を下に向けてるという事になり、チョコクリームが下に落ちていく可能性があるという事だ。

素人意見だが、太い方から食べるのが一般的だろう。

「こなたちゃんはこのように」

「誰だよ」

なんの話ですか。

「食べる人が好きな食べ方をする。が、正解だよね」

「りみりん正解」

項垂れるモカの隣で、牛込さんの答えに沙綾は満足げに正解を与えた。

「私はね、その時の気分によって食べる向きを変えるんだ。頭から食べると最後までチョコの味を楽しめるし、お尻から食べると後味がすつきりするんだよ」

「その発想はなかった。モカちゃんの大敗だ〜」

なるほど、正しい食べ方なんてないって事だな。ひっかけ問題の類いだが、これと同点になり最後の問題で全てが決まる事になる。

完全に茶番だが、ここまで来たのなら最後まで楽しもうじゃないか。

「それでは最後の問題です。ちなみにこの問題に正解した人には三点入るから、大逆転も可能だよ。ただし、回答権は一人一回まで！」

「いや二人共同点だから意味ないからね」

クイズ番組でよくある奴だけど、全く意味ないからね。言いたかっただけでしょそれ。

しかし回答権が一人一回だと引き分けになる可能性があるのだが、その時はどうするのだろうか。

「最終問題。チョココロネは誰に食べたがられてるでしょうか？」

「もはや問題の意味が不明なだけ?!」

どう考えても答えがない。だってチョココロネの気持ちなんて分からないじゃないか。

なら、さつきと同じで正解なんてないのが正解なのだろうか？

いや、食べ方と違ってこれはチョココロネ個人（個人？）の意思の問題だ。ちゃんとした答えがある筈である。

「ふっふっふー、モカちゃんにはパンの気持ち分かる特殊能力があるのだよ」
初耳だよ。

「それじゃ、モカの答えから聞こうかな」

「ズバリ、チョココロネはモカちゃんに食べられたがっています」

「お前が食べたいだけだろ！」

相手の意思を強要するのは良くありません。

「いやいや、あたしとチョココロネは相思相愛だからねー。お互いwin-winというかー？」

「その言い方と普段の素行を比べるとお前は沢山のパンを誑かす最低な奴だからね？」
全く愛情がない。遊ばれてるパン。いや、俺は何を考えているんだ。

「わ、私はチョココロネ一筋だよ！ だから、チョココロネも私に食べられたがつてると思うんだ」

「いやそもそもその理屈がおかしいからね。そもそもチョココロネ沢山あるからね。どちらにせよ一途もクソもないよ」

結局は意地の張り合いなのか、二人の間で火花が散る。おいどうするんだコレ。

「はいストップストップ。残念ながら二人共不正解だよ。このチョココロネは私が食べちゃおうかな」

争いに終止符を打ったのは、火種を起こした張本人だった。

彼女は不敵な笑みで、チョココロネを口に頬張る。

牛込さんは泣きそうな表情で、モカは何考えてるか分からない表情でそれを見ている事しか出来なかった。

「なんだこの茶番——ん？ 良い匂い」

それを見てもうツツコミを入れる元気もなくなっていた俺の嗅覚に、突如甘い香りが漂ってくる。

この安心するような、心が温まる匂いは——

「チヨココロネの匂い」

「焼きたてのパンの匂い」

「あ、丁度焼き上がってきたみたいだね」

チヨココロネを食べ終わった沙綾は、俺達に背を向けて厨房に歩いて行つた。奥からは店主であるご両親と思われる声と、沙綾の明るい声が聞こえてくる。

そして、そんな彼女が戻つて来て手に持っていたのは――

「チヨココロネ……っ」

「焼きたてのパンが沢山」

――色々な種類のパンが乗つたお盆だった。

「おまたせしましたー、やまぶきベーカリーの焼きたてパンだよ」
白い歯を見せる彼女は得意げな表情で俺に視線を向ける。

なるほど、そういう事だったのか……。

さつきまでの茶番はパンを焼き上げるまでの時間稼ぎだったという事だ。

そもそもこんな時間にパンがなくなっているのは、ライブによる予想外の大盛況が原因である。

それでパンがなくなったからと言って店を閉める訳がなく、しかしパンを焼くのに時間は掛かる訳で。その時間に来てしまった俺達への、彼女なりの粋な計らいだったのだ。

茶番だけどな!!!

「取り合おうんじゃなくて、皆で美味しく頂きたいよね。沢山あるから、好きなパンを買って行つてね」

勿論有料である。接客上手なパン屋の娘さんだ。

「私チョココロネ」

「メロンパンとー、チョココロネとー、ハムエッグサンドとー、それから——」
「食い過ぎです。」

「ほらほら、翔太君も」

「んじや、チョココロネで」

予想外な珍事件もあったが、楽しい昼食の場を提供してくれた彼女にはお礼を言っても足りないくらいだ。明日からはもう少し多目に通おう。

「あとー、コロツケパンとカツサン——」

「いやどんだけ食べるんだよ!!! 別に奢るけど、食べれるんだろうな?! お残しは許しまへんで?!」

「余裕〜」

して、とんでもない茶番に付き合わされたがまだ昼だという事を忘れていた。既に疲れてるよ。

この後どうするかねえ。

置いて行かれたくないから

やまぶきベーカリーで昼食を終えて、俺とモカは何のアテもなく商店街を歩き出す。

予定もなければ用事もない。

せっかくの休日に付き合ってくれているモカに申し訳ないが、俺はそんなに面白い人間じゃないのだ。

気の利いた遊びのプランとかを考えられるスペックを持ち合わせていないのである。

「いやー、賑わってますなー。ねーねー、しよーくん。今流れてる曲は聴いた事あるー？」

「ん？ あー、これか」

モカに言われて商店街のスピーカーカーで流れている音楽に耳を傾けると、蘭とは似ても似つかない明るい声の曲が流れていた。

ただ、何処となく曲調が好きというか。よく分からないけどそんな事を考える。

「いや、聴いた事ないな」

しかし記憶にある限り、この曲を聞いたことはなかった。

どこことなく曲調が気になるというか、身に覚えがあるのだけど、それ以上でもそれ以下でもない。

「これ歌ったり演奏してるのが、日菜先輩所属のアイドルバンド Pastel*Palet なんだよねー」

「へー、そうなのか。ちよつと気になるし、今度色々聴いてみるか」

あのおふざけが過ぎる日菜先輩がこの中に混じってギターを弾いているというのだから、この世界は分からない。天才少女恐るべし。

「えーとー。あ、このお店見て行っても良いー?」

その後少し歩いて行くと、モカは商店街にある服屋を指差す。

特に高くも安くもない、俺もたまに見にくる店だ。幅広いジャンルの服が置いてあるので、老若男女のお客さんで賑わっている。

「良いぞー。歩いてるだけじゃなんにもならないしな」

一生懸命考えてはいるのだが、どうも気の利いた事は思いつかない。

本当にモカには申し訳ないと思っているから、彼女が行きたい場所があるなら拒む理由もなかった。

例えば俺が何か本気で取り組んでいる事があれば、それに付き合ってもらおうとか、そういう事が出来るのにな。

「おー、良いパーカー発見〜」

「モカってパーカーばっか着てるよな」

「着やすくして楽なんだよねー。まー、モカちゃんは何着ても似合うしー？」

凄い自信である。

「それじゃ、そのワンピースとかどうよ」

「ひとつなぎの大秘宝？」

「それはONE●IECEピな」

怒られるからやめて。

「パーカーワンピースならパジャマで持つてるよー？」

どうも彼女はパーカーにこだわりがあるらしい。いつかショッピングモールでワン

ピースを着てくれた事もあつたが、彼女がパーカー以外の私服を着ている姿をほとんど見たことないし。

「よし、このパーカーに決定〜」

「買ってやろう」

ただ、彼女の言う通り。モカは何を着ても似合いそうだな——なんて事を思った。



「ありがとう、しょーくん」

買ってあげた服の入った紙袋を抱きながら、モカは笑顔でお礼を言ってくれる。

「金ならある」

「なんでそんなに格好の付け方が下手なのかなー」

酷い。

「蘭を見習ってみたらー?」

「別に、金ならあるし」

目をそらしてそう言ってみると、モカは「うわー、似てるー」と引き攣った表情で俺

を見た。

あなたがやれって言ったんだからね?!

「それじゃー、私は彩さんの真似をするひーちゃんのモノマネしまーす」

「突如始まる細か過ぎて伝わらないモノマネ大会」

そもそも彩さんって誰ですか。

「まん丸お山に彩りを、Pastel*Palettesのふわふわピンク担当、丸山彩でーす」

「よく分かんないけど多分絶対似てない」

Pastel*Palettesってアイドルバンドだろ? 絶対のんびり口調じゃないでしょ。あとそのゲツツ(死語)は何。今時そんなのやるアイドルいないでしょ。

「えー、結構自信あったんだけどなー」

「とりあえずこのポーズはなくない? ダサくない?」

俺がモカのやっていたポーズを真似すると、モカは珍しく目を見開いて開いた口を手で閉じた。

え? 何?

「そ、そんな……ダサ……え、ぐすつ」

「彩ちゃん？ 大丈夫よ、世の中には色々な感性を持った人が——彩ちゃん?!」
「うえええん!!」

すると何故か突然俺達の近くを歩いていた、ピンク色の髪と変なサングラスが特徴的な女の子が泣きながら走っていく。

それを慌てて追いかけて行く金髪の女の子には何故か冷ややかな目で見られたのだが、何が起きたのかは全く分からなかった。

「何気ない一言が、現役アイドルを傷付けた」

「う、嘘だろ……」

嘘だと言ってくれよ……。

その後何回かモカに真相を聞こうとしたのだが、全部はぶらかされてしまう。

後日 Pastel*Palettes という存在を認知した俺が啞然としたのは、また別の話だ。

「ところでしょーくん、自分の服は良かったのー?」

「服はー、特に欲しいって思わないしな」

唐突にそう聞いてくるモカは、紙袋の中身を見ながら首を傾げる。

手元にはまだ九万円以上残っているのだが、元々今日は採算しようと思っていたのに全然財布は軽くない。

とは言っても、商店街でこんな大金を使おうというのがそもそも難しい話なのだ。移動するにしても行きたい所もないし。

しかしこのまま歩いているだけじゃ何も始まらない。

「モカはなんか欲しいものないのか？」

「しょーくん」

「え」

ドユコトー。

ま、まさか?!

「奴隷になれと?!」

人身売買ですか。

「どーしてそーなるのさー」

半目でそう言うモカは、明後日の方向を見ながら「モカちゃんは苦労人だなー」と独り言を呟く。

どうしたんだろうこの人。

「もー、今日はしよーくんがしたい事をしに来たんだよー？」

「そ、そう言われてもな……」

したい事。やりたい事。

社畜のバイト戦士になったらそれを見失った訳じゃない。俺に元々やりたい事はなかったんだ。

結局、その時だけ楽しければ良いと。

前を見る事なく、真下だけを見て歩いて来た罰なんだと思う。

今を全力で生きている彼女は、俺には眩し過ぎた。

「お前と遊べるなら、何処でも良いよ」

「しよーくん……」

気の利いた言葉を言えず、俺は気まずさに顔を背ける。

視界に映ったアイス屋がちやうど良く、俺は考える事から逃げた。

「お、アイスあんじゃん。食べようぜ」

「良いですなー。しよーくん分かってるー」

モカを連れて、俺は外に置いてあるアイス屋のメニューに目を向ける。

色々な種類のアイスが置いてあり、本日一割引と大きな告知がされていた。

ハロハピライブに合わせて客寄せの為の値引きだろう。その効果もあって、店内は大盛り上がりだ。

採算したい俺としては特に旨味はないのだが。というか、やつぱり商店街で十万円も使い切るのは難しいのだろう。まあ、財布を落とさない限りはどこかで使っていればいずれ使い切れる筈だ。

大繁盛で混雑する店内で食べる事は諦めて、俺達は持ち帰りでアイスを買う事にす。俺はチョコレート味で、モカがバニラアイスだ。

小皿代わりのコーンを持って、近くの公園のベンチに座る。

なんかデートみたいだなと、そんな変な事を思った。モカからしたら迷惑な話だろうし、口には出さない。

「美味しいな」

特に意味もなく、語彙力も表現力もなく、自然と口からそんな言葉が出る。

モカは人差し指を唇に向けて、そんな俺のアイスをジツと見詰めていた。

「……食べたいのか」

「ほら、他の味も試したくなるのがJKって奴じゃーん？」

いや、JK関係なくない？

「しょうがな——」

「あーん」

して、突然モカは目を閉じて口を開いてその場で固まる。

「——何してんの」

「見た目通りだよー?」

いやー、いやいやー。そうだねー、見た目通りだねー。他に言い表せないもんねー。

食わせろと?!

商店街も賑わいを見せる午後三時、公衆の面前で女の子にアイスをあーんしろと?!
何その羞恥プレイ。ゾクゾクしちやうわ!! 俺を社会的に殺す気か?!

「ダメなのー?」

なんだその上目遣いは!!

もはや俺に選択権などなかった。

何? 女の子ってこういう事平気でしてくるものなの?

「……口を開けい」

「あーん」

瞳を閉じてアイスを待つモカの無防備な口の中に、スプーンですくったアイスを入れる。
る。

少し表情を緩めたモカは、口の中でアイスを転がしてから「あまーい」と笑顔で
呟いた。

「そりゃ、アイスだからね」

満足気な表情の彼女を見て、俺はふと思い出す。

あれ？ これ間接キスじゃね？

「しよーくん、どーしたの？」

そんな事は気にしていないのか、モカは首を横に傾けて俺に顔を近付けてけた。湿った唇が嫌でも視界に入る。柔らかそうな、甘そうな。ほんのり香るシャンプーの香りが、トリップしていた俺の意識を戻した。

「な、な、な、な、なんでもごさいませんわよ」

何緊張しちゃってんの俺。相手はモカだぞ。いや、モカは可愛いんだけど——いや、そうじゃなくて。

「しよーくんも食べるー？ 人生のように甘いアイスだよー」

自分で使っていたスプーンを使ってアイスをすくったモカは、それを俺の口に向けてくる。

何を緊張する事があるのか。たかだか間接キスだ。高校生なら普通だよ。

「人生つてのは苦いんだよ」

いかん、テンパってツツコミがおかしい。しつかりしろ山田。お前のツツコミはそん

な物か。

「えー、甘々だと思っけどなー。はい、あーん」

近付いてくるスプーン。もはや逃げ場もなく、俺は眼を閉じてアイスを口に受け入れる。

甘い。とにかく甘い。もうなんか色々甘い。冷たいアイスの筈なのに、顔は熱くなつて口の中のアイスは一瞬で溶けた。

俺は何をこんなに火照ってるんだろう。

「美味しいー?」

「美味しい」

「でしょー」

満足気なモカは、自分のアイスを笑顔で口に放り込んでいった。

俺はそれを見ながら、頭を冷やすためにアイスを食べる。この冷たさが今は丁度良いくらいだった。

「ねー、しょーくん」

青い空を見上げて、彼女はゆっくりと言葉を繋げる。

「……やりたい事は、見付かった？」

その言葉はどちらの意味なのか。

今日——今からやりたい事なのか。

それとも——俺が全力でやりたい事なのか。

どちらにしても、俺は答えを言えなかった。

答えを先延ばしにして、今が楽しければ良いと逃げて。

結局此処にいる俺はなんの答えも出せていない。

でも何かを言わなければいけない気がする。

そうしないと、この時間がなくなってしまうそうで。

「俺は……俺は……」

—— だけど、言葉が出なかった。

出る言葉がないのだから。

今だから全力でやりたい事を、俺は見付けられていないのだから。

「俺は——」

「あ、翔太君にモカ！ こんな所で何してるのー？」

背後から聞き覚えのある声が聞こえて、俺とモカは揃ってその声の主に視線を向ける。

ピンク色の髪を揺らすひまりちゃんは、クレープを持ったまま俺達の座るベンチに向かって走ってきていた。

「ひーちゃんじゃーん。おすおすー」

何気ない顔で挨拶をするモカの隣で、俺は顔を逸らしてもう一度アイスを食べる。あーんとか、見られていたりするのだろうか。なんて事を妙に冷静に考えていた。

「こんな所で二人きりなんてー、もしかしてデート？」

何を考えているのか、ひまりちゃんは眼を輝かせてそんな事を聞いてくる。俺は口も含んでいたアイスを吹いた。

「そーだよー？」

「おいしいおいしい!!」

誤解を招くような返事をしないで?!

いや、確かに男女が二人きりで遊んでたらデートかもしれないけどさ。

俺達はそんな関係じゃないでしょう。いつかもそれで蘭と一悶着あったでしょうが。

「や、やっぱり二人って……。モカー、なんであたしに教えてくれなかったのー!」

「完全に勘違いしてますなー」

「え……。ど、どつちななの?」

困惑するひまりちゃんを見ながら、俺は両手を上げてモカのジョークだと訴えた。

ひまりちゃんはそれを見るなり頬を膨らませて、モカに「もー! 紛らわしいよー!」と抗議する。

俺とモカじゃ釣り合わない。

俺となんか——いや、下向きな事ばかり考えてもダメか。

少なくとも、まだ何も探せていない俺とモカでは釣り合わないんだ。

「なあ、モカ……俺探すから」

無意識の内に、そんな言葉が漏れる。

彼女と釣り合わないからどうした。俺とモカはそんな関係じゃない。

それでも、彼女と居ると前に進まなきゃいけないと思ってしまうんだ。

このままじゃいけない。

置いていかれてしまいそうで。

せめて彼女の隣じゃなくて、後ろでもいいから、そこに居させて欲しい、

どうしてか、そう思った。

「そっか」

彼女は笑顔で短く答えてくれてから、ひまりちゃんが膨らませた頬を突く。

「ひーちゃん、プニプニだねー」

「それもしかして太ったって事?!」

「ぷーちゃん、プニプニー」

「待って! ぷーちゃんって何?!」

この賑やかな場所から離れたくない。

だからせめて——

「ぷまりちゃん、そこに美味しいアイス屋があるんだが」

「翔太君まで?! 待って、あたしそんなに太ってる?! ねえってばー!」

——今だから全力でやりたい事を探すんだ。

答えを探して

きつと、俺には眩し過ぎたんだと思う。

届きもしない場所で輝いている太陽に手を伸ばして、赤く染まった夕焼けは俺から離れて行くように黒く染まっていった。

走ったら太陽に追いつけるだろうか。

走り続けたらずつとあの空を見ていられるだろうか。

俺なんかそんな事が出来るのだろうか。

そう思つて立ち止まつて、毎日やってくる夕焼けを待つだけの俺はふと思う。

別に太陽に届かなくても良い。せめて走り続けて、あの空を見続けていたいんだ。だから、探すんだ。

「お仕事お仕事楽しいなあ〜」

変わっていく空を見上げながら、窓際に設置されている本棚の整理をする。

山田翔太は社畜だ。最近ちよつと休みが増えたけど、やっぱり社畜なのは変わらない。平日なんてほぼ出勤である。

一応高校生なんですけどね。

「お仕事お仕事楽し——ハ?! いや、なんだこの歌は……働き過ぎて遂に頭がイカレたのか」

無意識に口ずさんでいた歌に自分で絶望しながら、俺は心を切り替えようと頭の中で別の曲を流した。

最近聞き出した *Pasteil*Palette's* の曲。その中でも耳に残るのは商店街で始めて聞いた曲で、名前はなんだったかな。

「お仕事お仕事、楽しいよ〜。お仕事楽しいよ〜お仕事」

歌詞が思い出せないといルルルとかラララとか歌うのが、疲れてるのかなんか自然とお仕事になるんだけど。

サビの部分歌ったんだけど、なんかもう酷い。えーと、ちゃんと歌詞を思い出して。

「♪」

「あ、山田君！ こんな所で何してるのー！」

「うわあああああああ!!！」

突然背後から話しかけられて、俺は悲鳴というか絶叫を上げる。

普通にアイドルの曲を歌ってるのを聞かれるのだけでも充分に恥ずかしいのに、それを本人に聞かれたのだ。

「奇遇だねー！」

背後に立っていたのは、薄水色の髪と小さな三つ編みが特徴的な整った顔の女の子。

Pastel*Palettesというアイドルバンドのギター担当——氷川日菜である。

そして俺が口ずさんでいたのはそのPastel*Palettesの曲だ。この事態の意味が分かるか？

もうなんかね、死にたい。死のう。

「こんな所で何も、奇遇でもなんでもなくここは俺の職場なんですうううう!!!」

なんとか冷静を保って返——せてないね、全然冷静じゃないよ。窓に映る自分の顔

は真つ赤だった。もう殺してくれ。

「あつははー、顔真つ赤だよ？ どうしたの？」

な、なんだ聞いてなかったのよ、良か——

「ところでさつき歌ってたのって、Y・O・L・O!!!!だよな？」

「聞いてたのかよおおおお!! なら聞いてくるんじやねーよその通りだよもおおおお
おおお!!」

何この人！ 人の気持ちに分からないのかな?! サイコパスかアンタ!!

しかし俺が歌っていたのは、彼女の言う通りP a s t e l * P a l e t t e sのY・O・L・O!!!!である。

商店街でモカが教えてくれたのをきっかけに、最近よく聞くようになった曲だった。

「でもどうして顔が赤いのかなー？」

「いや、それは——」

「あ、分かった！」

なんかよく分からないけど絶対に分かってないだろ。

「あ、リサちー。聞いて聞いて！ 山田君ってばね——」

学校帰りで一緒だったのか、後から店に入ってきたリサさんを笑顔で呼び付ける日菜先輩。

「エロい本の表紙見て顔真っ赤にしてるんだよー!」

「お前はバカかああああああ!!!」

確かに本棚の整理してたからエロ本も近くにあるけど!! 男の子だしチラ見したりするけど!!

この赤面は断じて違うからね。しかもよりによつてリサさんに言うって何考えてるのこの人!!

「山田君も男の子だしねー。でも日菜、男の子のそういう部分には出来るだけ触れてあげないのが女子力って物だと思っよ?」

「違いますから!! 誤解ですからあ!!」

もう泣きたい。いや泣いてるわ。なんか大粒の涙が床に垂れてる。

「そーなんだー。でも面白い山田君が見れたからあたしは満足だなー」

鬼かコイツ。

「……いや、実は——」

かくかくしかじかで——と、リサさんへの誤解を解く為に俺は事情を話した。本当の事情もそれはそれで恥ずかしいのだが、背に腹はかえられぬという奴である。

「なるほど、つまりパスパレの歌を歌ってるのを本人に聞かれて顔を真っ赤にしてただけで。えっちな本を読んでいた訳じゃないんだね」

最後の確認入りますか？

「はい……」

「そんなに恥ずかしい事かなー？ あたしも、歩きながら歌ったりするけどなー」
あなたと一緒にしないでほしい。

「まあ……気持ちが変わらなくはないかな。シャワー浴びてる時の鼻歌とか、家族に聞かれたりしてると恥ずかしく思う事もあるよね」

「ほう……」

「山田君？」

「あいやあ！ なんでもないです!! ですよね！ 俺も思います!!」

断じてリサさんのシャワーシーンを想像していた訳じゃないぞ。俺は健全な高校生だ。ある意味な！

「でも、他のパスパレの曲じゃなくてY. O. L. O!!!だったのは妬いちやうなー」
明後日の方を見ながら、日菜先輩は別に声のトーンも落とさずにそんな事を言う。
どういう意味なのか分からない。

「ドユコト」

「山田君知らないんだ。Y. O. L. O!!!の作られた経緯。モカとかに聞いてるかと思っただけ」

「何を言ってるのかさっぱりですね」

経緯って何。

「あの曲はねー、蘭ちゃん達に作ってもらった曲なんだよ」

何やらとても楽しそうな笑顔で、日菜先輩はそんな事を言った。

一瞬何を言っているのか分からなかったが、一周回って色々な事が理解できる。

「だから……」

曲調というか、その曲の本質というか。あまり音楽に興味がある訳じゃないが、俺がずっと好んで聞いていた曲に似ていたんだ。

——Afterglowの曲に。

「いや、なんか……すみません」

それに気が付いて、俺は苦笑しながら日菜先輩に謝る。

申し訳ないというかなんというか。どうも言葉に出来ない気分だった。

「別に良いんだけどさー。でもなんだろう、この気持ち。モヤモヤする」

どうしたのこの人。

「日菜って負けた事ないからさ」

そんな彼女を横目で見ながら、リサさんは小声で俺にそう言う。

成る程、天才故の葛藤という奴なのかもしれない。

「しかしモカ達のグループが作った歌詞や曲を、日菜先輩達が演奏か……。面白いですね」

「でしょー！ あの時は凄いるんときたなー！ なんかこーねー、あたし達とは違う人の曲って新鮮でさー。いつもしゅわしゅわしゅわなのに、その時はガラガラ〜って感じだ！」

何言ってるか全然分からないんですけど。

「いや、しかしそうか……。曲作りか」

無意識とまでは言わないが、俺はふとそんな事を呟いていた。

そもそも俺が無趣味なのは本当にやりたい事が見つからないからである。だったら、面白そうなものがあつたら挑戦してみればいい。

それにもし曲が作れるようになったりすれば——なんて事を考えた。

「リサさんって、歌詞コンテストだかに挑戦した事あるって話してましたよね？」

日菜先輩が帰った後、接客の合間に俺はリサさんにそんな質問をする。

モカに聞いた話なんだが、リサさんは歌詞作りの天才らしい。お菓子もお歌詞も作れるんだと、自分の事のように話してくれたっけか。

「んー、お菓子コンテストには参加した事ないけど。してみたいなー」

リサさんの作るお菓子美味しいからね。

いや、そうじゃなくて。

「作詞の方です」

「あ、そつちか。ごめんごめん。……うん、一応ね。……落選しちゃったけどさ」

「目を逸らしてそう言うりサさん。もしかしたら触れたらいけない話題だったのかも
しれない。」

「作詞に興味があるの？」

「ちよ、ちよつと……ちよつとですよ」

理由とか恥ずかしくて言えない。

「ふふーん、成る程ねえ」

妙に頬を緩ませるりサさんは、急に「よーし、今日この後山田君空いてるよね？」と
聞いてきた。俺は即答する。

「アタシがおかし作りの基礎を教え込んでいじゃうぞー！」

「これはもしや、りサさんと初デート——なんて事を少し前なら思っていたかもしれ
ない。」

ただ、今の俺にそんな余裕はなかった。

焦っていたんだと思う。

バイトが終わった後、ファミレスでリサさんのよく分からない歌詞講座を必死に聞いた。

家に帰るなりノートとペンを持って珍しく机に向かう。両親に心配されたが、無視してとりあえず前に進んだ。

「……やめるか」

でも結局、俺は立ち止まる。

三日坊主とかそういうレベルですらなくて、結局最後まで全力で取り組む事が出来ないんだ。

何処かで冷めてしまつて、熱が続かない。何をやってもそう。

この十五年間ずっとそうだった。

今更変わる事なんて出来るわけではない。

「クソが」

何の意味もない文字の羅列が書かれた紙を、破って捨てる。
ふと携帯を見るとメッセージが丁度届いた所だった。

『しょーくん』

短文。

『日曜日休みだよね?』

『暇?』

直ぐに『暇』と入力して、俺はその文字を消す。

「暇だよ……」

遊びたい。その時が楽しければ良い。

そんな事を思ってる奴と、彼女みたいな今を本当に大切に生きてる奴が釣り合うわけがない。俺なんかが隣にいて良い訳がない。

『ごめん、その日はやりたい事があるんだ』

それなのに、俺は見栄を張った。救いようのない嘘をついた。

『了解』

『楽しんでー？』

『頑張れー？』

『またね』

返事を返せない。ただ既読だけが付いたメッセージを見て彼女が何を考えるだろうかとか、そんな事を考える。

それでも、何かメッセージを送る事は出来なかった。何度も文字を入力しては、それを消す。

——やりたい事は、見付かった？——

「やりたい事が見つかったんだ」

ただ、その言葉が言いたいただけだったのかもしれない。

結局俺は、何も出来ない。

「こんなんじゃないダメだよな……」

どうしたら良いのか。どうしたら何かを頑張れるのか。

一人で考えても答えが出ないなら——

「——ツグる方法でも教えて貰うか」



「いらっしやいま——山田君？」

「おはよう、つぐみちゃん」

日曜日。モカにはあんな連絡をしたが、実際用事なんてなかった俺は羽沢珈琲店に来ていた。

つぐみちゃんに席を案内してもらいながら、俺は店内を確認する。

これでモカがいたらちよつとした大惨事だからね。

別に何も後ろめたい事はないけど……。いや、あるか。

「今日もモカちゃんど？」

お水を持ってきてくれたつぐみちゃんは、さりげなくそんな事を聞いてきた。心が痛い。

「いや、ちよつとつぐみちゃんと話したくて。あ、朝食のBセットで」

言い掛けた時に凄く恥ずかしい事を言っている事を自覚したので、俺はもう吹っ切れてキメ顔でそう言う。

当のつぐみちゃんは「ええ?! 私と?!」と顔を真っ赤にしていた。可愛い。

いや、凄く申し訳ない気分だ……。

「まあ……ただの相談事なんだけでも」

「相談事……？ うん、私で良かったら全然聞くよ！ バイト終わりが十一時くらいなんだけど、その後でも良いかな？」

「ありがとう。食べながら待つてるよ」

真剣な表情で答えてくれたつぐみちゃんにお礼を言つて、俺はつぐみちゃんのバイトが終わるのを待つ事にする。

どうも話によれば巴とひまりちゃんも来るようだ。

モ力は来ないって聞いた時にホツとしたのは、誘いを断つた後ろめたさもあるけれど

「趣味がなくて自分に自信が持てない、か」

羽沢珈琲店の一角に集まった巴とひまりちゃん、それにつぐみちゃんの前で俺は今の悩みを彼女達にぶつける。

あまり人に相談とかした事ないから、少し恥ずかしい。

「山田君……」

俺のそんな話を聞いて、残念そうな表情をしたのはつぐみちゃんだった。

彼女はお化け屋敷で俺の事を褒めてくれていたから、今の俺の行動はそんな彼女の気持ちを蔑ろにする事になるんだろう。

「ごめん、つぐみちゃん」

「あ、謝らないで！ でも、私は山田君は素敵な人だと思うよ！」

なんですかそれ告白ですか。惚れますよ。

「でもなんで急にそんな事思ったの？ そんなに気にする事じゃない？」

ひまりちゃんは首を横に傾けてそう言った。

確かにその通りだろう。

なにせ俺はこの十五年間それで良いと思って生きてきたんだ。

それが急にどうしたって話である。

「なあ、翔太。アタシ達友達だよな？」

「急に何ですか恥ずかしい」

詰め寄ってくる巴に怖気ついて身を引くが、彼女は更に俺に詰め寄ってきた。
「友達だよな？」

そして念押しされたその言葉に、俺は首を縦に振るしかない。

それを否定する要素はないだろう。何度か一緒に遊んだし、彼女達がどうあれ俺は友達だと思っているのだから。

「それじゃ、遠慮しないからな」

巴はそうとだけ言って、一度自分の席に戻った。そんな彼女を見るひまりちゃんの表情は、何かに怯えたようなそんな表情。

「え、えーと、巴……さん？」

「翔太」

真剣な表情の眼光に睨まれて、俺は動きが取れなくなる。これが蛇に睨まれた蛙の気分なのだろうか。

「これは買い被りかもしれないけれど、もしアタシ達を見て自分の事を蔑んでるなら許さないぞ」

「そ、そんな事は……」

凶星だった。

それで、許さないとまで言われて俺はどうしたら良いか分からなくなる。

この関係が壊れるのが怖い。

今がなくなるのが怖い。

「と、巴ちゃん……っ」

「だってアタシ達はそんな理由でバンドを組んでるんじゃない。自信がない？ アタシだって自信なんてないよ。アタシはあこの前に胸張って立っていられる姉で居ようって、必死になってる」

彼女達がバンドを組んだ理由は知っていた。

五人が一緒にいる為に。

そんな単純だけど、大切な理由。

「確かに今はAfterglowとしてバンドをやるのは楽しい。でもアタシ達は、自分に自信を持つ為にバンドを組んだ訳じゃない」

「そうだよな……」

彼女達にとつては当たり前前の事なのだろう。

真剣な表情で、彼女は俺の目を見ていた。

「アタシ達だって、別にやりたい事や趣味があるからって自分に自信がある訳じゃないぞ。つぐみなんて、自信がなさ過ぎるくらいだ」

「わ、私はだって……その」

俺に吊られるように俯くつぐみちゃん。なんだか申し訳ない気分だが、巴はそんな彼女を見ながらこう続ける。

「でも、つぐみが居なかったら……少なくともAfterglowは無いと思う。自分で思ってるより、他の人から見たらその人は凄い奴なんだよ……って、自分でもちよつと何言ってるか分からなくなってきた」

あははと笑いながら、巴は仕切り直すように笑顔を向けてくれた。

「翔太だって凄い奴だと思うぞ。モカが失くした財布を見付けてくれたし」

「いや、あれは……」

結局あの財布を見付けたのは俺じゃない。俺は何もしていない。

そう思つて俯くと、今度はひまりちゃんが席を立て詰め寄ってくる。

「そもそも、モカがあれだけ大切にしている財布をプレゼントしたのは翔太君でしょ？
もつと自信持ちなよ！」

「私が言うのも変かもしれないけど、山田君はもう少し自信を持つても良いと思うんだ」
ひまりちゃんをつぐみちゃんにもそう言われて何も感じない程不貞腐れている訳ではなかった。

ただ、どうもモカの事を考えるとモヤモヤする。
彼女を遠くに感じてしまう。

「ありがとう、三人共」

どうしてそれが嫌なのかも、分からなかった。

見付かった答え

青空を見上げながら、似合わない事してるなど息を吐く。

羽沢珈琲店を後にした俺は、一人で公園のベンチに座っていた。

「自分に自信を持つために始めた訳じゃない、か」

よく考えたら当たり前の事なんだろう。

そもそも趣味なんてものは探す訳じゃなくて、知らず知らずのうちに始めているものだ。

探す時点で間違っているのかもしれない。

ならどうしたら良いのか。

「分からん」

「何が」

「うわあああ?!」

突然背後から声を掛けられて、俺はその場から飛び退いて後ろを確認する。視界に入ったのは上品な顔立ちの黒髪の女の子だった。振る舞いというか、服装からするに高貴な家柄の人なんだろう。

何処かで見覚えが――

「誰？」

――いや、ない。俺の知っている彼女はこんなに上品じゃない。

「は？ 何言ってるんの山田」

しかし、不機嫌そうな表情でドスの効いた声を出すのは正しく彼女美竹蘭だった。

嘘でしょ。

「蘭……？？」

「それ以外の誰に見えんの？」

目を半開きにしてそう言う彼女は「隣良い？」と俺の返事を聞かずに隣に座ってくる。どうしてか花の匂いがする彼女だが、座ってからは喋らなくなってしまった。

いや、これどういう状況。

「なんでそんなお上品なんざます?」

「何その話し方。うざいよ」

泣きたい。

「これはその、花道の集まりの後だから」

目を逸らしながら、彼女は淡々とそう言う。

えーと、花道ね。なるほどなるほど、花道ね。

「はああああ?!」

「山田ってなんでいつもそんなにオーバーリアクションなの……」

いや、だってあの美竹さんだよ?! あの美竹さんが花道?!

しかし、彼女をよく見てみるとその道に相應しい振る舞いというか上品さが漂っていた。

普段のロックでクールな美竹さんはどこに行ったのか。

「こういう性分なんです……」

「あ、そう。で、こんな所で何してんの?」

そう聞かれて、俺はどう答えれば良いのか分からない。答えは何もしていない、だからか。

ただありのままを答えれば良いのだろうが、俺はまだ自分が何もしていないのが許せないでいる。

「こんな所で立ち止まっても、何も見つからないよ」

何も答えない俺にしびれを切らしたのか、蘭は俺の事は見ずにそう言った。

まるで事情を知っているような口ぶりである。

「巴達か……」

「少しだけ会ってきて、話を聞いてきた。本当は今日バンドの練習だったんだけど、花道の集まりに行かないと行けなくなつて皆に迷惑かけたから」

それでモカから遊びに誘われた訳か。

「あたしはさ、山田の気持ちに少しだけ分かるよ」

「え？」

唐突にそんな事を言った彼女は、色を変えていく空を見上げながらこう続けた。

「確かに、花道もバンドも自分に自信をつける為に始めた訳じゃないよ。……あたしは皆と居る為に必死でやったんだと思う。今はそんな事ないけど、あたしも前は花道なんてやりたくなかったから」

花の形をした髪飾りを触りながら、彼女はゆっくりと俺の事を見る。

その瞳に夕焼けが映って眩しい。

ただ、目を背けたらいけないと思った。

「モカと一緒に居たいんでしょ？」

返事が出来ない。

どうしてだろう。

きっと、俺はその気持ちに気が付いている筈だ。

でも、その気持ちを認めるのが怖い。

これまでの関係が壊れるのが怖い。

だからその先は言わないでくれ。

お願いだから、俺の今を壊さないでくれ。

「好きなんですよ、モカが」

確信めいたその言葉は、俺の耳に残って何度も頭の中を回る。

そうだよ。

俺は彼女が好きなんだ。友達としてじゃなくて、異性として。

彼女という時間が楽しくて、幸せで。でも、それが壊れるのが怖い。この関係が壊れるのが怖い。

何もない自分が見捨てられるのが怖い。置いて行かれるのが怖い。

怖くて、寂しくて、ただ震えているだけの自分が情けなかった。

「だとして、俺にその権利はないよ……」

「バカじゃないの？」

眉間に皺を寄せて、蘭は少し大きな声でそう言う。

俺はそれにビックリして、彼女の顔を見た。目の周りが少し腫れているようにも見える。

「誰かと一緒に居たいって、そんなの誰にでもある権利じゃん。その為に頑張るか頑張らないかのどっちかじゃん。だからあたしはバンドも花道もやってる。山田だって――」

「俺は何も頑張ってるじゃない」

必死に言葉を並べる彼女の口を遮ったのは、そんな下らない言葉だった。

「一緒にするな。誰だって自分みたいに頑張れると思わないでくれ。俺みたいな何にも出来ない奴だって居るんだ。お前達はな、常人からしたら雲の上みたいなの――」

そして俺のそんな言葉を遮ったのは、涙目で放たれた平手打ち。

我に返って蘭の顔を見ると、大粒の涙が頬から地面に落ちていく。

俺は自分が言った事を思い出して、今にもここから逃げてしまいそうになった。

でも、それだけははしたらいけないと辛うじてこの足は動かない。ただ、足と地面を縫い付けられたように硬直する。

「皆をバカにするな」

彼女達が特別な訳がない。

皆だって必死になって音楽をした筈だ。初めから上手くいって、なんの苦勞もせずにバンドを始められた訳がない。

そんな事分かっていては筈。モカにギターを教えてもらって、それだけでもどれだけ大変か分かっていては筈なのに。

「(イ)めん……」

「……モカは、興味ない事にはとことん興味ないから。権利がないとか、そんな訳ない

よ。……でもさ、今の山田は本当にダサイ」
涙を拭って、彼女はそう言う。

そうだな。最高にダサイ。

格好悪い。

「山田が本当に何もなくて、つまらない奴ならモカもあたし達も一緒に居たりしない。それだけ覚えてくれれば、あとは山田が頑張って前に進めば良いんじゃないの?」

蘭はそう言って、俺から目を逸らした。恥ずかしい事を言っている自覚はあるのだろうか。言われた俺も恥ずかしい。

「ありがとう……」

「別に……」

夕焼けを見ながら、俺達は二人揃って沈黙した。

ただ黙り込む俺の横で、彼女は何も言わずに側にいてくれる。答えを待つように。

「何をしたら良いのかは分からないけどさ、一つだけやつと分かった事があるんだ。いや、認めたくなかったただけなんだけどさ」

「何？」

やつと口を動かした俺に対して、蘭はゆっくりと身体を向けて真っ直ぐ俺の目を見てくれた。

ちやんと言おう。

逃げずに、前に進もう。

「俺は、モカが好きだ」

蘭の目を見て、俺はしっかりとそう言った。

目を背けていたんだと思う。この気持ちを認めたら、これまでの関係ではいられなくなると思っていたから。

「あいつといる時間が何より楽しくて、幸せに感じる。これまで何もなかった俺に、何かを与えてくれたのは間違いない。俺はその何かを探して、全力でやって。あいつの隣にいたい」

自分でも恥ずかしい事を言っている事くらい分かっていた。

それでも、本人に言うよりは遥かにマシだろう。

今はこの気持ちをとにかくぶつけない。それが蘭なら丁度いい。

「モカとバイトしてる時が一番楽しいし、あいつが何か食べてるのを見るとほっとする。ライブに行ってもずっとモカの事を見てた。あいつが何かを全力でやってる姿に憧れてた。そんなモカが俺と遊んでくれるのが最高に嬉しかった。……俺は、青葉モカが好きだ」

顔が熱い。こんなに本気で喋ったのは生まれて初めてかもしれない。

気が付いたら蘭も自分の事じゃないのに顔を真っ赤にして「そ、そろそろ止めて」とついに顔を逸らした。

いや、うん。申し訳ない事をしたよね。でも、スッキリしたよ。

「悪いな。でも、あと一つだけ。モカってき、最高に可愛いよな」

「ちよ、吹っ切れた山田怖い。もうそのまま告白してきたら……?」

「それは無理」

「なんなの」

「ごめんなさい無理です!! 今にも心臓が弾け飛びそうなんですよ!!」

「ありがとな、蘭」

「別に」

俺がお礼を言うと、蘭はいつものように顔を逸らした。

そんないつも通りに、俺は少しだけホッとする。

「少しだけ前に進めそうな気がするよ。あいつを追いかけられそうな気がするよ」
「そっか」

空が完全に暗くなってから、俺達は公園を後にした。

送っていくと行ったら断られて、真っ直ぐに家に帰る。

一人でいると色々考えてしまう悪い癖があるが、今はどうもそれが楽しかった。



「そっかー、歌詞作りはやめちゃったんだ」

平日のバイト先。

リサさんと二人きり。

思えば俺は彼女に勝手に片思いしていた訳で、しかも今はモカに片思いしている訳で。我ながら最低な人間である。

「どうも難しくてですね……。あ、そうだ。リサさんに言っておかなきゃいけない事があるんですよ」

それでも俺は、少しでも前に進もうと思った。

「え？ どうしたの、急に」

「俺、リサさんに一目惚れしてたんですよ」

「うえええええ?!」

俺の突然の告白に顔を真っ赤にするリサ先輩。

え、何?! 脈ありだったの?! ショックなんだけど?! それとも顔真っ赤にして怒る程嫌だったの?! ショックなんだけど!!

「……し、してたって事は。今は違うって事?」

何故か周りや店の外を執拗に確認してから、リサさんは小声でそう聞いてくる。

その震え声はなんですか。そんなに嫌だったんですか。泣きますよ。

「ですわ……」

「そっかー、そっかそっかー」

しかし俺の返事を聞いたリサさんの反応は、なんとも言い難い。まるで内心を察せられたような反応だった。

「モカでしょ」

「どうして分かった?!」

して、俺の思っている通り心を見透かされているのか。

彼女は自信満々にそう言うと、俺の反応を見て「うっはー」と妙にテンションの高い溜息を吐く。

「いやー、でも山田君がアタシに一目惚れしてたつてのは驚いたなー。女の子ってそういうのはやっぱり嬉しいし」

「それじゃ、俺がもし告白してたら付き合ってくれてたつて事ですかね？」

「それはないかな」

俺はその場に崩れ落ちた。大粒の涙でコンビニの床を濡らす。

あはは、あはははははっ、掃除しなくちゃ。お仕事だもんね！

「気持ち嬉しいけど、その気持ちを受け取れない事情があつてさ」

リサさんは目を逸らしながらそう言った。

なにそれ気になるんだけど。まさか彼氏持ちか?! くそ!! 羨ましいぞ畜生!!

山田翔太ブレブレである。

いや、普通に最低だな山田翔太って奴誰だよ。俺だよ。

「それで、モカには告白するの?」

「ここぞという時に女子力を発揮して、リサさんは俺にそう詰め寄ってきた。」

「いや、まだ無理ですね……」

ただ、俺は目を逸らしてそう返す。

確かに俺の中にあつた気持ちの整理は出来たかもしれない。

進むべき道は見付けられた。だけど、俺はまだ前に進めてはいない。

「探したいんです」

「探したい……?」

「俺も、モカや皆みたいに今だから全力でやりたい事を」

それを見付けたら、俺はモカに告白する。

何かが変わる訳ではないだろうし、振られるかもしれない。それでも、これが俺の決めたケジメだった。

——やりたい事は、見付かった?——

あの質問の返事をする為に。

「ちやーすゝ、モカちゃんは遅れてやってくるゝ」

「よ、モカ。遅刻の罰として俺の涙で濡れた床を拭け」

「開幕しよーくんのテンションが意味分かんないよー。リサさん助けてゝ」

「あつはは、たまには良いんじゃない？」

リサさんは何故か安心したような表情で、俺とモカを指差して笑う。

「モカシヨーはモカちゃんがボケだから、しよーくんはボケたらだめなんだよ？」

「そもそもコンビ組んでないからね。俺だつてたまにはボケたい年頃なんだからね?!」

こんな今が欲しかったんだ。

こんな今だから、全力で何かをしたいんだ。

そして俺は――

「はい、ストップストップ。とりあえずモカは着替えてきてね。そろそろお客さん沢

「山来る時間だぞー」

「はーい」

「しょうがない、自分で床を拭くか。モップモップ」

「あれ、ここ濡れてる。しょーくんお漏らし？」

「涙だって言っただろ!! とつとつ着替えてこい!!」

——彼女に告白する。

「多分、もう見付かかってるんだと思うけどなー」

「え、リサさん何か言いました？」

「なーんにもー。さて、今日も頑張つて働こーう！」

「お〜」

「着替えるの早っ！」

そうして俺は、少しだけ前に進んだ。

普通のいつも通り

山田翔太の朝は早い。

午前五時に起床した俺は、洗面台で歯を磨いてから顔を洗う。

念入りに洗顔を終えた後は服選びだ。どうせ着替えるのだが、少しでも格好付けたいというのが男の子の心なのである。

今日この後の事が楽しみで鼻歌まで漏れる始末だ。随分と浮かれているようである。

「こんな朝早くから何してんのあんた」

「おはよう母上様。今日は良い天気だね」

寝ていた母親を起ここしてしまつたらしいが、俺は気にせず窓の外に手を伸ばしてそうほざいた。

「曇りだけど」

暗雲である。

「なんか気分良さそうじゃん。彼女でも出来た？」

「ち、ち、違うけどお??」

「産まれたばかりの子鹿みたいになってんぞ。いや、でもその反応なら違うか」
流星は俺の母親だ。なんかもうキレが違う。

「今の鼻歌、パスパレの曲でしょ?」

「待て、なんで四十のババアがパスパレを知っている」

「まだ三十九だぶつ殺すぞ」

嫌だこの親。実の息子に向かってなんて暴言を。

「私。パスパレのメンバーの一人と名前一文字違いなのよ」

そう言いながら、三十九歳のおばさんは両手の人差し指と親指だけを立ててゲッツ
(死語)のポーズを取った。

この平成初期のギャグみたいなポーズこそ、Pastel*Palettesのふわ
ふわピンク担当丸山彩のキメポーズなのである。

「あー、あの茶髪の子か」

そのパスパレのメンバーの一人、大和麻弥と我が母親山田真矢はひらがなにすると丁
度真ん中の文字だけが違うらしい。

凄くどうでも良い。

「もう推しちゃうよね」

「知るかよ。とりあえずそのポーズを止めろ」

「これはゲッツよ」

「それ死語だからね」

分からない人の方が多いからね。

「てか、あんたアイドルの歌聞く趣味なんてあつたっけ？」

「これにはコルカ溪谷よりも深い事情があるんだよ。それとは別にパスパレにはハマってるけど」

「あんたが何かにハマるなんて珍しい……。今日は晴天かしら」
「曇りだよ」

俺の事なんだと思ってるの。いや、なにも否定できないけど。

「で、そんなに気合い入れてどこ行くわけ？」

「ん？ ああ、えーとな」

財布とか諸々の準備を終えて、玄関先に立った俺は態々勿体ぶつてからキメ顔を作った。母親は若干引き気味である。

「バイトだ」

「息子が純情な社畜に育ってしまった……」

そう、本日土曜日も山田翔太はバイトに出掛けるのだ。

十五歳にして真の社畜である。



「ふ、早く来過ぎた」

誰も居ない事を確認して、俺は無駄に格好を付けてそう言った。

コンビニの前まで来たは良いが俺のシフトは午前八時からである。現在の時間は午前六時である。

「働くのが楽しみで時間より早く来ちゃうとかバカか俺はああ!!!」

あまりの痴態に俺は近くにあった電信柱に頭をぶつけながら叫んだ。見た目完全に不審者である。

いや何も、別にお仕事を楽しみでこんな事になっている訳ではない。この奇行にも意味はあるのだ。

「しょうがないよね、今日は朝から夕方まで好きな人とバイトで一緒だからね」

そう、山田翔太は恋をしている。片思いだけ。

自分の想い人と、なんともないイベントだけど一緒に居られる時間なんて事が楽しみで仕方がないのだ。純情な感情である。

「とりあえずイメトレでもするか」

もはや訳の分からないテンションで訳の分からない事をし始めるのは、片思い中の男の子にはよくある事だ。

「まずここでモカが来るまで待つて、あいつが来たら俺は爽やかな笑顔で——おはようモカ。今日もいい天気だな——と、言う。するとモカは——待ったー？——と、聞いてくるからすかさず俺は——ハハッ、今来たところさ——と出来た男の返事をする訳だ。

完璧だね。自分自身の才能が怖い」

いや——

「キモい奴かよおおおおお!!」

—— どう考えても危ない奴である。俺は電信柱を傾ける勢いで頭をぶつけた。側から見たら本当にやばい奴である。

「デートじゃないんだから待ったもクソもないよ。己が早く来てるだけだからね。てかなんで俺は一人でボケで一人でツツコミ入れてるの暇なの？ 暇だよ!! なんで二時間も前に到着してるんだバカか!! 社畜だ!!」

「なーにしてるさね山田君」

「あびいいいっ?!!」

朝の六時からコンビニの前で奇行に走っていると、店の中からゴミ袋を持ってきた高木さんに遭遇した。

その目は完全に不審者を見る目である。

やめろ。俺をそんな目で見ろな。

「おはようございま——す！　良い天気ですね!!」

「曇りだよ」

「この会話何処かで。」

「まだ六時なのになにやつとーね。……は、もしや——」

ハツとしたような表情で口を抑える高木さん。まさか俺の気持ちがバレているのか
?!

「私に会いたくて早く来ちやつたかー。いやー、可愛いねえ山田君は」

「自惚れるなクソババアああ!!」

やめろ。今の俺は確かにヤバイ奴かもしれないがそこまで行きたくない。

「まあ、せつかく来たんだから休憩室でも入ってたらどうだい？」

「そ、そうします」

普通に無難な行動を推奨された。流石に家に帰るのもなんだしね。

俺はバイト先でお茶とパンを買って休憩室に。当たり前だが物静かで誰もいない。

客すらいない。

一時間程経つと朝から出掛ける人が立ち寄っていく為、少しだけコンビニは賑やかになる。

手伝おうかとも思ったが、ベテラン高木さんは一人で全ての客を捌いていた。

本来この時間はもう一人バイトが居るはずなのだが、どうやら風邪で倒れていて休みらしい。

最近流行っているみたいなので俺も気を付けよう。

「お疲れ様っす」

「いやー、疲れたね。疲労で死ぬかと思ったよ」

冗談に聞こえないからやめて欲しい。

「モカちゃんはまだかねえ？」

モカと俺が来てから高木さんは帰る予定なのだが、その当人はまだ来ていない。

時刻は七時半なので来てなくて当たり前なのだが、高木さんは妙な笑顔で俺を見て笑っていた。

「まあ、数分遅れる事はあってもちゃんと時間には来る奴だから心配しなくていいと思います」

俺がそう言うのと、高木さんはさらに顔を歪めて笑いを堪えるように口を抑える。なにこの人怖いんだけど。まるで悪巧みする魔女だよ。

「ひっぴ、人生長いんだから楽しまなあかんよ。死んだら何も出来んさね。いやー、長生きしたいねー」

「心に来るブラックジョークやめて」

「この人は長生きしそうだなあ……」。

「ちーすく。メロンパン下さーい」

そんな話をしていると、二十分くらい早くモカがコンビニにやってきた。ここはパン屋じゃねえ。

「120円だよ」

「買わせるんかい。」

「諭吉で」

「地味に嫌な支払い方！」

「朝飯か？」

「そだよー。モカちゃんは目覚めたばかりで元気がないのです。およろこ」
女子高生が欠伸をしながらメロンパンに噛り付いている姿は珍妙である。

「中で食え中で」

「イエッサー」

敬礼をして休憩室に入っていくモカ。どうも俺は無駄に緊張していたが、結局はいつも通りなのだ。

俺もその方が気が楽で良い。

「頑張んな」

「うるせえ!!」

くそ、このババア気付いてやがる。

八時にもなると朝のピークの時間だ。俺とモカは特に仕事以外の会話もする事なく、テキパキと働く。

「しよーくん、このお菓子補充しといて〜」

お客さんが買った弁当を温めるついでに、モカはお菓子の箱を渡して来た。

子供に人気のあるスナック菓子だが、今忙しいこのタイミングでやる必要があるのだろうか。

ただ、この職場で彼女の采配が間違える事はまずない。ふとお菓子コーナーを見てみると、寂しそうな顔をした子供が二人見える。

なんでこういう事自分でやらないのかね、モカは。

「はい、補充です。ちよーつと退いてね」

俺はその子供達の間から、おそらく二人が欲しかったのであろうスナック菓子の箱を棚に置いた。

八時頃には半分くらいあったのに一時間ほどでなくなった人気のお菓子である。子供達二人は「わーい、やったー!」「お兄ちゃんありがとう!」と大喜びだ。

「沢山買ってってねー」

内心悪人の顔をしながら、俺は笑顔で子供達に手を振ってレジに戻る。

子供達にお礼を言われて嬉しくない訳もなく、むしろそれは接客業をやっている一番

楽しい時間でもあった。

モカってなんでこうやって人に手柄を渡しちゃうのかねえ。

十時ごろになるとそこそこ暇な時間がやってくる。ちよつとした休憩時間ともいえるよう。

「うー、疲れたよ。バイト終わりにスタジオで練習なのに」

「そういえば、明日がライブだったか。なんで働いてんの」

日曜日である明日、AfterglowはCIRCLEでライブの予定だ。俺も都合良く休みなので観に行く予定だが、本番の前日に夕方まで働いていて大丈夫だったのだろうか。

「まー、モカちゃん天才だし？ よー。失敗する要素が見当たらない」

何その死亡フラグ。

「そだ、しょーくん。今日のバンド練見に来るー？」

「いや、流石に迷惑だろ」

「人に聞いてもらっているという緊張感が、ひーちゃんの緊張感を高めてくれるのだよ」

「ひまりちゃん限定なんだな」

まあ、言われてみれば観客の有無は演奏に響いてくるかもしれないし一理あるか。

「まあ、皆が良いなら行く」

「確認済みです」

すつと俺に自分の携帯を見せるモカ。

おそらくAfterglowのメンバーが使っているのだろうトーク画面には、全員からの返事がちゃんと書かれている。

「仕事が早いな」

「元々、蘭がしょーくん呼んでって言ってたんだよねー」

え、蘭が？ どういう事だ。何を企んでるのあの人。

「しょーくんが良いなら、決定ねー。あと、練習終わったらファミレスでご飯食べるけど、どーする？」

「オーケー。ファミレスも付いてって良いなら付いてく」

「聞いとく」

パパッとメッセージを送ったモカは、お客さんが入って来た事に素早く気が付いて接客の準備に付く。

お昼からはまた忙しくなる時間だが、この後の楽しみも出来たし頑張るか。



バイトを終えた俺とモカはその足で練習スタジオのあるC i R C L Eに向かった。明日のライブもここでやるようで、玄関には明日の広告がデカデカと張られている。

「しよーくんを連行してきたよー」

「いやなんで俺は捕まってるの」

物騒な紹介をするモカにツツコミを入れながら、俺は既に演奏の準備を終えているスタジオに入った。

他の四人は衣装こそ着ていないが、本気表情で何やら話をしている。

耳を傾ければ、どうも明日演奏する曲と曲の繋ぎの話らしい。一旦間を空けるか、続いてそのまま演奏するかで悩んでいるようだ。

「お、来てくれてありがとな翔太」

真つ先に俺に声をかけてくれた巴は「聞いてもらった方が早いだろ」とドラムの元に向かっていく。

もしかしてさっきの相談内容を俺に判断しろという事ではないだろうな……。

「ちよ、待て。無理だからね?! 俺に音楽の話とか無理だからね?!」

「しよーくん、そこはフイーリングでなんとなく良いのだよ」

「良いわけなくない?!」

「いや、それでいいよ」

モカの爆弾発言を肯定したのは、ギター持ちながら音を確かめている蘭だった。

嘘お?!

「ただ単純に、聞いててどつちが気持ちいいか教えて欲しいだけだし」

蘭がそう言いながらマイクの調整をしている間に、他のメンバーも演奏の準備を終える。

有無を言わせるまもなく、巴がドラムのスティックで合図を出してから演奏が始まった。

曲の終盤の所から、勢いよく駆け抜ける。

そのまま演奏がゆっくりと終わって、少し間を置いてから次の曲の初めからを彼女達は演奏した。

少しだけ演奏を続けると、唐突にその演奏は打ち切られる。

蘭の「それじゃ、これと次どっちが良いか教えて」という言葉と同時に巴の合図で再び演奏が始まった。

再び曲の終盤からの演奏。

気持ちの良い勢いで駆け抜けたかと思えば、どこで代わったのか分からないタイミン
グで次の曲の演奏が始まる。

疾走感のまま、興奮が途切れない。

個人的にはどっちが良いかは明らかだった。

だけど、俺なんかの感覚で良し悪しを言って良いのだろうか。

「どっちが良かった？」

ステージの上からそう言う蘭は、やっぱり輝いて見える。

眩しくて、手が届きそうにない。

「しよーくんはさー、普通だよ」

唐突にモカはそう言った。

「バカにしてるのかな?！」

「そして、あたし達も普通。普通に演奏して、普通にどっちが良いか気になってるだけ」

「モカ……」

普通、か。

「後の方が、何というか疾走感があった。うまく言えないけど、気持ち良かった」
「ありがとう、その言葉が欲しかった」

蘭の望む答えが出せたようで、俺は一安心して胸を撫で下ろす。

ずっと悩んでいたのだろう方針が決まって、彼女達は安堵の表情を見せていた。

俺も少しは力になれたのだろうか。

その後、一通りの演奏を聞かしてもらってスタジオを後にする。

演奏に関しては特にいう事もない。いつも通り、俺の好きなAfterglowの演奏がそこにはあった。

「モカ、俺は普通か」

スタジオを出た所で、そんな質問をする。

「うーん、しょーくんはねー、うん。普通。あたし達も、いつも通り普通」

それが、普通。いつも通りの普通。

俺はそのいつも通りに入っているらしい。

その言葉が嬉しかった。

「よし、ファミレス行くか。今日は俺の奢りだ!」

「それじゃモカちゃんやんはAセットとポテトとチキンナゲットとメロンとソフトクリームとイチゴパフェと、それから——」

「遠慮とかそういう問題以前に人が食べる量じゃないよね?!」

「食べれるよー」

「普通に怖いわ!!!」

これが、俺達のいつも通り。

恋愛難易度と攻略法

音とは、言ってしまうばただの空気の振動だ。

リズムミカルな音楽も、都会の駅の喧騒も、小鳥の囀りから雑音まで全てただの振動である。

だけどそれは、受け取った人次第で感じ方も変わる物だ。この喧騒も、リズムも、雑音も——歌声もリズムも、俺は大好きだった。

気が付けば彼女ばかり見ている。

その時間は一瞬で。

やっぱり俺は、彼女の事が好きなんだと再確認する。

「お疲れさん」

日曜日。ライブイベントが終わり控え室から皆が出てくるのを待って、俺は差し入れを突き出しながらそう言った。

やまぶきベーカリーのオススメパン五つセット。おやつになってしまおうが、演奏で疲れた五人には丁度いいだろう。

「ありがとう山田君」

「おう。全部違う奴だから仲良く分けるよ」

この五人に限ってパンを取り合って喧嘩するなんて事は――

「ひーちゃん、そのメロンパンは一つしかないのだけど」

「そうだね。でも、私が最初に取ったよ？」

「やる気かな」

「私だってモカにやられっぱなしじゃないからね！」

――どうしようパンだけで喧嘩し始めた。

「あつはは、アタシは最後に残った奴でいいよ」

「モカもひまりも、早く決めて」

「だって今日はメロンパンの気分なんでもん！」

「モカちゃんからパンを取ろうなんて、あんまりだよひーちゃん」

「ふ、二人共落ち着いてー！」

どうしてこうなったのよ……。

「あー、もうはいはい。半分にしろ半分に」

俺は紙袋からメロンパンを取り出して、それを二つに割る。クッキーの部分に線が入ってるから、メロンパンって半分にしやすいよね。

「後なんか二人で選んでそれも半分にしたら良いだろ……」

「いやー、モカちゃんも初めからそうしたら良いと思ってたんだよねー」

「翔太君ってもしかして天才?！」

「バカではないかな。メロンパンで喧嘩する程バカではないかな」

「翔太君が酷い!!」

ライブに参加していたバンドのメンバーやお客さんの通る通路でこんなバカをやっている彼女達だが、ライブの時に全力で音楽に向き合う熱い気持ちを見せてくれるのもまた彼女達だ。

「お、つぐの選んだパンは新作か？」

「うん。気になったからこれにしたんだ。巴ちゃんも少し食べる？」

「メロンパン美味しー」

「こうしてひーちゃんの体重がまた増えるのであったー」

「モカ、ひまりより食べてるよね……？」

いや、でもなんかもう実は別人なんじゃないかって思えて来たよね。

「しよーくんも食べるー？」

「いや、俺は良いよ」

「あげないけどねー」

「テメエえええええ!! よこせえええええ!!」

「ひーちゃん、逃げよう」

「なんで私まで追いかけられてるのおお?!」

「三人共落ち着いて?!」

まあ、それが良いんだけどさ。

「君達ここで遊ばないで?!」

数秒後、CIRCLEのスタッフであるまりなさんに怒られたという話。

「いやー、走り回ったらお腹減ったねー」

さつきパンを食べたばかりの女子高生は、お腹をさすりながらそんな事を言う。

昨日も俺を含めた六人でファミレスに行ったのだが、せつかくのライブの日だからお疲れ様会という事でまた皆で晩飯に行くようだ。

一応俺は断ったのだが、どうしてかひまりちゃんに強制連行されている。どうやら聞きたい事があるらしい。

何かあるなら今直ぐに聞けば良いと思うのだが、今はダメだとかなんだとか。何を聞いてくるつもりなんですかね。

「しかし、いつものファミレスで良いのか？　なんかこう、少しくらい高い店でも俺は大丈夫だぞ」

「なんで翔太は自分で財布になろうとしてるんだ……？」

「山田君、流石に申し訳ないから今日は自分達で払わせてほしいな……」

「いやー、だってほら。お金の使い道がないし」

社畜を舐めるなよ。

「別に高いお店じゃなくても、あたしはいつも通り皆と居られればそれで良いし」
僕がいるからいつも通りじゃないんですけどね。

「それに、山田が財布になる事はないよ。うちには頼れるリーダーがいるから」
「ちよつと待って?! それ私が払う事になるの?!」

「冗談」

最近、ひまりちゃんの扱いがなんとなく分かってきた。

「ひーちゃん、ごちになりまーす」

「モカの代金だけは嫌ー!」

シヤレにならないからね。

そんな訳で、俺達はいつも通りのファミレスに辿り着く。

いつも通りのドリンクバーと、個性豊かな注文と。

ちよつと贅沢にデザートまで頼んだ俺達は夕食を楽しみながら談笑に浸っていた。

「それで、演奏中に私涙が出てきちゃってー」

「ひまりは大袈裟過ぎ」

「あつはは、ひまりらしいな」

「ひーちゃんはずぐ泣くからなー。あ、モカちゃんちよつとお花を摘んで来まーす」

話の途中でモカがトイレに行くと、さつきまで若干興奮気味にライブの感想を話していたひまりちゃんは急に表情を引き締める。

え、何どうしたのこの人。

「翔太君!」

「なんで話ぶった切れてんの……?」

さつきまでライブの話してたのに、モカが居なくなつた瞬間どうしたのさ。

「モカの事好きって本当?!」

「ブフウウウツツ!!」

唐突なその発言に、俺は飲んでいたりんごジュースを吹き出した。

なんとか顔を横に向けて誰かにぶち当たる事は回避したが、この人こんな公衆の面前で何言ってくれるの?!

「蘭か!!」

「いや、別にあたしが言わなくても当人とひまり以外は全員気が付いてたけど」
嘘だろ……。

「ご、ごめんね山田君! ひまりちゃんも気が付いてると思って、私あの後言っちゃって……」

ひまりちゃんに俺の気持ちをバラしたのはつぐみちゃんらしく、とても申し訳なさそうな表情で謝ってくる。

流石につぐみちゃんを怒る理由はないが、とても厄介な人に気が付かれたと知って頭が痛くなった。

「で、どうなの?」

前のめりになって、ひまりちゃんは俺に再び聞いてくる。モカが帰って来る前に話を聞き出そうという魂胆か。

という事はつまり、話があるの話とはこの事だったらしい。帰ればよかった。ひまりちゃん、この手の話好きそうだからなあ。

「仰る通りでございます……」

「きやー!」

「ひまり、うるさい」

大興奮のひまりちゃんを蘭が黙らせて、席に座らせる。

それでも興奮の治らない彼女は目を輝かせて俺の事を見ていた。
やめろ。そんな目で俺を見るな。

「私、すっごい応援しちゃう!」

「ど、どうも……」

怖いなあ……。何されるんだろ。

「ていうか、お前達は良いのかよ。幼馴染を誑かそうとしてる男が目の前にいる訳だが」

「自分で言い方が酷い」

事実だしな。

「自覚はあったんだ」

どういう事?!

「アタシ達は翔太が良い奴だって知ってるし。それに、翔太の気持ちをモカが喜んでく

れればアタシ達も嬉しいしき」

最高の幼馴染かよ。眩しいよ。直視出来ない。

「別に、山田なら良いっていうか……」

お父さんかお前は！

「あとはモカをどう落とすかだよねー」

「う、うん。そうだね！ 山田君、ファイトだよ！」

モカをどう落とすか、ねえ。

やべえ、何も考えてなかったけどモカに俺の事を好きになってもらうって中々無理ゲーなんじゃないの？

そもそもあの恋愛感情とかあるの？ てか心情が読めないんだよ。脈の有り無しが全くもって分からないよ。

「なに頭抱えてんの……」

「無理ゲーだ……」

「あ、あはは……。山田君なら大丈夫だよ！」

どこからその自信が湧くんですか……。

「いやー、綺麗なお花が詰めたな〜」

そして唐突にモカが帰ってくると、俺達は一斉に姿勢を戻して話をぶった切る。

静まり返った俺達を見て首を横に傾げるモカは、この場で一番おどおどしている人物に話し掛けた。

「どーしたの、ひーちゃん」

「な、な、な、な、な、な、な、何でもないよお?!」

何でもありませんでしょその反応は!!

「ひーちゃん」

「な、何? モカ」

「もつと食べたいなら食べても良いんだよ。太るかもしれないけど」

「モカと一緒にしないで?!」

えー、お腹が減って動揺してると思ったのー? えーっ。

しかし、ひまりちゃん弄りで場が和みなんとかあの空気からは脱出する。

ただ、これまで全く気にしていなかった事を俺は気にするようになった。

「モカを振り向かせる、か」

俺はもしかしたらとんでもない難易度の恋愛に挑もうとしているのかもしれない。



「——と、いう訳なんだ」

翌日の学校で、俺は友人である橘圭介に女の子の口説き方を聞いてみる。

中学からの仲の親友は、真剣に俺の言葉に耳を傾けてくれた。

「死ねば良いと思うぞ」

「俺達友達だよな?!」

「いや、俺は本気で言っている」

「いや本気で酷いよ!!」

「死ぬ気でやれ。それしかない」

「圭介……」

なんでこの人こんなに格好良い事平然と言えるんだろう。俺が女の子だったら惚れてるね。

「まあ、俺はその人の事を知らないから具体的なアドバイスは出来ないな。強いて言うなら、彼女の事を知っている人に聞くのが一番だ」

「天才かよお前」

「お前がバカなだけだと思っぞ」

なんでこの人こんなにさらっと酷い事平然と言えるんだろう。俺じゃなかったら心が折れてるね。

「世の中なるようになる。頑張れ」

「おう」

良い友達を持ったよね。本当に。



彼女の身近な人というのは、思いの外結構身近に居た。

だから、俺は手近な所から攻めていく事にする。

勿論、モカに悟られないようにね。

「そんな訳なのでリサさん。何かご教示を」

「モカを振り向かせる方法、かあ。どうしてそうなったのかって所から言いたいけど、それは野暮なんだろうなあ」

「どういう意味よ……。」

「それじゃ、アタシはモカ以前に——異性を振り向かせるアドバイスを一つ教えてあげようかな」

「え、何そのギャルの裏技みたいな奴。大丈夫なんですか?!」
「なんか怖い事教えられちゃうのだろうか。」

「なんでそんなに怖がられてるの……?」

「ギャル怖い。」

「山田君、人が生活する上で必要な三つの事ってなんだと思う?」

「睡眠欲、食欲、せ——」

「待った！ それは三大欲求!! ちよつと違う!!」

慌てて顔を真っ赤にするリサさん。ギャルなのに……。

「あはは……。衣食住ですよね？」

「わざとだなあ……。？」

バレたか。

「欲求もそうだけど……。食べる事ってやっぱり大切なんだよね。モカは特に貪食だし」

確かに彼女は良く食べるな。これでもかというくらいの胃袋の持ち主だ。

「異性のハートを掴むなら、まずは胃袋を掴むべし。これがアタシからのアドバイスね。なんならお料理教室も開いちゃうよ」

たまにこの人が本当にギャルなのか疑いたくなるよね。

「他にも皆にアドバイスを聞いて、日曜日モカも休みで確か練習とかもないって言つた筈だからさ。思い切つて家に誘つてみたら？」

「いきなりお家呼びなんて流石ギャル！」

「山田君がアタシに遠慮なくてなんか怖い！ ていうか山田君、何回かモカを家に誘つ

てるよね?!

緊張がほぐれるとこんな感じなんです許してください。普通にセクハラですけどね。怒らないリサさん優しい……。

「決行は今週の日曜日か……」

この一週間で色々と準備しなくちゃな。

前回商店街を歩いた時は、予定すら立てられずに情けない結果になっている。あの時の挽回も兼ねてモカからの好感度を上げる為に全力を出すんだ。

何かやりたい事を探すとか、その後モカに告白するとか以前に彼女に俺を好きになつてもらわないと意味ないからな。

「おっしや、やるぞおお!!」

「あ、あははー。大変だなあ……二人共」

この直後バイトに来たモカに、何をやるのか聞かれて超挙動不審になったのはまた別の話。

お家デート【準備編】

土下座した。

多分人生で初めて親に土下座した。

「出掛けて下さい!!! お父様お母様!!!」

「嫌よ」

「嫌だな」

「そこをなんとかああああ!!!」

頭を床に擦り付けて、俺は悲痛の叫びを上げる。

今日は日曜日。晴天で絶好のお出かけ日和だというのにこの両親、家に引きこもると言うのだ。

そんなの勿体ないじゃないか!! 出掛けろよ!! なんでも良いからこの家から消えろ!!

「父さんな、今月全敗してもうパチンコに行く金がないんだ」

「分かった。金ならやる。パチンコに行け。三万くらいやるから今日一日目一杯パチンカスになれ。こんな良い天気パチンコに行かないなんて損だろ?!」

もうヤケです。

「私は家でゴロゴロゲームを——家事をやらないといけないから。だって主婦だもの！」

「家事なら俺がやっつくんで!! 本当!! お母様いつも大変でしょう?! 三万くらいあげるから商店街の喫茶店巡りでもしてて!! 羽沢珈琲店の珈琲新作出てるよ!!」

もう相当ヤケだった。

「うん、急にパチンコ行きたくなくなってきたな」

「私も課金してガチャを——近所のお母さん方とお話をしなきゃ」

さらば俺の六万。やったよ、あの時下ろして結局手元にあった大金の使い道が出来たよ畜生!!

「ていうか何ー。彼女さんを家に連れて来て私達を追い出すなんて。高校生らしくいやらしい事でもする予定なの？」

「そ、そ、そ、そ、そ、そ、んな、な、な、な、事、な、な、な、ないよお???'? そもそも彼女じゃないよ?!」

何を隠そう今日はモカを家に誘って、リサさんや諸々からの作戦を実行してモカを落とそうと計画している日なのである。

両親がいては邪魔なのだ。

「エクストリームシヤゲダンみたいになってるぞ」

「まあ、なんだ。このくらいの歳になると男はエロい事しか考えられなくなるんだよ。大丈夫。俺達は見て見ぬ振りをするから」

「親指立てんじゃねーよ!! 違うから!! そんな事しないから!!」

付き合ってもないのにそんな展開になったら怖いわ。てか僕まだ高校生!! R—1
8 未満!!

「本当に? なんの期待もしてない?」

「……」

嘘ですしてます。だって男の子だもん!! 少しくらい妄想するよね!!

「ねーよ!!」

「けどそれとこれは別だ。俺は本気でモカが好きなんだよ。そんな傷付けるような事はしない。」

妄想くらいするけどね!! 男の子だもん!!

「じゃあな、ゴムはしろよ」

「孫の顔が楽しみね」

「なにもしないって言ってるだろエロオヤジ!! 母さんに関しては気が早過ぎる!!」

まさかモカが来る前にここまでツツコミで体力を使う事になるとは……。

そんな訳でやつと親を追い出せた俺は、モカが来る前にもろもろの準備を済ませる事にする。

ここ数日、俺はこの日の為に沢山の準備をしてきた。

全てはモカに「きゃー、翔太さん素敵!」と言わせる為。全然想像出来ないけど、そ

んな感じになってくれればオーケー!!

そこで、俺は数日前相談に乗ってくれた皆との会話を思い出す――



「えー、今日皆に集まって貰ったのは他でもない。日曜日、モカを家に呼んだのでその時にどんなおもてなしをしたらモカに振り向いてもらえるかアドバイスが欲しい。いや下さい!! お願いします!!」

平日の喫茶店で、俺は声を掛けて集まってくれた皆に頭を下げた。

「そんなに畏まらなくても良いってー。皆、山田君の事を応援してるから集まった訳だし」

そう言ってくれるのは、先日お料理教室まで開いてくれたのにこの場にも来てくれたリサさんである。

この人どんだけ良い人なのよ。

「そうそう。だってそもそも楽しそうだし? モカちゃんが青葉モカから川田モカにな

るって思ったら凄いるんってなるよね！」

リサさんの横で呼んでもないのにナチュラルに会話に混じって来るのは、現役アイドルバンド高校生——氷川日菜その人だ。もう一度言うが俺は呼んでない。

「山田です!! てかなんであんたまで居るの?! 呼んでないよ?!」

「え? そこで偶然皆を見付けたからだけど?」

「帰ってくれ頼む!!」

絶対話が脱線する!!

「良いんじゃないか? 人が多い方が意見は沢山出ると思うぞ! 丁度ひまりは用事が

あって来れなかったし」

「ひまりが居た方が話がかんがらがる気がする」

「ら、蘭ちゃん酷い……」

後は、モカとひまりちゃん以外のAfterglowのメンバー。いつメンだ。

因みに席順は俺の隣にリサさんと日菜先輩。

正面の席に蘭と巴とつぐみちゃんが座っている。

そんな訳で俺含めた六人は、デザートとドリンクバーを頼んでファミレスで会議を始めた。会費は私持ちますよ。ええ、勿論です。

「これはお家デートだけじゃなくて、全てのデートに言える事なだけだね」

そう話し始めるのは、皆がジュースを取ってきて座るのを待っていたリサさんだった。

こういう時、リサさんみたいな人はとても頼りになる。一体どれほどの経験を積んでいるのだろうか……。

「大切なのはその場の空気」

「空気……?」

「雰囲気って事か?」

「気温だね」

「そんな訳ないでしょ」

「日菜、その通りだよ」

「うそーん」

ドユコト。

「女の子の身体は結構デリケートなの。暑過ぎるのも嫌だけど、お腹を冷やすのはちよつと嫌かな」

「つまり、室温管理が大切だと……」

「そうそう。ほら、男の子って結構部屋を寒くする癖がある人が多いみたいだし」

言われてみれば、確かに。涼しくらいが丁度いいと思っっている節はあるな。

女の子はお腹を冷やしちやいけないうてよく聞かし、基礎中の基礎か。

「な、なんだよ蘭……そんな目で見るなよ」

そんな話をしていると、正面の蘭が巴の事をジト目で見ていた。つぐみちゃんは苦笑いしている。

どうしたのよ。

「そ、そうだ。モカちゃんは寒いのは苦手だから、私も部屋の気温は大切だと思うよ！」

「モカ、あんまりにも寒い日に家のコタツで冬眠するとか言ってたし」

「熊か」

あれだけ食べるのは冬眠する為だったんですかね。

「そんな訳で、部屋の温度は適温を保つ事。暖かめがベストだよ」

「サー、イエッサー！」

メモつとくか。

「そして次に服装かな」

「服装……？」

家なんだし、部屋着じゃダメなの？

「山田君、いつもモカと家で遊ぶ時どんな服装してる？」

「え、普通にシャツとズボンです。ぶつちやけ寝巻きです」

「アウト」

マジか。

「服の皺とかあるし、その服で寝てたら汗で匂いもついてるかも知れないんだよ？ お家デートは自然と身体が近くなるんだから。そういうところも以上以上に気を付けないと！」

「サー、イエツサー!!」

ヤバイ……俺これまで何も考えてなかった。どうしよう、モカにめっちゃ嫌われてたら……。

「ど、どうした翔太?!」

「なんかもう生きててごめんささい。既にモカからの好感度最底辺なんじゃない……?」

「そ、そんな事はないと思うけど……。げ、元気出して山田君!!」
既に不安になってきたよ。

「でもさー、モカちゃんはそんな山田君の愚行も気にせずにこれまで遊びに行ってたんでしょ?」

「愚行」

心臓に杭を打たれた気分です。

「それってさー、まだ嫌われてはないって事じゃない?」

「日菜先輩……」

「それか山田君の事をこれっぽっちも気にしてないか?」

「日菜先輩?!」

怖い!! この人怖い!! もう心が痛い!!

「日菜先輩気付いてないんだ……」

蘭がボソツツと何か言っているが、もう俺のハートは粉々なので意味を考える余力もなかった。

「どちらにせよ、山田君のこれからに全て掛かっているんじゃないかなってあたしは思うけどなー。だから、これまでの事は関係ない!」

「飴と鞭は良いけどもう少し鞭を優しくしてください」

僕の心臓が持ちません。

「そんな訳で、デートの日はモカが来る前に着替えて清潔な格好でいる事」

「サー、イエツサー!」

「これ、あたし達居る?」

「私達も何かアドバイス出来ると良いんだけどね」

「全部リサ先輩に持ってかれてるな」

俺もモカの幼馴染達も、リサさんの女子力に震える。

なんでギャルなんだ。

「いやいや、蘭達に手伝ってもらいたいのはこれからだよ。お家デート基本といえば、家で何をして過ごすかだからね。山田君は普段モカと何して遊んでる？」

「えーと、ギター教えてもらったりゲームしたりですかね」

「うーん……良いんだけどそれだとやっぱり友達って感じになっちゃうと思うんだよ」
おっしやる通りです。

「はい、ここで皆に聞くよ。異性とのお家デートでの定番といえぼ？」

「はいはいー！」

自信満々に手を挙げたのは日菜先輩だった。嫌な予感しかない。

「えっち」

「あんた本当に期待を裏切らないな!!」

言うと思つたよ!!

「えー、だって山田君そういうの好きそうだし」

謎のニヤケ顔でそう言う日菜先輩は、リサさんを挟みながらも肘を俺に向けて「このこのー」と弄ってくる。

思春期真っ盛りの男の子になんて事を言ってくるんだこの先輩。怖い。

日菜先輩以外全員が真っ赤になった所で、意外にも一番トリップしていたリサさんは両手を叩いて空気を仕切り直した。

「それはなしー！」

ですよね!!

「他には?」

「普通に雑談とか。普段の何気ない会話を楽しむのは大切だと思うんだ!」

自信満々にそう言う巴だが、それは今リサさんが題材にしている内容とは違うという事は俺でも分かる。

「それじゃ友達と遊んでるのとあんまり変わらないよ?」

「そ、そうですね……」

巴が撃沈すると、その場は静まり返ってしまった。

難しい問題だな……。

ふと正面の三人を見てみると、なんだか震えながら手をあげる蘭の姿が映る。

「蘭、何だと思う？」

「……え、えーと、部屋で……その、キ——キスとか。ベッドで寝転んだり……？」

リサさんが優しく聞いて、答えられたのはそんな言葉だった。

「乙女か!!!」

なんでそんな要所所で乙女になるのあなたは!! 自分のイメージを守って!!

「良いんだけど……。皆忘れてない? 山田君とモカは今別に付き合ってる訳じゃないって事。必要なのは深入りする事じゃなくて、まず密着させるって事。チョコケーキみたいに混ぜるんじゃないって、ティラミスみたいに合わせる事が重要な訳」

最後何言ってるか分からなかったけど、これはデートであつてもカップルのデートではないという意味合いはなんとなく分かる。

それを踏まえた上で答えを出したのは、つぐみちゃんだった。

「映画鑑賞とか、どうかな？」

「そうだよ！ それそれ！」

なるほど映画観賞か。確かにゆっくりと時間を過ごせるし、共通の話題を作れてその後の時間も過ごし易い。

「タイミングはお昼ご飯を食べて、少し休憩してから。十四時くらいから二時間くらいの映画を見てると、おやつの時間にもぴったりだよ」

リサさんはなんでそんなに経験豊かそうな感じなの？!

やっぱり彼氏がいるの?! もう何人目か数えてないってくらいの歴戦の猛者感を感じるんだけど!!

「問題は見る映画だけだねー」

「洋画とか見るとエッチなシーンがあっってお互いに気まずくなって面白い空気になるよ!」

「日菜先輩はエロい事しか考えてないんですか?!」

「山田君が恥ずかしい思いをする事しか考えてない!!」

「帰れ!!!」

いかん、此処が喫茶店という事を忘れている……。

「やっぱりバトル物じゃないかな？ モカはそういうの好きだし」

「巴、デートって事忘れてない……？」

「う……」

確かにその辺りの趣味はモカと合うのだが、今回の趣旨的には正解ではなさそうだ。

日菜先輩は言い過ぎだが、やっぱり恋愛映画とかそういうのが良いのだろうか？

「猫映画なんてどうかかな？ 癒し効果で空気も和むと思うんだー」

「またもや素敵な提案を出してくれるつくみちゃん。天才かと思った。」

「良いねえ。因みにオススメとかある？」

「ドラ●もん？」

「それは違う!!!」

「日菜先輩はモカが居ないからって張り切ってボケなくて良いからね!! 俺が疲れるだけだからね!!」

「ト●とジエ●ーとか？」

「蘭までボケるな!! なんて皆モカの粹を埋めようとするの!!」

「1●1匹ワンちゃんなんてどうだ？」

「猫って言葉が聞こえなかったのかな巴さん?!」

猫映画ってなんだっけ!!

結局、モカが視聴済みだった場合を考慮して三種類ほどの猫映画をレンタルショップで借りて来る事に。

他にも買っておくお菓子の種類だったり、帰らせる時間だったり、エロ本の隠し場所だったり（持ってたねーよ!!）を相談に乗ってもらおう。

ここまでして貰って失敗は出来ない。万全の準備をして、お部屋デートに臨むのであった。

◆ ◆ ◆
「さて、時間だ」

室温よし。料理の用意よし。服装よし。エロ本もちやんと隠し——持ってないよ

!!

家のチャイムが鳴って、俺は扉の前に進む。

やばい。めっちゃ緊張するぞ。

いや、頑張れ山田。集中しろ。失敗は許されない。

「よ、モカ。態々家まで呼んで悪——」

「クロネコヤ●トです、山田さんのお宅でしょうか？」

「違うんか——いい!!!」

モカが宅配屋さんと入れ替わりでやって来たのはその一分後だった。

お家デート【本番編】

——大切なのは料理をする所を見せる事だよ!!——
お料理教室でのそんなリサさんの言葉を思い出す。

「おー、なんかしよーくん、歴戦の主婦みたい」

「歴戦ってなんだよ。何かと戦うのか？」

「G?」

「そんな歴戦嫌だ!!」

後ろで歓声を上げるモカにツツコミを入れながら、俺はエプロンを装着した。

お家デート当日。宅配屋さんと入れ替わりでやって来たモカ。

宅配屋さんに凄い爽やかな笑顔を向けられたが、残念ながら俺達はまだそういう関係ではない。

だが、今日とは言わずともいつか必ずモカを落としてみせる!!

そして俺も全力でやりたい事を探して、モカに告白してみせるのだ。

「何を作るのー?」

いつも通り。パーカーにショートパンツとラフな格好のモカは、背後から顔を覗かせてキッチンに置いてある食材を凝視する。

常に腹ペコのモカだから、昼食が気になって仕方がないらしい。

所で俺の眼前に広がる食材はいたってシンプルだ。

豚のバラ肉に、キャベツ、ニンジン、やきそば。なんの説明もする必要もなくやきそばである。

流石にやきそばだけだと寂しいので、モカに「見れば分かる」とだけ答えて冷蔵庫から豆腐と白味噌を取り出した。味噌汁である。

はい。ぶつちやけ突然料理を教わってそんなに難しいものが作れる訳がありませんでした。

本当は格好付けて何品も作りたかったよ!! なんだよ二品って!! しかもやきそば

!! 山田の無能!!

「おー、やきそばだろ。安くてお腹の膨れる、主婦の味方。やつぱりしょーくんは歴戦の主婦だった」

ただ、当のモカには好評のようである。もしかしなくてもお前食べられれば何でもいいな？

「ま、まあな。本当は色々作れるけど？ うん、そんなに張り切らなくても良いかと思つて？ うん」

嘘です超張り切ってますよ。色々どころかやきそばと味噌汁しか作れないよ。

「それはそれは将来が楽しみですな」

それは置いておいて、リサさん曰く——料理をしている姿から思いやりを感じさせられれば好感度アップ間違いなし。

見せてやろう、俺がりサさんから授かった女子力を!!

「肝心な時に聞いていない」

「ん？　なんか言ったか？」

「なんにも。ところで、何してるの？」

リサさんからの教鞭を思い出しながら、俺は数種類の調味料を小皿に分けて混ぜていた。

主な材料はソース、というかぶつちやけソース以外の何物でもない。ただ、ここにリサさんのこだわりが付いてくる。

「やきそばのソースを作ってるんだよ。普通に市販のをを使うのも良いが、こうやって自分で作れば自分好みの味がやきそばに乗るからな」

俺が調理片手間にそう言うと、モカは口元を押さえながら「おーっ」と歓声をあげた。今の台詞は完全にリサさんから教えてもらった通りに言っただけなのだが、モカは若干目を輝かせて薄っすらと光沢を浴びるソースに釘付けになっている。

ふ、完璧だ。

お料理教室での教鞭はしっかりと頭に叩き込んである。

もうリサさんの拘りったら半端ない。ギャルってなんだっけ。

これは当たり前だが、やきそばは肉から炒めていくのが定石だ。そして野菜類の後に麺のだが、ここで一工夫。少量の水をなるべく広範囲に散らばるように上から投入する。

「よくさー、やきそば作る時に水入れる人居るけど、これはどういう意味なの〜?」

「この水、普通に熱で気化して高温の水蒸気になるんだがな。水自体じゃなくてこつちが使用目的だ。普通ならフライパンで焼いているところしか加熱されないんだけど、この蒸気で全体を素早く加熱する事が出来る」

勿論、リサさんからの受け売りだ。

「加熱時間が少なくなれば、野菜の感触を崩す事もないからな。あ、これはチャーハンにも使える小技だ」

「しよーくん料理屋さんみたい」

相変わらず目を輝かせるモカだが、ここまできるとなんだか罪悪感が湧いてくる。

ちゃんと料理の研究は続けないとダメだな……。

心を掴むにはまず胃袋から。俺はそんなリサさんの言葉を何度も復唱した。

そんなこんなで味噌汁もパパツと作って、十三時前に昼食の準備を終える。結構なボギャブラリーの少なさだが、こうして並べてみると案外悪くない。それに俺には秘密兵器もあるのだ。

「それじゃ」

「いただきます」

早速料理に手を付けていくモカ。まずは箸でやきそばを掬い上げて、その口に運んでいく。

何度も練習で作ったし、今回だってモカの目を盗んで味見もした。出来は上々。

しかし、それがモカの舌に合うかどうかは別である。緊張の一瞬だ。息を飲んで反応を待つ。

「……これは——」

固まって声を漏らすモカ。こころなしに声のトーンが低くて、俺は冷や汗を流した。

「——これは、ただそばを焼く料理だから付けられたやきそばという名前に革命を齎

す一品。……お手製のソースも平均的に絡まっついていて味にバラツキもないし、野菜も肉もそばも全部焼き加減がパーペキだよ。しょーくん、将来はやきそばで食べていく？」

「いやそこまでの食レポは求めてないしそんなつもりは毛頭ないしそもそもレシピも人譲りだからね?!」

突然とんでもない食レポが飛んできたのにビックリして、ついツツコミがてら本当の事を言ってしまう。

し、しまった……。

「でも作ったのはしょーくんだよねー」

しかし、モカはそんな事を言いながら満足気な表情でやきそばを口に運んでいく。

偶に味噌汁に手を付けては笑顔を零す彼女の顔を見て、俺は溜息が出る程安心してしまった。

自分が作った料理をこんなに美味しそうに食べてもらうのって、こんなに嬉しいのか。

感傷に浸っていると、ありえない速度でモカが食べているので危うく秘密兵器の事を忘れかける。

俺は急いで彼女の箸に待ったをかけた。

「……これが、待ての時の犬の気持ち」

「理性を保て」

よだれを垂らすな。

「こんな所で待てなんて酷いよ。ご主人はモカちゃんに何を命令する気なんだワ
ン」

「語尾の犬が無理ありすぎるしなんか変な誤解を生みそうな台詞やめて?!」

やばいプレイしてる人みたいじゃん!!

「とっておきがあるのよ。これを食べずして俺達の飯を終わらせるなんて論外だ」

そう言いながら俺は隠しておいたある食品を取り出す。

小麦粉に水を混ぜてこね、発酵させてから焼く全世界で主食として用いられている食

品——

「——パン……っ！」

——パンだ。ただのパンである。コッペパンだ。コッペパンである。

「……俺がやりたい事は分かるな？」

「……ふっふっふー、モカちゃんに分からないとでも？」

だが、これはただのパンにあらずなのだ!!

「やきそばパンだ——!!」

やきそばパン。

コッペパンに切り込みを入れ、そこにやきそばを挟んで食す日本独自のパンの食べ方である。

炭水化物オブ炭水化物みたいな食べ方は海外の方から見ると外道らしいが、日本人はこれが好きでたまらない奴が多い。

不良の決め台詞「やきそばパン買ってこいよ。お前の金でな」は特に有名だ（個人的見解）。

とにかく、日本人はこのやきそばパンが大好きなのである。

特にパン好きのモカにとって、これは普通にやきそばを食べるよりさらに嬉しい筈。これこそが俺の秘密兵器。モカの胃袋を掴む、とっておきだ。

「さて、お味の方は？」

「美味しい」

あれ？ さっきみたいな食レポは？

なんて不思議に思っていると、何故かモカの両目からポタポタと涙が出始める。

え、どういう事？ どういう事?!

「美味すぎて何も言えない」

「語彙力が死んでる……」

あまりにも衝撃的だったのか、モカはやきそばパンを食べ終わるまで一言も喋らなかった。

ただ、なんだか彼女は幸せそうで。そんな彼女を見れたのは俺も嬉しく思う。

◆ ◆ ◆
「大丈夫か？」

食器を片付けてから、俺は黙りを決め込んでいたモカにそう聞いた。

若干トリップしているようだが、この後の予定もあるのでそろそろ戻って来てもらわないと困る。

「モカちゃんは常に大丈夫〜」

色々な意味で大丈夫じゃない。

「……………つたく、どうしたんだよ」

「いやー、うーん、決意を心に固めていた的な〜？」

やきそばパン食って何考えんだこの人。

「……………そ、そうか。……………あ、そうだ。何作か映画借りて来たんだけどさ、一緒に見ないか？」

ここからは第二ステップ。映画観賞だ。

食事で胃袋を掴んだら、次は癒される猫映画を見て雰囲気のを和らげる。

金に任せてレンタルショップで猫が表紙の映画を五本借りてきたのだ。

DVDの入ったケースをモカに見せると、彼女は「おー、猫だらけ」と感心のこもった声で各種タイトルを眺めていく。

「ハ、これは……」

そんなモカの目に止まったのは、猫の惑星というゲンジャラスな名前の映画だった。内容は知らないが、タイトルからするに沢山猫が出て癒される映画なのは間違いない。

「これにするか」

「うん。これ見たかったんだよね」

どうやら当たりを引いていたらしい。

早速DVDデッキを開いてテレビをつける。

画面に映ったタイトル画面。背景は自由の女神像の横に拡大された猫の顔が写っているという物。ちよつとこの時点でよく分からない。

「モカはこの映画がどんな奴なのか知ってるのか？」

俺の想像だと、世界中の猫が関わってくるハートフルニャンニャンストーリーなのが。

「猫と戦う映画だよー？」

「ごめんもう一回言つて」

俺が聞き返そうとすると、映画が始まってしまった。

当然映し出される宇宙船。乗組員達が歓喜の表情で宇宙船の外を見るのだが、視界に入るのは我等が母星——地球である。

どうやら宇宙船は数百年の旅をしていたらしくて、乗組員達は地球がどうなっているのか気になっている様子だ。

初めのうちは期待を膨らませる乗組員達なのだが、地球とのコンタクトが取れずにとんどん不安が募っていく。

画面が切り替わり、宇宙船からの連絡が届いて声が響いている宇宙センターのような場所。

しかしそこはもぬけの殻で、誰もいないどころか何年も放置されているかのように埃を被っていた。

そんなワンシーンで唯一、何かの影が動く。

三角形に尖った二つの何かが付いた丸。ゆっくりとカメラが影の反対側に回って、映し出されたのは——猫。

猫だ。ドラ●もんや●ムのように二足歩行をする猫。モン●ターハンターのア●ルーに近いかもしれない。猫である。

そしてその猫は口を開いた。

『——最後の人類がお帰りだニヤ』

「いやなんだよこの映画!!」

え?! ナニコレ?! 癒し系じゃないの?!

「猫の惑星。猫に支配された星のお話だよ」

「字面だけ見たらまだ癒し系じゃん?! いやそんな事ないか。いやだとしてもなんでこうなったの?!」

俺は癒し系を見る予定だったのに、なんかいきなりSFが始まったんだけど。

しかも猫、凄い運動神経で人間翻弄してるんだけど。怖い!! 猫怖い!!

「いやー、この映画ずっと見たかったんだよね。数ある猫映画の中でも最高水準のアクシオンシーンが魅力的なんだよ」

「猫映画の中でアクシオンシーンってどういう事だつてばよ」

ダメだ、ツツコミが付いていかない。

何より話が普通に面白い。癒しとか全くないが、話の流れも分かりやすいしモカの解説もあって情景がどんどん入り込んでくる。

気が付けば俺は映画に集中していて、あつという間に上映が終わってしまった。

「いやー、面白かったね」

「まさかあの場面で死んだと思っていたツムゴロウさんが助けに来てくれるなんてなあ。感動だわ」

「実はこの作品、続きやスピンオフも豊富なんだよね」

「それは見るしかないな。……今度また見ようぜ」

「うん。見にくるね」

なんて映画の感想を言い合って、俺はやっと目的を忘れていた事を思い出す。

猫映画で癒されていい雰囲気になるって目標があつた筈なのに何してんだ俺は!!
い、今からでも遅くはない。もう一本猫映画を——

「なんと次回作はツムゴロウさんが主役らしいんだよね。それはモカちゃんの超エモイというか」

——なんて、むしろ何してんだか。

モカがこんなに楽しそうならそれで良いじゃないか。癒しとか雰囲気とか以前に、彼女が俺と居ることを楽しいと思ってくれるなら、それ以上に嬉しい事はない。

だって俺は、その笑顔に惚れたんだから。

今を全力で楽しんでいるその笑顔に。

「また今度借りて来るよ。所でさ、ゲームやろうぜ」

「おっけー。負ける度に映画のツムゴロウさんのモノマネね」

「考える事エグっ！」

惚れさせるといふ点からしたら今回は失敗かもしれないが、モカが今日という日を楽しんでくれたのならそれで良い。

やきそばは喜んでくれたし、また家に来てくれるって約束してくれたし。

今の俺には、それでも充分だ。

宇田川巴は過保護さん

友人にこう言われた事がある。

「お前……仕事が趣味なのか？」

もし本当にその通りなら相当まずいというか、手遅れというか。

そのくらい働いているのだ。平日は全部出勤だし、土日も片方は必ず出勤である。

高校生バイト戦士に休む暇などないのだ。かといって、特にお金が欲しい訳でもなく貯金は溜まっていく一方である。

そんな俺だが、珍しく今日は平日が休みだった。金曜日である。

と、いうのも本来休みだった筈の前の日曜日にバイト先の先輩——リサさんの代わりに出勤したからだ。

その日はリサさんが急用が出来てしまったらしく、平日の休みと交代して俺が出勤した形になる。

そんな訳で久し振りの平日休み。花の金曜日に学校が終わった俺は――

「……やる事ねえ」

――独りで黄昏ていた。

そもそも平日が休みでも学校から帰って家でゴロゴロするしかやる事がないんだよね。

なんか趣味を探せと自分に言い聞かせてはいるんだが、これがなかなか前に進めない。

それでも止まっている訳にはいかないし、やりたい事探しのために俺は当てもなく商店街を歩く。

ふと目に入ったのは不審者二人組だった。

「……な、なあ、モカ。これで本当に彼氏とかだったらアタシはどうしたら良いんだ？」

「……落ち着いて、トモちん。いつかは通る道なんだから、堂々とぶん殴っちゃえば良い

と思うよ〜」

「そうだな! ——つて、いや、殴るのはダメだろ。……うん」

電信柱の陰で帽子を深めに被っている女の子が二人。

長身に赤い長髪が特徴的な巴と、俺の意中の相手であるモカである。意中の相手とか自分で言うの恥ずかしいな。

「何してんだバカ二人」

「うわあ?!」

俺が後ろから話しかけると、珍しく驚いた表情を見せる巴。

どうやらかなり集中していたらしく、話しかけられるまで俺の存在に気が付かなかつたらしい。

「しよ〜くん、今日はバイトじゃなかったの〜? もしかしてサボり〜?」

至って冷戦なモカは事情を知っているにも関わらずそんな言葉を零していた。とりあえず頭にチョップを入れておく。

「酷いよ〜もー」

「俺はそんな年がら年中働いてる訳じゃ——いや、働いてるけど」

普通にただの社畜なので、平日のこんな時間に外にいる事を珍しいと言われても何も言えない。

「で、何してんだ？」

話を戻すと、一人テンパっていた巴は思い出したように電信柱の奥に視線を向けた。

そして「しまった、見失った」と焦った声を漏らす。

誰かを追っていたのか？

「尾行とは悪趣味だな」

「違うんだ翔太、聞いてくれ」

いつになく真剣な表情の巴。その瞳は真っ直ぐで、どうも悪気というものを感じなかった。

しょうがない、話だけでも聞いてやろう。

「——と、いう訳なんだ」

「いや、帰れ。今すぐ家に帰れ」

で、事情を聞いてみたのだが——最低だった。完全に悪気だった。

どうも今週に入ってから、Roseliaのドラム担当——巴の妹の宇田川あこの様子が少し変らしい。

家に帰ってくるなり姉である巴に何も言わずに出掛けてしまうのだとか。

いや、さ。俺は一人っ子だから何も言えないけどね。そんな出かける度に家族に何処へ何処に行くって伝える物じゃないでしょ?!

「き、聞いてくれ翔太。あこはまだ中学生だ。悪い大人の区別だって付かないかもしれない……」

「いや一歳しか違わないからね。中三なんてもう殆ど高校生みたいなもんだからね」

「トモちんってあこちんの事になるとダメになるよね」

「アタシは真剣に心配してるんだって!」

モカの言う通り、妹の事になると本当にダメになってしまいうらしい。

まあ、大切な友達の手前だし。なによりモカの前なんだから、格好を付けるとしようか。

「……しようがない。あこちゃんが何をしてるか、探るのを手伝ってやるよ」

「本当か翔太！」

「とりあえず巴は声がデカイ。ボリユームを下げろ」

「う……」

尾行するなら尾行するなりの心得つてもものがあるのよ。とりあえずあんパン持つていこ。

「でも、しよーくん。あこちゃんの事見失っちゃってるけど、どーするの〜？」

「ここは商店街。見ての通り人がわんさかいる。お前達不審者が目立たないくらいには人通りが盛んだ」

俺のそんな言葉に首を横に傾ける二人。

世の中自分で何とかしようなんて思うのは間違いである。

「……そんなもん、適当な人に聞けば何処で見たとか情報はいくらでも手に入るんだよ。あこちゃんは目立つ方だしな」

巴と違って背は低いが、中学生らしい服装と紫のツインテールで視界には残りやすい。

試しにそこら辺の奥さんに話しかけてみると、彼女がどっちに向かったのか呆気なく教えて貰う事が出来た。

「翔太って結構人に話しかけるの遠慮ないよな」

「仕事で他人と話すのは慣れてるからな……」

こんな所で社畜が役に立つとは。

そういえば自分はコミュ症だと思っていたが、もうそれは治っているのかもしれない。

そんな訳で奥さんに聞いた通りの道を歩くと、とても目立つ格好の小さな女の子が視界に映る。

黒を基調とした、まるで衣装のような中学生感丸出しの服。

本当に姉妹なのか疑わしい小柄な少女は、紫色のツインテールを揺らしながら鼻歌交じりに商店街を歩いていた。

「見付けたぞ……。ところでさ、巴。あこちゃんはいつもどんな感じで家を出るんだ？」
「帰ってきた瞬間、着替えて直ぐに……。かな。とにかく急いでる感じだった」

まるで友達の家に行く小学生だな。

いや、むしろよく考えなくても普通に遊びに行ってるだけじゃね？ どう考えても巴が過保護過ぎるだけじゃね？

「あ、見て見てトモチーん。あこちゃんが誰かと話してるよー」

モカが言う通り、あこちゃんは商店街の端っこで一人の男と話をし始める。

茶髪に長身の、後ろから見ただけで分かる今時の高校生みたいな格好。多分顔もイケメンだ。

何処かで見た事のある気がするそんな男と、あこちゃんは楽しそうな笑顔で話をしている。

バレないように物陰に隠れるが、巴は顔を真っ赤にして今にも飛び出していきそうだった。

「トモチーん、ステイステイ」

「まさか……本当に彼氏？」

横でプルプルと震える巴を無視して、俺は件の男に視線を集中させる。チラツと見える横顔は屈託のないどうも憎めない笑顔で、爽やかさを感じた。

俺はそんな男の事を知っている。

「圭介？」

あこちゃんと話している男は俺の友人。橘圭介に間違いなかった。

ただ、どうしてもその二人の接点が見えない。一体どういう事なのか。

そこで俺は、数少ない友人との数少ない会話を思い出す。

——俺は彼女居るし——

「ま、ま、ま、まさか……圭介の彼女って」

「なんだ?! 翔太はあの男と知り合いなのか?」

「知り合いも何も、数少ない友人の一人だ」

あいつ、確か彼女がいるって言ってたよな。その彼女こそあこちゃんだという事なのか?!

歳下の彼女って事だったのか?!

「あいつ付き合ってる女の子がいるみたいなお話を言ってたんだよ。それがまさかあこちゃんなのか……?」

あこちゃんに「先輩!」とか言われて嬉しがつてやがるのか?!

「あいつ殺す!!」

「流石翔太、アタシも同じ気持ちだ!!」

「ねーねー、あたしがツッコミやるお話なのー?」

俺と巴は圭介を殺す勢いで睨み付けた。一歳差だけど中学生に手を出すなんて最低だろう!!

「リア充羨ましいから処す」

「それをしょーくんが言うのかと戦慄する、モカちゃんなのであった……」

モカが何か言っているが気にしない。俺と巴は二人の動向を監視する為に目を光らせた。

どうやら話は進んだようで、二人は並んで商店街の外まで歩いて行く。

おい幼気な中学生をどこに連れて行く気だ?!

「あそこは……カラオケ?」

そんな二人を追い掛けると、圭介の先導であこちゃんはカラオケに入っていく。

高校生が中学生をカラオケの個室に連れ去っているんだが。もう冗談でもなんでもなく危ない気がするんだが。

「あの野郎……アタシの妹にカラオケで何をする気だ?!

」絶対に良からぬ事を考えているに違いない。追いかけよう」

「いや、普通にカラオケで歌ってるだけかもしれないよ? って、あー……行っちゃった」

俺と巴は、二人が入って行ったカラオケ屋に突撃した。色々と手遅れになるまえにあの野郎をお巡りさんに突き出しないと。

カラオケ屋に入るが、既に案内されてしまったのか待合室に二人の姿は見当たらない。

流石に何の用もなくお店の中をうろうろするのも問題があるので、俺達は三人でカラオケの部屋を一部屋取る。

このカラオケは扉が密閉タイプで、外から中の様子を見るには不便だ。

小さな小窓はあるが、そこから全部屋を覗くとか変質者を極めたような事はしたくない。

さて、どうするか。

「なんとかして早くあこの居場所を突き止めないと……」

「今こうしてるうちにもあこちゃんに魔の手がさしかかっていると思うと……」

「二人共悲観しすぎじゃない？ 普通にカラオケを楽しんでるだけかもしれないよ？」

ドリンクバーからジュースを持ってきてリモコンで曲を選びながらそういうモカ。

彼女は彼女で楽しむ気まんまんである。

「もしもの事があつたら遅いんだぞ！」

「心配性だなー、もー」

呆れ顔でそういうモカだが、そういう事言ってる女の子に限って悪い奴に騙されるのだ。
だ。

特にモカは警戒心薄いし、俺の誘いにも簡単に乗ってくる。むしろもう少し警戒して欲しいくらいだ。

「それに、お相手さんはしょーくんのお友達なんですよ？　悪い人じゃないって事は、しょーくんが一番分かってるんじゃないのー？」

「そ、それはそうなんだけど……」

ぶっちゃけ橘圭介は聖人かっと思う程に良い奴である。

中学生の彼女がいても絶対アイツは手を出さない。そんな悪い事をする奴じゃないってのは、モカの言う通り俺が一番分かっていた。

「考え過ぎなのかも……な」

「ちよつと待て、隣の部屋から少し聞こえる声……あこじやないか？」

俺が話を切り替えて、あこちゃんの事は明日学校で聞くとして今はカラオケを楽しもうと思ったその時である。

物凄い勢いで壁に耳を当てながら、巴が血走った目でそう言った。

え、お隣さんだったの。

切り替えようと思ったが、やっぱり気になるものは気になる。

俺も巴と一緒に耳を壁に当てて、小さな声も逃さないように音に集中した。

「大丈夫。恥ずかしがらなくて良いよ。皆始めはそんなもんだって」

聞こえてくるのは圭介の声。なんの話をしてるんだろう。

「でもあこ、見られるのちよつと恥ずかしいよ」

おいちよつと待てなんの話だ?! 何を見せようとしてるんだ?!

「大丈夫、綺麗だよ。ほら、恥ずかしがらずにもっと広げて」

「う、うん。分かった」

待てえええ!! なんかもうダメじゃない?! 色々ダメじゃない?!

完全にアウトだよ!!

「あ、あこが……あこが……」

「しつかりしろ巴!! 巴ええ!!」

ダメだ、巴が真っ白になってる。早くあこちゃんをあの屑野郎の魔の手から救わないといけないのに!!

「よーしその調子だ。あー、そうそう。燐子さんもその調子」

さらに聞こえてくるそんな声。

おい待て Roselia のキーボード、白金燐子さんもそこに居るのか?!

歳下の中学生から歳上の先輩まで手玉に取ってるって事なのかよ!! しかも二人同時に同じ場所でこんな……羨——やましい事を。最低だ。見損なつた!!

「二人共緊張し過ぎなんだよなあ。大丈夫、ここはカラオケ屋さんだからどんなに大き

な声を出しても周りに聞かれたりはしないって。……思う存分、声を出して良いんだよ」

聞こえてんだよ!! テメエの悪行真横の部屋に聞こえてんだよ!!!

「さて、本番いつてみようか。それじゃ、入れるよ」

「う、うん」

「は、はい。がんばり、ます」

それは流石にダメえええええ!!!

「圭介えええええ!!!」

俺はトリップ状態の巴の手を取って隣の部屋に突撃する。

正直どんな惨状になってるのか気にな——不安だった。

だけど、そんな事を気にしている場合じゃない。今まさに二人の女の子がああ野郎の魔の手に掛かろうとしている。そんな事だけは許す訳にはいかない。

——だが、扉を開いて視界に映ったのは全く想像だにしていな光景だった。

「あれ、お姉……ちゃん？」

「え、えと……お部屋、ちが、いますよ……？」

マイクを持った二人の女の子。

一人は巴の妹、宇田川あこ。

もう一人は長い黒髪が綺麗なスタイルの良い女の子、白金燐子さん。

二人は特に不自然な点もなく、ただマイクを持って並んでいる。

「……翔太？ 社畜のお前がなんでこんなところに」

そしてその奥で座り込んでデンモクを触っている男こそ、俺の友人である橘圭介だった。

「あれ……何これ」

聞いていた会話の内容から想像していた現場とは全く違う景色に俺の頭は真っ白になる。

一体全体どういう事なの？

「いやー、大勘違いですな〜」

そんな俺達の後ろから、いつ頼んだのかポテトを食るモカの声。
勘違い。勘違いしていたのか……俺は？



事の真相はこうだ。

Rose liaのドラム、キーボード担当の二人だが曲によつては二人が声を出す機会もあるらしい。

しかし発声慣れしていないというか、隣子さんに至つては緊張で声が出ないという事で急遽二人の発声練習の場を設けたのだとか。

曰く先週の日曜日から、今日にかけて毎日カラオケに通つていたという。

あこちゃんが巴に何も言わなかったのは、ライブ会場でもちゃんと響き渡るようになった声を姉に聞かせて驚かせたかったという理由だそうだ。

要するに、俺が勘違いした内容は発声練習の会話だったという事ですな。

いや、気付く訳ないだろ。

そんな事よりも——

「なんで圭介が？」

——その発声練習のコーチが圭介というのが理解できない。

確かに彼はバンドマン——というか、なんでも出来ちやう天才君だが。
Roseliaの面々と圭介に接点なんてあつたか？

「あー、リサに頼まれたんだよ。日曜日にさ」

軽々と、さも当たり前かのように圭介はそう言う。

うん、なるほどなるほど。

へー、リサさんにね——

「——は？ 今お前なんて？」

「頼まれたんだよ、日曜日に」

「ちげえ、その前だ」

「ん？ あー、リサに頼まれたんだよ」

なんでお前リサさんの事呼び捨てなの？ ん？ ちょっと待つて。なんでそんな爽やかな笑顔なの？

「大切な彼女の頼みなら断れないだろ」

むふう……ふふう。なるほどねー。あー、そういう事ねー。

「ダメエかあああああ!!」

居るかもしれないと思っっていたリサさんの彼氏。それが、俺の友人だったなんて。

ナニコレ。えー、ナニコレ。どんな反応したらいいのよ。

とりあえず殺すか?!

「ふへー……リサ先輩に彼氏さんがいたなんて。驚き〜」

「死ねリア充」

「お前が言うのか……」

なんの話だ。

「いや、でも、そうとは知らずに着けてきちゃってさ。……あこには悪い事したかな」

俺が殺意の炎で燃えている間に、反省の表情を見せる巴。

確かにモカの言うとおりのいらぬ心配だったし、余計な事をしてしまったのだろう。

「ううん、そんな事ないよ！ あこ、お姉ちゃんがそんなに心配してくれてたなんて知らなかった。……心配掛けてごめんさい」

「わ、私も……ちゃんと連絡を入れておけば良かった、のに」

しかし、あこちゃんに続いて燐子さんまで巴に謝るといふ事態に。

なんとというかアレだ、色々な事情が重なって気不味い事になってしまった。

そんな訳でこの場はリセットして、俺達はその後普通にカラオケを楽しむ事にする。壁越して伝わってくる歌声に「うんうん」と頷く巴を除けば、俺達はいつも通りその日を楽しんだ。

「ところでしょーくん、さつきは何を焦って飛び出したのー？」

「は？ そりやお前あこちゃん達が——」

質問に答えようとして、俺はふとモカでそうえっいう事ちいを想像してしまう。

「——グッ」

「え、しよーくん？ ええ、どしたの〜？」
俺は鼻血を出しながら卒倒した。

男の子ってのはね、エロいんだよ。

温めますか？

「お弁当温めますか？」

「お願いしまーす」

「かしこまりました」

お客さんの選んだお弁当を業務用の電子レンジに入れてから、他の商品のバーコードを読み込んでいく。

あんパンにクロワッサンにスナック菓子、何に使うか分からないけど乾電池。最後に牛乳。

「牛乳あたためお願いしまーす」

「いや牛乳はあたためないだろ普通!!」

「はい、ツツコミ入れた。しょーくんの負けー」

「ハッ」

そう言われてから、弁当をあたたため終わった電子レンジがチーンと音を鳴らした。

それは敗北の鐘のようにも聞こえる。

「じゃーねー。精進するのじゃぞー」

「覚えてろおお!!」

完全に悪役の台詞だった。

「モカは上がり？ ていうか山田君、何してたの？」

休憩所から出て来たリサさん。休日のバイト先で、モカが上がってリサさんが入るっていうタイミングでの事である。

ちなみにモカはこれからバンド練らしく、弁当とお腹が減った時に食べる用のパンとお菓子と飲み物を買っていった。

「ツツコミを入れない練習……ですね」

「風邪でも引いたの?!」

「なんでそうなるんですか?!」

「山田君からツツコミ取ったら何も残らなくなる?!」

「地味に凄い酷い事を言った事に気が付いてますか?!」

泣くぞぞ!!

「急にどうしちゃった訳？」

「いや、流石に客にツツコミ入れるのはまずいんじゃないかと思ひ始めましてね。モカと話し合ってたんですよ」

このコンビニはヤバイ奴が来る頻度も高く、どうもツツコミを入れてしまう事が多い。

しかしお客さんに向かってツツコミを入れるのも流石にまずいと思つて来たのである。

「良いですよねー、ポケの人は。氣を使わなくて良いし。ツツコミはなあ……ツツコミは大変なんだぞ……」

「どうしてかナイーブになつてゐるなあ……。あ、そうだ山田君。だったらモカにツツコミを入れてみたら良いんじゃない？」

「モカにツツコミ……か」

しない訳じゃないが、確かにモカのツツコミはレアだ。

それに、俺ばかり客にツツコミを入れているのもなんだか理不尽だと思ふ。

ふ、ならばやってみようか!! 俺の最大のポケをモカにぶつけてやるのだ!!

「なんか……変な方向に進みそうで怖いなあ」

そんな訳で、決行は翌日。

俺が休みで、その日はモカとリサさんがバイトの日。

俺はグラサンとマスクを付けて、帽子を被りコンビニに入店する。

「ただいま」

「なんか凄い人が来たー！！ ていうかただいま?! 帰って来たの?!」

リサさんが全力でツツコミを入れてくれた。これはこれで珍しい気がするけど、俺の目的はモカのツツコミである。

「しゃーせー」

スルー!!! 圧倒的スルー!!!

モカは表情一つ変えずに、俺の渾身のボケをスルーした。なんでそんなに肝が座ってるんだろう。正直見習いたい!!

ふ、だがな。これだけでは終わらんぞ!!

「ブレンドコーヒー。砂糖多めで」

俺はレジの前に立ってキメ声でそう言う。完全に喫茶店のノリだ。リサさんは耐えれなくなつて丸くなつている。

さあ、どうするモカ!!

「冷蔵庫の奥に氷だけが入ったカップがあるので、それをお持ちください。砂糖はないけどシロップはそこにあるので、ご自由に〜」

スルー!!! 圧倒的スルー!!!

「あ、はい……」

そうだったね。一応コンビニでもコーヒーは飲めるもんね。

俺は渋々冷蔵庫に向かって氷だけが入ったカップを手にとった。

だがな、このまま終わると思うなよ。俺の渾身のギャグはまだ残っている!!

「ふ、冷た過ぎて心に染みるぜ。コーヒーもこころなしか寒そうだ。……悪いがこの可哀想なコーヒーを温めてくれないか?」

もう自分でも何言ってるか分からないけど、リサさんが耐えられなくなって床を転がりまわってるので威力は高い筈だ。

さあ、どうするモカ!!

「かしこまりましたー」

「え」

俺からアイスコーヒーを受け取ったモカは、それを休憩所から持ってきたマグカップに入れてから電子レンジに放り込む。

待つ事数十秒。なんとという事でしょう、さつきまでアイスコーヒーだった物がホットコーヒーに。

「あたたまりましたー」

「もうお前の凶太さが怖い!!」

結局俺がツツコミを入れて、完全敗北した。



「ど、どうかな……」

緊張したような声で、手に持ったお盆を力強く抱きながらつぐみちゃんはそう聞いてくる。

目の手には半分程飲まれたコーヒー。

淹れたての程よい香りに乗せた湯気の上がるそのコーヒーは、机に置いた衝撃をまだ覚えていてユラユラと揺れていた。

「バリスタさんバリスタさん、このブレンドはどんな名前のコーヒーなんですかなー？」

「え?! えーと……」

「からかうなモカ。普通に感想を言えば良いだろ」

モカの頭にチョップを落として、俺はもう一杯コーヒーを飲む。

俺もモカも、特に味にうるさいという訳ではない。むしろよく分からない。

だが、そんな庶民の普通な意見が大切らしい。タダでコーヒーを飲ませて貰っているし、何か気の利いた言葉を言えれば良いのだが――

「いや、でも、ごめんつぐみちゃん。よく分かんない」

——ぶっちゃけ俺はコーヒの味なんざ全部一緒に感じる人間なのだ。

突然モカに呼ばれて来たのは良いのだが、何を考えても気の利いた言葉は出てこない。

「そ、そっか……。ごめんね、急に呼び出しちゃったりして」

明らかさまにつぐみちゃんがシユンとしている。蘭辺りに見られたらぶん殴られそう。

いかん、何か気の利いた事を言わなければ……。

「たださ、つぐみちゃんが生懸命淹れてくれたって気持ちには伝わってくるよ。味はよく分からないけど、それだけで俺は嬉しい」

「や、山田君……っ」

何が恥ずかしかったのか、つぐみちゃんは顔を真っ赤にしてその顔をお盆で隠す。

うーん、失敗だっただろうか。

「しよーくんてさー、たらし？」

「なんでだよ!!」

その日、モカは一日中ジト目だった。



俺は特段食べる訳ではないし、特に甘いものが好きという訳でもない。しかしこれは、なんというか、眼を見張るものがあるな。

「うっへえ……あそこのスイーツ全部食べ放題か」

「そうだよ！ ちょっと高いけれど、自分を甘やかすにはもってこいだよね！」

そう笑顔ではしゃいでたわわな実を揺らすひまりちゃん。

その横で、モカは既に涎を垂らしている。やる気が違うというか、もう目が輝いていた。

俺とモカとひまりちゃんがやって来たのは、デザート専門の食べ放題形式のお店である。大人気のお店らしく、俺達は行列に並んでいるところだ。

店頭に並ぶ何種類ものデザートが、どれだけ食べても同じ値段。食べれば食べるだけお得。食べれば食べるだけ太る素敵なお店らしい。

「モカ、そんなに急がなくてもなくなるならいいだろ。無限に出てくるし」

早く食べたいのか忙しく揺れているモカに落ち着くように言うが、モカは鼻息を荒げながら「食べ放題は戦争だよ」と謎の迷言を放つ。

お前は何と戦っているんだ。

「二人共、今日は付き合ってくれてありがとね！ どうしても一度来てみたかったお店なんだよねー！」

実はこれ結構遠出しているのだが、ここに来ようと提案してくれたのはひまりちゃんである。

流石は女子力の塊。こういう女の子ウケの良いお店は色々チェック済みらしく、今日は満を期しての遠征だった。

「まあ、財布なら任せろ」

「そ、そういう意味じゃなくて！ ほら、やつぱりこういうお店って一人じゃ来にくいじゃん？」

こんなキラキラしたお店に一人で来る勇気は俺もないね。

「しっかし女の子ばかりでなんか浮くなあ……」

「女装でもしたら良いんじゃない？　しよーくん、似合うと思うよ？　よく可愛いって言われてるし」

「誰に?!」

「デザートを食べ放題の為に女装なんてしてたまるか。」

「すみませんお客様」

そんな会話をしながら列に並んでいると、突然店員さんらしき人物に話しかけられる。予約の確認とかかな？

「本日ガールズデーで、男性のお客様のご入店はお断りさせて頂いております。本当に申し訳ありません」

「マジか」

「嘘お?!　態々遠出して来たのに?!」

「そ、そんな……っ!　ご、ごめんね翔太君!　私何にも見てなかった!　ど、どうしよう。ごめんね翔太君……」

「あーあー、ひーちゃんやつちやつたなー」

「こらモカ。ひまりちゃん泣いちゃってるだろやめなさい」

しかし、せっかく来たのに俺に付き合わせて二人がお店には入れないのも申し訳ない。

俺は外で待つてるから、二人は食べて来て良いぞと言おうとしたその時――

「――これは、やるしかなさそうすなあ」

――モカがこの世界の悪の権化みたいな顔でそう言った。

「嘘だろお前」

ここから先は察して欲しい。俺は数時間後、無事(?)にデザート食べ放題のお店で好きなだけデザートを食べる事に成功する。

方法は察して欲しい。いや、本当、察して欲しい。

その日食べたデザートは何故か、少しだけ塩っぱい味がした。

◆ ◆ ◆
空気が揺れる。

耳だけじゃなく、心にも響くような、そんな音。

特に人が集まっている訳でもなく、喧騒もない静かな場所で、ただ一つの楽器の音だけが木霊していた。

「いやー、トモチん流石だねー。痺れる〜」

「あそこまで行くともうただ格好良いな……」

男として色々な自信がなくなるんだけど。

俺とモカは、バイト終わりに始まるライブを観に行く予定なのだが、ついでに巴を拾う為に近所の神社に来ている。

そこで聞こえて来たのは和太鼓の音。どうやら近々あるお祭りの為に、一人練習に励んでいるらしい。

和太鼓の事はよく知らないのだが、力強く太鼓を打つ彼女の表情は真剣なもので。そうやって何かに全力で取り組む姿はやっぱり、眩しかった。

見習わないとな。

「来たか二人共。ライブまでもう少し時間あるけど、どうする？」

「あたしは特に予定ないかな。しょーくんはー？」

「俺も特にはないかな。巴、まだ練習していたかったら時間まで練習しても良いぞ？」

俺がそう言うのと巴は「良いのか？ 退屈だろ」と困ったような表情で苦笑いをする。

「そんな事ないよ。聞いてて、というか見てて気持ちが良い」

「そっか。ありがとな。……そーだ、翔太も叩いてみるよ！」

え、なんでそうなるの。

「いーじゃーん、おもしろそー」

それに乗って来たのはモカで、得意げな表情で巴からバチを受け取って、彼女は大きな和太鼓の前に立った。

やる気満々か。これは期待できる。

「そいやー」

ただ、のんびり口調のせいで全く迫力がなかった。

「もつと腹から声を出すんだよ！ こうやって！」

モカからバチを返して貰った巴は、構えてから目を瞑って一度静まり返る。突然目を開いたと思えば、凄まじい眼光で和太鼓を見ながら口を開いた。

「ソイソイソイソイソイ！ ソイヤー！」

力強い音。どんな曇り空も晴らしてしまいそうな、そんな気迫と音が伝わってくる。やっぱり、何かを全力でやるって事は本当に格好良いと思った。

「ほら、モカ！」

「流石に恥ずかしいかな〜」

ドユコト。

「ノリが悪いなあ。翔太はやってみるか？」

「おう、やってみる」

俺がそう言うと、巴は笑顔で俺にバチを渡してくれる。

見様見真似で構えて、息を大きく吸った。

この言葉に何の意味があるかは分からないけど、俺は吸った息を大きく吐きながら叫ぶ。

「ソイヤー！」

腹から声を出して、俺は腕を大きく振った。

気持ちの良い空気の振動——が、なる事はなく。

「うおお?!」

「お〜」

バチは手から擦り抜けて、あらゆる方向に飛んでいってしまった。

そして、地面に落ちたバチは見事に割れて四つに増える。なんとというか、時間が止まった気がした。

「ごめんなさいごめんなさい!! ごめんなさい!! 弁償するんで!! 本当ごめんなさい!!」

とりあえず土下座。

「いい、良いって良いって! 力が入り過ぎだな、でも迫力はあったぞ!」

「しょーくんのそいやー、格好良かったよー」

なんか二人に褒められている気がするが、申し訳なさ過ぎて何を言っているのか分からなかったよ。

いや本当、頑張るって大変だね。

◆ ◆ ◆
花とは。

簡単にいうと植物のちん——

失礼。

眼前に置かれたのは、お洒落な瓶に詰められて綺麗に飾られた花の数々。

色々な種類の花が見栄え良く飾られていて、そこまで花に興味がない俺でもそれは「綺麗だ」と思ってしまう。

——これが生け花か。初めてじっくりと見たけど、本当に細かいところまで拘っている——
——ような気がした。

いや、よく分からないんだよ。でも、綺麗だとは思う。

「流石蘭々。いつもありがとね々」

「別に、練習ついでに生けただけだから」

蘭から生け花を受け取って、それをレジの横に置くモカ。
現在バイト中、蘭が俺達のバイト先に来たのは初めて見た。

「これ、蘭が作ったのか？」

「そ、そうだけど」

「ふへー、凄いな」

語彙力がないせいで大した言葉が出てこない。

だから、そんな素直な褒め言葉が出て来る。本当に気の利いた事が言えない奴だ。

「あたしなんてまだまだだよ。もつと綺麗に生ける人なんて沢山いるし。……これも、もう少し考える所があったかなって、今見たらそう思う」

彼女は生け花に対して真剣に取り組んでいるのだろう。レジの横に置かれた花を見ながら、蘭は少し困ったような表情でそう言った。

「それでもあたしは、蘭の生けた花好きだよ」

「あ、あつそ……ありがとう」

緩い笑顔でモカがそう言うのと、蘭は顔を真っ赤にして背中を向けてしまう。いやあ、

素直じゃない。

「んん？ 聞こえない」

「あーもう！ 次はもつと良く生けてくるから」

そうとだけ言つて、蘭は何も買わずコンビニを出て言つてしまった。

何かに全力で挑む誰かは、やっぱり格好良い。

俺はそんな事とは無縁だと思つていたけれど、今はそんな彼女達を全力で追いかけた
と思つている。

いつか、彼女の隣に立つ為に。

「……。……これ、お願いします」

「はい。アイスコーヒーを一点ですね。温めますか？」

「あ、温める訳ないじゃん!!」

「ブフツ」

買物物を忘れていて帰って来た蘭とモカのやりとりに俺が思い出し笑いをしたのはまた別の話。

勘違いから見付けたもの

メロンパンとは。

パンの上にビスケット生地を乗せて焼いた、菓子パンの一種である。

その際ビスケット生地に網目を入れる事でよりふつくらとビスケットが焼きあがるのだが、その見た目がメロンの網目模様に見える事からメロンパンと名付けられた訳だ。

実際のメロンはこのパンとは全く関係ない。一応、後付けだがメロンを材料に使う事もあるようだが。

さて、俺達の目の前にはそんなメロンパンが一つ。

「おお〜……至高のメロンパン」

モカがそう言うのも分かるほど、そのメロンパンはなんとというか確実に美味しいぞっというオーラを出していた。

何を言っているか分からないかもしれないが、自分も何を言っているか分かっていな

いので安心してほしい。とにかく、目の前に物凄く美味そうなメロンパンがあるという事である。

「これ、リサさんが?」

「そうだよー。ちよつと材料買い過ぎちゃって、余っちゃったんだよね。二人で仲良く食べるんだよ! モカ!」

今にも涎を垂らしそうなモカに言い聞かせるように、リサさんは苦笑い気味にそう言った。

「メロンパン……」

ダメだ、聞いてない。

「も、モカーっ。あー……もう、山田君頑張つて!」

「何を?!」

「それじゃ、アタシ練習あるから」

そうとだけ言つて、リサさんは行つてしまう。

残されたメロンパンに釘付けになったモカは、今にも仕留めた獲物に喰らい付こうとする獣のようなオーラを出していた。

「……食べないのか？」

「食べるよー。……しよーくんも欲しい〜？」

「……いや、その調子だと全部食いたいだろ。良いよ、俺そんなお腹減ってないし」
いや、あれだけ美味そうだと流石に食べたいけどね。

ただここは、モカの好感度を上げる為に一歩引く。
頑張れってそういう事ですよ、リサさん！

いや、これなんて拷問？

「……。……しよーくん、はい」

なんて事を考えていると、突如モカはメロンパンを千切って俺に渡して来た。

——網目模様一つ分だけ。もはやビスケットの部分しかないけど。

「……なんのつもりだ」

「餌付け？」

酷い。

しかし、モカから何か食べ物を買えるってコトが嬉しくて俺は素直にその細切れのメロンパンを受け取る。

甘い。ただのクツキーだよこれ。

「美味しい〜?」

「美味しいけどこれパンじゃないからね」

「ですよ〜。はい、半分こ」

いつかライブ終わりに俺がパンを差し入れて持っていた時のように、モカはメロンパンを半分にして俺に渡してくれた。

え、なんか嬉しい。

「嬉しそうだね〜」

「そりゃ、お前——」

「リサさんのパンだもんね〜」

——なんというか、空気が凍った気がする。

恋愛経験はまったくない俺だが、その場の空気くらいは読めるのだ。
どういう訳か、物凄く空気が冷たい。モカの笑顔はなんだか寂しく見える。

「でもー、ビックリしたよね。リサさんに彼氏さんが居たなんて」

「これ、もしかして——」

「しよーくん、ショックだった?」

——もしかして、俺が好きなのはリサ先輩だってモカに勘違いされてるんじゃないやね?!



「——つ、ぷつ、あははっ、あっははは」

「笑うところじゃないですからね!!」

翌日、その件をバイト中にこっそりと話すと大笑いされた。

いや、ぶっちゃけ自業自得なんですけども。

「いや、でも……そうだね。笑い事じゃないよこれ」

「助けてください……。ていうか、リサさん彼氏が居るなんて一言も言つてなかったじゃないですか……」

「え？ 居ないけど」

「え？」

「え？」

「え？」

「ああ……」

どうしてか明後日の方向を見るリサさんは、溜息を吐く。

「まあ、それはそれとして」

「ちよつと待つてくください気になるんですけど!!」

「それはそれとして」

ダメだこの人話す気がない!!

「明日はアタシと山田君とモカで三人じゃん？ この誤解を解く作戦、今から考えようよ」

物凄く気になる一件があるのだが、今俺にとつて大切な事はこの誤解を解く事だ。そうでもしないと俺が精神的に辛い!!

そんな訳で、翌日のバイト時間。
先にコンビニに辿り着いた俺は、飲み物を一本だけ購入する。

——作戦その一、モカにだけ差し入れを渡す！——

なんかそれ大丈夫なのかって感じだけど、とりあえずリサさんに従っておけば間違いはない筈だ！ 多分!!

「ちやーす〜」

「お、も、モカ。これ、さつき自販機で偶然当たり出てさ、二本も要らないからあげるよ」
当たり障りもない理由をつけて、リサさんも居る中モカにだけ差し入れを渡せば勘違いも晴れる筈だ。

そういう作戦だったのだが——

「なんと、奇遇ですなー。あたしもさつき自販機で飲み物買ったら、当たりが出たんだよね〜」

このコンビニの近くにある自販機だが、購入の度に抽選があつて当たりを引くともう一本ただで買う事が出来る。

俺は実際には当たっていないのだが、なんと間の悪い事にモカもその自販機で飲み物を買つてきたらしい。しかも、当たり出してるとか。

「しよーくんもいつものあの自販機ー？　こんな短時間に当たりが二回も出るなんて、太っ腹だね〜」

「お、俺はその……ちよつと離れた所の自販機だよ。あはは……」

リサさんを横目で見ると、とても申し訳なきような表情で目を逸らしていた。

多分、モカが自販機で飲み物を買う所を必死で止めようとはしてくれただらう。……申し訳ない。

「なので、ここは間を取つてリサさんに二人から飲み物をプレゼント〜。いつも不出来な後輩をありがとうございませ〜」

「あ、あははー。モカも山田君もありがとう……」

つ、次だ次。作戦は一つだけじゃないもんね。

——作戦その二、バイト中はモカにくっついて回る！——

よく考えたら俺いつもモカにくっついてる気がするけど?!

もしかして俺ストーカーなの?! 大丈夫? 迷惑がられてない?!

「も、モカ……なんか手伝う事あるか?」

「ないよー。見てごらんなさいこの静まり返った店内を。お客さんも居ないしね」

「こんな日に限って客少ないし!!」

「ひ、暇だな……」

「暇だねー」

「ひまりちゃんだな……」

ダメだ、暇過ぎて変な事言ってる。

「しよーくん」

「な、なんだ?」

「十五点。赤点です」

俺は泣いた。

——作戦その三、リサさんをスルーしちゃおう!——

もはや外道の領域な気がする。

「山田くーん、ちょっと力仕事手伝ってくれない？」

表からそんな声が聞こえるが、俺は聞こえていない振りをした。

リサさんの事が好きなら、その言葉を聞き逃さない筈である。そんな恋の原理を逆手にとった作戦だ。

正直気が乗らないのだが、これも誤解を解くためである。俺は何の意味もない商品の整理に真剣に取り組んだ。

聞こえてない振り聞こえてない振り。

何度かりサさんが俺を呼ぶ。するとモカが俺を呼びに来る筈だ。

そしたら「あ、聞こえてなかった」とリサさんの元へ向かう。そういう作戦だ。

「リサさーん。しょーくん忙しいみたいだから、あたしが手伝いますねー」

「え?! モカそうくる?! え、あ、うん……ありがとう」

リサさああん!!!

「ダメだ……精神的に辛い」

モカがお花摘みトイレ休憩に行っている間、俺は崩れ落ちてリサさんに泣きつく。

「これで勘違いされたままだったら俺、モカに告白なんて無理なんですけど……」

「ま、まだ勘違いされてるって決まった訳じゃないじゃん？」

それはそうだけでも……。

「……。……よし、分かった。こうなったらアタシが一肌脱ぐよ」

脱ぐのか!!

「……山田くん？」

「き、気にしないで下さい。……いや、どうする気ですか？」

「直接モカに聞くとよ。山田君はトイレに行っておいて」

そんな恐ろしい事を!!

ただ、今の俺は藁にもすがる思いなのだ。

大人しくリサさんの言う事を聞くしかない。

「二人共鈍いんだよねえ……。はあ、世話がやけるんだから」

なんの話ですか……。

「あれ？　しよーくんもお花摘みー？」

「そんなお洒落な趣味はないけどな。小さい方です」

「小さいんだー」

「なんの話だと思ってる?!」

小さくねーよ!!!

モカにツツコミを入れてから、俺はトイレに入って扉に耳を傾ける。

「ねえ、モカー。気になる事があるんだけどさ。山田君って好きな人居るのかなー？」

え、何その会話のノリ。女の子の会話じゃん。これ盗み聞きして良いの？

「リサさん、しよーくんの事気になるんですかー？　彼氏さんいるのに」

「え？　居ないよ？」

「え？」

「え？」

「え？」

なんか同じような会話した記憶があるぞ。

「ほ、ほら、やっぱり気になるじゃん？ モカも気になるでしょ？」
話を逸らしたぞこの人。

まあ、今はそつちよりもこつちだが……。

「んー、気にならないですねー」

ただ、モカから返って来た返事はそんな言葉だった。

少しだけ溜息が出る。

それって、眼中にないって事なんじゃないか？

頭の中が真っ白になった。

「な、なんで?! だってモカ——」

「しよーくんが何を好きでも誰を好きでも、それを邪魔する権利はモカちゃんにはあり
ませんからな〜」

モカ……。

「しよーくんは好きな人が出来たら、きつと全力でその人の事を好きでいると思うんで

すよねー。きつと、誰も邪魔できないくらい、その人の事を真っ直ぐ見ると思うんですよ。……しょーくんが本当にやりたい事を見付けたなら、モカちゃんはそんなしょーくんを全力で応援しようと思うのです」

少しだけ力の入った声で、モカはそう言う。

「モカ……。そっか」

「それで、その好きな人に——」

その先からは、声が小さくて聞こえなかった。

そうだな……。こんな所で盗み聞きしてる場合じゃない。

早く前に進まなきゃな。

「あー、出た出た。めっちゃ出た」

「しょーくんおかえりー。小さい方じゃなかったのー？」

「小さくねえ!! ……た、多分」

「何の話ー？」

忘れて下さい。

「そーそー、しよーくん。好きなパンの話してただけど、しよーくんはどんなパンが好きー？」

いや、そんな話してなかったよね？

そして唐突だな。

「パン……？　パンか……」

チラツと映るリサさんの顔。なにやら目で訴えているが、何が言いたいのかわからない。

「メロンパンかな。リサさんのメロンパン最高に美味かった！」

「分かる。リサさんの至高のメロンパンは最高だよね」

そんな俺達の会話を聞いて、リサさんは半目で苦笑いを見せる。

でも、これで良いんだ。

俺がモカにどう思われてるかとかじゃない。

俺がモカをどう思ってるかが大切なんだと思う。

モカがどう思ってるかはともかく、俺はモカの事が好きなんだ。それだけは誰が何を思おうが変わらない。

「好きだよ、メロンパン」

「あたしも大好き〜」

そうか……。もしかしたら見つかったのかもしれない。

——俺の、今だから全力でやりたい事が。

上原ひまりにお任せを！

メロンとは。

植物界。真正双子葉類。バラ類。ウリ目。ウリ科。キュウリ属。に属する、簡単に言うとなかなか果実である。

それが目の前に二つ。といっても、これは比喩表現ではあるが。

「ひまりちゃん……」

「ラブ師匠とお呼び！」

俺がそんな果実の持ち主の名前を呼ぶと、謎の仮面を付けた彼女は鞭を振るう動作をしながらそう言った。

なんて安直な名前なのだろうか。

「私はあまりの進歩のなさに怒っております」

「ごもつともな意見です……」

立ち上がったってメロンの下で腕を組むラブ師匠。

そんな彼女の前で跪く事しか出来ない俺。

そんな二人の間に、コーヒーが二つ運ばれてくる。

「で、でも大変なんだと思うよ? 二人共」

苦笑いをしながら、つぐみちゃんはそうとだけ言って去っていった。

そう思うなら助けて欲しい。逃げないでほしい。

俺は今、ひまりちゃんと二人で羽沢珈琲店に居る。

いつかモカを家に呼んだ時に一人だけ相談に乗れなくて怒っていたようなので、今日はその埋め合わせという形だ。

そんな訳で、ひまりちゃんにも何かアドバイスを貰えたらなと思っていたのだが。

現状を話すとひまりちゃんは何処からか謎の仮面を取り出して、ラブ師匠へとその姿を変える。いや、ラブ師匠ってなんですか。

「モカが好きなんですよ?!」

「その通りでございます……」

「だったらその気持ちを伝えるだけじゃん！」

それが出来たら苦労しないんですよ……。

俺のやりたい事は多分見付かった。だから、後は本当に前に進むだけなのに。

いかんせん俺はヘタレである。ぶつちやけ告白とか無理。

それ以前に振られたらどうしようとか考えたら胃に穴が空きそうだ。

「当たって砕けろだよ」

「砕けたらダメなんだよ!!　そもそもモカが誰かに告白されたとして、それをオーケーするのを想像出来るか?！」

俺がそう言うのと、ひまりちゃんは目を見開いて少し考え込む。

「……出来ないかも」

そして真顔でそう言った。

「だろお?！」

「た、確かに……。モカからそういう話全然聞かないしなあ……」

そんな話をしていると、遠くで仕事をしていたつぐみちゃんが珍しくジト目で俺達を見ながら苦笑いをしているのが目に入る。

あ、もしかして煩かったかな……。一応店内だしね。ボリュームは下げようか。

「でも、いつまでもこのままって訳にはいかないでしょう?」

「それはごもつともです……」

そもそも俺は、彼女達が今全力でやりたい事をしている事に惹かれたんだ。

そんな俺がここで立ち止まっているのは、自分の気持ちにまだ正直になれていないって事になる。

ただやっぱり、少し怖い。

「……問題は雰囲気作りだと思っただよね」

目を半開きにして、机に肘をつけて組んだ腕に顎を乗せながらラブ師匠はそう言った。

「雰囲気……?」

「告白する場所って事! 綺麗な夜景だったり、夕焼けの映る海辺とか、あとは一面銀色の雪景色とか!」

確かに、映画やドラマでのそういうシーンってロマンティックな場所が多いよな。夕焼けの海辺とか最高かもしれない。

「モカは寒いのが苦手だし、やっぱり海辺とかじゃないか？」

「ふっふっふー、甘い。甘いよ翔太君」

突然含み笑いをするラブ師匠。影の落ちる表情は何を企んでいるのか、妙に口角が吊り上っている。

「むしろ、寒さでモカが弱ってる所がチャンスなんだよ！」

「その発想はなかった。いや、可哀想な気がするんだけど」

寒くてやってられんのに突然告白とかされても困るのでは？

そう思ったのだが、ひまりちゃんは笑いながらこう続けた。

「想像してみて、翔太君。ここは雪の降り積もるゲレンデの中央付近。寒くて上手く動けないモカを翔太君はエスコートしてゆっくり進んでいくの」

想像してみる。俺格好良い!!

「そして降りたところで視界に映る、白銀の世界を燃やしてしまうような夕焼け。……

いつ告白するの!! 今でしょ!!」

某熱血な人のように声を上げるひまりちゃん。少ししてからここが喫茶店だという事に気が付いたのか、ハツと口を押さえて彼女は横目でつぐみちゃんを見た。

あははと笑って許してくれるつぐみちゃんは天使のようである。

「で、どう? この作戦」

「あるな」

「でしょ!」

語彙力を失う程の作戦だった。負ける気がしない。

「……ラブ師匠。一生付いて行きます!」

「ふふふ、私にかかれればちよちよいのちよいなんだから! はー、私にも好きな人出来な
いかなー」

ひまりちゃんを狙ってる男子は多そうだけどなあ……。いや、女子校つてのは案外出
会いが少ないのかもしれない。

ただ、いつ誰が誰と付き合うかなんて分からない。圭介がリサさんとどうこうなつて
るなんて想像もしてなかったからな。てか本当にどうなってるの。

「そうと決まれば場所探しと日取りだね。せつかくだからA f t e r g l o wの皆と翔太君とまた行きたいな」

遊園地に皆で行った時の事を思い出す。

少しアクシデントもあったが、あの日は本当に楽しかった。

そう言えば観覧車の中でモカは――

「それじゃ、場所は私が探しとくね！ 確か日菜先輩がスキー場に行ったことあるって言うってたんだよね。日付はどうしよっか。翔太君社畜だしね。とりあえず、S N Sで翔太君と私達のグループ作るからバイト休みの日とか教えて欲しいな！」

地味になんの遠慮もなく社畜と言われた事はともかく、そんな訳でひまりちゃんの独断によりA f t e r g l o wメンバーと俺との二度目の日帰り旅行が決まってしまふ。

それで良いのだろうか。まあ、ひまりちゃんはA f t e r g l o wのリーダーだし甘える事にした。

俺も止まっていられないからな。



バイト先でシフト表とにらめっこをする。

「いやー……困ったな」

「どうしたの? 山田君」

「どうもAfterglowの面々と予定が合わないですよ」

俺が唸っているところに話しかけてくれたリサさんに、俺は諸々の事情を説明した。

あの日から数日経つのだが、なんとも全員が遊べる日取りが見つからない。

半分以上が俺のバイトのシフトのせいなので、俺がなんとかするべきなのだ。

「ごめん山田君。私達近々ライブがあるから休み削れなくて」

「い、いやいやいや。リサさんが謝る事なんてなにもないですからー!」

両手を合わせて頭を下げるリサさんに、俺は両手を振って頭をあげてくださいと頼む。

しかし、リサさんがダメとなると中々厳しい。モカと遊ぶのだからこうなつて来ると頼める人が少ない。

「お、なんだいなんだい。二人でデートの約束かい」

二人で唸っていると、自動ドアの奥からお客さんではなく同僚の高木さんが入ってきた。

「いやー、それがですね」

「待ってくれリサさん。流石にね?」

高木さんにはかなりお世話になってるから、こうも毎回バイトを代わってもらうのも気が引ける。

「でも、他に誰に頼む気?」

「うぐ……」

「まーまー、二人して青春だねえ。三角関係かい」

「ちげーよ!!」

「私を入れて四角にするかい?」

「意味の分からない方に複雑にしないで?!」

「この婆さんも元気だなあ!! 本当に!!」

何も話さないとそのままボケて話があらぬ方向に進んでいってしまう為、俺は高木さんにも事情を話す事に。

「——そんな訳で、ここかここかで休みを代わって欲しいんですね」

「この日曜日なら代わってあげられるよ」

「本当すか?」

「任せんしやい。若者は遊んでなんぼよ。年取ったら後は死ぬだけ、若い内に遊んどきなあ」

相変わらずのブラックジョークに苦笑いしか出来ないが、本当に高木さんの気遣いには感謝だ。

「人間いつポツクリ死ぬか分からんからねえ。今生きてるこの時を大切にして、全力で生きな」

その言葉は確かにいつもものブラックジョークなのだけでも、なんだか心に刺さる。

今生きてるこの時を大切にして、全力で。きつとそれは俺が憧れて好意を寄せた彼女の生き様そのものだったからなのかもしれない。

そんな訳で、俺は無事に遊ぶ日を確認出来た。ひまりちゃん伝えて A f t e r g l o w メンバーの予定も完璧である。

聞く話によればモカを説得するのが大変だったとか。バイト中も「寒いから嫌だし、他の所にしようよー」の一点張りだった彼女をどう説得したのか気になったがそれはまた別の話。

そして俺達は無事にスキー場に遊びに行く――

「え？　高木さんが倒れた?！」

―― 筈だった。

スキー場に行く前日のバイト先の事。

突然リサさんが慌てた顔でスマートフォンを持ちながら声を掛けてきたかと思えば、彼女は「高木さんが……」と心配そうな声で画面を見せて来る。

リサさんのスマホの画面に映っているのはSNSのバイトメンバーで作ったグループだ。

よく急用でバイトに来れなくなった人が誰かに代わりに代わりを頼む時とかに使われていたのだが、そのトーク画面には――

『タカギノマゴデス。タオレテ、イマネコンデイルノデ、スウジツカンバイトイケナイトオモイマス』

——と、簡単なメッセージが入っている。

思わず俺も自分のスマホでトーク画面を確認した。当たり前だが書かれている内容は変わらない。

いや、なんで全部カタカナなの。孫って事は幼い子供って可能性もあるけど。

「ま、マジか……」

「高木さん大丈夫かなあ……。それに、明日どうしよつか」

複雑な表情で唸るリサ先輩。まあ、流石にこうなると答えは決まってくる。

「まあ、俺が普通にバイト出れば良い話ですよ。元々明日は代わって貰ってたんだし。モカ達は五人でも楽しんでくるだろうし。……んー、高木さんに気を使わせるのもなんだからグループトーク上はリサさんが代わりに出たって事にしてください」

「山田君……」

別にこっちはモカ達と遊ばないと死ぬ訳じゃあるまい。むしろ俺は高木さんの方が心配だった。

あの人かなり元気そうだったのになあ……。

外を見ると雨まで降っている。天気予報だと明日は晴れらしいが、どうも色々な事が向かい風だ。

その後少し仕事も忙しくなって、特に他に対策も思いつかない。つまり、そういう事なのだろう。

「ふっふっふー、話は聞きました」

それで、その日バイト終わりの時間。まるで生えてきたようにモカが現れた。少しだけ雨に濡れた髪が気になったので、手元にあったタオルで拭いてやる。

「今日非番だよなモカ……。あー、そうだ。悪い、グループトーク見ただろ？ 明日の事なんだけど——」

「それならモカちゃんにお任せを。とっておきの助っ人を用意してあります」
え、ドユコト。

「この方でーす」

そうやってモカが両手を広げた先に居たのは、金髪碧眼の顔の整った——どう見て

も日本人じゃない一人の青年だった。

「いや誰だよ!!」

全くもって見た事ないし、なんならそんな人間が登場するって伏線もどこにもないからね。全くの赤の他人だからね。いや本当に誰?!

「紹介します。……ジョンソン・マッケンジー君です」

「いやマジで誰?! 外国人じゃねーか!!」

いや、でも何処かで聞いた事があるような——

「あー、モカが最初山田君と間違えた人だ」

リサさんは口を開けて驚いた表情で両手を叩いてそう言う。

彼女のそんな言葉に、俺もどこでその名前を聞いたか思い出した。

アレは俺がこのバイトを始めた日の事。

リサさんがモカを俺に紹介して、最初にモカは俺と何故か高木さんを間違えて。

その後リサさんが「そんな訳ないでしょ」と突っ込むとモカはこう言ったのである。

——あー、そうでしたね。なら、ジョンソン・マッケンジー君?——

「実在してたのかよ!!!」

だとしてどこの知り合いなのその人って感じだけど。そもそも高木さんもジョンソン君も俺に全く似てないよね!!

「というかモカ。彼はどちら様なの?」

若干引きつった笑みでリサさんはモカにそう聞いた。一体どこから連れて来た人なのよ。

「高木さんのお孫さんにあたる人だよ」

「二世代の間に何があったの!!!」

高木さん家がどうなってるか気になるんだけど!!

「ハジメマシテ、ワタシタカギノマゴ、ジョンソンデース」

しかも片言だし!! というかさっきのグループのカタカナで会話してた高木さんの孫ってこの人だな?!

「いや、流石にこの人にバイト代わってもらうのは無理じゃない?!」

「大丈夫だよー。店長にも許可取ってあるからー」

そう言いながら、モカは自分のスマホの画面を俺に見せてくる。

少しの間仕事が忙しくて確認できていなかったグループトークにはこう書かれていた。

『ソノカワリ、ワタシガリンジデハタラキマス。コンビニバイトケイケンアルノデ、マカセテクダサイ』

『オツケー』（店長）

「店長軽い!!!」

良いのかそれで。

「オバアチャンカラ、コトツテヲアズカツテマス」

俺が困惑していると、ジョンソンは真剣な表情で俺に話しかけてくる。高木さんから言伝?

「ニンゲン、イツシヌカワカリマセン。ダカラ、シニゾコナイノババアノコトハキニセズ、イマヲゼンリヨクデタノシンデキナサイ。ト、アノババアガイツテマシタ」

「今最後何気なくババアつて言つたよね。凄いありがたいお言葉だけど最後のでちよつと笑いそうになつたんだけど、どうしてくれるの?!」

日本語つて難しいから仕方ないけどね!!

「高木さん、優しいよね」

「んー……でも色々心配だ」

高木さんの安否もだが、この片言の外人さんがちゃんと働けるのかもとても心配だ。

「イラツシヤイマセー」

しかし、お客さんが入ってくるなり突然接客モードに入るジョンソン君。

少し黙って見ていたが、片言ながら接客対応は殆ど完璧である。やるじゃないかジョンソン……ッ！

「明日は大丈夫そうだねー」

「これでアタシも気兼ねなく練習に行けるねー」

「後は高木さんが完治してくれば完璧だけどな……」

倒れたとか言ってたけど、本当に大丈夫なのだろうか？

「オバアチャン、セツカクツクツテイタトランプタワーガタオレテ、シヨックデフテネシテルダケナノデ。ゴシンパイ、イリマセン」

「あのババア何してんだああああ!!! てか倒れたのトランプタワーかよおおお!!!」

そんな訳で、俺達は翌日なんの迷いも後腐れもなくスキー場に赴くのであった。

雪だるま造形大会

気が付けば視界は真っ白だった。

いや、高速バスが雪山に辿り着いたからとかそういう訳ではなくて。

肩に感じるほんのり軽い感触。

女の子特有の香りを間近で感じさせる。

そんな当人は、俺の肩に頭を寄せて寝息を立てていた。

お分かりだろうか。

俺、山田翔太は今片思い中の青葉モカに寄りかかれて、あまつさえ無防備な寝顔を真横に晒しているのである。

興奮するわ。

間違えた。頭真っ白だよ。

「あっはは、何トリップしてんだよ翔太」

「あ、モカちゃん寝ちゃってる。ふふ、もう少しで着くけどこのまま寝かせておいてあげよっか」

いや、俺の理性がもたないからなんとかして。

「モカ、確か三時ごろまで起きてたらしいし」

「あんなに、寒いのやだー行きたくないよーって言ってたのにねー!」

言いながらひまりちゃんは今日の予定の為に作られたSNSのグループトーク画面を見せてくれる。

最後の更新が二時五十分。

『皆寝ちゃったー?』

それまで話に付き合っていたひまりちゃんも寝落ちして、結局最後まで起きていたのはモカだった。

彼女を表すメロンパンのアイコンだけがその後永遠と話しているのは、なんだか狂気の的である。

『ひーちやまん、起きてー』

誤字ってるし。スマホのフリック使つてると、小さい文字にする時によくやるミスだ

よな。流石に眠かったのか。

俺も楽しみ過ぎてあまり寝れなかったが、モカの場合そうだな……ゲームでもしてたんだらう。

「三時って……殆ど寝てないな？」

早朝出発のバスに集合した時からどうも反応が薄いと思っていたが、大丈夫なのだろうか。

ちよつと心配だ。

「よほど楽しみだったんじゃないかなー。今朝会った時スマホの充電し忘れたくつて言ってたし」

「一割くらいしか残ってなかったし、モカが迷子になったら探すの大変なんだけど……」
「それはもう翔太がずっと一緒にいてくれるから大丈夫だろ！」

「山田君、モカちゃんの事お願いね！」

「マジかよ」

電池切れはマズイでしょ。

すーすーと寝息を立てるモカは、時折口をもごもごさせ何かを食べるような仕草をしている。

「——んの、手作りパンく……すう……」

どんな夢を見ているやら。

本日、俺とAfterglowの面々はとあるグレンデにやってきていた。

目的はというと寒さで弱ったモカに告白するといふかなり下劣な理由だが、普通にまた皆で遊べる事が楽しみだったりする。

問題は——

「——俺、スキーやった事ないんだよね」

「「「え」」」

——まあ、なんとかなるだろ。



比喩表現ではなく、一面真っ白の世界。

降り積もった雪を踏むと靴が数センチ沈んだ。

地元じゃここまで積もる事はめつたにない為、それだけで俺達は大はしやぎである。一人を除いて。

「寒いよ……」

モカは絶賛震えていた。

めっちゃ厚着だし、なんならポケットの至る所にカイロを突っ込んでいるらしいが、それでも彼女は震えている。

寝てないのもあつてちよつと顔色が悪い。

なんか……申し訳なくなってきた。

「モカちゃん、大丈夫？」

「つぐぐ」

心配そうに声を掛けるつぐみちゃんにモカは抱き着いて、もちもちと頬を擦り付ける。

羨ましい——じゃなかった、まさかここまで寒いのがダメとは。

「元気がないぞモカー。このくらい動けば直ぐにあつたかくなるって！」

「モカちゃんねー、トモより繊細なんだよー」

「ん？ どういう意味だ？」

ナチュラルにバカにされてるんだよ。

「あー、つぐ温かーい」

そのままつぐみちゃんをモフるモカ。羨ましい——じゃない、変わって。

じゃなくて、なんとか対策をしないと遊ぶ事すら出来ないな。

「まあ、動けば暖かくなるは確かに一理あるかもね！ そーだ、皆で雪だるま作ろうよ
！」

いきなりそんな提案をするひまりちゃんは「確か……あつちに雪遊び出来る場所があつた筈」と地図と睨めっこしながら歩き出した。

有無を言わせない感じだったので、笑いながら皆付いていく。

少しだけ歩くと、開けた場所にたどり着いた。

小さな子供達が走り回ったり、それを親御さん達が眺めている。ちよつと場違いじゃない？

「雪だるまなんて懐かしいな。最後に作ったのがいつか覚えてないや」

「蘭ちゃんも雪だるま作るの上手だったよね！」

「そうだつて。覚えてない」

なんて会話をしながらそれぞれ雪をかき集め、丸める幼馴染達。

しかしモカはといえば、プルプルと震えているだけだった。そんなに寒いのがダメなのか。

「大丈夫かモカ」

「大丈夫じゃないよ。しよーくん温めて〜」

「うえあ?!」

突然両手を広げて俺を引き寄せて来るモカ。普通に抱きつかれたんだが!! おそるべし寒さ効果!! やったぜ!! ありがとうひまりちゃん!!

——じゃ、ねーよ。こんなにモカが辛そうなのは正直見てられない。

「……ごめんな、こんな所に連れてきて」

「え、どーしたのしょーくん」

「なんでもない。ほら動け。寒い寒いって動かなかったら余計に寒くなるぞ」

「モチベがなー」

モチベか。確かに、モカは興味のない事には本当にとことん興味がなからな。

ならば——

「それじゃ、雪だるまじゃなくて雪でデカイパンを作ろうぜ」

——興味を引くのみ。

「デカイパン」

俺の提案に、モカは表情を緩める。

どうもやる気のスイッチが入ったのか、彼女はその目を燃やしながら雪をかき集めていった。

どんなのが出来上がるか楽しみだな。

それはそれとして、俺も久し振りに雪の造形を楽しむ事にする。

かつて近所のおじいちゃんおばあちゃんからは雪だるま職人と呼ばれた俺の力を見せる時が来たようだ。

少し時間が経って。

「よし出来た。集中し過ぎて周りを見てなかったが、皆はどんな感じかな？」

自分の作品の出来栄を見て手を叩きながら満足して周りを見る。

「どうやら皆おもしろいおもしろいの形に出来上がっているようだ。ちよつと見にいってみるか。」

「調子はどうだー？」

「あ、見て見て翔太君！」

俺が様子を見に行く、ひまりちゃんはかなり食い気味で俺の手を引っ張ってくる。

そんなに自信があるのか。それは楽しみな。

「これ！ 私が作ったの！」

そう言いながら両手を広げるひまりちゃん。その両手の先には歪というか不気味な——何処かで見たことのある表情をした雪だるまが立っていた。

「なにこれ」

「お守り！」

お守り。

そこでふと思い出したのは、彼女達 *A f t e r g l o w* の面々が各自持っている不思議なお守りである。

蘭なんかは割と常に持ち歩いているのだが、モカにはむしろ不思議な力が宿ってそうとか、つぐみちゃんすら若干なんて言えばいいのか分からない顔をすするアレ。

でもなんだかんだ言っただけじゃなく皆大切にしている、*A f t e r g l o w* の象徴だ。

それを雪だるままで作ったのだろう。

「完成度たけーなおい」

なんとも言えないので、とりあえず適当に褒めておいた。

「やったー！ 翔太君に褒められちゃったー！」

ひまりちゃんって偶に独特なセンスを發揮するよね。

顔を横に動かすと、また反応に困る造形の物が視界に入る。

満足気な表情で手を払う巴の正面には、丸は丸なのだが綺麗に整った円柱が横に傾けられていた。

すげー綺麗な断面してる。叩くといい音が出そうだ。

いや、なんで和太鼓。

「……これ、和太鼓か」

「お、翔太は分かってくれるのか！ 嬉しいな！」

俺が半目で聴くと、彼女は嬉しそうに円柱の面の部分を叩く。勿論爽快な音になる訳もなく、ポスツと雪を叩く音が虚しく鳴った。

「雪だるまとは」

「いやー、一応雪だるまを作ろうとはしてたんだけどさ。作ってる途中でこれ何かに似てるなって思って、気が付いたら」

「気が付いたら?! 無意識にこうなっちゃったの?! お前はニユアンスで生きてるのか?!」

雪だるまを作ろうって話だったんだけど!!

さらに視線を動かすと、何故か視界に雪だるまの生首が二つ転がっている。

二つは大きさが少し違って、生首の親子になっていた。

「身体は?!」

模様が描かれていて明らかに頭の部分なのに身体だけが用意されていない雪だるま。

ぶっちゃけこれまでより幾分かマシなのだが、どうして生首なのか気になる。そういう趣味の奴今日居たっけ?

しかもその二つの生首の真ん中に立っているのがつくぐみちゃんだから驚きだ。

「あ、あはは……。ちよつと大きく作り過ぎちゃって。……持ち上げられなくて」

「天使かよ」

「可愛いかよ。でもだからって二つとも頭にして生首状態ってどうなの?! 心の中に闇でも飼っているの?!」

「だから、ちゃんと足と手を付けてカー●イキみたいにしよと思うんだ！」

「君は本当に可愛いな?!」

それはそれで良いけど誰一人として雪だるまを真剣に作れてないのどうなのよ!

しかし、溜息を吐きながら振り向くと俺の前に雪だるまが五つ並んでいるのが見える。

手頃な大きさなのだがその雪だるまは結構作り込まれていて、ジト目にツリ目に可愛い系の目に表情でもその雪だるまに何が込められているのかハッキリと分かった。

仲良く五つ並んでいる After glow 皆を模した雪だるま。

それを作っていたのは——蘭である。

君は偶に可愛いことをするよね……。

「すげーな」

「あ、山田。皆のは見てきた?」

五つ目の雪だるまの顔を作りながら振り返った蘭は、俺にそんな事を聞いてきた。ツリ目に何故か髪の毛が描かれて一部だけ濃い色をしてる。これが蘭だな。

「個性的過ぎてツツコミが追いつかない」

「でしょ」

くすりと笑う蘭は、自分の雪だるまを叩いて「完成」と表情を引き締めた。どう？ と聞かれるまでもなく。俺は「優勝ですね」と呟いた。

「Afterglowの皆か」

「うん。ちよつと小さいけど」

背丈に関しては俺の腰までないくらいだが、小さい分拘りが見てとれる。

どれが誰なのか分かりやすく、蘭がどれだけAfterglowの皆の事が好きなのかよく分かった。

「山田も居るよ」

「え？ どこ？」

意外な発言に驚いて、俺は周りを見渡した。しかし六個目の雪だるまは見当たらない

い。

「モカの上」

自分の雪だるまを見付けられない俺を見かねてか、蘭は雪だるまの在り処を口で言うてくれる。

視界に入るジト目の雪だるま。その上に小さな——なんだろう絵に描いたような雪だるまが置いてあった。

なんの変哲もない普通の雪だるまである。

「……ありがとな」

そんな普通の俺が、Afterglowの中に居るのが嬉しくてついついそんな言葉が漏れた。

「別に」

いつも通りそう返す蘭は、辺りを見ながら少しだけ表情を曇らせる。

「どうかしたのか?」

「モカが居ない」

「え?」

蘭に言われて周りを見渡してみると、確かにモカの姿が見当たらなかった。

歪な雪だるまと、和太鼓、生首、小さな *A f t e r g l o w* 達、俺の雪だるま。特に人が隠れられるような物は——

「……ん？」

——なんて周りを注意深く見てみると、真つ白な世界に真つ白な巨大な何かポツンと置いてあるのが見える。

アレは……パン？

半球状の表面には網目模様が着けられていて、ふつくらと丸いその塊はメロンパンにも見えなくはなかった。

気になって近付いてみると、それは人の背丈程の大きさの雪の塊で——横に穴が開いている。

「やっほー」

その中で丸まった姿のモカが手を振っていた。

かまくらである。

「何してんのお?!」

「しよーくんがデカイパン作ろうって言ったから、作ってみましたー。結構力作だよー」
心なしか暖かそうな表情でモカはそう言った。

かまくらの中って暖かいって言うけど、どうなんだろう。

「中暖かいのか?」

「それはもう。お客さんも一泊どうぞですか? お安くしますよー」

「金は払わんぞ」

どうも気になったので、俺はモカ作のメロンパンかまくらの中に入ってみた。

これがどうも想像よりは暖かい。いや、そこまで暖かい訳じゃないけど。体感的には結構違う。

「これ、埋もれたりしたら危なくない?」

それを外から見ていた蘭はジト目でそう言った。

確かに、人が二人入れる大きさの雪の塊だから崩れた時はそのまま生き埋めだろう。

「……大丈夫なんだろうな？」

「いやー、突貫工事なので？」

「逃げろおお！」

すぐさまモ力を連れて脱出しようとしたが、モ力を押し出したところがかまくらが崩れて俺の下半身は雪に埋まってしまった。

「ぐへえつ」

「や、山田?! ……大丈夫?」

「お、おう……」

あぶねえ……。もう少しで生き埋めだったぞ。

埋まったらどうするつもりだったんだよ。流石に見付けられないからね。

「しよーくん大丈夫……?」

「一応。けど、まったく下半身が動かん。助けて」

雪に埋まった身体が思っていた以上に動かなくて、自力で脱出する事が出来ない。めちやくちや寒いし。モ力がこうならなくて良かったよ。

「生き埋めだね〜」

俺を掘り返しながら、モカは面白そうに言う。

「冗談じゃない。お前が埋まってたらどうするつもりだったんだ」

「その時は、きつとしょーくんが見つけてくれるから？」

「……お、おう」

なんとも能天気な事だ。

ただ、かまくらの中で少しは寒さにも慣れたのか、モカも皆の雪だるまを見て遊びに行くくらいには元気になったようである。

やっぱり弱ってるモカなんて見ていたくないね。彼女はあの笑顔が一番だ。

「これ、しょーくんの雪だるまー？」

この場にある唯一無二の普通の雪だるまを指差しながらモカはそう聞いてくる。

すっかりとした丸いフォーム。木の枝で作られた腕にバケツの帽子。

誰が何を言おうが完璧な雪だるま。ザ・雪だるま。ぶつちやけ優勝だ。

「なんとというか、普通だな」

「もう少し何かあった方が良かったんじゃない？」

「いやお前らが個性的過ぎるだけだからね!!」

ダメなの?! 普通に雪だるま作ったらダメなの?!

「あ、あはは。山田君と蘭ちゃん以外雪だるま作ってなかったね」

「待ってつく! 私のは辛うじて雪だるまだよ!」

いや氷のクリーチャーだよ。

「アタシのも雪だるまだろ」

「雪だるまの意味知ってる?」

「あたしのはかまくらだよ」

「お前は何しに来たの?!」

あーもう開幕ぐちゃぐちゃです。どうしてくれんのマジで。

「あつはつはく、これは蘭の勝ちかな」

「待て!! 俺の雪だるまのこの造形美を見ろ!!」

「しよーくん、無理にボケなくて良いんだよ」

「お前らが個性的過ぎるんだよお!!」

「……別に勝ち負けじゃなくない?」

まあ、やっぱり彼女達とはこう賑やかなのが一番だな。

また今回も楽しい一日になりそうだ。

俺なりの進み方で

そこは戦場だった。

白い世界で激しく飛び交う弾。世界の全てが敵に見える。

高速で飛び交う弾はもう後ろから飛んで来ているのか前から飛んで来ているのかも分からず、ただ俺の身体を前後に揺らすだけだった。

悲鳴をあげる事も叶わず、俺は冷たい地面に倒れる。

……死ぬのか、俺は。

「倒れないで山田！」

「しよーくん、頑張つて〜」

背後から仲間だと思っていた二人に声を掛けられた。

そんな事言つてもさ、もう俺はボロボロなんだよ。

許してくれよ。

薄れゆく意識の中、どうしてこんな事になってしまったのか俺は思い出す。アレは雪だるまを作り終えた後の事だった――



「雪といえは雪合戦だよな」

唐突に巴がそう言つて、雪玉を丸め始める。

いや、否定はしないけどその発想はおかしい。

だつてここスキー場だからね。雪合戦に來た訳じゃないからね。

「なるほど……良いね雪合戦！ やろー！」

しかし、何か考える仕草をしてからひまりちゃんも雪合戦に同意し始めた。

一応彼女はテニス部らしいが、そんなに積極的に巴と悪ノリするタイプだったっけ？

そんな事を考えていると、当のひまりちゃんが俺の耳元でこう囁く。

「今こそモカを守つて、翔太君の漢気を見せる時じゃない?!」

「な、なるほど……。流石だぜラブ師匠」

この雪合戦で良い所を見せれば、モカからの好感度も上がる筈だ。これは負けられない。

「それじゃー、チーム分けは巴とつぐに私のチーム。蘭とモカと翔太君のチームね！」
上手い具合に皆を強引に雪合戦に誘う、Afterglowのリーダーでもあるラブ
師匠。

蘭は若干苦笑い気味だが、申し訳ないけれど付き合ってもらおう。

「それじゃ行くぜえ！ ソイソイソイ！」

して、チーム分けだけしてまだなんのルールも決まっていないのに突然雪玉を投げ始める巴。

雪は俺達三人に直撃。蘭に関しては顔面に当たって、雪が顔から落ちた後の彼女はその顔を真っ赤にして巴を睨みつけていた。

オウノウ。

「……………痛いじゃん」

ガチギレなんですけど！

「いやー、これは波乱の予感」

「呑気な事言つてないでなんとかして?!」

俺に蘭を止める力はないぞ！

「この……っ！」

「その程度でアタシを倒せると思うなよ！」

倒すって何。俺達は何をしてるの?!

「ちよ、二人共?! そんなにムキにならないで?!」

「ど、ど、どうしようひまりちゃん！」

あつちのチームの二人も巴を止められそうになさそうである。

これはモ力をどうこうとか言つてられんな。俺が人肌脱ぐか。

「おい蘭、何もそんなにムキに——」

「あ、山田いい所に。そこに立って」

「はっ？」

突然腕を掴まれたかと思えば、蘭は俺を引つ張って前に突き出した。

お、お前まさか?!

「山田、盾ね」

「ちよつと待て!!」

「なんだ翔太。アタシの弾を受け止めようってか!」

「いやそんな気は毛頭ない!! 盾にされてるだけだから!! 別にな——ぐほおうつ?!」

腹部に走る鈍痛。待て、俺が投げられたのは雪玉だよな?! これ雪合戦だよな?!

「遠慮なしにどんどん行くぜ!」

「遠慮して!!」

「ソイソイソイソイ!!」

まるで機関銃の如く飛んで来る雪玉に、俺は蜂の巣にされていく。

「モカ、反撃するよ」

「任せてー」

俺の後ろで雪玉を作っていたモカは、それを蘭に手渡した。

そしてその雪玉を俺の陰から巴達に向かって投げ――

「あふんっ！」

なぜか比喩表現でなく背筋が凍るような冷たさに襲われる。

蘭が投げた雪玉は後ろの首元に直撃して、そのまま俺の服の中に入ってきた。冷た過ぎて変な声出たわ。

「あ、ごめん」

「俺は味方だ！」

「戦場に誤射は付き物なんだよ、しよーくん」

「この至近距離で誤射もクソもねーよ！」

「山田、前！ 前！」

俺のツッコミを無視して焦ったような表情で巴達を指差す蘭。

俺が振り向くと、雪だるまに使うような大きな雪の塊を持ち上げている巴の姿が目映る。

「嘘やろお前」

つい乾いた声が漏れた。

いや、流石にそんなの当たったら死んじやう。

巴さん殺意高過ぎない？

「巴ちゃんのために頑張って作ったよ！」

その奥で真剣な表情でそう言うのはつぐみちゃんだった。あ、ソレ作ったのつぐみちゃんなのね。

つぐみちゃん頑張り屋さんだもんね。偉いなー。

「いやー、ツグってますなー」

「ソーイー！」

アーメン。

雪合戦は俺が数メートル転がって立ち上がれなくなり、流石に皆に心配されて幕を閉じる。

良いところなんて見せられなかったぜ畜生。

ラブ師匠は舌を出して「テヘツ」と誤魔化していた。後でチョップだ覚えていろ……。



バスの移動時間もあり、少し動いて体を温めた所で時刻は昼を過ぎる。

俺達は一旦休憩所に向かって、昼食を取ることにした。

「あつたか〜い。もうモカちゃんはここに住みます」

「帰らない気か」

多少動いたとはいえ、やはり雪の降り積もるスキー場は寒い。

室内の暖かい空気に俺達はヌクヌクと目を細める。

フードコートには結構な人が集まっていて六人分の席を確保するのは難しそうだと思っていたが、そこは日頃の行いが良かったのか丁度六人席が目の前で開いてくれた所だった。

せっかく座れた席を手放したくないので、俺達は二人ずつご飯を注文しに行く。

皆それぞれ別の物を頼んできた訳だが、相変わらず良く食べるモカとラーメンの巴を見ているとなんだか安心するね。

「ひーちゃん、ここでそれを食べる勇氣は凄いなと思うよ？」

「え？ そうかな。だって美味しそうだったんだもん」

俺はカレーとか、つぐみちゃんはパスタとか、暖かい物を食べている中で一人だけパフェに手を付けている女子が一人。——ラブ師匠だ。

「んーっ、冷たい！」

寒くなるからやめて欲しい。

「あつはは。……えーと、この後どうしようっか」

全員でひまりちゃんに若干引きながら、つぐみちゃんが午後からの予定を立てようと話を切り替える。

こういうのはリーダーの仕事だと思うんですけどね。リーダーは絶賛パフェのアイヌに夢中だ。

「ここでトランプでもやる？」

モカはそう言いながら呑気な顔で鞆からトランプを取り出す。お前は何しに来たん

だ。

「せっかくスキー場に来たんだから、午後からは滑りに行こうよ！」

パフェを食べながらそう抗議するひまりちゃん。どこからそんなに寒さに負けない力が出てくるのだろうか。

「それもそうだな。アタシも最近あこの話を聞いて行きたいって思ってたんだ」

「まあ、ここに来たのは別に雪だるまを作る為でも雪合戦する為でもないしね」

半目でそう言う蘭に、巴とひまりちゃんは手を合わせて謝った。

彼女の言う通り俺達はスキーをしにここに来たのである。トランプをしに来た訳ではない。

「トランプも面白いと思うんだけどな」

「それはまた今度な……。ほら、行くぞ」

せっかくここまで来たんだから、今ここでしか出来ない事をしようじゃないか。

そう、今だからこそ出来る事を。

その後一度お花摘みに向かったのだが、トイレの近くにあった裏口から見えるゲレン

デの斜面に俺は不安になった。

俺はスキーの経験ゼロなのだが、大丈夫なのだろうか。杞憂に終われば良いのだけど

「動け……動け山田!! なぜ動かん!!」

——しかし、不安は現実になる。

スキー板をレンタルし、装着してから山頂に登るためのリフトまで歩こうとした矢先。

俺の身体は何故か突然固まってしまった。なんだこのプレッシャーは!!

「山田……何やってんの?」

やめろ!! 俺をそんな目で見るな!!

「翔太君?!」

「た、助けて……」

動けないの。どんだけ頑張っても前に進まないの。何これ。どうなってんの。

「とりあえず板外したらどうだ? 付けたままリフトに乗るのも大変だし」

「お、おう。そうする事にする」

巴のアドバイスを聞いて、俺は一旦スキー板を外して手に持って歩く。

取るときにバランスを崩して転けたのは内緒だ。まだモカがレンタル屋さんから出て来てなくて良かったよ。

「いえ〜い。モカちゃん絶好調であ〜る」

俺が溜息を吐いている後ろから、スキー板を完全に乗りこなして自由気ままに動くモカの声が聞こえてくる。

この天才め……。

ていうか、これどうするの。

このままだとただ俺が情けない姿を見せるだけになるんだけど?!

「ら、ラブ師匠……」

「むむむ……こうなったらプランBだね」

ナニソレ。

「逆パターンで行こう。翔太君がモカに弱い所を見せて、モカをキュンとさせるの！」
「普通に嫌だよ?!」

草食系男子的な? いや、俺としてはそんな気持ちないからね。

「でも、モカに直接スキーを教えて貰えればその分密着する時間も増えると思うんだけどなあ」

「その話乗った」

「翔太君って結構チョロいよね。うん、人払いは任せて!」

「ありがとうございますラブ師匠」

何を言うかね。俺は欲望に忠実なだけだ。

「おーい、置いてくぞー」

「待ってー!」

そんな訳で、俺達はリフトに乗って山頂に向かう。

リフトは小型で、二人乗るのが限界の吹き曝しの物だ。

その分登って行く時に見る景色は中々爽快である。

木々の立ち並ぶ雪山に何本か見える木のない真っ白な線。そこを滑って山の下に降

りて行くのがスキーというスポーツだ。

場所によって傾斜が緩やかだったり急だったり、狭かったり広かったり。それによって滑る難易度も違うので、コース毎に分けられているらしい。

そんな景色を眺めている間に頂上へ。

白い息を吐きながらも、中々の絶景に「おー」と語彙力も何もない歓声を上げる。

「それじゃ、早速滑ろー！ えいえい、おー！」

元気満々に声を上げるひまりちゃんの掛け声はスルーされたが、やる気満々の巴は一足先に上級者向けのコースへ一直線に向かっていった。

うわ、凄い傾斜だな。あんなん転がって雪だるまになるイメージしか湧かない。実際そんな事になる筈はないのだが、ギャグ漫画の見過ぎか。

「あたしはそんなに自信ないし、普通のコースにする」

「それじゃ、私も蘭ちゃんと一緒にするね」

「私は巴を追いかけようかなあ？」

それぞれが順々に遊びに行こうとするなか、俺一人だけはその場で立ち止まる。

というか、動けないから。

「しよーくんはどーするー?」

そう聞いてくるモカの後ろで、ひまりちゃんは俺を見ながら片目を瞑ってピースサインを向けていた。

やれって言うんでしょ。やってやりますよ!

「その……ですね。お恥ずかしながら僕、スキー初心者でしてね」

「ふむ」

「教えて欲しいなあ……なんて」

あれー? よく考えなくてもこれただの情けない奴じゃない? ねえ、今更だけど凄

い恥ずかしいぞー?

「良いよ〜」

ただ、モカは特に俺を咎める事もなく笑顔でそう答えてくれる。

そんな一部始終を見届けたラブ師匠は満面の笑みで巴を追いかけていき、続けて蘭とつぐみちゃんも雪の上を滑っていった。

皆普通に滑ってるし……。え、俺だけ？俺だけ初心者なの？

「とりあえず前に進む方法を伝授しよ〜」

ドヤ顔でそう言うモカだが、これすら出来ないともう動く事すらままならないので素直に話を聞く事にする。

ツツコミは封印だな。

「まず、蟹の気持ちになります」

「なんでやねん」

俺にツツコミを封印するのは無理でした。

いやなんだよ蟹の気持ちって。分かる訳ないからね?! 蟹の気持ちなんてそもそも考えた事ないからね!!

「えーとー、脚は開いてガニ股気味で？」

「え、そういうこと」

続くモカの説明を聞いて、なんとかその意味が分かかって俺は脚を開く。

「後は、進む方向に対して板を斜めにすると前に歩けるよ〜」

「おお……マジだ。すげえ」

言われた通りやってみると、さつきまでうんともすんともならなかった俺の身体はしっかりと前に進んだ。

「うっへへーい。これ付けたまま歩くっただけでなんか楽しいなこれ」

それだけで楽しくなつてしまい、勝手にはしゃいだ俺はバランスを崩して滑り両足を開いて転ける。

「ぎゃあああ!!! 股が避けりゅうう!!!」

情けない声を出しながら地面を転がる山田翔太高校一年生。周りの人に若干笑われているし、心が碎けそうだ。

「大丈夫〜?」

「オーケーオーケー。なんの問題もない。プライスレスだ」

「あまりの痛さにしよ〜くんが壊れてしまった」

すまん。落ち着くから少しだけ待ってくれ。

「楽しそうだねー」

「まあ、やった事ない事だしな。……俺に付き合わされてモカが楽しめてないの、なんかごめんな」

「うう〜ん。モカちゃんは楽しんでるよ〜」

笑顔でそう言つて手を伸ばしてくる彼女に手を引いてもらつて、俺はなんとか立ち上がる。

「そうか？」

「しよ〜くんを見てるだけで楽しいし〜？」

「バカにしているね?!」

「してないよ〜。……一緒に居るのが楽しいから」

なんか小声でゴニョゴニョ言つた気がするが、悪口かな。

でも、まあ、こんなバカを見てるだけで楽しいって事はだな、つまり。

俺と居る事を楽しいと思つてくれてるって事なんじゃないだろうか。

そんな事を考えると、そんな事だといふのになんだか嬉しくて気分が高揚した。

「よっしやあ！ 滑るか!!」

「いってみよ〜」

俺は難易度の低いコースに向けて歩き出す。

少しずつでも良い。こうやって二人の時間を大切に、前に進めればそれで――

「うおあうえええええ?!」

「しよーくんが転がっていく……。ま、待って〜。スキーは転がるんじゃないって滑るんだよ〜」

「んな事あ知ってますう!! とめて下さああい!!」

――こんな進み方はごめんだけどな!!

その言葉を伝えられたら

ここで一つ雪だるまの気分になってみよう。

全身冷たいまま、大抵の場合は全裸でこの寒空の下に放置されるのだ。

木の枝で出来た腕には申し訳程度の手袋が装着してあったりするが、ちげーよそうじゃねーよ。こつちは今全裸なんだよ。フルチンなんだよ!!

と、まあ、関係ない事は放っておいて。

今俺は何故か、雪に埋まっている。

「死ぬ」

「大丈夫……じゃ、なさそう」

モカにスキー板での歩き方を教わり、意気揚々とスキーを楽しもうとした俺はギャグ漫画みたいに転がって雪まみれになっていた。

このまま雪だるまになってしまおうのではないかと思つたが、そうそう漫画みたいな事は起こらないらしい。アレはフィクションである。

それでも全身で雪に突つ込んだ俺はほぼ頭から埋まる形で雪に埋もれてしまい、割と真面目に死ぬんじゃないかと思つた。

「オーケーオーケー。無問題だ。強いて言うなら寒い」

「それじゃー、モカちゃんが温めてあげよー」

「ん?」

笑顔でそういうモカは、俺の背後に回つて、なんと後ろから抱きついてくる。

正直厚着して居るので全く温もりを感じないのだが、俺はその事実を全身を真っ赤にする程興奮して身も心も温まった。

俺、今人生で一番幸せなんじゃない?

「温まった?」

振り向くと、若干上目遣いの彼女がそう聞いてくる。温まったとかいうレベルじゃな

くて、全身熱いんですけども。

今の俺なら周りの雪とか溶かせると思うよ!!

「お、おう。ありがとな」

「どういたしまして。滑り方、ちゃんと教えてなかったし。次はそこから練習しようか」

そう言いながらモカは立ち上がって、俺の横で姿勢を維持して止まった。

「こうやって腰を落として、重心は前。止まるときは、こう足をハの字にすると良いんだよね」

「ほうほう……」

モカの言葉を素直に聞いて姿勢を落とすと、俺の体は少しずつ前に進んで行く。急に加速したのが怖くて、モカに言われた通りにすると——俺はまた転けた。

「しょーくん……っ」

「うわぁ……痛い」

顔面から雪に突っ込み、珍しくモカも焦った声で助けに来てくれる。

「大丈夫？」

心配そうな彼女の表情を見るとなんだか申し訳ない気持ちになった。俺は楽しみに来たんだよ。お前に楽しんでもらう為に来たんだよ。

だから、ここは気の利いたジョークでも言つて空気を紛らわせよう。

「いやあ、たしかに俺はツツコミ属性だけだな。雪に頭から突つ込む趣味はないんだが、困つたなあ！ あはは！」

「しよーくん」

モカに肩を叩かれた。なんだ？ 面白かつたか？

「寒いよ〜？」

「厳しい!!」

気温の事であつてくれ。そう願つたが、その後俺の渾身のギャグは全否定される。

これは正しく滑つたな！ なんて言うのと、モカは白眼になつて固まつてしまった。もうなんかごめんさい。

「どうだ翔太？ 滑れたかー？」

「うん。めっちゃ滑つてたよ〜」

「お、マジか」

「やめてー！滑ったってそういう意味じゃないからやめてー！」

何度も転びながらやつとの思いで下に辿り着いて、リフトの前で俺達を待っていてくれた皆と合流する。

笑いながら俺の華麗な滑りを皆に暴露するモカは、それはもう笑顔だった。本当にやめてください！もう許してください！！

「山田ってツツコミのセンスはあるけどギヤグは最低だよね」

美竹さんなんでもいつもそんなに直球なの?! 傷付くよ?!

「大丈夫だよ山田君！人には得意不得意があるから！」

ギヤグの方に関してはフォローしてくれないのね!! つぐみちゃんでもフォローできなレベルなのね!!

「それじゃ、翔太はまだスキーには慣れてないのかー。どうする？アタシ達だけ楽し

むのもなんだよな」

「い、いや。俺は頑張って練習してみるよ。皆は俺の事は気にしないでくれ」

俺はそう言ってリフトの方に歩き出す。初めは歩く事も出来なかったのに、今は前に

進めるのだ。

全力で取り組みさえすれば前に進む事は出来る。

だから俺は――

「しよーくん」

「……モカ？」

「頑張ろ〜」

「おう」

――今だから全力で。



それから数時間が経った。

何回も転んだし、いつまで経っても上達する気配もなく。

登って転がり落ちて、登っては転がり落ちて。

流石に見兼ねた巴達がちまちまと教えてくれたりしたけれど、それでも一向に上達し

ない俺にモカはずっと着いて来てくれた。

「なあ、モカは普通に滑らなくていいのか？　普通に楽しまなくて良いのか？」

「あたしはねー、楽しんでるよ？」

俺の問いにモカはそう答える。

「そうなのか？」

「それより、しよーくんは楽しんでるのー？」

首を横に傾けながら、彼女は逆に問いかけて来た。

俺は楽しんでるのだろうか。

ただ雪の上を滑るといっだけの事。しかも、俺はそんな事も出来ずに転びながら下に降りているだけである。

こんな事を続ける事に何の意味があるのか。

そんな深い事は今はどうでも良かった。

「楽しいよ。俺さ、モカに会うまで本当にやりたい事なんて全くなかった」

「しよーくん……う？」

別にスキーがやりたくなつた訳じゃない。今更始めてどうこうなる趣味でもないしな。

「ずっと眩しかったんだよな。今を全力で生きてる A f t e r g l o w の皆が——モ力の姿が」

それが嫌だつた事もある。

彼女達を見ているだけでも自分の事が嫌になつて、不貞腐れて誰かに当たる事もあつた。

「そんなモ力達に……憧れたのかな」

惚れたとは言えずに。

ただ、少し驚いたような表情の彼女の目を真つ直ぐに見る。

「ずっと立ち止まつてるだけだからさ。どこかに進もうとか、全く考えてなくて。毎日ただ日が昇つて落ちて夕焼けが見えての繰り返しで、その夕焼けに向かつて歩いて

行こうなんて考えてもみなかった。……だけど、モカを見て歩いて行こうと思えたんだ」

着いて行こうと。後ろでも良いから歩いていけるようになりたいと。

「だからさ。別になんでも良いんだ。今日の前にある事を全力でやってみたい。無茶苦茶言うが、後のことなんて知らん。今が楽しければそれで良い！」

身も蓋もない事を言っているかもしれないが、これが俺の本心だった。

モカと今を全力で楽しめればそれで良い。

そう言えなかったのだけは自分でもダメだと思うけど。

「そんなしよーくんだから、一緒にいて楽しいな〜つて。……モカちゃんはそう思うのです」

「モカ……?」

目を逸らしながら、彼女はふとそんな事を呟く。

視線の先には山の陰に落ちていく太陽があつて、徐々に空の色を赤く染め上げてい

た。

「タイムアップですな〜」

雪山の上で綺麗な夕焼けを見ながら告白なんて雰囲気は最高だけど、結局まともに滑れなかった今の俺が告白してもねえ。

「後一回くらいは滑って下に行く時間もあるかもだけど〜?」

「俺だと滑ったというか転がってになるからかなり時間が掛かるぞ……」

結局ここまでちゃんと滑れた事はないし、夕焼けが見え始めたら暗くなるのも一瞬である。

そんな中で滑って最悪遭難とか、嫌じゃん?

「しよーくんはどーしたいのー?」

「俺は……」

しかし、素直な質問に俺は少しだけ考えた。

モカがスマホを取り出して時間を見せてくる。残り電池がほぼない状態の画面に映し出されているのは午後十八時という時間。

バスは遅めの九時に取ってあるから、俺がどれだけ遅く降りようが時間的には全く問題はなかった。

「あ、電池切れた……」

「本当だ〜」

俺がモカのスマホの画面を見ると、突然その画面が真っ暗になる。

充電してなかったようだし、しようがないか。

「失くさないようにしまつとこ〜。……さて、しよ〜くんはど〜したい〜?」

俺は――

「――最後まで全力でやりたいかな。付き合ってくれるか?」

「勿論。えへへー」

ニツと笑って、モカはもうお客さんが全くいない初心者コースに向かって行く。

俺は自分のスマホのSNSでひまりちゃんに最後に滑ってくるだけ連絡してから彼女に続いた。

今は後ろをついて行くだけでも良い。いつでも良いから、その隣に並ぶ為に今は前に進む。

もし一度も転ばずに下まで行けたら告白しよう——なんて考えながら進んだ矢先、俺は盛大に転んだ。

ダメだこりや。

今のはノーカンとか思いながら滑るけども、結局途中で転んで泣きそうになる。本当にだらしのない山田。

いつになったら告白できるやら。

「でもしよーくん、初めと比べると結構上手くなったよねー」

「そうか？ まあ、進めるようにはなったけどな。てかなんで転んでんのか分からん。ほぼ何も無い緩い傾斜なのになんでなの」

もう何往復もしたから分かるのだが。

流石初心者コース。凹凸なんて全くないし、斜面も緩やかだ。

もう少し上級者向けのコースだと障害物や雪の塊で出来た段差とか、ジャンプ台があるのだが。そういう滑るだけの為なら邪魔な物は一切ない。

それなのに転ぶのだから、山田翔太の才能のなさはむしろ凄いなと思うね。

泣けてくるわ。

「……泣いてるの？」

「……あ、いや。あはは。情けないなって」

「そんな事ないよ」

優しくそう言っ、彼女は俺の手を取ってくれる。

「頑張ってるしよーくんはね、凄い格好良い。何か決めたら一直線なのって、凄い格好良いと思んだよね」

白い息を吐きながら、彼女はそう言った。

「格好着がなくても、それでも真っ直ぐなしよーくんだから格好良いんだよ。あたしは、そんなしよーくんだから——」

地面が揺れる。

突然の事で俺もモカも驚いて、さっきまでの会話の内容も忘れて辺りを見渡した。

「な、なんだ？」

「地震かな？」

首を横に傾けて揺れが収まるのを待つモカ。

ただ、普通の地震にしては揺れが長い気がする。

不安になって、滑ってきた山の上に視線を向けた俺の目に入って来たのは――

「は？」

迫ってくる雪の塊。

「しよーくん……っ！」

――雪崩れ。

「は、走れ！」

必死に走った。

初心者コースには滑る物を遮るものは何もない。だから、迫ってくる雪の塊はただひたすら真つ直ぐに猛スピードで向かってくる。

俺達はコースの外——木々で出来た自然の道幅に向かつて必死に走った。

だけど、肝心な所で俺はまた転ぶ。

目の前に雪崩が迫っているのが見えて本気で命の危機を感じた。

「——やばっ」

流石にそれは死ぬだろ。冗談じゃないぞ。てかなんだよこの状況で雪崩って。

文句を言っても雪崩は止まってくれない。這い蹲ってでも前に進もうとするが、俺の手をモカが引つ張り上げてくれる。

「早く……っ」

彼女に背中を押されて、もう飛び込む勢いで俺はコースの端の木々の影に転がった。

気が付いたら足に固定されていたスキー板はなくて、ただ雪の塊が流れていく轟音が耳に残る。

「……………助かった？」

地鳴りと音が消えて、俺はちゃんと自分の身体が動く事を確認してから真つ白な溜息を吐きながら立ち上がった。

「いや、マジで。死ぬかと思ったよな……………」

雪崩に合うなんて滅多な体験だけど、正直勘弁して欲しい。こっちは死ぬかと思ったんだからな。

時間的にも俺達の他に滑ってた人は居なかったけど、誰かが巻き込まれてないか心配でもある。

「とりあえず降りようぜ。皆が無事かも心配だし」

それもあるし、太陽も落ちて暗くなり一時の不安は少しずつ大きくなっていった。早く皆と合流してさっきのを笑い話にしたい。

「いや、本当。現実には小説より奇なりってよく言う——」

そんな気持ちで振り向いて、俺は言葉を失う。

「——よ、な……………モカ？」

そこには誰も居なかった。

探して——

雪崩。

山頂部分に積もった雪がなんらかの原因で斜面を傾れ落ちる現象。

流れる雪の速度は遅くても時速四十、早くても時速二百キロメートルにも及ぶらしい。

「——モカ？」

雪崩に巻き込まれた人の生存率は極めて低く、多くの場合が巻き込まれた時の外傷もしくは雪に埋まった後の低体温症または窒息により死亡する。

「……お、おいおい。冗談キツイぞ。……流石にさ」

雪の中に埋まってから十五分が経つと生存率は極めて低くなるが、その理由こそが窒息によるものだ。

身動きも取れない中で雪の中に埋まり、呼吸する為の空気がなくなってしまうからだという。

「いや、そういうのは流石に心配するっていうか。あの、さ。俺そういうネタは嫌いだか

らな。……なあ、おい、出てこいよ。怒るぞ」
俺は何をやってるんだ？

「なあ、モカ……。何処だよ」

俺は何をしている？

「なあ……モカ!! おいモカ!! 返事をしろよ!! モカ!!!」

日も落ちて、真つ暗な雪山の中で俺は叫んだ。

さつきまで側にいた筈の彼女の名を、何回も何回も大声で呼ぶ。

だって、今の今まで彼女は俺の隣に居たんだ。

それがなんで居なくなってるんだよ。

意味が分からない。なんで雪崩が、俺はここに立って、モカは何処に？

頭の中がぐちゃぐちゃになる。白と黒だけの空間で、俺はゆっくりと前に進んだ。

「モカ……っ」

居ない。

「モカ……っ!!」

何処を探しても彼女の姿は見当たらない。

雪崩に巻き込まれたっていいのか？

ならなんで俺だけ無事なんだよ。なんで俺だけここに平然と立ってるんだよ。

そんなのおかしいだろ。

「モカ……」

少しだけ前の事を思い出す。

雪崩が来ているのを知って、必死にコースの外に走った。

俺は転んで、そんな俺を引っ張って彼女は背中を押してくれて。

飛び込むように——いや、彼女に押し飛ばされて難を逃れたんだろう。

それじゃ、俺を押し飛ばした彼女は？

雪崩に巻き込まれて今は雪の中って事か？

「そんな……」

必死に周りを見渡した。

代わり映えしない雪の景色。そんな中に一つだけ不自然な物が混じっているのが見える。

「モカ……？」

それは、雪の中から地上に頭を出しているスキー板だった。

今日ずっと一緒に居たんだから間違える訳がない。アレはモカが使っていた物だと直ぐに分かる。

「そこに居るんだな……っ!!」

足場の安定しない雪場を這うように進んで、俺はスキー板が飛び出ている所まで向かった。

冷たい雪も気にしないで、俺は必死にその場の雪を掘り返していく。

少しだけ不安がよぎった。巻き込まれた衝撃でモカが既に死んでいたらどうしよう

とか、そんな不安。

怖くて仕方がない。だけど、そんな事に怯えている暇はないだろう。

「モカ……っ。待ってろ!!」

必死に掘り進めて、俺はその場に座り込んだ。

スキー板が音を立てて倒れる。

そこには何もなかった。ただ、スキー板が一本埋まっていただけだった。

「モカ……何処に居るんだよ」

座り込んでる場合じゃない。早く探さないと、早く探さないと——どうなる？

「モカが……居なくなるのか？」

吐き気がする。

考えただけで目の前が真っ白になって、結局俺はその場で吐いた。

「……ふざけんよ、そんな事があつてたまるか」

こんな事してる場合じゃない。モ力を探さなきゃ。探さなきゃ。必死になつて、手当たり次第に雪を掻き分ける。

なんでも良い。手掛かりになる物が欲しい。

早く。早くしないと――

「――大丈夫か！ 君！」

突然声が聞こえた。

驚いて振り向くと、強い光に照らされる。懐中電灯？

いや、エンジン音からするに雪の上を走る乗り物のライトか。
「君一人か?!」

雪の上を走る為の乗り物に乗って現れたその人は、焦つたような話し方でそう聞いてきた。

「……モカが、モカが居ないんです！ 見てませんか?! このくらいの身長で、厚着してて、その……えっと……」

俺は藁にもすがる思いで、その人に掴みかかる。

彼は俺の話の話を聞くなり目を丸くしてスノーモービルに設置されていた無線を引っ張りだした。

「俺だ。一人巻き込まれてるらしい。直ぐに集まってくれ」

「貴方は……?」

「ただの客だよ。ちよつとスキーが趣味のね。だから、雪崩の事は少しくらい知ってる。

……急いで友達を探そう!」

頼り甲斐のある声でそう言ってくれた男性は、白い息を吐きながら自分の腕時計を確認する。

「雪崩が起きてから十分以上経ってる……。まずいな」

雪崩に巻き込まれてから十五分で生存率は極めて低くなるらしい。

男性は慌てて周りを見渡して、舌を鳴らしてから背負っていたスコップで辺りを探りだした。

きている。

確認してみれば、それは殆どがひまりちゃんで残りは蘭と巴とつぐみちゃん。全部心配してくれてるような内容とあと一つは——

『モカと連絡が取れない』

『モカちゃん電池きれてるみたいなんだけど、山田君は一緒に居るの?』

『大丈夫か?!』

『翔太君返事して!』

俺は何を呑気に構えてるんだ。

モカが危ないんだぞ。

自分を殴り飛ばしたくなる衝動を抑えて、今一度必至になつて雪を掻き分ける。

そういうば時計を見てなかつたけど、何分経つた。いや、そんな事を気にしてる暇も

ないだろう。

探すんだよ。モカを探すんだ。

「モカ……モカ……っ！　モ——」

凍り付いてしまったのか、もう全く感覚のない俺の手は突然誰かに掴まれて止まる。
なんなんだと後ろを睨むと、残念そうな表情で最初にここに来てくれた人が首を横に振った。

ただ、その意味がどういう意味なのか分からない。

「一時間経ってる。もう君の身体も危ないから、一旦帰ろう」
帰ろう？

何を言ってるんだこの人は。

一旦帰ろうだ？

それじゃモカはどうなる。この雪の中に置いていくのか。そんなバカな話があるか

よ。

「は？ 何言ってるんだアンタ……」

「雪崩から一時間が経ったんだ」

言っている意味が分からなかった。

確かに時間を見てみれば、モカを探している間にもう一時間程が経過している。

それはつまり、モカは雪崩に巻き込まれてから一時間も一人で雪の中にいるという事だった。

早く探して助けてやらないと。こんな所で時間を使っている場合じゃない。

俺は男性の手を振り払って、殆ど感覚のない手で雪を掻き分ける。

どこだよ。どこにいるんだよ。モカ……っ！

「君！」

ただ、男は俺の身体を掴んで振り向かせた。なんなんだよ。邪魔をしないでくれ。

頼むからモカを探させてくれ。

「もう見付かっても、友達は死んでる。これ以上ここに居たら次は君が危ないんだ。分かってくれ」

「……は？」

だから何を言ってるんだこの人は。

死んでるって？

何が？

モカが？

「……ははっ、は……はえ……はあ……え」

何を言ってるんだよ。分からない。なんで、どうしてこんな事になってる。

俺は……何をしてるんだ？

「そつちに乗せられるか？」

「一人分空いてるから行ける。二回目が来るかもしれないし、早い所降りよう」

「俺は少しゆっくり降りながら探すわ！」

「分かった、頼む！」

俺の關係ない所で話は勝手に進んでいき、助けに来てくれた人達は皆下に降りる準備をし始める。

なんで？

どうしてそんな判断が出来るんだ？

モカが——

「——死んだ？」

俺はその場に崩れ落ちて、そんな俺は誰かに抱き抱えられるようにして乗り物に乗せられる。

そのまま下に向かう俺は手を伸ばす事しか出来なかった。
この真っ白な世界の中にモ力を一人置き去りにして。

俺は独りで白い息を吐く。

何をしてるんだ。俺は。



「翔太!!!」

休憩所までたどり着いて、一番最初に大きな声が聞こえる。

その後突然大きな衝撃が来たかと思えば、俺はひまりちゃんに抱きつかれていた。

「うえええん！ 翔太君が無事で良かったよおお!! もおお、なんで返信してくれないのおお!!」

大粒の涙を流しながら俺に頬を擦りつけるひまりちゃん。そんな彼女から目をそらすと、安心したような表情の巴が歩いてくる。

「いやあ、無事で良かったよ。本当に心配したんだからな！」
そう言う巴の後ろで、蘭は頻りに周りを見渡していた。

「……ねえ、モ力は？」

そんな声。

実はもう一人で降りていて、皆と合流してるんじゃないかって。そんな甘い考えは蘭のその言葉に打ち消される。

「え……一緒じゃないの？」

蘭のそんな言葉を聞いて、俺に抱き付いていたひまりちゃんも真顔になって顔を上げた。

俺の口は開かない。

「あ、あの！ すみません！ 私達と同じ年くらいの女の子、居ませんでしたか?!」
直ぐにつぐみちゃんが俺をスノーモービルに乗せて来てくれた人に声を掛ける。

その人はゆつくりと首を横に振るだけだった。

「そんな……」

「え、う、嘘だよね？ モカ……。翔太君!! モカは?! ねえ、モカは!!」

また大粒の涙を流しながら、彼女は俺の肩を大きく揺らす。

だけど、俺の口は動かなかった。

寒さなのか、怖さなのか、悔しいのか、悲しいのか、もう何にも分からない。ただ身体は震えるだけで、動いてくれない。

「君達、とりあえず中に入ろう。彼もずっと外にいて大変だったから」

別に俺は大変じゃない。この通りピンピンしてる。

それなのになんで？

なんで身体は動いてくれない？

今すぐに戻ってモカを探すべきじゃないのか。俺はこんな所で何をしてるんだ。

なされるがまま、黙り込んでしまった蘭達の後ろから休憩所の中に入る。
暖かかった。気を使って巴が暖かい缶コーヒーを買ってくれて、手渡される。

「……大丈夫か？」

ただ、そんな巴の声も若干震えていて。

俺はやつと現実が把握できた。

涙が止まらない。

モカはもう——

「モカは——」

——居ない。

「……一緒に居たんだよな？」

「俺を、助けて……くれて。それで……」

端の方でひまりちゃん泣いていて、そんな彼女の後ろでつぐみちゃんも泣いてい

る。

蘭は黙って休憩所の外を眺めていた。その先では従業員と思われる人とさつきまで一緒にモカを探してくれていた人達が話し合っている。

こんな状況で俺に話しかけてくれた巴だけど、どこか落ち着いているようで表情はとも暗かった。

「雪崩が起きて、逃げて……気が付いたらモカが居なくて……。俺が……。俺がモタモタしてたから、俺が……」

「分かった。もう良いから。……な？」

巴は優しくそう言うってから、荷物から上着を取り出す。

「アタシが探してくる。皆は待つてくれ」

真剣な表情でそう言う巴は、突然振り向いた蘭に肩を抑えられた。

「蘭……？」

「……モカは寒いのが苦手だって、知ってるでしょ？」

低い声でそう言う蘭は、座り込んでいる俺を睨んで真っ赤になった目尻から涙を漏ら

す。

「山田、なんでモカを置いてこれたの？」

「おいやめろ蘭。翔太だつて必死に探して来たに決まつてるだろ！　今はそんな話をしている場合じゃない！」

「そうだ。必死に探したんだよ。」

「いや——」

「雪崩が起きてから一時間経つたんだよ？　雪の中でモカは……ずっと、ずっと一人で

………そんなの、もう——なんでモカが此処に居ないのに山田が居るわけ？

「ねえ、モカは……？」

「俺の胸倉を掴んでそう言う蘭。そんな彼女を俺から突き放して、巴は俺を庇うように前に出る。」

「だから今そんな話してる場合じゃないだろ!!　早くモカを探しに行かないと。翔太は頑張つて探してくれてもう疲れてるんだつて！　少しは現実を見ろよ！」

「現実を見るのは巴だよ!!　雪の中に一時間も埋まつてて生きてられる訳ないじゃん!!

もうモカは——」

「おいやめろ!!」

「——死んじゃったんだ……っ」

強く拳を握りしめて、蘭はそんな言葉を落とした。

それは誰だっで見たくなかった現実で。

多分、彼女は正しいのだろう。

「大体、いつもいつも探したい探すって言っててさ。結局山田は何も探してないじゃん。モカの事だっで本気で探してなかったんでしょ？ 最低!!」

「蘭、お前な……っ!!」

「もうやめてよ!!」

巴が蘭に掴み掛かろうとしたその時、大声をだして二人を止めたのはひまりちゃんだった。

彼女は大泣きしながら二人の間に入って、言葉にもならない声を出しながら大粒の涙

で床を濡らす。

ここには俺達の他にも人は居て、でもそんな事気にせずひまりちゃんは泣き崩れた。

静まり返った休憩所でただ時間が過ぎて行く。

なにもかも現実味がない。

ただ、事実として——

「モカ……」

——モカだけがこの場には居なかった。

今

寒い。

暗い。

ここはどこだっけ。

あたしは何をしてたんだっけ。

「……しよーくん、雪崩……大丈夫……だった、かなあ」
そうだった。

「携帯……」

しかしこれは、流石のモカちゃんも——

「……電池」

——ピンチかも。

「ひーちゃん……」

怖い。

「トモちん……」

怖い。

「つぐ……」

怖い。

「蘭……」

怖い。

「……しよーくん」

——助けて。

◆ ◆ ◆
休憩所の、時計の針の音だけが聞こえる。

もし、もしもだ。

まだモカが生きていたりするなら、今すぐにも助けに行かないといけない。それなのに俺は何をしてるんだろう。

蘭にあんな事を言われるのも、当然だった。

「……山田、ごめん」

俺の前まで来て、彼女は泣き崩れながらそう言う。

何も答える事が出来ずに、俺はただ扉の外を見詰めていた。

もしかしたらモカが帰ってくるかもしれない。そんな淡い希望を持ちながら。

「山田の手真つ赤だもんね……ちゃんと探してくれてた事くらい、分かるよ。……でも、あたし……モカが居なくなるなんて、嫌で……」

何も言えない。

必死に探したのは間違っていないだろう。

俺だってそんなのは嫌なんだ。誰だって大切な人が居なくなるなんて想像もしたくないだろう。

でも俺は、モカは直ぐに見つかって笑い話にでもなるんだと——どこかでそんな事を思っていたんだ。

その結果がこれだ。

「やっぱアタシは探しに行く……。こんな所でじっとしててもなんにもならないだろ」

「あたしも行く。つぐみはひまりと山田をお願い」

「と、巴ちゃん……蘭ちゃん……」

涙を拭って巴に着いて行く蘭に手を伸ばすつぐみちゃん。

二人を行かせるのは危険な事だと分かっているけれど、モカを探しに行きたい気持ちはずぐみちゃんも同じなのだろう。

「ダメですダメです。今は危険なので！」

ただ、出入り口に向かう二人を従業員と思われる人が止めた。

雪崩が一度起きると連続で起きやすくなったりするらしい。

雪崩の原因も分かってない今、二次災害を防ぐ為にも従業員の人の判断は正しいのだろう。

「一人雪の中に埋まってるかもしれないんだよ?!」

「モカを見殺しにするつもりか?!」

「い、いえそういう訳ではなく……。その、もう一時間も経ってますし……」

「ごもつともな意見だった。」

再び現実を叩きつけられた二人は、後ずさってからその場に座り込む。

「なんでだよ……」

巴の悲痛の声を聞いて従業員の方は苦虫を噛んだような表情をするが、それでも彼の意思は変わらなかった。

社会人として一人の大人として当たり前前的事をしているのだろう。だから、従業員の人を責める事は出来ない。

誰も悪くない。

悪いとしたら、あの時モタモタしてモカに助けられた俺だ。

モカを探す事が出来なかった俺だ。

「どうして……」

俺のせいでモカは――

「モカ……モカあ……。う、う……。……。あ、あれ？ え、ええ?!」

静まり返ったその場所で一人呻き声を上げていたひまりちゃんは、突然何度も瞬きをしながらスマホの画面を見て驚いたような声を上げる。

こんな時にどうしたんだ。

視線を移すと、彼女は震える手で俺にスマホの画面を見せてくる。

画面に移されていたのは今日の為に作られたSNSのグループトーク画面。皆で使っていたその場所に新着の書き込みがあった。

『ひーたやまわ』

短文。

意味の分からない文字の羅列。

ただそれだけなら、本当に意味も分からないだけだっただろう。

問題はそのメッセージの送り主だった。

「……モカ」

メッセージの横にはメロンパンのアイコンが表示されている。

見間違える訳もなく、それはモカが設定していた自分のアイコンだった。

「ねえ、何これ……どういうこと、ねえ！」

感情がぐちゃぐちゃになったような表情でひまりちゃんは皆にスマホの画面を見せ

て周る。

俺達は全員で自分のスマホのグループトーク画面を開いた。

どうしてだろう。

まずモカの携帯の電池は切れていた筈だ。

それに送ってきた文面の意味も分からない。

何かの怪奇現象か、そうでなければモカのスマホの画面に何かが干渉して勝手に動いたかである。

そのどちらにせよモカはスマホを触れる状態じゃないという事を意味していた。

だから、そのメッセージはある意味で彼女の死を確定付けるものだと思ってしまう。

「どうして……」

「電池……。ほら、携帯の電池つてなくなっても……その後時間が経つてからもう一回付けると点いたりしない?!」

蘭の声にそう答えるひまりちゃん。

確かにゲームの電池とかでも、そういう事は稀にある話だ。

だからといって、モカが『ひーたやまわ』なんて意味の分からない文字を打つ理由はない。

「……ひーちゃん」

そんな事を考えていると、今度はつぐみちゃんがそんな事を呟く。

ひーちゃん。

それはモカがひまりちゃんを呼ぶ時に使っていたあだ名だった。

「これ、ひーちゃんって書くこうとしてたんじゃないかな?！」

目を見開いて、つぐみちゃんは焦ったような表情で声を上げる。

彼女の言葉で思い出したのは、このグループトークのもう少し上でモカが入力していたメッセージだった。

——『ひーちやまん、起きてー』——

変な誤字。少し気を使わないと変な文字の羅列にも見えてしまう。

急いだり眠かったりしている時にメッセージの文が変な事になる事は良くある事だ。

『ひーたやまわ』

これがもしそうなら。

寒くて上手く動かない手でモカが入力したメツセージだとしたら。

そんな疑念は、次の瞬間送られてきたメツセージで確信に変わる。

『なかなあで』

泣かないで。

そう書いてあるんだと、直ぐに分かった。

モカは本当に皆の事が好きだから。

自分が居なくなつて、一番泣いてしまうのが誰か分かつていたんだと思う。

『ともちん』

短文。

『らんとけゆかしちやたまでよ』

ゆつくりと、少しずつだけどトーク画面にはメッセージが表示されていった。

『つぐー』

皆スマホの画面に釘付けになって、本当に静かな時間が過ぎて行く。

『あわまらがんばらすぎなちてまね』

でも次第に、そのメッセージの意味が分かってくると急にスマホを持つ手が震えてきた。

『らんー』

その先を知るのが怖くて俺は眼を瞑る。

メッセージが送られてきた事を知らせるバイブレーションから少しして、近くにいた蘭が泣き崩れるのが分かった。

「なにそれ……意味分かんない。なんで……こんな……っ」

恐る恐る眼を開ける。

『いめんね』

それはモカからの、彼女達への最期のメッセージだった。少なくとも、きっと彼女は今自分がどうなっているかは知っている。皆を心配する言葉。そして最後に蘭に謝ったという事は。

自分がどうなってしまうか、自分で分かっているという事だ。自分が死んでしまうと、分かっているのだろう。

でも、それは――

「嫌だあ……っ。モカが居なくなるなんて……嫌だ」

「蘭……」

「わ、私電話する！ モカに今どこに居るか聞く!! えーと、音声通――」

「ダメ!」

涙を拭きながら、決意めいた声でスマホの画面を叩くひまりちゃんを止めたのは――

—なんとつぐみちゃんだった。

「な、なんでとめるの?!」

「モカちゃんの携帯の電池つてもう殆どないはずだから……もし電話なんてしたら、本当に電池が切れちゃう!」

「で、でも……っ!」

確かに電池が切れて仕舞えばもう一切の連絡は出来なくなる。でも、結局連絡を取らないままなら現状は進まなかった。

俺達に出来る事はただ、五人それぞれでトーク画面を見て既読を付けてモカを安心させてやる事だけだろう。

——今は。

『しよーくん』

短文。

正直俺は、この時点でこの後どうするか考えていた。モカが何と言おうが、俺のやるべき事は決まっている。

皆は絶望的な状況である事実には気が付いていない。

だから、俺は何と言われようが――

「なあ、皆……。モカはまだ生きてる」

――俺は何と言われようが、もう一度モカを探しに行くつもりだ。

「確かに……」

俺の言葉を聞いて、蘭は顔を上げて眼を見開く。

メッセージが送られてくるという事は、まだモカは生きているという事だ。

いくら遺言みたいな事を言われようが彼女がまだ――少なくとも今メッセージを送ってきた瞬間までは生きているという事だから。

「……だから、俺にもう一度だけモカを探してくるチャンスをくれ」

頭を下げる。

モカが生きていると分かつて、結局場所は分からない。メッセージの続きは送られて来なくて、もう電池が切れているか——もしかしたらなんて可能性は十分にあった。

——それでも。

「俺が今やらないといけない事がやっと分かったんだ。……頼む」

精一杯頭を下げる。

結局俺はモカを探せなかった。諦めて、何もかもに絶望していた。だけでももう一度だけで良い。俺にチャンスをくれ。

「そんなの、当たり前じゃん。あたし達も探しに——」

「それは無理だと思う」

蘭の言葉を遮る。

「多分従業員の人や、さつき俺を連れて来てくれた人達にまだモカが生きてるって言っても探しには行かせてくれない」

どうして、と言いたげな表情の蘭の目を見て俺はそう言った。

さっきの従業員の反応を見るに、雪崩の原因とか諸々を調べるまで上に登るのは禁止になっているだろう。

また雪崩が起きて二次災害が起きたら企業としては冗談じや済まされないからだ。ここら辺は大人の対応というか、事情というか、俺達に文句を言う資格はない。

「だから、なんとかあの人達の眼をかくぐって俺だけでも探しに行かせて欲しい。

……頼む」

もう一度頭を下げる。

一人くらいなら、バレずに外に出られるかもしれない。

もちろん全員で探しに行ければそれに越した事はないのだが、それで足を止められたら誰一人としてモカを探しに行く事は出来なくなるんだ。

——だから。

「皆の力を貸してくれ……」
深く頭を下げる。

俺じゃない方が良いかもしれない。

運動神経もあるし、いつも皆の事を思ってるひまりちゃんの方が——

電池の事でも冷静だったし、いつも誰よりも頑張ってるつぐみちゃんの方が——

ずっとモカを探しに行くと意気込んでいたし、いつも本気の巴の方が——

きつと今一番モカに会いたがっていて、誰よりも皆の事が好きな蘭の方が——

俺なんて、雪の上を満足に歩く事も出来ない。一時間探しても結局モカを探さなかった。
現実を見て一度は諦めてしまったし、どこかで何とかかなると思って本気でモカを探し

ていなかったと思う。

モカとの付き合いだつて皆と比べたら長くない。

——それでも。

「——それでも俺は、モカが好きだ。世界で誰よりも、あいつが好きだ。モカと一緒に居たい。これからもずっと。……だから、頼む」

もしかしたら後悔させてしまうかもしれない。

自分が行けば良かった。こんな奴に行かせるべきじゃなかったと。

それでも。

もし許されるなら。俺にもう一度だけモカを探す時間とチャンスをくれ。

必ず探してくるから。見付けて来るから。

「まあ……一人しか行けないなら、山田が行くのが妥当じゃん」

顔をあげてよ、と。蘭は困ったような表情で言葉を漏らす。

そんな彼女の言葉に誰も反論を言う事はなかった。

ただ、どうしたら良い？　そう聞くように、彼女達は俺の目をまっすぐに見てくれる。

「ありがとう」

そんな言葉しか出ない。

「……ひまりちゃん、お腹が痛い振りをしてくれ。俺とつぐみちゃんて介護する振りをしてここから人の目の届かない所に行く。確かトイレの方に裏口があった筈だ」

「え、その役なんで私なの?！」

適任だろ。

「裏口から出ても今表にいる人の前を通らないと上には登れない……。だから、蘭と巴は合図したら出入り口付近で大喧嘩してくれ」

「マジか」

「え、なにそれ」

困惑する二人だが、これくらいしかこの現状で不自然にならずに人の目を集める事は

出来ない。

「なんなら取っ組み合いの喧嘩まで発展してくれれば、皆二人を止めに来てくれるだろ？」

「山田ってさ、たまに無茶苦茶だよね」

そんな事ないですよ。

「時間が惜しい。直ぐに取り掛かろう」

スマホの画面を見ると、それまで止まっていたモカからの新しいメッセージが表示されていた。

『たすけて』

短文。

分かってるよ。

今、探しに行くから。

「う、うう……お腹がー!」

いやひまりちゃん?! お前演技下手だな?!

「だ、大丈夫?! ひまりちゃん! す、直ぐにお手洗いに行こう!」

つぐみちゃん?! あなたもクツソ下手くそだな?!

「……大袈裟すぎる。ん、うん。大丈夫か? とりあえず行こう」

咳払いをしてから、ひまりちゃんの背中を摩りながらお手洗いに向かう。

新しいメッセージは来ない。

蘭達に連絡する為に『合図はここで』と入力するが、既読は四つだけだった。電池切れか。

「山田君、これ!」

裏口まで辿り着くと、つぐみちゃんは自動販売機で飲み物を二つ買って手渡してくる。
る。

暖かい缶コーヒード。それを俺は二つポケットに入れる。

「ありがとう、つぐみちゃん」

「ううん。モカちゃんにも飲ませてあげてね！」

当たり前だ。

「翔太君、これも！」

そして今度はひまりちゃんが、鞆の中から大量のカイロを取り出して渡してくれる。

「惜しみなく使って良いから！」

「ありがとう、ひまりちゃん」

さて、本当はお礼を言っている時間も惜しい。

俺はスマホを取り出して『作戦開始』と短文を送り付けた。やはり、既読は四つ。

「なんだと蘭!! もう一回言ってみろ!!」

しばらくして、怒号がここまで聞こえてきた。巴さん声大き過ぎですよ。

ただそのおかげで、今かなりヒートアップしているのが見なくても分かる。

——これなら。

「行ってくる！」

「うん！」

「待ってるから！」

二人に手を振って、俺は裏口から外に飛び出した。

気温差もあつてかなり寒い。ポケットの中の缶コーヒーやカイロを触りたくなるが、そんな時間はない。

俺なんかよりもモカはもつと寒い思いをしてる。こんな所で寒いなんて言ってる暇はないんだ。

慣れない雪の上を走る。靴の中に雪が入って、妙に歩き辛い。

それでも俺は走った。脇に見える休憩所の出入り口で、取っ組みあっている二人の女の子を大勢の人が止めようとしている。

蘭と目が合って、俺も彼女も大きく頷いた。

大丈夫。任せろ。

絶対に探してくるから。

「待ってるよ……モカ!!」
今、探してくるから。

今だから全力でやりたい事を探して

スマホの電池が点いた時、自分でも驚く程冷静だった。

これが奇跡的な事だと分かっていたし、なんなら実はあたしはもう死んじやってるんじゃないかなって、そう思ったのです。

だから、今やらないといけない事をただ真っ直ぐに。——彼みたいに。

『ひーたやまわ』

感覚のない手で、なんとか文字を打った。

打ち直している暇はないな——って、誤字も気にせず変換もせずに送信する。

大丈夫。つぐ辺りが解読してくれると思うし。

『なかなあで』

だからあたしは、皆に伝えないといけない事を伝えるんだ。

ひーちゃんは泣き虫だからなー。きつと、あたしが居なくなっちゃったら泣いちやうと思うし。

『ともちん』

せめて皆に、一言ずつ。

『らんとけゆかしちやたまでよ』

トモちんは多分、熱くなつて蘭と喧嘩しちやうかもしれない。
あたしの事で争わないでーつて、ドラマみたいな。

『つぐー』

でも皆はきつと後悔しちやうよね……。

『あわまらがんばらすぎなちてまね』

つぐはつぐり過ぎて、自分が危なくなっちゃいそうで不安だ。

『らんー』

もしかしたら探しに来てくれるかもしれない。
だけど見付かるか分からないし。

『ごめんね』

蘭には謝っておこう。

ごめんね、蘭。

ごめんね、皆。

ずっと一緒だって、言ってたのにね。

あと一人。

伝えないといけない人がいた。

「……しよーくん」

あの時。

雪崩が目の前まで来ていて、あたしは必死にしよーくんの背中を押したんだけど。

その後すぐに凄い勢いで雪の中に巻き込まれて。

結局しよーくんの事を助けられたか分からない。

しよーくんの事が心配。

もしかしたら、先に——なんて事を考えてスマホの画面が視界に映る。

意識がはつきりしなくて、ぼやける視界。

スマホの画面のあたしのメッセージ。

グループトークだと既読した人が何人か見れるんだけど。

『既読5』

メッセージの横に付いたそんな文字。

グループはあたし達Afterglowのメンバーとしよーくんの六人。つまり、五

人既読という事は皆が見ているという事だった。

しよーくんも見てる。無事なんだ。

『しよーくん』

だったら、伝えなきゃ。

——何を？

指が止まる。

動いているかどうか分からなかったけど、今は確実に止まっていた。

何を伝えよう。

電池はいつ切れてもおかしくない。

伝えたい言葉は沢山あった。

モカショーで賞を取りたい。しよーくんの作ったご飯が食べたい。いつもみたい
に無意識な感じで撫でられたい。

しよーくんの声が聞きたい。しよーくんの手に触りたい。
一緒にバイトから帰りたい。

あたしは、しよーくんが好き。

結局、あたしも蘭やトモちんみたいに不器用で。最期まで伝えられなかったこの言葉。

今なら伝えられるかな。

そして伝えたら――

「……嫌、だ」

――死にたくない。

皆の所に帰りたい。

ステージで笑う皆の顔を見たい。バイト先で馬鹿みたいな話をしたい。

『たすけて』

そう打ち込んで、送信ボタンを押したと同時に電池が切れて明かりも消える。
真つ暗な世界。寒い。怖い。

「あたしって……こんなに弱かったかなあー」

他人事みみたいな感覚。

「嫌だなあ……」

ただ、意識が埋まって。

「……ごめんね」

—— ゆっくりと、目を閉じた。



必死に走る。

とにかく歩きにくい雪の道を上にも、上にも。

当たり前だがリフトは動いていない。だから、歩いて上に登って行くしかなかった。何度も何度も転びながら周回した道だから間違える事はない。

俺とモカが雪崩に襲われた場所も何処かは覚えてる。とりあえずひたすらその場所を目指した。

スキー板を使つて滑る分には短く感じたが、歩いて登ってみると途方もなく感じる。

そんな時間が長ければ長いほど、ただ不安が募るばかりだった。

結局財布すら見付けられなかった俺がモカを見付ける事が出来るのか？ 見つからなかったらどうする？

全くもつてプラスの思考に入らない。ここまできて自分が嫌にもなるし、後の事が怖い。

「モカ……待ってろ」

それでも、急いで足を前に動かした。

とにかく前に。彼女の所に。

正直手掛かりがある訳でもなければ、探し出す当てもない。自信だつて——

「それでも」

——それでも、探し出す以外に選択肢はない。

モカと会えなくなる。そんなのはごめんだ。

俺はまだ何もしてない。彼女に伝えないといけない事がある。

今だから全力でやりたい事が見つかったんだつて。

「はい」だ……」

ついさつきまでモカを探していた場所に辿り着いた。

当たり前だが視界に入る限りにはモカどころか人も居ない。

考える前に、手当たり次第に雪を掻き分ける。

何かを考えている時間も惜しい。探しながら考える。

雪が盛り上がっている場所を見付けてはそこを掘って、掘りながら周りを見渡して手掛かりを探した。

そうしながら考える。

当たり前だが雪崩は上から下に流れて行く現象だ。ここより上にはモ力は居ない筈だけど、ここより下にいる可能性は充分にある。

気になる場所を全て確認していたら下まで行くのにどれだけ時間が掛かるか分かったものじゃない。だけど、もしモ力を通り過ぎるなんて事があつたらそれは問題外だ。

「……………」

なにも思い浮かばないし、手掛かりは一向に見つからない。

時間だけが経ち、焦りだけが募っていく。

「せめてモ力と連絡が取れれば……」

何度か確認したが、グループプートの既読は四から変わっていないかった。

多分モ力のスマホはもう電池切れだろう。連絡さえ取れれば、ヒントとかモ力の意識がなくても光とか音が手掛かりになる可能性はあつたのだが。

試しにと再び感覚のなくなってきた手でモカに電話を掛けてみたが、相手が電池切れか圏外だというアナウンスが流れるだけだった。

「くそ、連絡さえ——つと、いや、待てよ……」

スマホを仕舞おうとして雪の上に落としてしまい、それを拾おうと手を伸ばした時——頭の中を電撃が走るような感覚に襲われる。

スマホを手取る俺の手はもう感覚もないが、それでも画面を触ったりする事は出来るんだ。

だけど、今モカは雪崩に巻き込まれて雪の中に埋まっているんじゃないのか？

彼女が作ったかまくらに一度下半身だけが埋まった時、俺は身動きも取れなかった事を思い出す。

雪崩に巻き込まれて全身が雪の中なら身動きなんて取れない筈だ。スマホを触って連絡を取るなんて出来るのか？

いや、逆に考えろ。本当にモカは雪の中に埋まっているのか？

下半身だけが埋まっているか、骨折とかで身動きが取れないか。もしそうだとしたら、アレだけの人が雪の中を探しても見つからなかった理由も付く。

日は沈んでいて辺りは真っ暗で、探そうとしていない所なんて視界に入る訳もなかった。

俺が押し飛ばされた場所から、コースの端を歩いていく。少なくともモカはここから流されて、下にいる筈だ。

だから、コース中央の雪には眼もくれずに。

ひたすら真っ直ぐに進む。

「モカ……モカ……っ！」

この推測が間違っていたら、俺がモカを殺したと同義だ。だけど不思議と不安はなくて。

ただ、早く見付けてやらないとって、足は早くなる。

「……居た」

思っていたより早く、簡単に、彼女は見つかった。

どうしてもっと早く見付けてあげられなかったんだろう。

こんな所に一人でさ。寒かっただろうし、寂しかっただろうし、怖かっただろうし。

「モカ……」

ゆっくりと手を伸ばした。

返事はない。

うつ伏せの状態で彼女の手は伸びていて、その先には電池の切れたスマホが落ちてい
る。

なんだか血色の悪い彼女の手はピクリとも動かない。

「モカ……」

彼女に触れるのが怖かった。

返事はない。反応もない。

もしかしたら——そんな不安が過ぎる。

「……やつと見付けられたんだ。やつと、やつと……今だから全力でやりたい事が見付かったんだよ！」

そんな彼女の手を掴んだ。

冷たい。

身体を持ち上げようとするけど、彼女の下半身は雪に埋まっている。

俺も経験したから分かるが、こうなると自力どころか人に引つ張られても脱出は出来なくなるんだ。

雪を退かすしかない。

「待ってる!! モカ!!」

聞こえているか分からない。もしかしたらもう——なんて事も考えてしまう。だけど、俺が今やるべき事はそんな事を考える事じゃない。

少し緩くなってしまった缶コーヒーとカイロをモカの手の下に置いて、俺は必死にモカを固めている雪を掻き分けた。

時間が経っているからか、雪は妙に硬い。

感覚のなくなってきた手で雪を退かしていく。もはや痛覚しか感じない。ちゃんと雪を退かせているのかも分からない。

「大丈夫だモカ。絶対に皆の所に連れて行くから」
返事はなくても、俺は何度も彼女に話し掛けた。
怖かったんだと思う。

一人で居るのが。一人になってしまうのが。

モカはずっとここに居たのに。俺は——

「……しよーくん？」

声が聞こえた気がした。

「……モカ？」

恐る恐る視線を向ける。

妙に揺れる視線、瞳孔。ただ、驚いたような表情で——モカは目を開けていた。

「モカ！ 良かった……本当に良かった。大丈夫か？ 直ぐにこの雪退かすから、待つてろ！」

生きている。ただそれだけの事実が、俺はなによりも嬉しかった。

それだけで、どれだけだって本気になれる。全力でやれる。

「……ど、……して？」

「探すに決まってるだろ。そもそもなんだ、お前が言ったんだろ」

俺がかまくらに埋まって、自分が埋まったらどうするつもりだって聞いた時。

——「その時は、きっとしよーくんが見つけてくれるから？」——
彼女はそう言った。

約束なんてしてないけど。きっとこんな事になるなんて思ってもないけど。だけど、ちゃんと探したよって伝えたい。一度諦めた事も謝りたい。

沢山話したい事がある。

その前に、早く彼女を暖かい場所に連れて行きたかった。

「直ぐに出してやるから、待ってろ」

明らかに体力を奪われていて、モカの反応は薄い。

ただ、どこか安心しきったような表情に俺も安心する。

良かった。

なんとかあったのだから、焦る必要はない。勿論モカの身体が心配だから、急ぐ必要はあるけれど。

もう大丈夫——

「……なんだ？」

「……っ、しょ……くん」

——地面が揺れる。

嫌な予感がした。手を止めずに、視線を上げる。

「嘘だろ……」

雪崩。

少し遠くの方で、雪の塊が舞い上がっているのが見えた。

白と黒だけの世界。真っ暗な世界で、白は絶望的な速度で俺たちの元に向かってくる。

「……ぎげんな!!」

必死に雪を掻き分けた。少しだけ無理矢理でもモ力を引っ張り出そうとするが、やっぱり身体は動かない。

もつとちゃんと雪を掻き分けないとダメか。でも、そんな時間はない。

「しよ、……くん、逃げ、て……っ！」

上手く動かない口で、それでも必死に声を上げるモカ。

ふざけるな。

ふざけるな。

「んな事出来るかバカ!! 次はないんだよ。死んだら全部終わりなんだよ。今もクソも無くなっちまうんだよ! もう会えなくなるんだよ。だから今を全力で生きるんだ。今も後も後悔しない為に、必死で生きるんだよ!!」

手の感覚なんてもうないし、なんなら自分の身体がちゃんと動いているかも分からない。
い。

このまま二人揃って雪崩に巻き込まれたら、それこそ全部終わりかもしれない。

「しよーくんも死んじゃう……っ！」

「だったら一緒に死んでやる!!」

——それでも。

「……っ、しょ……くん？」

「見付かったんだよ。今だから全力でやりたい事。……モカ、俺はお前の事が好きだ」
もう雪崩は直ぐそこまで来ている。間に合わない。何をしようか、結局俺は凡人だ。
何も持っていない、ただの凡人だ。

「モカと一緒に居るだけで、俺は幸せなんだ。大好きなんだ。これからも一緒に居たい。
お前の為に生きるから。お前の為に全力で生きるから」

ここまで来てモカを助けられないのだから、本当にそうなのだろう。

でも、だからこそ、最後まで全力で——

「……あた、し——っ?!」

うつ伏せのモカに抱き付いて、耳元に口を近付けた。

「好きだ、モカ」

「あたしも、しょーくんが好き」

ちよつとズルだったかもしれない。

だけど、今はその言葉が聞けただけで——どれだけでも全力になれる。

今だから全力で——

「見付けたんだから、もう離さない」

衝撃と共に身体も意識も流された。

轟音。

左右上下も分からなくなる。

ただ、抱き付いたモカだけは離さなかった。

「……っ、んう」

手を伸ばすと、妙に綺麗な星空が視界に映る。

身体の節々が痛い。どんな流され方をしたのか、俺の上に乗っているモカの意識はなかった。

生きてるかどうかは分からない。ただ、絶対に離さないってそれだけだったから。

「帰ろう」

怖かったんだと思う。

正直意識は飛んでいた。自分も死んだかもしれないと思っていたし。

だから、結構時間が経っていたかもしれない。モカはかなり衰弱していたから、もしかしたら——なんて不安だけが襲ってくる。

「探したから……見付かったから」

起き上がって、返事のない彼女の身体を抱き抱えた。

俗に言うお姫様抱っこだ。

背負ったら俺が転んだ時どつちに転んでも彼女が痛いだろうから。

これなら、転ぶなら後ろに転べば良い。結局格好は付かないけれど、格好付かないなりに彼女の事を考える。

「帰ったら、皆とおでんでも食べよう。鍋でも良いな。にくまんも。……たくさん食べよう」

これからの事を話した。

身体が重い。一步一步で足に激痛が走る。もしかして足の骨とか折れてるかもしれない。

「それで、次遊ぶのはカラオケが良いな。寒過ぎるのも暑過ぎるのも、当分はごめんだ」
転びそうになって、俺は後ろに倒れた。

こころなしかモ力は軽くて、そこまで重荷に感じない。

直ぐに起き上がって進む。

「でも、巴が冷房ガンガンにするかもな。つぐみちゃんが寒がって、蘭はまた巴と喧嘩すると思う。ひまりちゃんはカラオケなのに割高なパフエとか頼んで、モカはその横でひまりちゃんを弄ってさ……」

また転んだ。

足が痛い。なんなら全身痛い。手は動いてるのか分からない。それでも、モカだけは離さないと力を込める。

歩けなかった。

前に進めない。

「俺はお前と……もつと、もつと先に進みたい。だから、こんな所で止まってる訳にはいかないんだよ」

それでも身体は動かなくて。

限界なんだと悟る。

所詮山田翔太はこの程度だ。

一人じゃ何も出来ない。

「なあ、モカ……疲れたろ。俺も疲れた。なんだかとても眠いんだ。……って、これ死亡フラグだよな」

寂しくなって、ただ話しかける。

いつも通りならさ、モカがボケて俺がツツコムのに。今はそれを一人でやっていた。

「一人にしないでくれ……」

心が折れる。

「俺、ダメなんだよ。お前が居たから頑張れた。お前が居たから前に進めた……。だから、さ。モカが居なくなったら俺——」

「……しよーくん」

声が聞こえた。

「帰ったら、結婚しよう」

「いやお前、それ……し、死亡フラグ、っだろ。……っ、おま、こんな時に……お前さあ?!」

涙と笑いで、確認しなくても自分の顔がぐしゃぐしゃになってるのが分かる。モカの頬に涙が落ちて、そんな彼女は安心しきった笑みで俺を見上げていた。

生きてる。生きているんだ。

俺達はまだ、生きている。一緒に前に進む事も、コンビニでバカをやる事も、なんでも出来るんだ。

「しよーくんなら、大丈夫だよ〜」

「そう、だな……そうだよな」

彼女のその一言だけで、痛みとか怠さとか。そんなものは全部感じなくなる。

「……ごめんね、しよーくん」

「謝る事なんて何も無い。ほら、帰って結婚するんだろ。……歩くけど、どこも痛くないなっ。」

立ち上がって、また一步前に進んだ。

大丈夫。お前が居るなら、お前が生きているなら、俺は全力になれる。

「結婚はさく、飛躍し過ぎじゃない?」

「お前が言ったんだからね?!」

歩きながら、いつもみたいにバカな話をした。

帰ったらどうしようとか、そんなくだらない事なのにボケるものだから俺は常にツツコミ続ける。疲れるんだけど。

でもそれが今は最高に楽しい。今だから最高に楽しい。

「ねー、しよーくん」

「なんだ?」

「今だからやりたい事は……見付かった?」

「見付かった」

人生なんて適当に生きてれば勝手に過ぎて行く物だと思っていた。

ある程度遊んで、ある程度勉強して、ある程度の高校大学をでて、ある程度の仕事に

ついて、ある程度の人と結婚とかして、ある程度の幸せな人生を生きる。

そんな物だと思っていた。

確かにその通り。俺みたいな平凡な人間はある程度なんだと思う。

だけど、そんなある程度でも適当じゃなくて全力で生きて——今を全力で生きる事が出来るんだ。

だから——

「俺は、モカが好きだ。一緒に居るのが最高に楽しい。気が付いたらモカの事ばかり考えてた、モカの事ばかり見てた。特にやりたい事がある訳じゃない。……ただ、モカと一緒に居たい。全力でモカとの時間を楽しみたい。それが、俺が今だから全力でやりたい事。なんでも良い、モカと一緒に生きる事を全力で楽しみたい。それを、探し続けたい」

何度でも言おう。

「モカ、好きだ」

「あたしも、しよーくんが……好き」

——だから、今だからやりたい事を全力で。

俺達は前に歩いていく。

きつと、一緒に。

前に。

前に。

今だから全力でやりたい事を探して。

今だからやりたい事を全力で

吊り橋効果という理論を知っているだろうか。

不安や恐怖を感じている時に出会った異性に対して恋愛感情を抱き易くなるという学説だ。

心拍数の増加を恋のドキドキと勘違いするとか、理由は色々諸説ある。

それで、まさに俺達はそれだったんじゃないかなって。今更ながらに不安に思っていた。

この吊り橋理論。実際に間違っではないのだが、その時に繋がった二人は長く続かないというのが定番らしい。これについても諸説ある訳だが。

あのゲレンデでの雪崩事件から数ヶ月が経って、俺達は平凡な暮らしを続けている。なんとか無事に休憩所に戻った俺は大人の人達に多大な迷惑を掛けながらも、一人の女の子の命を救った事を賞賛されたらしい。

らしいというのも、俺は休憩所に着いた瞬間倒れて気絶したのでその場の事情を知ら

なかったというか。気が付いたら知らないうちに天井を眺めていた。入院してベッドの上だった。格好悪い。

「いらつしやいませー」

なんとも情けない話である。

「ありがとうございますー」

それで、見ての通り俺は当たり前のように仕事中だ。

いや、さ。あの後俺もモカも入院したんですよ。俺はともかく、モカは凄く弱ってたからね。

でも後に何か問題になるような事はなくて無事に退院。モカは少し長引いたけれど、命に関わる事はなかったらしい。

いや、本当に良かったよ。

その後はさ、ほら、普通ハッピーな展開が待ってると思うじゃん。いや、これに関しては俺も悪いのだけど。

「ちゃーすー」

「二分遅刻だぞモカ」

「二なら、四捨五入すればゼロだよ」

灰色の髪をショートカットに整え、パーカーにショートパンツとボーイッシュな服装の少女はおちやらかした調子で敬礼しながら歩いてくる。

とりあえずチョップ。

「いたー」

「痛いのはお前の代わりに残業してる高木さんに払ってる店の財布だ。早く働け」

「しょーくんのまじめー」

はい、見ての通り。

休憩室に入っていくモカをジト目で見ていると、隣で働いていた二人にジト目で見られた。その視線やめて欲しい。

「で、進捗は？」

六十超えたババア高木さんは口元に手を向けながらニヤニヤした顔でそう聞いてくる。

あのゲレンデに出向いた日、物凄く下らない理由で孫に仕事を押し付けた年寄りさま

まだまだ元気だ。鬱陶しいくらい元気である。

出来れば死ぬまでその元気でいて欲しい。

何はともあれ、高木さんの言葉には何処かで救われた気がしているから。

「山田君……告白したんだよね？」

続いてリサさんも、半目で俺を見ながらそう聞いて来た。

そうです。

俺はあの日、モカを探し出してから思いの丈を伝えました。

ちよつとズルかったかもしれないけれど、モカからの返事も聞いたんです。

その結果がこれだ。

「なんで何も進展してないの?!」

「だって恥ずかしいもん!! あの日からモカの顔見ると目を逸らしちゃうし?! なんかうまく話しかけられないっていうか?!」

俺の言葉を聞いたリサさんの瞳が毛虫を見るような目になっているのは気のせいだ

ろうか。

「山田ア！」

「うわあ?! ビックリした。何ですか高木さん!!」

「それで良いのかい?」

優しくそういう高木さんは俺の肩を叩きながら休憩所の入り口を見る。

その視線の先にはバイトの制服に着替えたモカが首を横に傾けて立っていた。

「それじゃ、私達は上がろうかねえ。行こうかりサちゃん」

「はい。山田君、本当にがんばりなよ」

ぼん、と。肩を叩くりサさんは片目を瞑って手を振って去っていく。

勿論このままじゃいけないのは分かっているんだ。

ただ、少しだけ怖かったんだと思う。

何かが変わるのが。これまでの関係じゃなくなるのが。

でも、やっぱりこのままじゃいけないし。それは俺が嫌だった。

だって俺はまだ今を全力で楽しめていないから。

「なあ、モカ」

「なーにー?」

「帰り、一緒に帰らないか」

「いつも送ってくれてるじゃーん」

笑いながらそう言うモカは、それでも「良いよ」と答えてくれる。

俺は少しだけ手を強く握って、とりあえず気を紛らわそうと身体を動かすと――

「あ痛あああああ!!」

――肘をレジの角にぶつけて突然悲鳴をあげる事になった。

いやあ、格好がつかない。

ただ、そんな俺を見て笑っている彼女の顔がやっぱり好きなんだって。そんな事を再確認する。

俺の気持ちは変わってない。たとえば、あの時の返事が吊り橋効果でも。



「ちよつと、座つて話していかないか？」

丁度、いつか蘭と三人で話した公園の前で俺はそう言った。

モカは少しの間を置いてから「うん、良いよ」とのんびり口調で返してくれる。

俺はそんな彼女の前を歩いてベンチまで向かい、タオルを引いて彼女に座るように促した。

勿論タオルはリサさんから借りたものである。俺はそんなに出来ていない。

「どうも〜？」

「どうぞ……」

ややぎこちない挨拶をしながら二人で座った。

少しだけ沈黙が続く。

「お話つて〜？」

「えーと……」

どうしても、何をしたって、人はそんな簡単に変わる事は出来ない。

ダメでヘタレで何も無い山田翔太は多分一生このままなんだ。

「……俺、変わるのが怖かったんだと思う。だから、何もしないのが正解というか。それで良いんだと思ってた。この関係がなくなるのが怖かった」

一緒にバイト先でバカをやって、偶に一緒に帰ったり遊んだりしてバカやって。そんな時間が永遠に続けば良いなんて、そんな事を思っていたんだと思う。いや、思っていた。

「……だけど、さ。何もしなくても……何かしなきゃ、いつかどこかでこの関係もなくなっちゃうんだよな」

自分が何もしなくても時間は進んでいく。

人は年を取るし、学生は一年で生活がガラツと変わるんだ。俺達だってあと二年したら大学受験か就職か選択を迫られる。

ある一人の少女はいつかの日、学年が変わった時のクラス替えで大切な友達と一緒に

居られなくなった。

今この瞬間が、関係がずっと続くなんて事はありえない。何もしなければ、何かしなければどこかでその関係は消えてしまう。

ある一人の少女は皆と一緒に居られる場所を作るキツカケを作った。

ある一人の少女は皆を繋ぎ止める大切な役割を担った。

ある一人の少女は皆がバラバラになりそうな時、必ず声を上げてそれを阻止しようとした。

ある一人の少女は全力で皆の事を想い続けて、側に寄り添った。

何もしなければ、何かしなければ、きつとその関係はなくなっていたと思う。

それはきつと誰と誰の関係にも言える事で。

だから俺も、『今』を失わない為に前に進むんだ。

変わる為じゃない、変わらない為に。

大切ないつも通りを手に入れる為に。

「伝えたい事がある」

「うん」

「今だから全力でやりたい事を、見つけた」

「……うん」

震える手を押さえつけて、息を深く吸って吐く。

「大切な人が出来た。……その大切な人と一緒に居るのは本当に楽しくて、幸せで。だからその人と全力で今を楽しみたい。今もこれからも全力でその人と生きていきたい」

立ち上がって、彼女の前に直立してそう言った。

「……。……うん」

視線が合う。その瞳は少しだけ濡れている気がした。

きっと普通の人からみたらとても下らないと思う。
特に褒められた話でもなく、ただ単に俺は――

「モカ、好きだ。お前の事が全力で好きだ。――付き合ってください」
――今を全力で彼女と楽しみたい。

今もこれからも。

その為に、ほんの少しの勇気を出した。

「……うん、あたしもしょーくんが好き。ありがとう」

相変わらずの、いつも通りののんびり口調で。

立ち上がった彼女は前に突き出した俺の手を取る。

俺が驚いて下ろしていた頭を上げたのはそれが理由じゃなくて、彼女が俺に抱き付いてきたからだった。

「モ……モカ？」

肩の荷が降りたというか、なんというか。

これで何が変わるとか、そういう事は望んでいないし。俺は多分一生こんな感じなんだと思う。

ただ、今この瞬間を続ける為に。いつも通りを続ける為に。今この瞬間をいつも通りにする為に。

「だーいすき。えへへー」

「俺も、大好きだ」

——今だからやりたい事を全力で。

少し先に

母なる海。

生物の根源は海であり、宇宙人でも居ない限り今地球上に存在する生物全ては海から生まれた。その事からそう言われている。

新天地を求めて陸に上がって来た我等の祖先もいたが、その後再び海の中に帰った生き物もいるのは、きつと海という場所がそれ程までに魅力的な場所だからか。

真面目な話を切り上げて一般人のふとした思い付きを話すなら、そもそも地球の七割は海なんだから海の方が住む所あるよねって話だ。

少し話を戻すが、イルカという生き物は哺乳類である。クジラとかイルカとか、本当に人間と同じ同じ哺乳類なのか疑うよね。

「おー、すごい」

さて、なぜそんな話をしたかというのだ。俺達の目の前でイルカが大ジャンプを繰り返して、水飛沫が目に入って若干の海を感じたからである。

海を感じたってなんだよ。

「あははー、びしょ濡れだね〜」

水浸しになって若干ナイーブな俺の横で、のんびり口調でそう話す女の子。ショートカットの髪にパーカーと短パン。ボーイツシユな服装ではあるが、水に濡れて浮き出た身体のラインは女の子らしく少し目のやり場に困る程だ。

そんな彼女——青葉モカと、俺こと山田翔太は少し格好つけていうと交際中、普通にいうと付き合っている。

「最前席なんて選ぶもんじゃないな……」

「また一つ、モカちゃん達は賢くなったのであった。結果オーライだよ〜」

「のんきに言ってるけどこの後もあるからね?! 全然結構はオーライじゃないからね?!」

付き合っている……とはいっても、俺達の関係は以前と大差はない。

ひたすらボケ続けるモカに俺がツツコミを入れて疲れる日々だ。

ただ、やっぱり俺はそれが楽しいし。そんな日々を全力で過ごしたいから、彼女に告

白してこうして今モカと付き合っている。

「そうだねー、せっかくひーちゃん達に貰った水族館のチケットだし」

「とりあえずお土産屋さんでタオルでも買って頭だけでも拭くぞ。このままじゃ風邪引く。寒いのはこりこりだ」

そんな訳で、俺達はバイト先やら俺の家やら商店街とかシヨッピングモールとかで遊ぶ日々が続いていた。

それこそ友達と遊ぶみたいな感覚で。

普通のカップルとして想像するようなイチャイチャとか、そういうのは全くない。キスは愚か手を繋ぐとかすらまともにしてないね。健全過ぎる。小学生か。

そんな俺達を見兼ねた After glow のメンバー（主にひまりちゃん）が今回俺達に「デートしてきなさい」と水族館のチケットをくれた訳だ。

「あははー、そーだねー。そういえば、皆で井ノ島に行った時もタオル買ったんだよね」

「あー、蘭が持ってたタコのタオルか。あーという感じの奴ならお土産としても丁度良い

な」

なんて会話をしながら、俺達はイルカショーのステージを後にする。

開幕イルカショーでびしょ濡れになるなんてトラブルもあつたが、珍しくデートっぽい事に挑戦してみる事になった俺達。さて、どうなるやら。



お土産屋さんでそれらしいタオルを買ってその場で開封、頭を拭いて「さて、仕切り直しと行くか」と水族館の地図を広げようとした矢先。

モカが俺の服の袖を引っ張って「しょーくーん」と声を掛けてきた。

振り向くと髪が濡れた彼女がタオルを持って上目遣いで俺を見ていたので、ちよつとドキツとする。

やっぱさ、俺の彼女^{モカ}ってめっちゃくちゃ可愛いよな。

「ど、ど、ど、どうした?」

「髪の毛拭いてー」

「自分でやれよ！」

赤ちゃんか。

「自分じゃほらー、ちゃんと拭けてるか分かんないじゃーん？」

「しようがねーな……」

特に断る理由もなく、俺はモカの髪をタオルで拭いてやった。目を瞑って気持ちよさそうにする彼女を見ると少し恥ずかしくなる。

こんな事、流石に友達にはやらない。別にカップルらしいとは言わないが、付き合ってるんだなって少しだけ実感した。

「それじゃー、お魚を見に行こー」

「おい涎をしまえ。食べに来たんじゃないぞ」

まあ、思っていた通りの魚への反応なんだけどね。

少し水族館を歩いて見てみるが、蟹を見たら美味しそうなのタコを見たらタコせんべいだの「逃げて！魚逃げて！」である。二種とも魚じゃないけど。

「クラゲって美味しいのかなー？ 亀さんはクラゲを食べるんだよねー」

「すぐ食べようとするな」

ライトアップされたクラゲの水槽を見ながらそう言うモカ。こういうのって普通「綺麗だね」とかいう感想が出てくる物じゃないの？

「二応食えるクラゲもいた気がするけど……。そもそもクラゲって体の九割くらいが水なんだよな」

「それはつまりもう、クラゲはジュースという事なのでは？」

「違うよ?!」

どうしたらそんな発想が出て来るんだろう。どうしても食べたいのか。

「身体の半分以上が水なのって凄いな」

「そんな事ないぞ。人間だって身体の六割は水だしな」

「ほえー、しょーくん物知り〜」

暇人はよくネットサーフィンをするので無駄な知識が多いのだ。

そんな風に、水族館の生き物達を無駄な知識を並べながら主に食方面で盛り上がったりしながら見ていく。

お昼過ぎに来たのだが、全部回りきる前にもう良い時間だ。中々有意義な時間を過ごせたと思う。

「お、こっちはラッコが居るのか」

水族館といえば魚というイメージだが、海に住んでいる生き物は魚だけじゃない。

というか、個人的には魚よりもタコとか蟹とかイルカとか魚以外の生き物つて魚よりも姿形が豊富だから見るのが面白いんだよな。もつと言うとペンギンとか。

勿論、魚も変な奴がいるから面白いけど。

「しよーくん楽しそうだねー」

「そうか？ まあ……そうだな」

楽しいのは楽しいのかもしれないけど、それはきつとモカと一緒にだからだ。

いちいち反応が面白いし、やっぱり一緒にいるだけでその時間を大切に感じる。

好きな人と一緒にいるんだから、楽しいに決まってるのだ。

「どうかしたのー？」

「いや、何も。おー、丁度ラッコの餌やりの時間みたいだぞ」

若干はしゃいでる俺はそんなテンションでモカに付いて来いよと早足で歩く。

このままのノリで手でも掴んでしまえば良いのにかと思うかもしれないが、チキンな

のでそれが出来ない。

「ラッコって、お魚とかも食べるんだねー」

貝殻を腹の上で割って食べる印象が多いラッコだが、元々は魚とか蟹とかイカとかとにかく何でも食べる生き物だ。

なんでもラッコは体温が高いらしく、その体温を維持する為に沢山の食事を取るらしい。モカはラッコだったのか、なんてふと思つて一人で笑う。

「ついにモカちゃんがボケてないのにしよーくんが笑いだした……」

「まあ、笑つた理由お前だけだな」

なんて言うと、モカは「ひどいなー、もー」と頬を膨らませた。可愛い。

そんな訳でしばらくラッコの餌やりを見ていたのだが、突然横からあり得ない音がして俺は目を丸くする。

なんというかその、お腹の虫の音。モカの顔を見ると、彼女は涎を漏らす口に手を当ててラッコをジッと見つめていた。

「おい待てラッコだぞ?! 魚とかタコとかならまだ分かるけど!! ラッコだぞ!!」

「……シーフードサンドイッチ」

「餌の方かーいい!!!」

どうやらラッコに渡されていた餌を見てお腹を空かせていたらしい。

随分と水族館を歩き回ったし、時間としてもいい頃合いではある。

確か水族館を出た直ぐ先にレストラン街があつた筈だし、行つてみるかとモカに提案すると大絶賛された。

そんな訳で俺達は水族館を後にして、すぐ近くのレストラン街を歩く。

水族館とかデートスポットが近くにあるという事もあり、レストラン街ではデート中のカップルの姿も結構多かつた。

周りを見渡せば手を繋いでたり腕を組んだり。高校生の若者には少し刺激が多い光景が広がっている。

いや、この人達よく平気でそんな事出来るな。羞恥心とかないの。周りの人皆ジャガイモにでも見えてんの。

俺がチキンなだけなんだけどね!!

そんな事を考えていたせいか、どうも俺はぎこちなく歩いていた。せつかくのデートなのに、モカには申し訳ない。

「おー、しょーくん。シーフードカレーだつてー。流石、モカちゃんの今のお腹を捉えてきてますなー」

そう思つて一人で気不味くなっていると、俺の気持ちなんて知つてか知らずか。モカは俺の服の袖を引つ張つてお目当てのお店まで連れて行く。

ここで手を繋げない辺りが山田翔太なんですね。

「カレーか。……てか、カレーでいいのか？」

デートですよ。

「美味しそうじゃーん？ シーフードカレー」

「さては魚なら何でもいいな？」

「バレたかー」

のんびりとした笑顔を見せてくれる彼女の微笑みに、なんかよく分からない悩みは吹っ飛んでいった。

何をそんなに焦る必要があるのか。別にいつも通りでいい。いつも通り。それが、幸

せなんだから。

「んじや、俺はカツカレーにする」

「モカちゃんはLサイズにー、あとソーだなー、フライドポテトも食べちゃおうかなー」
「どんだけ食べるんですか。」

席に座って注文を済ませ、お冷の氷をストローで回しながら、俺達は水族館の話で再び盛り上がる。

また来ようとか、次はどこに行くとか。そんな事を当たり前のように話せるってだけで、幸せじゃないか。

「カレーうま」

「ラッコの気持ち分かるねー」

「いや、いくらラッコでもカレーは食べないからね」

モカラッコがバクバク食べている前で、俺は半目で彼女を見ながらそう言った。

本当によくもそんなに食べられますね。胃袋の中どうなってるんですか。●次元ポケットにでも繋がってるんですか。

「しょーくんも食べるー? 海を感じるよー」

海を感じるってなんだよと言いかけたが、序盤で俺も海を感じていたのでツツコミはやめておく。

それで、せっかくだし「少し貰っていいか?」と聞くとモカは笑顔で良いよと答えてくれた。

「はい、あーん」

彼女はそう言いながら、シーフードカレーを掬ったスプーンを俺に向ける。

いや、え?

え?

あーん?!

「どうかしたのー?」

不思議そうに首を横に傾げるモカだがちよつと待つてほしい。

こんなね、他にも色んな人がいる場所ですよ。人気のない場所ならともかくですよ。

あーんって！ あーんって！！ あーん!!!

「カップルかよ!!」

「カップルだよー?」

「そうだったああ!!」

お店の中でうるさくしてごめんなさい。

とりあえず落ち着いて、俺はモカのスプーンにゆつくりと口を近付けた。そのまま咀嚼。普通に美味い。

「おお……これは美味——」

「あははー、間接キスですなー」

「——ブフウウ!!」

恥ずかしさを紛らわせる為に、俺が当たり障りない感想を呟こうとした矢先。モカにそんな事を言われて俺は若干吹きそうになる。ていうか少し吹いた。マジでお店の人とお客さんごめんなさい。

「たまにはこういうのもありかなーって、モカちゃんは思うわけですよ」
「唐突過ぎて心臓に悪いです」

逃げるように勢いでカレーを腹の中に突っ込み、俺達は帰路に着く。

モカと遊ぶと大体濃い一日になるのだが、今日もまた全力疾走で疲れる日だった。

それが楽しいから、俺は彼女の事が好きなんだけどさ。

それに、いつも通りが良いけれど。少しずつ前に進めたら良いなとも、やっぱり思う。それを、いつも通りにする事が幸せになるって事なんだ。

「なあ、モカ」

「なーにー?」

「……手、繋いで帰らないか?」

「……いーよ。……しよーくんの手、冷たいねー」

「心があつたかい証拠だ」

「こんな風に、さ。」

番外編——今だからやりたい事を全力で

【番外編】青葉モカ誕生祭2018

誰かにとって何でもない日は、誰かにとっての特別な日である。

それは例えば何かの記念日だったり、何かを始めた日だったり、何かが終わった日だったり。

何十億人と人類が居る中で一年というのは基本的に三百六十五日しかない。毎日が誰かの何でもない日で、誰かにとっての特別な日なんだ。

「ねーねー、しよーくん。今日が何の日か知ってるー?」

「今日? 九月三日だったな。んーと、アメリカ独立戦争が終結してパリ条約が結ばれて、イギリスがアメリカ合衆国の独立を認めた日だろ?」

バイト中、モカが意味深に訪ねて来たので俺は即答する。まるで頭が良い人みたいだ。

実際はそういう質問をされるだろうと予測して、返答を考えるために調べてきただけ

なんだけどね。

「えー……しよーくんが物知り過ぎて……モカちゃんビツクリ。……つてー、そうじゃなくてー。誰かの誕生日だと思っただけどー？」

「バーカ、忘れる訳ないだろ。国民的な誕生日だからな」

「国民的」

「ほら？ ドラ●もんの誕生日だろ？ 忘れる訳ないじゃん」

「ドラ●もん」

モカは珍しく目を丸くして固まってしまう。普段ボケる側だからか、ツツコミが追いつかないのだろうか。

「しよーくん」

「なんだ？」

「おこるよー？」

怒るの?!

「冗談だつての。お前の誕生日だろ？」

何を隠そう青葉モカの誕生日はドラ●もんと同じ——本日九月三日なのだ。

俺がそういうと、モカは拗ねたような表情で口を尖らせる。珍しい表情だ。

「しよーくんのいけずー」

「悪かったって。……とところでさ、なんで誕生日なのにバイト来てるんだよ」

そこは休んで、Afterglowの面々と遊ぶのが普通なのではないだろうか。

しかしモカは本日夜までしつかりとバイトのシフトに入っている。

俺も同様なので変わってやる事は出来ないが、せつかくの誕生日なんだから誰かに代わって貰えば良かったのと思うんだよね、

「えーと、それはですねー」

言いにくそうに目をそらす彼女は、突然顔を作ってから口を開いた。

「忘れていたのです」

「自分の誕生日忘れるバカがいたかー」

救いようがなかったよ。同情の余地もないね。働け。

「モカちゃんはその日その日を大切に生きています」

「もう少しくらい前を見て生きようねー」

モカに同情はしないが、誕生会を用意している *A f t e r g l o w* の皆にはむしろても同情する。

巴に「バイトが終わったらモカを引きずってでも羽沢珈琲店に連れて来てくれ！」って言われてるんだよな。

きつと今頃誕生日会の準備を頑張っているに違いない。本人はこの有様だが。

「それでー、さつきカレンダーを見た時に思い出したんだよねー。……あたし誕生日だ、と」

「その日その日を大切に生きてるなら日付の確認くらいしろ。……ところで、よ。今日バイトの後は暇か？」

どう連れて行こうか悩んだのだが、とりあえず予定の有無を確認するのが先だ。

これで予定がありますとか言われたらどうしようかと思っただけだね。

「特に予定はないかなー？ モカちゃんはフリーです」

妙にテンション高めにそう返してくる。同時にお客さんがやって来たので、話は後で。

「しゃーしたー」

「羽沢珈琲店でも行かないか？ 一杯くらい奢るぞ。誕生日だし」

帰りに飲み屋に誘うおっさんのような誘い文句で、俺はモカにそう尋ねた。

どうも気の利いた誘い文句が思い浮かばないのである。

「プレゼントはー？」

「強請るねえ。……ネコまんを手を打つてくれ」

「やったー。モカちゃん大勝利」

「それで良いのかよ」

本当は用意してあるのだが、今バラしても面白くないしな。

そんな訳でバイト終わり。すっかり暗くなってしまった夜道を、俺達は羽沢珈琲店の
ある商店街まで歩いた。

殆どお店も閉まっているし、羽沢珈琲店も電気は消えている。

「まだ閉店時間じゃない筈だけど。……これは、事件の予感」

ネコまんを頬張りながらモカはそう言って羽沢珈琲店を真っ直ぐに見た。

中は暗くて見えないが、多分飾り付けとかしてあるんじゃないだろうか。

「事件は困るが……とりあえず行ってみるか？　モカ」

「そこはモカ警部だよ、しよーくん」

「それじゃ俺は翔太警部ですかい？」

「しよーくんは、しよーくん。一般人」

「なんでパンピーの俺が巻き込まれてるんだよ」

せつかくなら警察の仲間って事にしてよ。

「しよーくんは犯人の一味だから、参考人という事でここに連れてこられたのであつたー」

「犯罪者側だったのかよ」

モカの誕生日会のためによる事件だから、俺が犯人の一味である事に間違いはないという事がまた面白い。

「それでは、突入ー」

なんの警戒もせずに、モカはのんびりと扉を開く。

扉が開くと同時に電気が点いて、小さな破裂音が響き渡った。何かおかしいって俺がその破裂音にビックリして飛び上がった事である。

「「誕生日おめでとう」」

四人の声が聞こえて、モカは「ビックリしたー」とビックリしてなさそうな声を上げた。

ただ、店の飾りや用意された料理やケーキを見てほんの少しだけ彼女は笑う。嬉しくない訳がないよな。

「で、翔太はなんでそんな所で転んでるんだ？」

「ビックリして古傷が開いた」

「山田、それは痛いよ」

「ほっとけ」

どっちの意味だ。

巴と蘭に起こされて、俺も店の中に入る。

見事なまでの装飾が視界に入って、なんだかこっちまでワクワクしてきた。

「はい、皆さん笑ってくださいねー。笑顔でピースですよー」

ひまりちゃんの携帯を借りて、写真撮影。ケーキを前にA f t e r g l o wの五人で並んでもらう。こういうのって良いな。

「蘭、笑え」

「いや、別に……良くない?」

「良くない。つぐみちゃん、ひまりちゃん、やーつておしまい!」

「はいはいさー!」

「なにそのノリ?!」

つぐみちゃんとひまりちゃんに頬つぺたをムニムニされ、蘭もそこそこ表情が崩れた所で俺はシャッターを切った。

ごめん、蘭が凄い顔になってる。

「見せて見せ——ぶふっ、ナニコレ。蘭の顔」

「え、何……」

笑い転げるひまりちゃんに、引き攣った表情の蘭。あんまり笑うと怒られるよ。

「あ、翔太君。SNSに上げる用に、顔が写らない感じでもう一枚撮ってもらって良い

「？」

「オーケー任せろ。近所のおばちゃんに写真撮りの天才と呼ばれていた俺の力を見せてやる」

「もう食べようよー。モカちゃんお腹ペコペコだよー」

ひまりちゃんのリア充力が爆発し始めるが、モカは涎を抑えながら目の前の料理やケーキを眺めていた。

「こういうのは形に残しておかないと！」

「一枚撮ったじゃーん？」

仲の良い彼女達だが、考える事は一人一人違うらしい。

そんな訳でひまりちゃんのSNS映えするシャッターチャンスは幕を閉じ、ケーキは一旦仕舞って食事を楽しむ。

つぐみちゃんの両親が用意してくれた料理は種類も豊富で食べ飽きない素敵な食卓だった。

食事を終えた所で、お待ちかねのあの時間ですよ。

「誕生日プレゼントタイム！」

つぐみちゃんやんが食器を片付け終わると、ひまりちゃんがそう声を上げる。

モカを囲むように皆で座って、各々用意したプレゼントを手に持った。

こういう時リーダーシップを取るのがひまりちゃんだから、確かにAfterglowのリーダーは彼女なのだろう。

「誰のから欲しい？」

「それじゃー、ひーちゃんの」

謎の即答。ひまりちゃんは驚いた表情を見せるが、自信満々に鞆から小さな紙袋を取り出した。

「今回は自信作なんだー」

言いながらひまりちゃんは紙袋をモカに渡して、彼女の「開けて良い？」に笑顔で首を縦に振る。

自信作という事は自作なのだろうか？ ひまりちゃんって裁縫とか得意そうないメージはあるけど。

「でも自信作かー、不安ですなー」

「モカが酷い!」

「冗談だよー。……それでわ、オープンザ変な人形〜」

「変な人形じゃないよお!」

紙袋から出て来たのは——なんかよく分からない妖精?

茶色の身体に、ファンシーな顔、そしてなんか四角い羽。なんだこのクリーチャー。

「……ナニコレ」

モカは真顔で、自信満々の表情のひまりちゃんにそう尋ねた。

「パンの精霊!」

「パンの精霊」

なるほど、茶色いのはパンだからか。となるとこの羽は多分食パンだろう。

言われてみればよく出来ているのだが、よく出来ているからなのかそもそもパンの精霊という題材がおかしいので——申し訳ないが変な人形だった。

「へへーん、どう? よく出来てるでしょ!」

「よく出来過ぎてて逆に怖い奴だよねー。むしろ不気味」

「酷い?!」

「でも、せっかくひーちゃんが作ってくれたから大切にするね?」

「モカーターっ！」

「それにしても変な人形だなー」

「モカーターっ?!」

漫才かよ。

「それじゃ、次は誰のにする？ アタシは今回結構自信あるぞ」

「それじゃー、トモちんので」

次は巴の番らしく、彼女は自信満々な表情で紙袋をモカに渡す。

モカはそれを受け取ると、興味深そうに中を覗き込んだ。

こういうのって、こっちも気になるよね。

「い、これは……」

モカが喉を鳴らす。い、一体何が入ってるんだ？

「りんごカード」

りんごカード。

説明しよう。りんごカードとは、スマートフォンアプリに課金する為に使う電子マ

ネーの事である。

「なんでやねん」

「いや、ほら、この前モカがさ、パンドリームってアプリに期間限定のパンが出るけどパンを食べ過ぎてお金がピンチだって言ってたからさ！」

「いやパンドリームって何?! パンの夢?!」

あまりにも急カーブなボケに俺のツツコミも昭和に戻ってしまったが、巴は更にS字カーブのようなボケを繰り返して来た。

ツツコミが追い付かない。

「パンドリーム、菓子パンパーティー——略してパンドリ。またはカシパだよー? 今モカちゃんの、超エモいアプリなんだよね。商店街のパン屋さんになって、色んなパンを焼いてパンをコレクションするゲームなんだー」

「なにそのモカの為に存在してそんなゲーム?!」

どこに需要があるの?!

「面白いよー? だけど、手に入れたパンを食べる事が出来ないのが難点。それでパンが食べなくなっちゃって、モカちゃんの財布はピンチなのであった」

「パン作るゲームでお腹減ってパンを買ってパンを作るゲームに課金出来なくなったとはこれいかに。……いかん、パンがゲシュタルト崩壊してきたぞ。パンってなんだっけ」

俺が悶々と頭を抱えている横で、モカはゲームに課金して巴にガチャを引かせる。
パン作るのガチャなのかよ。

「お、なんか星四のパンが出てきたぞー!」

星四のパンって何。パワーワードなんだけど。

「これは……期間限定。パワフルチョココロネ! あたしが欲しかった奴ー!」

パワフルチョココロネって何?! パワフルって何?!

「しかも激レアのピュアメロン。パンまで! トモちん、本当にありがとう!」

あのモカが凄く興奮してる辺り、相当の当たりを引いたのだろうが俺にはさっぱり分からなかった。今度ダウンロードしてみようか。ちよつと気になる。

「えーとそれじゃー、次はつぐのが見たいなー」

「う、うん! 一生懸命選んで来たからね!」

「……」
「ここまで殆どギヤグだったが、つぐみちゃんなら大丈夫な筈だ。」

まあ、モカはどっちも喜んでたけどさ。

「私はね！　じじゃーん、可愛いクッションを買って来たよ！」

普通!!　凄い普通!!　めっちゃ女の子!!　可愛い!!

「メロンパン型の！」

メロンパン型の?!　なんでパンなの?!　お前らパンを渡せばいいと思ってるのか?!

——いや、俺もなんも言えないんだけど。

「おー、つぐらしい可愛いアイテム。これは普通に嬉しいですなあ。ありがとう、つぐー」

メロンパンを抱き抱えながら、モカは笑顔でつぐみちゃんにお礼を言う。

その反応を受けて、つぐみちゃんも安心したような笑顔を見せた。天使かな。

「な、なんで皆パンなの……」

そんな中で、蘭は青ざめた表情で小さくつぶやく。まさか皆パンだなんて事ないだろうな……。

いや、ありえなくはないか。ここは先手必勝よ。

「んじや、次は俺が渡すか。ほい」

「あれー？　しょーくんも用意してくれたの？　コンビニではないって言ってたのに」

「ここに居るんだから持つて来とるわ。あそこでバラしたらここに連れて来た時に困るからな。ほら、早く開けなさい」

そう言つて俺はモカに紙袋を押し付けた。さあ、戦慄しろ。

「こ、これは……っ」

中身を見たモカは驚きの声を出す。その中に入っているのは――

「巨大なフランスパン……」

――型の、寝袋である。

「ハツハツハツ！　取り出してみるがいい！！　俺がド●キーで手に入れた至高の寝袋を
!!」

「翔太って実はバカだな?!」

「私は翔太君は真面目だと思つてたのに!!」

「お前らと大差ないからね??」

自分の事を棚に上げないで!!

「めっちゃでかい。パンに食べられそう」

寝袋を取り出したモカは、口を開いて驚きの声を上げた。実際に使ってみると、パンになるというかパンに食べられてる人みたいになる。

ついでに表面はコットン製で、中に布団を敷き詰めるとモフモフの巨大なフランスパン型の抱き枕になるのだ!!

たぶん考えた奴は馬鹿である。

「もうモカちゃんはこの寝袋で生活します」

「それでどうやって外を出歩く気だ」

クリーチャーだよ。

「最後は蘭だねー」

「なんか、渡すの恥ずかしくなって来たんだけど……。気に入ってもらえるか分かんなくなってきた。……。皆。パンだし」

なんかごめん。

「そんな事言わずにさー?」

「……笑わない!?」

「笑わない」

「……じゃ、これ」

そつぽを向きながら、蘭は小さな紙袋をモカに向けた。

その中には小さな箱が入っていて、中にはロックな感じのイヤリングが入っている。

モカがそれを確認してから、蘭は自分の横髪を退けて耳を見せた。彼女の耳にも、同じイヤリングが付けられている。

「……お揃いの、アクセ。この前モカと買い物行った時、あたしが別の事にお金使つて買えなかった奴」

女の子かよ!!!

いや、女の子だけど。つぐみちゃんより女の子してて怖い!! 可愛いかよ!!

「おー……」

「い、嫌だった? パンが良かった?!

「いやいや、蘭がその時の事を覚えててくれて感動したというか。……ありがとー、蘭」

モカの素直なお礼に、蘭は耳まで顔を真っ赤にして俯いた。俺の入り込む隙がないん

だけど。

「よし、これで全員配り終わったな」

「モカ、もらったプレゼント全部持って！ 写真撮るから！」

「ひーちゃんは写真大好きだなー。はい、変な人形——じゃなくてパンの精霊さんも持ったよー」

一番異色放ってるのパンの精霊だな。いや、りんごカードも凄いいけど。いや全部凄いいとか、変過ぎて逆に蘭のプレゼントが浮いている。なんかもうごめんなさい。

ひまりちゃんが写真を撮っている間に、つぐみちゃんがケーキを持ってきた。歳の数分の蠟燭に火を付けて、電気を消す。

その人がこの世に生を受けたという特別な日に、生まれてきてくれてありがとうと伝えるのが誕生日だ。

きつとその日は誰かにとっては何でもない日だけど、誰かにとっては特別な日なんだと思う。

そんな感謝の気持ちを込めて、歌を歌って——

誕生日おめでとう、モカ。生まれてきてくれてありがとう。俺達と出会ってくれてありがとう。

そうやって、感謝を伝えるんだ。

「ありがとう、皆」

今日は、そんな俺達にとって特別な日。

モカランド〈番外編〉

世界が作られてはそこから生み出されたパンを屠る。

そうして満足した少女は何もない世界でただ一人、夢を語るのだ。

「それじゃ、少し寝るわ」

次はどんなパンが生まれてくるのかな、と。

「うん。おやすみ、しょーくん」

そうだ、こんなに美味しいパンならそれ全部を混ぜたらめっちゃエモいパンが生み出されるに違いない。

神様はふつつふと笑いながら、これから生み出されるであろう超エモいパンに想いを乗せながら夢物語を語り始める。

これは——パンの物語。

◆◆◆
俺、山田翔太は普通の高校一年生。

普通という文字を人にしたのが俺という存在だ。普通ザ普通。普通オブ普通。

そんな俺だが、その日はどうも不幸な日らしい。朝占いを見てみたら、今日の運勢はパン半分分だと言われたっけ。

いやパン半分分って何。

「はあ……はあっ、助けて！」

平凡な俺が平凡に学校に通って、平凡にバイト先に向かおうとしていたその時である。

バイト先の先輩——リサさんが息を荒げながら俺に助けを求めてきたのだ。

不安げな表情で俺の肩を抱くりサさんとの距離が近い。ふ、何がパン半分分だよ。最高にラッキーじゃねーか。

じゃ、なくて。

「ど、どうしたんですかりサさん」

いきなり助けてって、何があっただらう。

「私はリサじゃない。クツキー衆指導者。クツキー女王よ」

「いや突然何言ってるのこの人。え？ どうしたの？ 頭打っちゃったの？」

先輩の意味の分からない発言に困惑して俺は困惑しながら表情をヒクつかせた。

完全に意味がわからない。

「あなた、リサ様になんて無礼を！」

そんなリサさんの背後から若干怒り気味で声を荒げるのは、彼女と同じガールズバンド——Roseliaに所属するギター担当。氷川紗夜その人である。

いや、その人なのか。この人もなんか辺な事言ってるんだけど。リサ様って何?! 確かにリサさんは魅力的な人だけど!! 様って何!! 確

「さ、紗夜先輩……? 一体なんの冗談ですか?」

「私はクツキー將軍です」

「ダメだコイツ。早くなんとかしないと」

クツキーってなんだ。クツキー衆ってなんだ。宗教か!!

これアレだな。絶対アイツが絡んでるな。俺をからかっているのか、それとも――

「なんでも良いから助けて欲しいんだ。私達クッキー衆と同盟を結んだパン派の皆を……っ！」

「いやまた聞いたことのない単語が漏れてるんだけど。話についていけないんだけど」「そうわざせないんだから！」

俺がツツコミを入れていると、背後からそんな声が聞こえる。今度はなんだ。

「あ、あなた達は!!」

「私は超悪い秘密結社、マルマウンテンのボス！」

「そしてあたしは、その秘密結社の元請け組織。コオリヴァアのボス！」

紗夜さんの反応に二人の少女が名乗りを上げる。

一人はまんまるピンクに彩りをで馴染み、Pastel*Palettesギター担当氷川日菜その人だ。

「えー?! 私の秘密結社が下請け扱いなんて……。酷いよ日菜ちゃん」

「えー、だってー。彩ちゃんあんな弱そうな探偵に捕まっちゃうんだもん」

秘密結社の名前ダサ過ぎる。いや、そうじゃなくて。

「あなた達どうしちゃったの?!」

日菜先輩とはそこそこ付き合いがあるからこのノリについていけるのは分かるんだけど、丸山さんってそういうキャラだっけ。

「出たわね、焼きそばを崇拜する焼きそば軍……」

うわあ、また訳の分からない単語が飛んで来た。焼きそば軍って何。

「リサ様、ここは私が食い止めます。リサ様はパン派の皆と合流を」

「紗夜……。でも、それじゃ紗夜が!」

ダメだー、話について行けない。

「ふふふ、おねーちゃんは優しいなあ。でも、逃がす訳ないよ! この世界の小麦粉は全部焼きそばになるんだー!」

「そ、そうだよ！　それが私達焼きそば軍の目的。変な探偵に捕まった私を檻から脱出させてくれたあの方の目的なの！」

誰だか分からないが、あの二人には上の人がいるらしい。それはそれとして焼きそば軍のボスの目的しようもなさすぎる。

「そ、そんな……それが焼きそば軍の真の目的?!　そんな事したらもうクッキーも……パンも作れない！」

いや確かに全部小麦粉が原材料だけどね。

「く、ここまでか……。名もなき一般人の君」

「ノリについて行けないからかりささんからの扱いが辛辣過ぎる」

え、乗らないとダメだったの？　この意味の分からないノリに乗らないとダメだったの？

「私達はここまで……。だけど、クッキーの……パンの、小麦粉の未来を誰かに託したい。君に、それを託していいかな？」

「嫌だよ?!」

だって何言ってるのか分からないもん!!

「ありがとう……。名もなき凡人」

「嫌だつて言つたんだけど?！」

「そうと決まればここは私達に任せて逃げてください。ここは私達が食い止めます」

「いや人の話を聞いて?!」

「紗夜……。これまでありがとうね」

「いいえ、リサ様。もし生まれ変わる事が出来たら、もう一度あなたのクッキーを……。そして、メロンパンを」

そう言いながら二人は前に歩き出した。

「お姉ちゃん、覚悟はいい? 凄いいっぱい搦っちゃうからね!」

「やつと超悪い悪役っぽい活躍が出来る!」

なんかもう良いや。本当の意味で逃げよう。

なんか超凄い搦りを受けて倒れる紗夜さんやりサさんを尻目に、俺はその場を後にした。一体なんだったんだろう。

「ミツケタ」

商店街を歩いていると、ピンクのクマが俺を見ながらそう言った。

ミツシエル。ハローハッピーワールド所属のクマというデータしか持っていないけど。

何を見つけたって？

「笑顔ジャナイ人間、発見。焼キソバヲ食ベサセテ、笑顔ニシマス」

「あんたも焼キそば軍かーい!!!」

てか焼キそば食ベさせて笑顔にするって何。焼キそばってアレか?! アンパンとかそういう感じの意味なのか?!

「居たわ! 超悪い焼キそば軍の兵士、ミツシエルよ!」

俺が困惑していると、背後からさらに俺の頭を悩ませてきそうな声が聞こえてくる。

振り向くとそこには——妖精がいた。

「……友希那……さん?」

手の平サイズの、小さな人。しかしその顔に俺は見覚えがある。

そんなに話した事がある訳ではないが、たまにコンビニに来るしあのRoseliaのボーカルを俺が忘れる訳がない。

ただし、凄く体が小さい。妖精さんだ。羽が生えてる。

「美竹さん！ 超悪い奴を見つけたわ！ こっちょよ！」

「ちよ、待つて。アレ悪い奴っていうか熊だよね」

そんな妖精さんの後ろからついてきたのは、こちらはいつもと変わらない態度の美竹蘭。

蘭は「あ、山田」と漏れたような事を言っつて、俺と熊を見比べた。

「どうなってるの?」

「俺が聞きたいからね！ あ、でも良かった。まともな人が居た」

なんだかそれだけで心が落ち着く程に今日はおかしい。

「何してるの美竹さん！ 早く変身して、この超悪い熊をやっつけちゃいませう！」

いや妖精さんのテンション何！ 変身して何!!

「はあ……しょうがないな」

「え、どうしたの蘭？　もしかして変身するの？」

「……いつも通り、ぱっぱと終わらせる」

「お前のいつも通りはそんなんだったっけかああ?！」

ダメだ、なんか蘭もちよつとおかしい!!

「シュトーレン、イスト、ブロート！」

そして突然蘭が謎の呪文を言い放ち、彼女を謎のオーラが包み込む。本当にどうしたの美竹さん？

「——罪を憎んでパンを憎まず！　パンと正義の魔法少女、マジカルラン参上！」
本当にどうしちやつたの美竹さん?!

「母なる大地より生まれし小麦よ。大海の水によつて練られ、地獄の業火に焼かれし者よ。仮初めの肉体を捨て、我が前に真なる姿を示せ！」

姿形は変わっていないが、なんか魔法少女的なものに変身したっぽい蘭は手のひらをミッシェルに向けてこう叫んだ。

「ヴァツェン・ミツシユブロート!!」

「パンの名前じゃねーかああああ!!!」

説明しよう。ヴァツェン・ミツシユブロートとは、ライ麦を使った独特の酸味や風味と噛み応えがくせになるドイツ産のパンである。

「ウワー!」

そして何故かは分からないが、ミツシエルが爆発した。

「な、何がどうなってやがる……」

しかしどうしてパンなんだろう。そんな事を考えようとすると、ミツシエルの爆発した爆煙の中から一人の少女が現れた。

「……ここであつたが百年目ね。マジカルラン。私の、このローズチサトという名前を侮辱した罪を贖う時よ」

またなんか凄いのが出て来たよ。

てかミツシエルの中身違うくない?!

「ま、まさか……あの時の悪い魔女」

「蘭、知り合いなのか。てかあの、絶対に怒らせちゃいけないような人の名前バカにしたの？ いや、俺もダサイと思っただけど」

「あ、あなたまで私の名前を侮辱したわね……っ！」

うわ、めっちゃ怒ってる。

「山田、逃げて。ここはあたしが」

「いや、逃げろっただって……」

「ここはアタシに任せな」

俺が蘭と話していると、さらに背後から聞き覚えのある声が聞こえて来た。

しかし、聞き覚えはあるのだがどうも少し違う気がする。気のせいか？

「あ、巴」

「私は救世主トモエ。やっとミッシェルを倒し、後はヤバイやつをなんとかすれば世界が平和になると思っていたのに……今度は焼きそば軍か」

「な、何言ってるの巴。なんか変だよ」

「いや蘭も相当変だったけど？」

もしかして自覚ない？ ていうか、うん。確かに巴変だ。めっちゃ声低い。

「ここはアタシに任せて先に行け。……あ、この台詞いつか言ってみたかったんだよな——」

「おい素が漏れてるぞ?! 出来たら素で話して欲しいけど!!」

「こら、このローズチサトを無視して何を話している——きやあ?!」

俺達に起こったローズチサトの周りが突然爆発する。いや、何が起きた。

「私もいるよ。ハナゾノランド建設の邪魔になる存在は、とりあえず邪魔なんだ」

黒髪の、うさぎの被り物を着た少女が現れるやなんかとても危ない発言を漏らす。

そんな彼女は巴と背中合わせになって、怒り狂うローズチサトと戦う意思を見せた。どうでも良いけど世界観めっちゃくちゃじゃない？

「行こう山田。巴の犠牲を無駄にしないためにも」

「それで良いの?!」

「とりあえず目指すはやまぶきベーカリーよ！ さあ二人共、行きましょう！」

妖精ユキナの先導で、俺達は商店街にあるやまぶきベーカリーに向かう事に。

俺、バイトに行かないと行けないんだけど？

「いらつしやいませー」

やまぶきベーカリーに辿り着くと、お店の看板娘である沙綾が笑顔で迎え入れてくれる。

しかし騙されないぞ。なんかもう多分まともじゃない。

「ど、どうしたの三人共。なんだか凄い喧騒だけど」

あれ？ 普通だ。

「どうしたもこうも、俺が聞きたいよ。なんかいきなり焼きそばがなんとらとか、パンがクッキーがなんとかとかでめちやくちやなんだよ」

「そつか……ついに焼きそば軍がこんな所まで」

あ、ダメでしたか。あなたもですか。

「あなたはパンの聖女なんでしょう？ 今こそパンの神様の声を聞いて！ 私達を助け

て頂戴！」

パンの聖女って何。パンの神様って何。

というか、どうでも良いけど友希那さんのイメージがぶつ壊れていく。

「どうだろう。ここ最近パンの神様の声を聞いてないし……。あれ？ でも今声が……」

この声は、パンの神様?!

いや何か聞こえちやいけない音が聞こえてませんか。大丈夫ですか。

「ねえ、沙綾ヤバくない?」

「いや蘭。お前もヤバいからな」

自分がまともだと思ってるのかお前は。

「パンの神様が、もうすぐここに焼きそば軍のリーダーがやってくるから気をつけろつて」

まさかの急展開。え、どうしたら良いの。

「ぱーん！ ーんかー!」

俺がおどおどしていると、突然扉が開いて女の子が二人入店してきた。しかし、見た目的には焼きそば軍のリーダーというより……探偵である。

「ふっふっふ、私は名探偵香澄ちゃんです。ここに焼きそば軍のリーダーが居ると聞いてやってきました」

「焼きそば軍のリーダーは逮捕です！」

戸山さんと北沢さん、キヤラ違うよね。

「ズバリ、私はすでに焼きそば軍のリーダーを突き止めています！」

え、何？ 犯人探してみたいな感じになってるんだけど？

「犯人は……沙綾、あなたですね！」

「え、私?!」

なんでそうなったの?!

「証拠あるの?」

「あります。ここを見てください！」

蘭の率直な疑問に自信満々な表情で答える戸山さん。一体どこに証拠が――

「これは、焼きそばパン！」

戸山さんの指差す場所を見て、妖精ユキナはそんな声を上げた。いや、そんな下らない証拠ある?!

「……これは、決定的な証拠だね」

と、蘭。うんうん、そうだよ。こんな馬鹿な証拠で——え?

「蘭、お前自分がおかしいって自覚あるか?」

「ないけど」

ダメだコイツ。早くなんとかしないと。

「そ、そんな……。私はただ、パン軍の皆とも仲良くしたいから……」

「話は署で聞くよ、沙綾」

慈愛の目で沙綾を見る戸山さんだが、流石に言いがかりだつて俺でもわかるからね。てかもうどうでも良いけどね。

「あ、待つてくださーい! こんな所に、コロツケパンが!」

「何い?!」

助手と思われる少女の声に、戸山さんは目を見開いて耳を傾けた。

その視線の先には——何故かコロツケパン。

「……沙綾、私間違ってたよ。コロツケパンを愛する人に悪い人はいない」

いや、焼きそばパンを愛する人全てに謝れよ。

「でもそれじゃ、一体誰が焼きそば軍のリーダーなの？ やっぱり山田？」

「嫌なんでそうなるの。語り部がラスボスだったなんて伏線どつかにあつた？」

いや伏線もクソもないけどなこの流れ。

「ついに見つけたわ！ ここがパン派の拠点ね！」

俺達が頭を悩ませていると、なんの脈絡もなく唐突に焼きそばを持った少女が店に入店してくる。

腰まで流れる綺麗な金髪と、見惚れるような満面の笑みが特徴的な女の子だった。

「ハハハハ？」

戸山さんが彼女の名前を呼ぶ。

弦巻こころ。ハロー、ハッピーワールドのボーカル担当。

そんな彼女がこのタイミングでやってきて、焼きそばを片手に持っているのだ。この

流れからして彼女が焼きそば軍のリーダーなのだろう。

もはや意味の分からない流れにも慣れてきた。伏線もクソもないからね。いや、待てよ——

——笑顔ジャナイ人間、発見。焼キソバヲ食べサセテ、笑顔ニシマス——
唐突にミツシエルの言葉を思い出す。

——そうか、アレが伏線だったのか。

「クソどうでもいいわ」

思わず口に出てしまった。俺は何を考えているんだろう。

「どうして弦巻さんがここに居るの!」

「何を隠そう。私が焼きそば軍のリーダーだからよ!」

ユキナの言葉にそう返す弦巻さん。何を隠そうも何も隠せてないからね。なんで焼きそば手に持って歩いてきたの。バカなの。

「焼きそばはとっても美味しいし、子供から大人まで皆大好きなのよ！ だから、世界中の小麦粉を焼きそばにして世界を笑顔にするの！」

「流石ころん！」

探偵の助手が裏切った!!!

「確かに、焼きそばは……悪くないよね」

「ころんの言う事も分かる気がする」

蘭と戸山さんまで何言ってるの?!

「大変よ！ 焼きそば軍のリーダーココロの手によつて皆が洗脳されているわ！」

物凄い説明口調でユキナは俺にそう語りかけてくる。いや、そんな事を俺に言われてもね。

「もう残されたのは私達しかいない。この世界からパンを守るのは、私達しかいないの！」

いやどうでもいいよ——とは、何故か言えなかった。

大切な事を忘れていている気がする。

確かに俺にとってパンなんて、そこまで思い入れのある物じゃない。

世界中の小麦粉が焼きそばに変えられたら流石に困ると思うが、それをどうしようという程の熱情が俺にある訳がない。

ただ、何かを忘れていている気がした。

俺にとってはパンはどうでもいい物なのかもしれない、だけど『俺達』にとってパンはとても大切な物だから。

「弦巻さん。……この、焼きそばパン。こいつを見てどう思う？」

「凄く……美味しそうだね」

——そこから先はどうも覚えていない。



「——こうして、世界からパンは守られたのでした」

香ばしい匂いがする。

多分、パンの匂いだ。それと、焼きそばの匂い。

ごはんは焼きそばパンか。

そんな匂いよりも、どこか甘いふんわりとした匂いと柔らかさが俺を包み込んでい
る。

思い瞼を開けて見える天井は見知った天井だ。俺の部屋の、なんとでもない普通の天
井。

ただ少し違うのは、どうも枕が柔らかい。

———というか、今の声は。

「あ、起きた。おはよう、しよーくん。いい夢観れた〜？」

視界に映る、俺の彼女の可愛い顔。青葉モカ、その人だった。

「いや、酷い夢を見た」

淡々とそう答えると、モカは「え〜」と不満げな声を漏らす。

そんな彼女の顔は近い。というより、身体が近い。

この柔らかい枕は——モカの膝枕だったという事だ。カップルかよ。カップルだわ。

要するに、俺は寝ていたのである。モカの膝枕で。ここ重要な。

それを意識すると突然恥ずかしくなってきた。寝起きで、寝る前にどんな状態だったか思い出せないが、とりあえず膝枕である。幸せか。

いや、変な夢見たけど。

「せっかくしよーくんが良い夢を見れるように、モカちゃんがとっても素敵なお話を聞かせてあげてたのにく」

「あー、アレはお前のせいかな」

俺は真顔で起き上がって、満面の笑みを彼女に見せてやった。

膝枕は確かに嬉しい。最高である。だがな——

「夢オチは最低だよ!!!」

「あははー」

——もつとこうなんか無かったの?!

そんな、いつも通りの日常。

ちなみにその日の晩飯は焼きそばとパンだった。

どうしてお前の水着姿はそんなに可愛いんだ

海の家とか遊園地プールの食事つてよく考えると、意味の分からないくらい高いよな。

それとは関係なく俺はプールが嫌いだ。

ところで、夏です。夏です。

少し前までは梅雨で雨が降り続けて、今年の夏はそんなに暑くないな……なんて思っていたりもしました。

そんな事はありませんでした。猛暑です。

「なので、僕はなぜかプールに居ます。暑いです」

照り付ける太陽を見上げて、俺は一人でポツンと呟いた。

夏の日差しが照り付けるプールサイドで、一応海パンを履いてはいるが上はパーカー着用。

その理由は後で説明するとして。今はなぜ俺がプールにいるのか説明しておこう。

そして、なぜこうもノリが悪いのかも。

それは、つい二日前の事だった――



「――夏といえは〜?」

「唐突だな」

梅雨明けし、アイスが馬鹿売れするバイト先で。

バイト先の先輩であり、俺の彼女――青葉モカはいつも通り唐突に話題を振って来る。

彼女が唐突なのはいつもの事なので、俺はあえてオーバーなツツコミはしない。全てに全力で答えていると疲れるからだ。

「パンだよね〜」

「なんでだよ!!」

沈黙は一瞬です。平静を保つなんて彼女の前では無理でした。ツツコミは常に全力です。疲れます。

「個人的には夏といえばクリームパンだよね。……って事で、しよーくんプールに行くさう」

「ごめん。全くもって話が噛み合わない。クリームパンの下りからどうやってプールの話になった？ もしかして時空が歪んでませんか？」

話の途中で俺の意識が何処かに飛んでいた説を提唱したい。そうでないならモカの頭がぶっ飛んでいる事になるから。

「しよーくん」

「なんだ」

「漫画の導入なんて適当で良いんだって、ひーちゃんが自慢しながら言ってたよ」

絶対SNSの影響でしょそれ。あとその漫画多分普通の漫画じゃないからね。漫画家さんに謝って下さい。

「そんな訳で——」

そんな訳で?!



——そんな訳で、プールだ。

なんの説明にもなっていない？ 俺に説明してくれ。

ちなみに場所は都内某所遊園地プールで、なぜか俺は一人でここまで来ている。

一人でバスに乗ったり電車に乗ったりを繰り返したのは中々新鮮な感覚なのだが、それはそうしてなんで一人で来ないといけないのよ。

理由としては、モカは先に現地入りしているから……という事らしい。

集合場所は流れるプールのプールサイドという事だが、どうしてプールサイドの面積が一番広い流れるプールを選んだのかサツパリ分からない。

「……しかし、モカは何処だ」

で、言われた通り一人で都内某所のプールに来て黄昏ていたのだが。

休日で、さらに猛暑によりプールは大混雑。流れるプールはもう何が流れているのか分からないような状態だ。

そんな場所でモカを探せる訳もなく、コミュ症の俺はキョロキョロと不審者のように

周りを見渡す。

プールという事もあって、俺含め客はその殆どが水着姿だ。

大学生くらいのがタイの良いお兄さんも、ナイスバディなお姉さんも、幼女も。皆水着である。

「健全な男子高校生である山田翔太君は目のやり場に困るのであった……」

なんてモノローグを口に漏らしながら、俺はビキニのお姉さんを視線で追った。

別に卑しい理由ではない。目のやり場に困るから焦点を合わせる為に、視線を一点に絞っているだけである。キョロキョロと周りを見渡すよりは遥かに不審者感は削がれるだろう。

健全な男子高校生ならこのくらい当然だ。

「何を食ったらあん——な、あんっ!!」

しかし、突然俺の眼球を鈍痛が襲う。突然過ぎて変な悲鳴を上げてしまった。

「……だよ」

俺が謎の鈍痛に「目が……目があ……」と転がっていると、不意にそんな声が聞こえてくる。聞き間違える訳もなくモカの声だが。

ここだよと言われましても、今私は眼球を負傷しているので少しお待ちください。

「……一体何が」

と、顔を上げた所で視界に入ったのは、流れるプールで俺を真っ直ぐ見ながら――
水鉄砲を構えているモカだった。

「お前だな」

犯人。

「いえ〜い、しよ〜くん撃破〜」

そんな事を言いながらプールから上がってくるモカ。

その両手に持っていた小さい水鉄砲とゴツい水鉄砲に目を奪われてしまったが、ここはプールである。必然的に彼女は水着な訳で。

クロスホルターネックのビキニに対して、腰に巻いたパーカーが露出度を下げ、そこが逆に良い味を出している男の子心を擽る水着姿だ。

さらにサンバイザーの上に乗っているサングラスが妙にひたすら似合っている。そんなに長い訳ではない後ろの髪を一つに括っているのもポイントが高い。

総評。

俺の彼女めちやくちや可愛い。世界で一番可愛い。

「どしたの〜？ 黙り込んで。……あは〜、モカちゃんの可愛さに撃たれて言葉を失ってしまってますな〜？」

「うん」

「……え。あ……え、と……しよ〜くん？」

「ん？」

「くらえハイドロポンプ〜！」

「なんでええええええ!!！」

素直に褒めたのに水鉄砲で眼球を潰される理由を教えて下さい。

一応避けようとしたけど、自分が使うと三割で相手が使うと十割当たる技を俺が避けられる訳がなかった。

本日二度目の「目が目」である。

「大丈夫〜？」

「なあ……モカは俺の眼球に恨みでもあるの？」

「永遠のライバル的なく？」

「どうして眼球だけにヘイトが集まってるんですかね！」

呪われた瞳なんですか。邪眼なんですか。中学二年生が掛かる病気ですか。

「……まあ、それはともかく。なんとか合流出来たな」

「迷子のしよーくんが見付かってモカちゃんも一安心ですな」

「迷子じゃないからね。ちゃんと一人でここまでこれたもんね」

しかし、改めて見てもモカの水着姿は可愛い。健全な男子高校生なのでちよつと視線に困るが、どれだけ見ても飽きない。

「しかし、どうして一人で来ないといけなかった訳よ。本当に迷子になるかと思っただが」

「……、広いしね。」

「それはそのー、あたしは他の人達と呼ばれて来たんだよね。ほら、あの辺りに顔を見た事のありそうな人が四人いるでしょ？」

そう言つてモカが指差した先に居たのは、確かに顔は知っている女の子四人組だつ

た。

Poppin', Partyのボーカルアンドギター担当、戸山香澄。

Roseliaのキーボード担当、白金燐子。

ハロー、ハッピーワールド! のドラム担当、松原花音。

そしてPastel*Palettesベース担当にして人気子役でもある白鷺千聖。

モカを合わせればガールズバンドパーティのバンド勢揃いのメンバーだが、全くもって接点が分からない。

「え、なんの集まりあれ」

「なんていうか、コラボレーション的なく？ 大人の事情的な？」

「分かった。それ以上は突っ込まない方が良い話だな」

「なんやかんやでその五人がこのプールに集まる機会があつて、ある程度の自由時間があるから俺が個人で呼ばれたというだけの話だ。」

あまり大人の事情に口を挟むべきではないのである。

「それじゃ、大人の事情に甘えて遊ばせてもらうか」

俺はそう言つて、目ぼしいアトラクションを探して周りを見渡した。

小さな滑り台やウォータースライダーのある子供用の施設に、沢山トランポリンとかが置いてあるプール。

なんか凄そうなおウォータースライダーに、ジェットコースターっぽい乗り物のアトラクションと選り取り見取りである。

とりあえずウォータースライダーが安定か。

「あれ行く——」

「それじゃー、泳いでいこー」

俺が目星を付けて歩こうとすると、モ力は俺の手に抱き付いて身体を引き寄せて来た。

二の腕なんかめっちゃ柔らかい物が当たってるんですが、なんですかこれは。パンですか。パンですね。

「——ちよ、モカ。あ、ちよ、待ってください」

「ん？ しよーくん、どうしたの？ お腹が痛いのか？」

「なん……でも……ないっす!!」

落ち着け。落ち着くんだ山田翔太。平常心を保て山田翔太。お前は男だけど、健全な男子高校生だけど。その前に青葉モカを愛すると誓った男だろう。

「……オーケー。オーケー。ノープロブレム。モカ、愛してる」

「流石のモカちゃんも突然の愛の告白は恥ずかしいよ？」

少し嬉しそうにはにかむモカはまるで天使のようだった。

煩惱が吹き飛んだね。

「ん……で、なんだっけ？」

「せっかくプールに来たんだから泳がなきゃねー」

俺に抱き付いたまま、その手に握られている水鉄砲をチラつかせるモカ。

泳ぎと水鉄砲は矛盾してませんかとツツコミを入れた所だが、今はそれどころじゃない。

「なあ、モカ。……魚の真似なんかして何が楽しいんだ」

「……しよーくんが突然リアリストに」

俺は元からリアリストです。

流石のモカも俺の言葉に驚いたのか、目を丸くして啞然としていた。

流石に気まずいな。せつかくプールに誘われたのに、この事実を伝えないといけな
とは。

「んー、でも確かにしよーくんという事は一理あるかもねー。やっぱりプールは浮き輪
に乗って流れるのが一番だとモカちゃんも——」

「辞めてええ!! 優しくしないでええ!! 泳げないんですうう!!」

そう、山田翔太高校二年生。泳げません。金槌です。

俺はその場に崩れ落ちて頭を地面に擦り受けた。

「泳げないのにモカの水着姿が見たくてここまで来ました。申し訳ございませんでした

……」

「しよーくん……」

やばい……。嫌われたかも。

「とーう」

暗転。突然視界がひっくり返る。

何が起きたか分からず、分かったのは身体が吹っ飛んでプールに着水した事だけだった。

え、何が起きたんですか。

そして何が起きたのかも分からずに、俺の体は水中から引き上げられる。

息を吸い込んで、プールの水を擦ってからなんとか目を開いた。目の前にモカがいる。今度は胸元にとてつもない柔らかい物を感じた。

「しよーくん」

俺に抱きつきながら、モカはいつも通りゆっくりと言葉を漏らす。

「あたしは、しよーくんと一緒に居られれば……。それだけで幸せだから」

そう言うってから彼女は顔を持ち上げて、上目遣いでこう言った。

「しょーくんが楽しめれば、モカちゃんはそれで良いのです。だから、しょーくんが楽しいと思う事をしたいな」

「モカ……。……。ありが——」

あまりにも嬉しい言葉に泣きそうになりながら、感謝の言葉を漏らそうとした直後。何故かモカは俺から離れて、手に持っていた水鉄砲を俺の顔に向ける。

「——え」

そして彼女は、見事俺の眼球を水鉄砲で撃ち抜いた。

「なんでえええ!!」

今とっても良い雰囲気だったのに?! このタイミングでそういう事する?!

いや、それがモカの良い所だけどき!!

「という事で、水鉄砲で勝負しようと思います。景品は今晚のご飯代です」

「ほお……。近所の婆ちゃん達に水鉄砲を持たせたら右に出るものは居ないと言われている俺に勝負を挑むとは良い度胸じゃないか」

「それじゃ、しょーくんはコレね」

そう言いながらモカはとんでもなく小さい、百均で売ってそうな水鉄砲を俺に渡して来た。

そしてモカは両手に持った完全に高級品の水鉄砲を俺に向ける。

「……あのさ、流石にあんまりじゃない？」

「勝負はプールに来る前から始まっていたのだよ、しよーくん。自腹五千円もした水鉄砲の威力を見よ〜」

「それ勝負に勝って飯奢ってもらっても赤字だぞ!!」

なんて、ルールも分からないまま俺は百円の水鉄砲でモカに勝負を挑み蜂の巣にされたのであった。アーメン。

それから浮き輪を使って二人で流れるプールを流れたり、貝殻の形をしたプールで波に飲まれたり。

ウォータースライダーで絶叫したりして、プールを一日満喫する。

日が沈むのにも気が付かない程楽しんで、辺りが暗くなつてからやつと時間を思い出した。

「そろそろ帰るか……。モカ、帰りは一緒に帰れるのか？」

「何を言ってるんだい、しょーくん。夜は始まったばかりだよ」

何を言ってるんだい、モカくん。良い子は帰る時間だよ。

「こつちこつち」

言いながら、モカはトテトテとプールサイドを早歩きで進んでいく。

もう空は暗いが、辺りは一応ライトが照らしていて明るい。閉園の時間じゃないのだろうか。

「ん……これは」

それで、モカに着いて行くと辿り着いたのは貝殻状の波のプール。

少しばかり水深が深く、泳げない俺はあまり近付こうとしなかったのだが。

昼間とはどうも雰囲気違って、俺はその光景に見惚れてしまった。

「綺麗でしょ」

ライトアップされた水面に夜空の光が映り込む。

幻想的な光景の真ん中で、クルクルと回るモカはまるで絵の様に綺麗だった。

「……うん、綺麗だわ」

これはまた凄いな。どうなっているのやら。

「ナイトプールっていつてー、ここのプールの目玉なんだよね」

そう言つてから近くの売店で飲み物を二つ買ったモカは、ビーチチェアに触りながら俺を手招きする。

呼ばれるがままに座つて飲み物を受け取ると、モカは満足気な表情で飲み物片手に波のプールに視線を向けた。

それにしてもグラサン似合ってるな。イケメンかよ。

「今日は楽しかった〜?」

「んー、今日も楽しかった。モカと居ると毎日が飽きない」

「あはは、しよーくんもいつも通りだねー」

それを望んだのだから、こうやっていつも通り全力で楽しめれば幸せなんだろう。

「ねー、しよーくん」

「なんだ」

「夜ご飯ここで食べよつか」

「おう、そうだな。そうし——待て!!」

俺が気が付いた時には、もう遅かった。

近くの売店を走り回ったモカは、ありえないくらい高い売店のジャンクフードをありえない量買って来る。

事前は無慈悲な水鉄砲勝負で敗北した俺は、晩飯代を出す事になっていたのだ。

「……つまり、そういう事か」

だからプールは嫌いなのだ。

「しよーくんも早く選ばないと、お店の食べ物なくなっちゃうよ」

「いやどれだけ食べる気だよ!!!」

まあ、なんやかんやでモカも半分払ってくれるんだけどな。

そんな訳で、とある夏のとある日のお話。

【番外編】青葉モ力誕生祭2020

突然だがドラ○もんの秘密道具で何が欲しいかと問われた時、自分はなんと答えるだろうか。

別に心理テストみたいな物ではない。

ただ単の興味。退屈への逃亡。大した意味のない自問自答だ。

空を自由に飛びたいならタケ○プターだし、自由にどこにでも行けるどこ○もドアなんてのも捨て難い。

他にも有名どころの秘密道具だつて沢山の夢を見させてくれるだろう。それこそ思春期の男の子が使えばの○太君もビックリなあんな事やこんな事まで。

そこで俺が選んだのはコレだった。

「——いや、もしも○ックスだろ。アレさえ持つてればなんでも出来るぞ」

「しよー君つて本当に夢がないよねー」

バイト先。いつも通りのモカとの会話である。

商品のお菓子を並べていると、丁度ドラ○もんの絵柄が印刷されたガムを見掛けた事からこの話に発展した。

ついでにこの手のお菓子だがポ○モンとか妖怪○オッチとか沢山種類があるけど、中は同じだし大人になるってのは夢を失うって事なんだよ。分かれ。

「じゃー、しよー君が好きな映画は？」

「恐竜。旧ドラ○もんの一作目の方ね」

「しよー君何歳？」

「名作ってのは色々あせてから味が出て来るもんなんだよ。ガムだって噛み始めよりある最後捨てる直前が本番だろ？」

「ガムは最後捨てちゃうけどねー」

「例えば悪かった。……とにかく昔の物ってのは良いの。俺は旧ドラ○もん派なの」

この歳になってなぜドラ○もんを熱く語っているのだろうか。

「で、モカは何が好きな訳？」

「あたしはポ○モンパンかなー」

「いやポ○モンの話してなかったよね？ いやしたか？ いやいやしてないわ。そしてお前が好きなのはポ○モンじゃなくてパンだ」

「パンダよりパン派〜」

「無駄に韻を踏むな」

そもそもパンダなんて言っていない。いや言ったのか。言っていないよ。

「あー、そうそう。モカちゃんはねー、ドラ○もんと誕生日同じなんだよー？」

「ドラ○もんの話してなかったよね!? いやしてたわ!! てかマジかよ!! なんかすげーな!!」

こう、アニメのキャラと誕生日とか同じだと興奮するよね。

因みに父親曰く、少年の頃同年だった筈のアニメキャラクターと自分の年齢を今比べると泣きたくなるらしい。

そういうえば俺もの○太やサ○シとはだいぶ歳が離れてしまったな。サ○シはいつまで放浪してるんだ。最近はなんか落ち着いてるけど。

「そんな訳で、次の誕生日はバイバインでよろしく〜」

「ここで最初の話に戻るのかよ。無限にパンを増やす気かもしれないけど、間違えたら

宇宙がパンで満たされるぞ」

「本望だよねー」

「パンで世界を滅ぼそうとするな」

そんな人類滅亡嫌過ぎる。

「しゃーした〜」

少しだけ時が進んで。

モカのチャレンジジャブルな接客を横目に、俺はリンゴのマークが着いたカードの陳列に勤しんでいた。

世が世なのでコンビニでこのリンゴのカードを買う人も多い。俺もたまに買うしな。

「そーいやさ、パンドリでメロンパンコンプしたんだけど」

「夜道には気を付けてねー?」

「生涯で一番怖い顔しないで。え、めっちゃ笑顔なのなんなん。お前そんな顔出来たのな。いや怖い。ほんとうに怖いから辞めて?」

あるよね、こう他人が真剣にやつてるゲームを興味本位でやつたら他人の押しキャラを簡単に当てちゃったとかそういう事。

「お前だつて賞味果実フルーツバスケットで俺の大好きなバナナ当てたじゃん！」
「ばななちゃん可愛いよね〜」

「話を逸らすな!？」

バナナ可愛いのか。いや、ばななは可愛い。

でも、モカの方が可愛い。

「……ん？ どしたのー、しよー君」

「んや、なんでもない。……なんてーか、こう。やつぱり居心地が良いなつて」

「ちゃんと働いてねー」

「お前が言うな!？」

「モカちゃんは小銭の数を数えるのに忙しいです」

「遊んでんじやねーか!! いや遊んでないわ!! それちゃんとした仕事だわ!! 遊んでたの俺だわ!! え、なんか嫌だ!! 俺働くからお前遊んでろ!？」

「おろろー、しよー君が無茶苦茶言ってるよー。およよー」

拝見、俺達はいつも通りです。

あとドラ○もん、誕生日おめでとう。